新ひだか町における アイヌ民族の現状と地域住民

北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室

新ひだか町における アイヌ民族の現状と地域住民

小内 透 編著

はしがき

本報告書は、北海道新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民との交流に関する実態を明らかにしたものである。

2007年9月、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が、国連総会において賛成多数により採択された。わが国も宣言の採択にあたり賛成票を投じ、2008年6月には衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で可決された。現在、2005年から始まった国連による第二次「世界の先住民の国際の10年」(~2014年)が進行中であり、世界各国で宣言を実質的なものとするための取り組みが求められている。それは、わが国においても同様である。

このような状況の下で、私たちの研究グループは、アイヌ民族の復権をめぐる議論の基礎資料を得るため、アイヌ民族の現状と課題、比較対象としての北欧の先住民族・サーミの現状と課題に関する4年間の社会学的な実証研究のプロジェクトを立ち上げた。プロジェクトの1年目にあたる本年度は、ノルウェーとスウェーデンのサーミに関する調査研究とアイヌの人々が多く居住する北海道新ひだか町における調査研究を行った。このうち、スウェーデンでの調査はすでに1年前から開始されていた別のプロジェクトと合流して行われた。

本報告書は、本プロジェクトの1年目の成果をもとにした中間報告のひとつである。ノルウェーとスウェーデンのサーミ調査に関する報告書も『調査と社会理論』研究報告書29として、同時に刊行しているので、あわせて参考にしていただきたい。

本報告書のもとになった郵送アンケート調査では新ひだか町民の方々、インタビュー調査にあたっては多くのアイヌ民族の方々に協力していただいた。調査の準備および実施にあたっては、北海道アイヌ協会事務局長・佐藤幸雄氏、同新ひだか支部事務局長・羽沢進氏、事務局員・笹原拓也氏にお世話になった。また、調査メンバーとして、本報告書執筆者以外に、財団法人・アイヌ文化振興・研究推進機構職員(当時)の上田しのぶさん、北海道大学アイヌ・先住民研究センター職員の長田直美さんおよび北海道大学大学院教育学院の院生、同教育学部の学生の協力を得た。本研究を支えて頂いた皆様に、この場を借りてお礼を申し上げる。

(付記)本報告書は、平成24~27年度の日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A)(研究課題「先住民族の労働・生活・意識の変容と政策課題に関する実証的研究」、研究代表者・小内透、課題番号24243055) および平成23~26年度の日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究B)(研究課題「先住民族の教育実態とその保障に関する実証的研究」、研究代表者・野崎剛毅、課題番号23330247) にもとづく研究成果である。

なお、本研究は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの第二期社会調査プロジェクトとして も位置づけられている。

> 北海道大学大学院教育学研究院 北海道大学アイヌ・先住民研究センター (兼務)

> > 小内 透

はしがき

| 序 章 問題の所在 | 小内 | 透 |
|--------------------------------|-----|-----|
| 第1節 アイヌ民族の歴史と近年の動向 | | 1 |
| 第2節 本研究の問題意識 | | 5 |
| 第3節 調査地の概要 | | 6 |
| 第4節 調査の対象と方法 | | 10 |
| 第1部 アイヌの人々の生活の歩みと意識 | | |
| 第1章 アイヌの家族形成 | 品川で | トろみ |
| はじめに | | 17 |
| 第1節 調査対象者の生活 | | 17 |
| 第2節 結婚と次世代への意識 | | 23 |
| おわりに | | 28 |
| 第2章 アイヌ民族の階層形成 | 野崎 | 剛毅 |
| 第1節 分析の視点 | | 30 |
| 第2節 青年層の階層形成過程 | | 33 |
| 第3節 壮年層の階層形成過程 | | 34 |
| 第4節 老年層の階層形成過程 | | 35 |
| 第5節 まとめ | | 36 |
| 第3章 アイヌ差別の諸相 | 菊地 | 千夏 |
| はじめに | | 38 |
| 第1節 ライフコース上の被差別体験 | | 38 |
| 第2節 現代のアイヌ差別とその変化 | | 45 |
| 第3節 まとめと考察 | | 48 |
| 第4章 エスニック・アイデンティティの諸相 | 新藤こ | ずえ |
| はじめに | | 51 |
| 第1節 エスニック・アイデンティティの形成と変容 | | 51 |
| 第2節 アイヌ文化の体験と影響 | | 59 |
| 第3節 運動への関わり方――アイヌ協会への加入と関わりの現状 | | 64 |
| おわりに | | 66 |
| 第5章 アイヌの先住民族メディアの現段階 | 小内 | 純子 |
| はじめに | | 68 |
| 第1節 アイヌタイムズの誕生と現段階 | | 68 |
| 第2節 エフエム二風谷放送 (FMピパウシ) の開局と現段階 | | 69 |
| 第3節 アイヌタイムズとFMピパウシの認知度 | | 71 |
| 第 4 節 メディア環境に対する評価 | | |
| おわりに | | 74 |

第2部 地域住民のアイヌの人々との関わり

| 第6草 | アイヌの人々との接触・交流と社会関係 | 小野寺理佳 |
|--|--|---|
| 第1節 | はじめに | 81 |
| 第2節 | 属性 | 81 |
| 第3節 | 生活史における交流 | 84 |
| 第4節 | 日常生活における交流 | 93 |
| 第5節 | 結婚による結びつき――和人とアイヌのカップルへの眼差し | 104 |
| 第6節 | 交流と「共通なるものとしての差異を承認すること」 | 108 |
| 第7節 | おわりに | 110 |
| 第7章 | アイヌ文化の知識と体験 | 上山浩次郎 |
| はじめ | VZ | 113 |
| 第1節 | アイヌ文化に関する知識・体験 | 113 |
| 第2節 | 生活史のなかのアイヌ文化 | 120 |
| 第3節 | アイヌ文化の現状と将来 | 124 |
| おわり | r | 133 |
| | | |
| 第8章 | アイヌ政策に対する評価 | 濱田 国佑 |
| はじめ | łz | 136 |
| はじめ | | 136 |
| はじめ | に | 136 137 |
| はじめ 第1節 | に アイヌ政策の概要 アイヌ政策に対する地域住民の意識 | |
| はじめ 第1節 第2節 | に アイヌ政策の概要 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する意識の規定要因 | |
| は 第 1 第 2 第 3 第 3 第 3 第 3 第 3 第 6 | に アイヌ政策の概要 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する意識の規定要因 | |
| は 第 1 第 2 第 3 第 3 第 3 第 3 第 3 第 6 | に アイヌ政策の概要 アイヌ政策の概要 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する意識の規定要因 まとめ | 136 137 138 142 146 新藤 慶 |
| はじ 第1 第2 第3 第 第 第 第 第 第 9 第 | に アイヌ政策の概要 アイヌ政策の概要 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する意識の規定要因 まとめ 地域への評価 | 136 137 138 142 146 新藤 慶 148 |
| は 第 2 第 3 第 3 第 3 第 9 章 第 9 章 第 9 5 8 9 8 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 | に アイヌ政策の概要 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する意識の規定要因 まとめ 地域への評価 本章の課題と方法 | 136 137 138 142 146 新藤 慶 148 149 |
| は第第第第 第第第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 | に アイヌ政策の概要 アイヌ政策に対する地域住民の意識 アイヌ政策に対する意識の規定要因 まとめ 地域への評価 本章の課題と方法 地域に対する意識 | 136 137 138 142 146 新藤 慶 148 149 157 |
| は第第第第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 | に アイヌ政策の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 136 137 138 142 146 新藤 慶 148 149 157 158 |

付属資料

序 章 問題の所在

小内 透 | 北海道大学大学院教育学研究院教授 | 北海道大学アイヌ・先住民研究センター兼務教員

第1節 アイヌ民族の歴史と近年の動向

日本政府は、これまでアイヌ民族が先住民族であることを認めてこなかった。しかし、2007年、アイヌ民族を先住民族と認めるべきだとする決議が国会の衆参両院で成立した。これを契機に、政府もこの決議に沿って、新しいアイヌ政策の構築をめざした有識者会議を発足させ、いくつかの提言が出されるようになった。わが国におけるアイヌ政策が、新しい段階に入ったといってよい。本研究プロジェクトの問題意識を説明する前提として、改めてアイヌ民族の歴史を振り返り¹⁾、近年のアイヌ民族をめぐる動向とその背景について検討することから始めよう。

第1項 アイヌ民族とアイヌ文化の起源

アイヌ民族の起源については、1960年代までコーカソイド説が有力だった。しかし、形質人類学や遺伝学の進展により、現在では、本州に広く分布した縄文時代人がアイヌ民族にもっとも類縁関係のある集団であることが定説になっている(石田 2006: 11)。しかし、アイヌ独自の文化が成立するのはずっと後のことである。

北海道では、縄文時代の後に弥生時代がなく、続縄文時代(紀元前3世紀頃から7世紀)となり、擦文時代(7・8世紀頃~12・13世紀)が続いた。同時に、続縄文文化や擦文文化とは異なるオホーツク文化(3世紀~13世紀)がオホーツク海沿岸や北海道北海岸、樺太、南千島の沿岸部に存在していた。アイヌ文化・社会の成立時期については、不明な点が多いものの、現在の考古学的知見では、擦文文化につらなるという見解が定説になっている(榎森 2007: 16)。

アイヌ民族は、すでに擦文文化の時代に日本社会との交易を行っていた。当時のアイヌ民族の生業は河川・海での漁業・海獣狩猟と山野での狩猟であり、副次的に畑作も行っていた。12~13世紀には、北では北海道からサハリンへ進出しモンゴル・元軍と戦い、南では海を渡って東北地方の北部へと新たな進出を遂げていた。13世紀後半から14世紀になると、擦文文化が急激な変容を遂げ、英雄ユーカラのテーマで描かれ、一般に理解されている特徴をもったアイヌ文化やアイヌ社会が成立することになった(榎森 2007: 96)。

第2項 中世・近世のアイヌ民族

14世紀頃から本州から北海道南部に移住する者が現れ始めた。1454(享徳3)年には、それまでアイヌとの交易を担っていた安東氏が南部氏に追われ武田信広らとともに北海道へ逃げ渡った。その後、多数の和人が移住し、現在の函館から上ノ国に至る渡島半島南部に、道南十二館と呼ばれる渡党領主の館が形成された。彼らは、アイヌとの交易や漁場への進出を通して成長した。

道南に進出した和人に対して、1457(長禄元)年、アイヌの首長コシャマインが蜂起し(コシャマインの戦い)、道南十二館のうち、10館を攻め落とした。しかし、花沢館の館主である蠣崎氏の武将、武田信広がこの戦いを制圧し、蠣崎家を相続したと伝えられている。蠣崎家はその後、勢力を伸張し、1593(文禄2)年、蠣崎慶広が豊臣秀吉から朱印状を与えられ、蝦夷島の支配権を公認されることになった。その後、松前に改姓した慶広は、1604(慶長9)年には徳川家康から黒印状によりアイヌとの独占的な交易権を認められた。

松前藩は、渡島半島南部の地域を和人が居住する和人地とし、それ以外を蝦夷地とした。蝦夷地はアイヌが生活する地域で、松前藩の許可なく和人が出入りすることを禁止した。

松前藩は、同時に、米のとれる土地がほとんどなかったため、家臣に対してアイヌとの交易権を与える商場(場所)知行制をとった。松前藩が交易権を独占したことにより、家臣たちはアイヌにとって不利な交易を行うようになった。そのため、アイヌ側は和人製品を得るために、より多くの干鮭、熊皮などの確保が必要となった。それが背景となって、沙流地方と静内地方のアイヌの漁狩猟権をめぐる争いが生じ、松前藩に対するアイヌの一斉蜂起、シャクシャインの戦いにつながった。しかし、この戦いも、アイヌ側の敗北に終わり、松前藩の支配が強まった。

交易権を与えられた家臣は次第に、近江商人などに交易を代行させるようになり、18世紀初頭には、場所請負制が一般化した。場所請負人となった商人は、アイヌを交易相手とするだけでなく、労働力としても使用した。交易は不平等で、労働環境も過酷であった。1789(寛政元)年のクナシリ・メナシの戦いは、こうした状況に不満をもった国後島とその対岸のアイヌたちの蜂起であった。この蜂起も松前藩により鎮圧された。

この頃、ロシアが北千島まで南進しており、クナシリ・メナシの戦いの3年後にはロシア使節ラクスマンが通商を求めて根室に来航した。ロシアからの脅威にそなえ、幕府は、1799(寛政11)年東蝦夷地(松前からみて東、知床岬までのおおよそ北海道の南半分)を天領とし、請負人の不正を排除するため場所を直営化した。1807(文化4)年には、和人地も西蝦夷地も天領となったが、西蝦夷地は資金的な事情から場所請負制を維持した。幕府は、北海道が日本固有の領土であることを示すため、穀食の奨励、日本語の使用、和服の着用など、アイヌ民族の同化策を展開した。

しかし、1821 (文政 4) 年には、ナポレオン戦争の影響からロシアとの緊張状態が緩和されたため、幕府は蝦夷地を松前藩に返還した。このころから、蝦夷地への和人の移住が増加し、アイヌの生活・文化の破壊が顕著となった。

その後、再びロシアからの圧力が強まり、1855(安政元)年に、日露和親条約が締結された。同 条約により、千島列島の得憮水道以南が日本の領土、樺太は雑居の地となり、箱館が開港されるこ とになった。これにともない、幕府は木古内、乙部以北を再び直轄とし、諸藩に警備を命じた。

第3項 近代のアイヌ民族

明治維新後、1869 (明治2) 年に開拓使が設置され、場所請負制が廃止された。しかし、漁業の担い手が育っていなかったため、1876 (明治9) 年までは、場所請負人を漁場持と名のらせ漁業に従事させた。蝦夷地を北海道と樺太と改称、日本の領土とした。アイヌ民族が狩猟、漁労、採集に利用していた土地が無主地とされ、北海道開拓が始まった。

1872 (明治5) 年に制定された「北海道土地売貸規則」と「地所規則」では、北海道の土地は官

用地やそれまでに民間が使用中の土地を除いて、すべて民間の希望者に売り払うこととされた。アイヌ民族であってもこの規定は適用されたが、申請に必要な戸籍がなく、近代的な土地所有の観念がなかったり、文字が読める者が少数だったりしたため、土地の所有権を取得したアイヌはほとんどいなかった(アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会 2009: 12) ²⁾。1877 (明治10) 年の「北海道地券発行条例」では、アイヌの人々の居住地は官有地に編入され権利が保留された。アイヌの人々に土地の所有権を与えても、近代的な土地所有の観念がなく、和人に詐取されるおそれがあったためとされている。さらに、1886 (明治19) 年の「北海道土地払下規則」、1897 (明治30) 年の「北海道国有未開地処分法」などにより、北海道における和人の土地所有が拡大していった。多くの土地が入植者によって開墾され、取得された。北海道開拓の過程で、樺太から対雁への移住を始めとして、アイヌの人々に対する強制移住が様々な場所で行われた。

北海道開拓とともに、アイヌ民族に対する本格的な同化政策も展開された。1871(明治4)年には、 戸籍法の制定にともない、アイヌを「平民」に編入した。同時に、アイヌの開墾者に家屋・農具を 与え、男子の耳環(イヤリング)や女子の入れ墨など独自の風習を禁じ、日本語の使用を強制した。 1876(明治9)年、アイヌの「創氏改名」が布達され、アイヌの仕掛け弓猟が禁止された。1878(明治 11)年に、札幌郡内諸川での鮭漁を全面禁止し、1883(明治16)年には、札幌県が十勝川上流の鮭漁 を禁止した。さらに、1889(明治22)年、アイヌの食料分として許されていた鹿猟も禁止された。

その結果、アイヌ民族は疲弊し、アイヌ語も衰退した。アイヌの窮状を前にして、民族の保護を目指した「北海道旧土人保護法」が、1899 (明治32) 年に制定された。同法により、アイヌの人々に、それぞれ1万5,000坪 (5 町歩) 以内の土地が給与地として無償下付された。しかし、それも同化主義を基本としたものであり、アイヌ政策の根本的な転換をもたらすものではなかった。給与地の下付は、「農業に従事する者又は従事せんと欲する者には」(北海道旧土人保護法・第1条)との条件がついており、狩猟や漁を基本にしたそれまでの生業とは異なる農業振興を前提にしたものであった。また、旧土人保護法にもとづいて設立された旧土人学校では、日本語を学ぶためにアイヌ語の使用が禁止された。

このような状況のもとで、アイヌ民族の中には、和人との結婚を通じて自ら進んでアイヌの血を 薄めようとした者も少なくない。それほど、アイヌ民族に対する差別や抑圧は強固なものだった。

しかし、アイヌ民族は、ただ手をこまねいていたわけではなかった。アイヌ民族の運動組織が、いくつか誕生するようになった。1922 (大正11) 年に、伏根弘三 (アイヌ名ホテネ) を中心にアイヌの青年たちが帯広で「十勝旭明社」、1926 (昭和元) 年に、旭川で部落解放運動の影響を受けた「解平社」が結成された。1930 (昭和5) 年には、バチェラー系のキリスト教関係者や十勝の旭明社などが中心となり、旧土人保護法の改正を目指して、道庁の肝いりの下、「北海道アイヌ協会」が結成された。これらの組織による運動は、1934 (昭和9) 年の旭川市旧土人保護地処分法制定、1937 (昭和12) 年の北海道旧土人保護法改正などの成果を勝ち取った³⁾。だが、アイヌの民族運動は、それ以上発展することはなかった。

第4項 現代のアイヌ民族をめぐる動向

第二次世界大戦後、1946(昭和21)年、社団法人「北海道アイヌ協会」が新たに設立された。同協会は、旧土人保護法による給与地を農地改革の対象から除外するよう試みた。しかし、その試み

は成功に至らず、アイヌ協会はその後長期の休眠状態に陥った。一方、国のアイヌ政策も、1946(昭和21)年、1947(昭和22)年に旧土人保護法の改正があったのみで、めぼしいものはなかった。そのため、戦後は旧土人保護法は機能しなかったとされている(榎森 2007: 520-1)。

このような状況は、1961 (昭和36) 年から始まった国と道による不良環境地区対策がきっかけで変化することになった。同対策は、全国的な政策で、同和地区や都市のスラム地区の住宅や生活環境の改善をめざしたものであった。北海道では、アイヌ部落や炭鉱地区が対象となった。同政策を策定するに当たり、前年の1960 (昭和35) 年に北海道民生部が不良環境地区の調査を実施したのがきっかけで、同年アイヌ協会が再建された。翌1961 (昭和36) 年には、アイヌという言葉が差別につながるという意見も強く、「北海道ウタリ協会」に改称されている。

さらに、1974(昭和49)年度から、国や道のアイヌ対策として、新たに教育、住宅、就労など多方面の支援を行う「北海道ウタリ福祉対策」が開始され、不良環境地区対策事業はその中に組み込まれた。それ以後、2001(平成13)年度まで4次にわたる「北海道ウタリ福祉対策」が実施され、2002(平成14)年度からは「アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」が「北海道ウタリ福祉対策」を引き継ぐ形になった。

この間、国際的に先住民族の権利の見直しが進んだ。その影響もあり、1981年から国連の人権監視機関の一つである自由権規約人権委員会でアイヌ民族に関する報告と審査が開始された。翌1982年には、コーボ報告にもとづいて、国際連合先住民作業部会(WGIP)が立ち上げられ、先住民族の復権に向けた議論が始まった。1992(平成4)年には、国連本部で「世界の先住民の国際年」が開催され、国際的に先住民族の権利が見直される時代になった。その開幕式典で北海道ウタリ協会理事長(当時)の野村義一が日本の先住民族として記念演説をしている。その年、自由権規約人権委員会の第3回審査で、政府が初めてアイヌを日本におけるマイノリティであると認めた(大竹2010:143)。

1994(平成6)年には萱野茂がアイヌ初の参議院議員となり、1997年には100年近く存続した北海道旧土人保護法が廃止された。同年、新たに「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」(略称、アイヌ文化振興法)が制定されている。

1997年の自由権規約人権委員会第4回審査では、日本政府はアイヌ文化振興法の説明を行ったが、委員たちはその積極性を評価したものの、アイヌ政策は未だ不十分だとした。そして最終所見として、アイヌの人々に対する言語および高等教育に関する差別、また先住民族としてのアイヌ民族の土地に関する権利を認めないことに懸念を表明した(大竹 2010: 145)。

さらに、国連の別の人権監視機関である人種差別撤廃委員会でも、2001年にアイヌ民族に関する報告と審査が行われ、アイヌを先住民族と認めることの重要性が示唆され、第1回審査でILO第169号条約の批准が推奨されるとともに、アイヌに対する差別が根強く残っていることが指摘された(大竹2010:150)。

そして、2007年、国連総会で「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択され、日本も賛成 した。これを受け、冒頭で示したように、アイヌ民族を先住民族と認めるべきだとする国会決議が 成立したのである。

第2節 本研究の問題意識

以上のように、アイヌ民族に対する政府のとらえ方が変化した背景には、アイヌ民族自身の運動とともに、先住民族の復権を促す国際的な動向がある。国連は、2005年~2014年を第二次「世界の先住民の国際の10年」としており、先住民族の復権を巡る動きはさらに強くなると予測される。この動きに対して、日本の政府がいかなる対応をするのか、この点に注目が集まることになる。

その際、政府が実施するアイヌ政策が、アイヌ諸個人の必要や要求を反映したものになっているのかを検討する必要がある。国際的な動向への対応として実施したとしても、肝心のアイヌ民族自身の要望とかけ離れた施策になるとすれば意味がない。その際、可能な限り、アイヌ民族に属する個々人の要望とその背後にある生活実態や意識を明確にすることが重要である。なぜなら、アイヌ民族といっても、多様な人々から構成されているからである。

さらに、アイヌ政策を効果的に立案し実行するにあたって、アイヌ以外の人々、いわゆる和人の 意識についても検討することが求められる。アイヌ政策の内容や進め方によっては、和人からの反 発も生じかねない。効果的なアイヌ政策の立案や実行にとって、和人の意見も無視することはでき ない。そこに、アイヌに対する差別や誤解などがあれば、それを正していくことも政策の課題とな る。和人の理解を得るためにも、彼らがアイヌ民族に対していかなる意識をもち、どのように接し ているのかを把握する必要がある。

そこで、本研究では、政府が実施するアイヌ政策、実施しようとするアイヌ政策の妥当性と課題 をアイヌと和人の双方の立場から検討することを課題とする。

本研究の課題にこたえるために、以下のような視点を重視した。第1に、アイヌ自身の生活の実態と意識を解明することである。これは、現在あるいは将来の政府のアイヌ政策がアイヌ諸個人の必要や要求を反映しているかどうかを検討する際に重要になる。政策的にみて見落としているものがないかどうか、あるいはアイヌの人々の生活や意識からかけ離れたものがないかどうかが問われることになる。

第2に、アイヌの人々の生活の歩みにも注目した。アイヌ民族の生活の現状や意識は、これまでの生活の歩みによって作り上げられ、規定されるからである。その場合、彼らの生活の歩みは、時代によって大きく異なっていることにも留意しなければならない。生きた時代によって、アイヌ政策やアイヌ差別のありよう自体変化しており、それが生活の歩みに刻印されているためである。

第3に、アイヌ民族や政府の政策に関する和人の評価を明らかにすることである。政府のアイヌ 政策の妥当性は、和人の評価にも依存する。アイヌ民族だけでなく、和人も納得するものでなけれ ば、政策は効果的なものとならず、むしろ新たな反発や差別のもとになりかねない。和人の評価が 国際的な動向からかけ離れている場合には、そうした現状を打開すること自体が政策課題として浮 上する。

第4に、和人とアイヌ民族との日常的な関係を把握することである。アイヌ政策に対する評価は、政策の内容自体によって左右されると同時に、和人やアイヌ民族の日常的な交流や接触のあり方によって規定される。両者の日常的な関係が互いに対する見方を形成する基盤となり、それが政策への評価に影響を与えると考えられる。とくに、和人とアイヌの人々が接する機会の多い地域の実情をとらえることが重要な意味をもつ。

これらの点をふまえ、本研究では、アイヌの人々が多く居住するいくつかの地域を取り上げ、ア

イヌ民族の生活の歩みと意識、和人のアイヌ民族やアイヌ政策に対する意識、アイヌ民族と和人の 交流と接触の実態について調査を実施する計画を立てた⁴⁾。初年度にあたる2012年には、新ひだか 町を対象として、調査を実施した。本報告書は、初年度の計画にしたがって実施した調査をまとめ たものである。

第3節 調査地の概要5)

第1項 開拓と産業の歴史

今回の調査で対象地として設定した新ひだか町は、2006 (平成18) 年3月31日に「静内町」と「三石町」が合併して誕生した、北海道日高振興局管内の中央に位置する町である。2010 (平成22) 年現在の人口は25,419人 (国勢調査人口) となっている。

旧静内町はシャクシャインが蜂起した土地として知られ、旧三石町も含めて、古くからアイヌの人々が住んでいた。アイヌは地方によって系統が異なり、この地は、メナシウンクル(東方人)、シュムウンクル(西方人)の接触する境界地としての性格をもっていた。また、シュムウンクル系の中にも、ハエウンクル(波恵人)という系統があり、この3つの集団が時には反発し、時には融合して、複雑な様相を呈していた。それが、シャクシャインの戦いの背景の一つになった。

江戸時代後期に入ると、1780年代、旧静内地区にシツナイ場所、シフチャリ場所、旧三石町にミツイシ場所がおかれ、場所請負人などの和人が定住を始めた。彼らは、番屋(漁場の近くの海岸線に作られた作業場兼宿泊施設)の周辺に菜園程度の耕地を作った。アイヌの人々もアワ・ヒエ・大豆・小豆といった穀類などを収穫し、食糧の足しにしていた。しかし、松前藩は、農耕を認めると漁獲高が減るとの理由で、蝦夷地における農耕を禁止した。

和人の本格的な入植は、1871 (明治 4) 年の徳島藩淡路島城代家老・稲田家の旧家臣546人が元静内に上陸したことを嚆矢とする。彼らは、原生林を開拓し、農業を始めた。1885 (明治18) 年には渡辺伊平を団長とする兵庫団体50戸が移住し、農業が一段と飛躍した。同じ頃、旧三石町でも農業を専業とする人々の入植が始まった。開拓が進み、厳しい自然環境のもとでも、麦、そば、馬鈴薯、大豆、えん麦などが収穫できるようになった。水稲栽培も1887 (明治20) 年から始まった。

稲田家旧家臣団が入植した当時、静内地方には野生の馬が山野にたくさんおり、農作物に被害を与えていた。そこで、稲田家の家臣らは、アイヌの若者に依頼し野生の馬を捕らえさせ、馴らしていた。この地方が牧野に適していることが知られ、1872 (明治5)年に北海道開拓使長官・黒田清隆により北海道産馬の改良を目的として、静内、新冠、沙流の3郡にわたる7万へクタールの広大な用地に新冠牧場が設けられた。1884 (明治17)年、新冠牧場は宮内省の所管になり、1888 (明治21)年、新冠御料牧場と改称された。農家が生産した大豆は牧場が馬の餌として購入していた。

新冠牧場・新冠御料牧場には、正式に牧夫として雇われるアイヌの人たちもいた。その一方、牧場の新冠側にあった姉去コタンに別のコタンからアイヌを移住させ牧場の土地を貸与させた後、その土地を飼料用地にするため平取町上貫気別の未開地に強制的に移住させることも行った⁶⁾。

新冠牧場をみて、1877 (明治10) 年頃から民間の中からも牧場経営を行う者が現れるようになった。1890 (明治23) 年時点で、旧三石町だけで5つの牧場が設立された(三石町史編さん委員会編1971: 154)。さらに、1892 (明治25) 年から優良牝馬を導入し、競走馬としての軽種馬の生産が本格的に開始された。1910 (明治43) 年には、旧静内町だけで、25の民有牧場が数えられるようになっ

た (静内町史編さん委員会編 1996: 861)。旧静内町では大正末期から静内・新冠産牛馬畜産組合が主催者となり、競馬が行われた。静内の競馬は1941 (昭和16) 年まで続いた。戦後も1946 (昭和21) 年と1958 (昭和33) 年に静内で競馬が催されたが、これが最後となった (静内町史編さん委員会編 1996: 881-2)。軽種馬生産はその後も続けられ、この地域一帯は、現在、日本における軽種馬の一大生産地となっている。牧夫や経営者として軽種馬生産に従事しているアイヌの人々も少なくないという。

しかし、牧場関係者を含めた農業就業人口は、戦後1953(昭和33)年を境に減少している。牧場の倒産や離農などがその原因である。ただし、産業就業人口に占める農業就業者の割合は、2010(平成22)年現在でも、旧静内町で14.2%(表0-1)、旧三石町で32.3%(表0-2)と全国(3.6%)や北海道全体(5.6%)に比べて格段に高く、牧場経営を始めとした農業が重要な産業であり続けていることは間違いない。

表0-1 旧静内町の産業別就業人口・構成比の推移

単位:人、%

| | | 1955年 | 1960年 | 1965年 | 1970年 | 1975年 | 1980年 | 1985年 | 1990年 | 1995年 | 2000年 | 2005年 | 2010年 |
|---|--------------------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| | 総数 | 7,856 | 9,755 | 12,022 | 11,630 | 11,274 | 12,535 | 12,492 | 12,001 | 12,088 | 11,425 | 10,871 | 9,813 |
| | 農業 | 2,948 | 2,731 | 2,186 | 2,094 | 1,949 | 1,694 | 1,714 | 1,689 | 1,698 | 1,620 | 1,509 | 1,391 |
| | 林業 | 211 | 509 | 755 | 481 | 294 | 254 | 291 | 156 | 115 | 65 | 59 | 51 |
| | 漁業 | 365 | 616 | 534 | 381 | 411 | 349 | 393 | 381 | 377 | 310 | 281 | 250 |
| | 鉱業 | 4 | 54 | 53 | 92 | 72 | 63 | 57 | 43 | 41 | 32 | 34 | 19 |
| | 建設業 | 874 | 959 | 2,398 | 1,481 | 1,483 | 2,197 | 1,906 | 1,583 | 1,875 | 1,714 | 1,446 | 1,058 |
| | 製造業 | 1,230 | 1,465 | 1,710 | 1,759 | 1,360 | 1,392 | 1,196 | 1,236 | 803 | 527 | 400 | 363 |
| | 電気・ガス・熱供給・水道業 | L | 39 | 114 | 72 | 85 | 113 | 97 | 110 | 112 | 103 | 107 | 103 |
| | 情報通信業 | 495 | | L | L | L | L | L | L | L | L | 19 | 22 |
| | 運輸業・郵便業 | H | 612 | 669 | 744 | 759 | 756 | 702 | 547 | 581 | 494 | 356 | 342 |
| | 卸売業・小売業 | 805 | 1,322 | 1,669 | 2,209 | 2,304 | 2,631 | 2,673 | 2,545 | 2,557 | 2,578 | 1,949 | 1,603 |
| | 金融・保険業 | L | L -, | L -, | L -, | L -, | L -, | L -, | L -, | L -, | L -, | 230 | 183 |
| | 不動産業・物品賃貸業 | | | | | | | | | | | 35 | 101 |
| | 宿泊業・飲食サービス業 | | | | | | | | | | | 629 | 629 |
| | 教育・学習支援業 | | | | | | | | | | | 452 | 431 |
| | 医療・福祉 | 784 | 1.232 | 1.552 | 1.888 | 2,003 | 2,407 | 2,730 | 2,976 | 3,225 | 3,267 | 1,060 | 1,161 |
| | 複合サービス事業 | 104 | 1,202 | 1,002 | 1,000 | 2,000 | 2,401 | 2,130 | 2,510 | 0,220 | 0,201 | 248 | 169 |
| | 学術研究・専門・技術サービス業 | | | | | | | | | | | _ 240 | 159 |
| | 生活関連サービス業・娯楽業 | | | | | | | | | | | 1,353 | 467 |
| | サービス業 (他に分類されないもの) | | | | Ц | | | | | | | 1,555 | 629 |
| | 公務(他に分類されるものを除く) | 139 | 211 | 382 | 424 | 542 | 679 | 731 | 735 | 703 | 715 | 702 | 679 |
| | 分類不能 | 159 | 5 | 0 | 5 | 12 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 573 |
| - | 総数 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| | 農業 | 37.5 | 28.0 | 18.2 | 18.0 | 17.3 | 13.5 | 13.7 | 14.1 | 14.0 | 14.2 | 13.9 | 14.2 |
| | 林業 | 2.7 | 5.2 | 6.3 | 4.1 | 2.6 | 2.0 | 2.3 | 1.3 | 1.0 | 0.6 | 0.5 | 0.5 |
| | 漁業 | 4.6 | 6.3 | 4.4 | 3.3 | 3.6 | 2.8 | 3.1 | 3.2 | 3.1 | 2.7 | 2.6 | 2.5 |
| | 鉱業 | 0.1 | 0.6 | 0.4 | 0.8 | 0.6 | 0.5 | 0.5 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 0.3 | 0.2 |
| | 建設業 | 11.1 | 9.8 | 19.9 | 12.7 | 13.2 | 17.5 | 15.3 | 13.2 | 15.5 | 15.0 | 13.3 | 10.8 |
| | 製造業 | 15.7 | 15.0 | 14.2 | 15.1 | 12.1 | 11.1 | 9.6 | 10.3 | 6.6 | 4.6 | 3.7 | 3.7 |
| | 電気・ガス・熱供給・水道業 | 15.7 | 0.4 | 0.9 | 0.6 | 0.8 | 0.9 | 0.8 | 0.9 | 0.0 | 0.9 | 1.0 | 1.0 |
| | 情報通信業 | 6.3 | 0.4 | 0.5 | 0.0 | 0.0 | 0.9 | 0.0 | 0.9 | 0.5 | 0.9 | 0.2 | 0.2 |
| | 運輸業・郵便業 | 0.5 | 6.3 | 5.6 | 6.4 | 6.7 | 6.0 | 5.6 | 4.6 | 4.8 | 4.3 | 3.3 | 3.5 |
| | | 10.0 | 10.0 | 10.0 | 10.0 | 00.4 | 01.0 | 01.4 | 01.0 | 01.0 | 00.0 | | |
| | 卸売業・小売業 | 10.2 | 13.6 | 13.9 | 19.0 | 20.4 | 21.0 | 21.4 | 21.2 | 21.2 | 22.6 | 17.9 | 16.3 |
| | 金融・保険業 | П | h | h | П | h | П | h | h | П | h | 2.1 | 1.9 |
| | 不動産業・物品賃貸業 | | | | | | | | | | | 0.3 | 1.0 |
| | 宿泊業・飲食サービス業 | | | | | | | | | | | 5.8 | 6.4 |
| | 教育・学習支援業 | 100 | 10.2 | 100 | 100 | 17.0 | 100 | | | 00.5 | 00.0 | 4.2 | 4.4 |
| | 医療・福祉 | 10.0 | 12.6 | 12.9 | 16.2 | 17.8 | 19.2 | 21.9 | 24.8 | 26.7 | 28.6 | 9.8 | 11.8 |
| | 複合サービス事業 | | | | | | | | | | | 2.3 | 1.7 |
| | 学術研究・専門・技術サービス業 | | | | | | | | | | | h l | 1.6 |
| | 生活関連サービス業・娯楽業 | | | | | | | | | | | 12.4 | 4.8 |
| | サービス業 (他に分類されないもの) | ľ | ľ | ľ | ľ | ۲ | ľ | ľ | ľ | Ľ | ľ | Γ | 6.4 |
| | 公務(他に分類されるものを除く) | 1.8 | 2.2 | 3.2 | 3.6 | 4.8 | 5.4 | 5.9 | 6.1 | 5.8 | 6.3 | 6.5 | 6.9 |
| | 分類不能 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |

資料:『国勢調査報告』各年版より作成

表 0-2 旧三石町の産業別就業人口・構成比の推移

| | | 1955年 | 1960年 | 1965年 | 1970年 | 1975年 | 1980年 | 1985年 | 1990年 | 1995年 | 2000年 | 2005年 | 2010年 |
|----|--------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 総数 | 5,138 | 4,969 | 4,248 | 4,120 | 3,917 | 3,672 | 3,554 | 3,444 | 3,266 | 2,992 | 2,543 | 2,259 |
| | 農業 | 2,793 | 2,592 | 2,037 | 1,928 | 1,730 | 1,484 | 1,339 | 1,230 | 1,073 | 966 | 804 | 729 |
| | 林業 | 158 | 249 | 127 | 108 | 68 | 96 | 65 | 63 | 51 | 38 | 29 | 39 |
| | 漁業 | 561 | 479 | 345 | 362 | 343 | 308 | 311 | 361 | 318 | 263 | 188 | 174 |
| | 鉱業 | 1 | 11 | 7 | 12 | 14 | 10 | 12 | 8 | 7 | 8 | 1 | 0 |
| | 建設業 | 375 | 365 | 469 | 392 | 423 | 450 | 474 | 423 | 443 | 366 | 308 | 219 |
| | 製造業 | 336 | 281 | 222 | 196 | 230 | 223 | 216 | 185 | 182 | 173 | 121 | 109 |
| | 電気・ガス・熱供給・水道業 | L | 9 | 7 | 4 | 9 | 9 | 2 | 2 | 7 | 8 | 8 | 9 |
| | 情報通信業 | 138 | L | 140 | 105 | | | L | | | L | 5 | 5 |
| 実 | 運輸業・郵便業 | H | 153 | 149 | 135 | 94 | 83 | 74 | 76 | 73 | 71 | 39 | 45 |
| | 卸売業・小売業 | 295 | 330 | 360 | 348 | 308 | 316 | 362 | 375 | 362 | 355 | 270 | 248 |
| | 金融・保険業 | h | h | _ | h | h | h | Ь | h | h | h | 28 | 24 |
| | 不動産業・物品賃貸業 | | | | | | | | | | | 2 | 7 |
| 数 | 宿泊業・飲食サービス業 | | | | | | | | | | | 76 | 74 |
| | 教育・学習支援業 | | | | | | | | | | | 67 | 66 |
| | 医療・福祉 | 378 | 418 | 433 | 535 | 545 | 578 | 568 | 585 | 596 | 600 | 152 | 177 |
| | 複合サービス事業 | | | | | | | H | | | | 78 | 67 |
| | 学術研究・専門・技術サービス業 | | | | | | | | | | | h l | 38 |
| | 生活関連サービス業・娯楽業 | | | | | | | | | | | 239 | 47 |
| | サービス業 (他に分類されないもの) | Ц | H | Ц | Н | Ц | Ц | Н | Н | Н | Н | μ | 85 |
| | 公務(他に分類されるものを除く) | 103 | 80 | 92 | 98 | 150 | 115 | 129 | 136 | 154 | 143 | 128 | 97 |
| | 分類不能 | 0 | 2 | 0 | 2 | 3 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| | 総数 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| | 農業 | 54.4 | 52.2 | 48.0 | 46.8 | 44.2 | 40.4 | 37.7 | 35.7 | 32.9 | 32.3 | 31.6 | 32.3 |
| | 林業 | 3.1 | 5.0 | 3.0 | 2.6 | 1.7 | 2.6 | 1.8 | 1.8 | 1.6 | 1.3 | 1.1 | 1.7 |
| | 漁業 | 10.9 | 9.6 | 8.1 | 8.8 | 8.8 | 8.4 | 8.8 | 10.5 | 9.7 | 8.8 | 7.4 | 7.7 |
| | 鉱業 | 0.0 | 0.2 | 0.2 | 0.3 | 0.4 | 0.3 | 0.3 | 0.2 | 0.2 | 0.3 | 0.0 | 0.0 |
| | 建設業 | 7.3 | 7.3 | 11.0 | 9.5 | 10.8 | 12.3 | 13.3 | 12.3 | 13.6 | 12.2 | 12.1 | 9.7 |
| | 製造業 | 6.5 | 5.7 | 5.2 | 4.8 | 5.9 | 6.1 | 6.1 | 5.4 | 5.6 | 5.8 | 4.8 | 4.8 |
| | 電気・ガス・熱供給・水道業 | h | 0.2 | 0.2 | 0.1 | 0.2 | 0.2 | 0.1 | 0.1 | 0.2 | 0.3 | 0.3 | 0.4 |
| 構 | 情報通信業 | 2.7 | 3.1 | 3.5 | 3.3 | 2.4 | 2.3 | 2.1 | 2.2 | 2.2 | 2.4 | 0.2 | 0.2 |
| | 運輸業・郵便業 | Γ | Γ | Γ | | Γ | | Γ | Γ | | Γ | 1.5 | 2.0 |
| 成 | 卸売業・小売業 | 5.7 | 6.6 | 8.5 | 8.4 | 7.9 | 8.6 | 10.2 | 10.9 | 11.1 | 11.9 | 10.6 | 11.0 |
| μX | 金融・保険業 | Н | h | Н | h | h | h | h | Н | h | h | 1.1 | 1.1 |
| | 不動産業・物品賃貸業 | | | | | | | | | | | 0.1 | 0.3 |
| 比 | 宿泊業・飲食サービス業 | | | | | | | | | | | 3.0 | 3.3 |
| | 教育・学習支援業 | | | | | | | | | | | 2.6 | 2.9 |
| | 医療・福祉 | 7.4 | 8.4 | 10.2 | 13.0 | 13.9 | 15.7 | 16.0 | 17.0 | 18.2 | 20.1 | 6.0 | 7.8 |
| | 複合サービス事業 | | | | | | | | | | | 3.1 | 3.0 |
| | 学術研究・専門・技術サービス業 | | | | | | | | | | | h | 1.7 |
| | 生活関連サービス業・娯楽業 | | | | | | | | | | | 9.4 | 2.1 |
| | サービス業 (他に分類されないもの) | ľ | ľ | ľ | ľ | ľ | ľ | ľ | Ľ | ľ | ľ | | 3.8 |
| | 公務 (他に分類されるものを除く) | 2.0 | 1.6 | 2.2 | 2.4 | 3.8 | 3.1 | 3.6 | 3.9 | 4.7 | 4.8 | 5.0 | 4.3 |
| | 分類不能 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |

資料:『国勢調査報告』各年版より作成

一方、明治以降、開拓使は場所請負制度を廃止し請負人を排除した。漁場は官有とされたが漁業の担い手がすぐには育たず、しばらくの間、漁場持に漁業経営を委託することになった。旧静内町では函館の山田栄六、旧三石町では元場所請負人の小林重吉を漁場持として漁業経営をまかせた。同時に、アイヌの人々にも漁業の権利を認め、昆布採取の権利はすべてアイヌの人々に付与した。しかし、開拓使が委託した山田の経営はうまくいかず、その後、漁業に従事する和人が移住することで漁業が盛んになった。1877(明治10)年には、旧三石町の鳧舞地区が新たな漁村集落として誕生し、1887(明治20)年には、新潟から移住した遠藤幸次郎、榎本鹿太郎等によって三石で沖合漁業が始められた。

また、当時アイヌの人々だけが行っていた昆布採取に和人の移住者が乗り出すようになった。すると、人口の増加による乱獲が問題となり、1892(明治25)には、日高その他の昆布採取新規出願

を許可しないとの道庁令が出された。その後、1930(昭和5)年前後から昆布増殖事業が取り組まれた。戦後、1949(昭和24)に北海道が浅海増殖事業を補助事業としてから、昆布の増殖が急速な発展を遂げた。現在では、三石昆布のブランドが確立している。

しかし、高度経済成長期以降、農漁業が衰退する中で、人口自体が減少するようになった(図 0 - 1)。旧三石町では、早くも1955(昭和30)年の11,479人をピークに人口減が始まり、旧静内町でも1965(昭和40)年の26,533人をピークに、人口が減少した。その結果、2010(平成22)年には旧静内地区の人口が20,865人、旧三石地区が4,554人、両地区合わせた新ひだか町の人口が25,419人となり、旧静内町のピーク時の人口を下回るまでになっている。

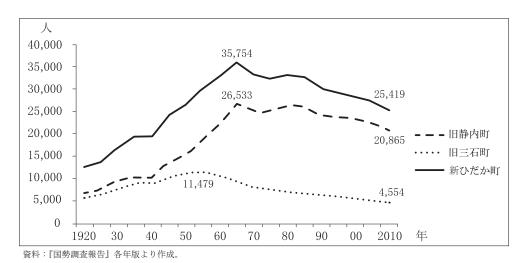


図0-1 新ひだか町の人口の推移

第2項 近代以降のアイヌ民族の動向

旧静内町には、1857 (安政4) 年の時点で、127戸、675人のアイヌがいたとされる。1871 (明治3) 年には、アイヌ人口は増加し1,219人となり、和人は64人しかいなかった。和人はアイヌの5%程度だった(静内町教育委員会 1991: 4)。しかし、1896 (明治29) になると、総戸数699戸、人口3,515人のうち、339戸、1,729人がアイヌとなり、和人とアイヌの戸数や人口はほぼ半々になった(静内町史編さん委員会編 1996: 473-4)。アイヌ人口も増加したが、それ以上に移住する和人の方が多かったからである。その後、和人の増加が続き、反対にアイヌ人口は減少した。その結果、1921 (大正10) 年には総戸数1,355戸、6,995人のうち、アイヌが345戸、1,037人となった。アイヌと比べ、和人の戸数が約4倍、人口が約7倍に達した(静内町史編さん委員会編 1996: 475)。

一方、旧三石町には、1786 (天明6) 年の時点で、30余戸、140余人のアイヌの人々が居住していたとの記録がある。それが、1822 (文政5) 年に56戸、222人、1868 (慶応4) 年には63戸、270人 (三石町史編さん委員会編 1971: 59-60)、1886 (明治19) 年には、67戸、391人と増加している。これに対し、1886年の和人の戸数が149戸、人口が411人であるため、この段階で和人の数がアイヌの数を上回るようになった。その後は、アイヌの人口が横ばいとなる一方、和人の数が急増した。その結果、1921 (大正10) 年にはアイヌ86戸、474人に対し、和人は1,028戸、2,829人と、アイヌは完全に少数派になっている(三石町史編さん委員会編 1971: 120-1)。

和人の入植により、アイヌの人々が従来共同で利用していた土地の多くが無主地とされ和人のものになった。その後、北海道旧土人保護法の制定にともない、給与地が下付され、旧土人学校として1906 (明治39) 年に旧三石町の辺訪尋常小学校 (~1922 (大正11) 年)(三石町史編さん委員会編 1971: 216)、1907 (明治40) 年に旧静内町の遠仏尋常小学校 (~1921 (大正10) 年)が設置された (静内町史編纂委員会編 1963: 851-4)。前者は、1922 (大正11) 年、後者は1921 (大正10)年に旧土人学校としての使命を終えている。

第二次世界大戦後、1946(昭和21)年、北海道アイヌ協会が社団法人として設立され、静内支部も結成された。設立総会の場となったのが、旧静内町の公会堂であった。静内は、シャクシャインゆかりの地であり、アイヌの人々にとって象徴的な地であることを物語っている。一方、三石支部はアイヌ協会が再建された1960年に設立され、1962(昭和37)年には、ウタリ協会支部の日高連合会が結成されている(三石町史編さん委員会編 1971: 971)7)。

なお、2006 (平成18) 年に静内町と三石町が合併したが、アイヌ協会の静内支部と三石支部は合併していない。静内支部が新ひだか支部に名称を変更しただけである。それぞれの会員数は、2008年の北海道アイヌ民族生活実態調査実施時点で、新ひだか支部が235人、三石支部が36人であった(山崎 2010:8)。

第4節 調査の対象と方法

今回、われわれは、アイヌの人々を対象にしたインタビュー調査と地域住民を対象にした郵送調査・インタビュー調査を実施した。

アイヌの人々を対象にしたインタビュー調査は、アイヌ協会新ひだか支部に所属する会員家族の うち、20歳から80歳未満の人々から、10歳きざみで各世代ごとに10人ずつ、あわせて60人を対象者 とする計画を立てた。対象者の選定にあたっては、北海道アイヌ協会および同協会新ひだか支部の 全面的な協力をえた。

具体的には、まず、新ひだか支部事務局が会員名簿より会員や家族の中から年齢ごとに無作為で対象者候補をリストアップし、それをもとに対象者の協力の意志と調査日時の都合を同支部事務局の方から確認していただいた。協力を得られない場合には、対象者候補を追加し、54人が確定できた。結果的に、年齢に大きな偏りができ、20歳代が3人(男性のみ)、30歳代が6人(男性1人、女性5人)、40歳代が16人(男性6人、女性10人)、50歳代が10人(男女とも5人)、60歳代が13人(男性6人、女性7人)、70歳代が6人(男女とも3人)となった。20歳~30歳代はもともと少なく、協力者を得ることがむずかしいため、全体数の確保を優先した結果、40歳代と60歳代が多くなった。ちなみに、もっとも若い対象者が21歳、最高齢が78歳である。また、アイヌ協会の会員には、アイヌの人と結婚した和人やアイヌの家庭で育てられた和人養子も含まれている。今回の対象者のうち、アイヌ以外の配偶者(和人および和人と朝鮮人の混血)が4人、和人養子が1人である。対象者については、プライバシーを保護するため、氏名、住所とも新ひだか支部事務局だけが把握しており、当研究室では、まったくわからない状態になっている。

インタビュー調査は、新ひだか支部事務局が入居している新ひだか町役場のいくつかの部屋を会場にして、9月16・17、26・27日の4日間の日程で実施された。都合の良い時間に会場に来ていただき、原則として、2人1組の調査員が $1\sim2$ 時間の予定で統一の調査票にもとづくインタビュー

を行った。インタビュー調査は、生まれてからこれまでの生活の歩み、アイヌ文化との関わり、アイヌ民族としての意識、国のアイヌ政策に対する要望などの聞き取りを中心にして行われた。実際には、インタビューが予定時間をこえることもあり、最長で3時間に及ぶケースもあった。2人以外は、同意を得てインタビュー内容をICレコーダーに録音している。

一方、住民調査は新ひだか町選挙管理委員会の許可をえて、有権者名簿から系統抽出法により、1,229人の対象者を選定し、8月6日から8月21日の間に郵送調査をおこなった。その結果、有効回収票が529、有効回収率が43.0%となった。サンプルの構成を住民の構成と比較すると、20~40歳代の男女でサンプルの構成比の方ががやや低く、60歳代の女性を除く、50歳~70歳代の男女でやや高くなっている(表0-3)。20歳代男性で住民構成より6.9ポイント低く、70歳代男女がそれぞれ5.1ポイント、5.5ポイント高くなっている点が目につく。この点を念頭において、解釈をする必要がある。

表0-3 男女別年齢別住民構成とサンプル構成

単位:人、%

| | | | 実 数 | | į | 構 成 比 | |
|---------|--|--|--|--|---|--|---|
| | | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 |
| 新ひだか町 | 20 ~ 30歳未満 30 ~ 40歳未満 40 ~ 50歳未満 50 ~ 60歳未満 60 ~ 70歳未満 70 ~ 80歳未満 | 886 1,510 1,496 1,542 2,075 1,679 | 471 795 704 807 970 739 | 415 715 792 735 1,105 940 | 9.6 16.4 16.3 16.8 22.6 18.3 | 10.5 17.7 15.7 18.0 21.6 16.5 | 8.8 15.2 16.8 15.6 23.5 20.0 |
| | 計 | 9,188 | 4,486 | 4,702 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 住民調査回答者 | 20 ~ 30歳未満 30 ~ 40歳未満 40 ~ 50歳未満 50 ~ 60歳未満 60 ~ 70歳未満 70 ~ 80歳未満 | 25 64 80 111 120 124 | 9 35 35 56 61 54 | 16 29 45 55 59 70 | 4.8 12.2 15.3 21.2 22.9 23.7 | 3.6 14.0 14.0 22.4 24.4 21.6 | 5.8 10.6 16.4 20.1 21.5 25.5 |
| | 計 | 524 | 250 | 274 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

注)住民調査回答者のうち、年齢ないし性別不明の5名を除いてある。 資料:『国勢調査報告』2010年版およびアンケート調査結果より作成。

調査対象者には当然アイヌの方も含まれるが、調査倫理の上で問題があるため、アイヌ民族であるかどうかについて直接問うことはしていない。しかし、自らの祖先が明治以前から新ひだか町に住んでいた方や自らアイヌであることを表明された方などがいた。そのため、これらに該当する人たちをアイヌの人々とした。これに該当するのは、22ケース、うち1人が和人配偶者、2人が和人養子である。

さらに郵送調査の際、インタビュー調査への協力をお願いしたところ、49名の方が協力を申し出てくれた。結果として、9月15~20日、26・27日の間に、43名の方にインタビュー調査を実施させて頂いた。うち、3人がアイヌの方である。アイヌの方には、別に行ったインタビュー調査と同じ調査票を用いた。そのため、アイヌの人々の分析を行う際には、原則として3人のアイヌの方のインタビュー結果も加えて分析している。インタビューは自宅や指定された場所に原則2人の調査員が出向き実施した。3人の方以外は、同意を得てインタビュー内容をICレコーダーに録音している。

以下、第1部がアイヌ調査結果、第2部が住民調査結果の分析となる。第1部では、アイヌの家

族と階層の形成過程(第1章、第2章)を明らかにした上で、差別やエスニック・アイデンティティの諸相、さらにエスニック・メディアの現状(第3~5章)を分析した。第2部では、アイヌの人々との交流や接触(第6章)、アイヌ文化に関する知識と体験(第7章)の分析の後に、アイヌ政策や地域社会への評価(第8章、第9章)を明らかにした。なお、本報告書は中間報告であるため、終章はあえて設けていない。

注

- 1)アイヌ民族の歴史については、おもに榎森(2007)、アイヌ民族に関する指導資料編集委員会編(2006)、アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会(2009)、小川(1997)などを参照した。
- 2) 榎森進は「北海道土地売貸規則」と「地所規則」について「問題は、その『私有』の対象は、 あくまでも和人であり、アイヌは対象外とされたことである」(榎森 2007: 394) としている。し かし、法令上アイヌが対象外になったわけではなく、720戸のアイヌが一戸あたり310坪の土地に 関して私有権条項の適用を受けている (小川 1997: 49-50)。
- 3)第二次世界大戦以前のアイヌ民族運動については、小川(1997)の第6章および金倉(2006) の第2章も参照されたい。
- 4)アイヌ研究は数多い。しかし、考古学、歴史学、民族学、人類学等の分野のものがほとんどで、アイヌの人々をめぐる現状や課題に関する社会学的研究は多くない。まとまったものとしては、松本・大黒編(1998)と松本・江川編(2001)が目につく程度である。本研究は、こうした状況を克服しようとする試みでもある。この点については、小内(2010)、小内(2012)を参照されたい。
- 5)旧静内町と旧三石町の歴史については、静内町史編纂委員会編(1963)、静内町史編さん委員会編(1996)、静内町編(2006)、三石町史編さん委員会編(1971)および三石町開基百年記念誌編纂委員会編(1976)を参照した。
- 6)新冠御料牧場が道庁に働きかけ、1912(大正元)年に姉去コタン住民の強制移住のため北海道 旧土人保護法による平取町上貫気別の土地下付がなされた(山田 2006: 64)。1916(大正5)年 には、アイヌコタン70戸、300人が土地を追われ、その一部が上貫気別に移住した(山本 1985: 120)。
- 7)1965 (昭和40) 年の時点で、旧三石町に住むアイヌの人々の数は86戸、411人だった (三石町史編さん委員会編 1971: 972)。

参考文献

- アイヌ民族に関する指導資料編集委員会編,2006,『アイヌ民族に関する指導資料(改訂3版)』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.
- アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会,2009,『アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書』アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会.

榎森進、2007、『アイヌ民族の歴史』草風館.

石田肇, 2006,「北海道の古人骨」アイヌ民族に関する指導資料編集委員会編『アイヌ民族に関する 指導資料(改訂3版)』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構, 10-6.

金倉義慧, 2006, 『旭川・アイヌ民族の近現代史』高文研.

松本和良・江川直子編,2001,『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社.

松本和良・大黒正伸編、1998、『ウタリ社会と福祉コミュニティ』学文社.

- 三石町開基百年記念誌編纂委員会編,1976,『みついし百年』三石町開基百年記念事業推進委員会.
- 三石町史編さん委員会編, 1971, 『三石町史』北海道三石町長.

小川正人, 1997, 『近代アイヌ教育制度史研究』 北海道大学出版会.

- 小内透,2010,「問題意識と調査の概要」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識――2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学 アイヌ・先住民研究センター、1-6.
- 大竹秀樹, 2010,「日本政府のアイヌ民族政策について――国際人権監視機関から考える」『日本福祉 大学研究紀要―現代と文化』第121号, 135-55.

静内町編、2006、『静内まちの記憶』静内町.

静内町教育委員会, 1991, 『静内地方の伝承――織田ステノの口承文芸(1)』静内町教育委員会. 静内町史編纂委員会編, 1963, 『静内町史』静内町.

静内町史編さん委員会編, 1996, 『増補改訂 静内町史 上巻』静内町.

山田伸一,2006,「近代の政治・社会」アイヌ民族に関する指導資料編集委員会編『アイヌ民族に関する指導資料(改訂3版)』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構,62-8.

山本融定, 1985,『日高國 新冠御料牧場史』みやま書房.

山﨑幸治,2010,「調査対象の特性」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,7-18.

(小内 透)

第 1 部

アイヌの人々の生活の歩みと意識

第1章 アイヌの家族形成

品川ひろみ|札幌国際大学短期大学部教授

はじめに

アイヌの血筋は、和人との結婚が進み、次第に薄まっているといわれている。それは結婚の際に アイヌの身体的特徴を目立たなくするため、あえて和人を選んだというアイヌ自身の戦略によるも のでもあり、その結果、アイヌの混血が進んできたといえる(小内 2012)。

今回の対象地域である新ひだか町は、アイヌ民族にとって歴史ある重要な地域である。この地に おいてもアイヌの人々の血筋や意識は、他の地域と同様な傾向にあるのだろうか。

本章ではアイヌの人々が、その血筋をどのように受け継いできたのか。つまり、どのような家族に生まれ育ち、新しく家族を形成し、次の世代へとつなげていったのかを明らかにする。具体的には、本人とその親や配偶者の血筋を確認したのち、アイヌの血筋であることをどのように意識したのか、さらに結婚の際にアイヌであることは影響したか、子どもへの民族性をどう育てたいかについて、年齢層に着目しながら分析をすすめる。

また、その際には、当地域におけるアイヌの人々の特性を明らかにするため、2009年に札幌とむかわで行ったアイヌ民族生活実態調査の結果を参考にする¹⁾。

第1節 調査対象者の生活

第1項 婚姻と家族の状況

本章で分析の対象とするのは、インタビューに答えてくれた57人のアイヌの人々である。その内 訳は、20代、30代の青年層が9人、30代、40代の壮年層が26人、60代以上の老年層は22人であった。 男女別では男性27人、女性30人となっている。また、壮年層の3人、老年層の2人が和人である。

対象者の婚姻と世帯の状況についてみると、青年層9人のうち、未婚は2人、既婚が6人、離別が1人となっていた。現在の生活は、2人の未婚者も、親やきょうだいと生活するなど、すべての者が家族と同居しており、1人暮らしは見られなかった。また4人家族以上の世帯が6人と、家族規模が大きいことが確認された。

1人暮らしがみられなかった青年層に対して、壮年層は1人暮らしが6人ほどみられた。また、2人暮らしというのも8人と世帯の規模が青年層に比べ小さいケースが多い。これは子どもが成長し進学や就職のため地元を離れてしまい、夫婦2人暮らしになったというケースが影響している。一方で、子どもが多く、さらに親と同居しているため5人以上の家族もあるなど、家族の規模に開きがあった。

老年層になると1人暮らしが5人と、壮年層以上に世帯規模が小さくなっている。これは年齢が高くなることで子どもが成長し家を離れることに加え、配偶者との離別や死別が影響していると考

えられる。

つぎに家族の生活を支えている現在の職業についてみてみよう。青年層では牧場関係、公務員、自由業など多彩である。無職が4例と多いのは、母子家庭であるのと、専業主婦であるためである。 壮年層の26例では、青年層以上に多様な職種がみられた。しかし、いわゆるホワイトカラーの職 についている者は5人だけであり、農業、建設、土木、運輸などのブルーカラーが目立つ。また新

老年層では22人中14人が無職である。そのうち夫が就労しているためのいわば専業主婦のため無職というのは3人のみであり、高齢のため、年金生活、体調が悪いなどの理由で就労していない場合が多い。また夫婦2人暮らしで、ともに無職という例もみられた。

ひだか町という地域性から、地元の漁業に関連する季節労働の仕事もみられた。

表1-1 調査対象

| | 未婚 | 既婚 再婚 | 離別 死別 | 現在の職業 |
|----|----|----------|----------|---|
| 青年 | 2 | 6 | 1 | 牧場関係、自由業、公務員、事務、土木関係、無職(4) |
| 壮年 | 5 | 15 | 6 | 農業(3)、公務員、建設、土木、事務、運輸、自由業、自営業、季節労働、無職(4)、パート(3) |
| 老年 | 1 | 15 | 6 | 自営業、農業、運輸、建設、自動車、管理人、無職(14) |

表1-2 同居家族

| 衣1-2 问店多 | 次 | | | |
|-----------------|-----|------|------|------|
| 同居家族 (本人を含む) | 青年 | 壮年 | 老年 | 合計 |
| 1.1 | 0 | 6 | 5 | 11 |
| 1人 | 0.0 | 10.5 | 8.8 | 19.3 |
| 0.1 | 1 | 8 | 10 | 19 |
| 2人 | 1.8 | 14.0 | 17.5 | 33.3 |
| 0.1 | 2 | 4 | 4 | 10 |
| 3人 | 3.5 | 7.0 | 7.0 | 17.5 |
| 4.1 | 3 | 3 | 2 | 8 |
| 4人 | 5.3 | 5.3 | 3.5 | 14.0 |
| - I | 1 | 2 | 1 | 4 |
| 5人 | 1.8 | 3.5 | 1.8 | 7.0 |
| 0.1 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| 6人 | 1.8 | 1.8 | 0.0 | 3.5 |
| 7.1 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| 7人 | 1.8 | 1.8 | 0.0 | 3.5 |
| 0.1 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 8人 | 0.0 | 1.8 | 0.0 | 1.8 |

注) セルの上段は実数の表記、下段はデータ総数を分母とする百分比(%)となっている。

第2項 アイヌの血筋

アイヌの血筋について、青年層、壮年層、老年層の年代ではそれぞれどのような状況だろうか。 まず、青年層をみると、9人すべてがアイヌの血筋であった。そのうち、父母ともにアイヌであった者は2人だけで、残りはすべて父母のどちらかが和人であった²⁾。

9人のうち、結婚経験をもつのは7人であるが、配偶者もアイヌである者は2人だけで、残りは 和人が3人、不明が2人である。不明の2人は、和人だろうと考えてはいるものの、とくに確認し たことはないという者である。

特筆すべきは、父母ともにアイヌであった2人についても、その配偶者は和人であった。つまり 父母ともにアイヌの血筋であり、本人の世代までは純粋のアイヌの血筋であったとしても、次の世 代では和人との混血になるということである。

表1-3 アイヌの血筋(青年層)

| 婚姻 | 本人血筋 | 父・母血筋 | 配偶者血筋 | 配偶者父母 |
|------|------|---------|-------|--------|
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 未婚 | アイヌ | 不明・アイヌ | _ | _ |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | 不明 | _ |
| 未婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | _ | _ |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | アイヌ | 和人・アイヌ |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | 不明 | 不明 |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 腐能另订 | アイヌ | 和人・アイヌ | アイヌ | 和人・アイヌ |

つぎに壮年層をみてみよう。40代50代の壮年層では、本人の血筋がアイヌである者は23人、和人は3人である。23人のアイヌの血筋をひく者のうち、父母ともにアイヌである者は12人と半数程度となる。残りの半数は父母の一方がアイヌであり、もう一方が和人である³⁾。父母ともがアイヌである12人のうち、さらに配偶者もアイヌである者は3人のみであった。その3人については配偶者の父母もアイヌであった。

表1-4 アイヌの血筋(壮年層)

| 婚姻 本人血筋 父・母血筋 配偶者血筋 配偶者父・母 既婚 和人 外国人・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ・アイヌ 来婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和 | | | | | |
|--|----|------|---------|-------|---------|
| 既婚 アイヌ アイヌ・和人 和人 和人・和人・和人 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ 未婚 アイヌ カ人・アイヌ カ人 和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・和人 アイヌ・アイヌ・和人 アイヌ・和人 アイヌ・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・アイヌ アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・ | 婚姻 | 本人血筋 | 父・母血筋 | 配偶者血筋 | 配偶者父・母 |
| 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ 未婚 アイヌ 和人・アイヌ ー ー 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・那人・那人・那人・那人・那人・那人・那人・那人・那人・那人・那人・那人・那人 | 既婚 | 和人 | 外国人・和人 | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| 末婚 アイヌ 和人・アイヌ 一 一 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 一 一 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 一 一 離別 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ・カ人 和人・和人 廃婚 アイヌ アイヌ・アイヌ・和人 不明 不明 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人・和人・和人・和人・和人・アイヌ 死婚 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・和人 | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人 和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人 た婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 一 一 離別 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ・和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・アイヌ・アイヌ・和人・アイヌ・和人・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ | 死別 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 一 一 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 一 一 離別 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・和人 和人 和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人・アイヌ アイヌ・アイヌ 死婚 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ 死別 アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 未婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | _ | _ |
| 既婚 アイヌ アイヌ・和人 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 一 一 離別 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ・和人 和人・和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・和人 不明 死明 既婚 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人・和人・和人・和人・和人・不付 死期 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ 死別 アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人 |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ ー ー 離別 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・和人 不明 不明 既婚 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人・和人 アイヌ・アイヌ 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ ー ー 離別 アイヌ アイヌ・カ人 アイヌ・和人 取イヌ・和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・大アイヌ・カート・アイヌ・カート・アイヌ・カート・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・和人 | 和人 | 和人・和人 |
| 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ ー ー 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ ー ー 離別 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ・和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・財婚 アイヌ・アイヌ・和人 不明 不明 死明 死明 アイヌ・アイヌ・和人・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ ー ー 離別 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・和人 和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・和人・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 離別 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・和人 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人 離別 アイヌ アイヌ・和人 和人 和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・和人 不明 不明 既婚 和人 外国人・和人 アイヌ 和人・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人・和人・和人 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 未婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | - | _ |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人・和人 離別 アイヌ アイヌ・和人 和人 和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・和人 不明 不明 既婚 和人 外国人・和人 アイヌ 和人・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人・和人・和人・和人・アイヌ 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 未婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | - | _ |
| 離別 アイヌ アイヌ・和人 和人 和人・和人・和人 既婚 アイヌ アイヌ・和人 不明 不明 既婚 和人 外国人・和人 アイヌ 和人・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ 和人・アイヌ 和人・和人 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ | 離別 | アイヌ | アイヌ・和人 | アイヌ | アイヌ・和人 |
| 既婚 アイヌ アイヌ・和人 不明 不明 既婚 和人 外国人・和人 アイヌ 和人・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ 和人・アイヌ 和人・和人・和人 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 和人 外国人・和人 アイヌ 和人・アイヌ 既婚 アイヌ アイヌ・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ 和人・アイヌ 和人・和人・和人・和人・アイヌ 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 離別 | アイヌ | アイヌ・和人 | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 既婚 アイヌ 和人・アイヌ 和人 和人・和人 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・和人 | 不明 | 不明 |
| 既婚 アイヌ 和人・アイヌ 和人 和人・和人 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | 和人 | 外国人・和人 | アイヌ | 和人・アイヌ |
| 死別 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・和人 | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| | 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| factor and the second s | 死別 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| | 離別 | アイヌ | 和人・アイヌ | 不明 | 不明 |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ 和人 和人・和人 | 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 未婚 アイヌ アイヌ・不明 | 未婚 | アイヌ | アイヌ・不明 | _ | _ |
| 離別 アイヌ 和人・アイヌ 和人 和人・和人 | 離別 | アイヌ | 和人・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 未婚 アイヌ アイヌ・アイヌ | 未婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | | _ |
| 既婚 アイヌ アイヌ・アイヌ アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| 既婚 和人 和人・和人 アイヌ アイヌ・アイヌ | 既婚 | 和人 | 和人・和人 | アイヌ | アイヌ・アイヌ |

老年層はどうだろうか。22人の老年層のうち、アイヌである者は20人、和人が2人であった。和人のうちの1人は養子であった。さらに20人のアイヌのうち父母ともにアイヌである者は13人である。ただし、配偶者もアイヌである者は13人中5人だけであり、その5人の配偶者のなかで、父母ともにアイヌであるのは2名だけだった。

表1-5 アイヌの血筋 (老年層)

| 婚姻 | 本人血筋 | 父・母血筋 | 配偶者血筋 | 配偶者父・母 |
|------|------|---------|-----------|---------|
| 未婚 | 和人 | アイヌ・アイヌ | - | _ |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・和人 | 和人 | 和人 |
| 死別 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | 和人 | アイヌ・アイヌ |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | アイヌ | 和人・アイヌ |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | アイヌ・和人 |
| 死別 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | 不明・アイヌ |
| 既婚 | アイヌ | 和人・アイヌ | アイヌ | アイヌ・アイヌ |
| 死別 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 死別 | アイヌ | 和人・アイヌ | 和人/アイヌ/和人 | 和人 3人目 |
| 离隹另刂 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 离隹另刂 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | アイヌ | _ |
| 既婚 | アイヌ | アイヌ・アイヌ | 和人 | 和人・和人 |
| 既婚 | 和人 | 和人・和人 | アイヌ | アイヌ・アイヌ |

このように、青年層、壮年層、老年層におけるアイヌの血筋をみると、年齢層が高い老年層ほど、 父母ともにアイヌである比率が高く、年齢が下がるほどアイヌであるのは父母のどちらかであるこ とが多かった。つまり年齢層が若いほどアイヌの血は薄くなっているとみることができる。

この結果を前回2009年に行われた札幌とむかわの調査と比較してみると、本人がアイヌであり、その父母もアイヌであるのは、今回の調査では青年層22.2%、壮年層47.8%、老年層65.0%、平均では45.6%であるのに対し、札幌は青年層8.3%、壮年層38.9%、老年層40.0%、平均31.1%、むかわは、青年層13.3%、壮年層41.2%、老年層36.8%、平均31.4%であった。

このように、新ひだか町の比率が札幌やむかわと比較して高いことがわかる。この地域でアイヌの血筋が濃いのは、ここ旧静内町・旧三石町や隣接する新冠町がアイヌ民族の中心的な居留地の一つであったことが影響しているだろう。北海道環境生活部が平成18年に行なった調査によれば、日高支庁のアイヌは7,530人で道内でもっとも多い。隣接する胆振支庁も6,622人と多いが、人口比で比較すると日高の9.2%に対して胆振は1.6%と大きな差がある(北海道環境生活部 2007)⁴⁾。そのためアイヌ同士が出会う可能性も大きいことが少なからず関係していると推察される。

第3項 アイヌであることの捉え

ではアイヌの人々は、アイヌの血筋であることを、どのように捉えているのだろうか。まずは青年層から確認してみよう。アイヌ民族であると意識したことについての発言を整理すると、もっとも多いのは、「意識していない」というものである。意識しないという発言の背景には、これまでの生活の中で、アイヌであることを意識するような場面に遭遇しなかったことがある。それに加え、アイヌとしての身体的な特徴が目立たなかったという発言もあった。たとえば、「親もそんなにアイヌくさい顔でもないんでね」というように、アイヌの特徴である「ホリの深さ」や「毛深さ」が目立たなかったということである。

では反対にアイヌであることを意識した人たちは、そのことをどのように捉えていたのだろうか。 目立つのはアイヌ文化にふれたことでアイヌであることを意識したという者である。「伝統的なことを見たり聞いたりして」と、冠婚葬祭を通して周囲の大人たちが話をすることを聞いて、さらにはそれらの人々を見ることによって「自分もそうだろう」と考えるようになったというものである。

ただし、これらの中に否定的な意識はみられない。むしろ積極的とまではいかなくても、アイヌであることを、子どもを含めた周囲に理解してほしいという考えが目立った。

表1-6 アイヌ民族であると意識したこと(青年層)

- ・高校出てからとか、社会人になってからいろいろ。伝統的なことを見たり聞いたりして。中学校、高校時代つきあっていた子もアイヌだったんで。 ・アイヌ文化に囲まれた生活。朝の8時から晩の5時まで踊りやって。その間に薪切ったりとか木彫りしたりとか、あとムックリつくったりとか。 もうアイヌの生活ですよね。
- ・(子どもにアイヌ民族であることを) そうですね、自分と同じくらいの時には理解しててほしいと思います。
- ・高校を卒業してから身内の冠婚葬祭とか、身内のとこに出ることが多くなって、それでそういう大人たちとかおじさん、おばさんがそういう話をするので、そうなんだと思うようになってきました。ショックでしたね、今は慣れてきてスネ毛とかもそったりとか、そういうのもできるようになって慣れてきたんですけど、その頃はちょっとショックだった。
- ・アイヌ民族というか、今の保存会(注・アイヌ文化を対象にした静内民族文化保存会)もそうなのですけど、人数が今少ないんですよ。で、親の 友だちのお母さんというか、友だちなんですけど、私はアイヌだけど入らないという人もいるし、何なんでしょうね、何かもうちょっとそういう。 知ってほしいというか、もうちょっとわかってほしいというのかな。
- ・アイヌの血を継いでいるんだと。・・・うちに家系図はあるんですよね。そのときの家系図をもらって、それで見たんで。すごいじゃないですか。ごちゃ ごちゃしてて。何番目とかも見てないんですけど。
- ・やっぱり親がアイヌだっていうのを、聞いたのかな。親に。漠然としてた、うーん、あまり実感なかったですね。親もそんなにアイヌくさい顔でもないんでね。うーん。
- ・(自覚は) 小さい時からですよね。やっぱり、実家のところが結構そういう人が多くて、自分もそうだろうって頭もあったので。

アイヌの血筋を意識する発言がさほど多くなかった青年層に比べ、壮年層ではアイヌの血筋を意識する場面が多くみられた。アイヌとしての身体的な特徴である毛深さについて「何でこんなに毛があるの」と親に尋ねたり、小学校のときに毛深いことに気づいた、などである。さらにアイヌであることを友だちから指摘されたことで自らのルーツを意識した者もみられる。

上記のように何かのきっかけでアイヌであることを意識したというのに対して、とくに意識はしなかったものの、「物心ついた時からわかっている」や「きちんとじゃなくても意識はしているさ」のように、ごく自然にアイヌであることを知った者もいる。

ただしどちらにしても、確実にそうであるか否かについては、「親に聞いた」ことではっきりと 理解したという者が多い。身体的な特徴や友人からの指摘と、きっかけは異なっていても、そのこ とを親あるいは祖父母に確かめるなどして自らがアイヌであると自覚するようになっている。

その時期については、年少時から結婚後までさまざまであった。結婚後に意識するようになった中には、結婚するまでわからなかったという例もある。嫁いだ後に母親が「よかったね、お前は濃くないから」と言われ、何が濃いのか、薄いのかと考えたという。またアイヌ協会に入会した後で、アイヌの血筋について聞いたという声もみられた。

表1-7 アイヌ民族であると意識したこと(壮年層)

- ・父親がアイヌの家系で25%、母親の家系はみんな和人だが、養女なんだわ。中略・・・育ての親はアイヌ。父方の祖父のほうはどちらもアイヌだ。
- ・そういう強い自覚というのか、アイヌであるのは間違いないとは感じますけれどもね。子どもの頃からです。馬鹿にされていましたからね。一部だけなんです。そういう、いじめとかそういうんじゃなくて口で、やっぱり。「アイヌ、アイヌと」。
- ・調べてもらって、本当にアイヌの血引いてるかっちゅうので調べてもらって。それで見て、結果みたっけそういうふうになってたもんで、ああと思った。それまでぜんぜん知らなかったもんでね。
- ・(アイヌ民族というのは) いつぐらいなんでしょうね。どの程度、その理解度にもよると思うんですけども、要するに家の中で生活していれば、明らかに外にないものがやっぱり目に付くんで、で、やっぱりどうなんだろうな、小学校時代、アバウトですが小学校時代でもいいでしょうか。
- ・「何で」って親に聞くじゃないですか。なんでこんなに毛があるのと。何も答えてくれなかった。最初はね。で、しつこく聞くとばあちゃんとか 私たちもそうだしっていうことで言われて。

- ・自覚、どうだろう。小学校の頃には毛深いとかで、そういうのは分かってましたよね。…中略…自覚というよりアイヌ民族というのはこういうものだというのは、協会の活動とかでわかったくらいで。
- ・(子どもは) 親がアイヌだということはわかってますけどね。常日頃そう言ってますから。女房のほうは完全にシャモですから。自分だって途中で混ざってるんだろうし。ほとんど子どもたちは親はアイヌだ、アイヌの血が流れてることは3人とも理解はしてますけど。
- ・小学校3年になったかそのくらいのことは、きちんとじゃなくても意識はしているさ。
- ・きっかけも何も物心ついた時からそういうのはわかってる。
- ・協会に入ってからアイヌの血筋について聞いた。誰がそっちの方なのというのはやっぱり聞きましたね。父方のおばあちゃんだよ。昔の人ってね、何か複雑で、育ちとかがね。だから、どの血筋なのか、何番目の親なのかっていう、そういう感じになっちゃって、でも、種はあれなんだけど、育てられたのは違うっていう。
- ・父方のおじいちゃんのきょうだいが何か写真あるって言っていたから、おじいちゃんも、もしかしたらアイヌの血を引いていたのかもしれないですね。わたしははっきりわからないです。おばあちゃんのほうは多分間違いないんですけど、おじいちゃんのほうがちょっと定かじゃないんですよね。おじいちゃんも、おばあちゃんも小学生のときになくなっているもんですから。
- ・うちのお母さんはきれいなほうだから、毛深くもないし。父親は写真であるだけで、見たら別にきれいな写真だし。おばあちゃんがそれ系統だから、それの子どもかなと推測でいったのか。でも、子どものときにそうやって育ってきて、社会に出て、そういう波は治まって、今度結婚してから、お前の父親がアイヌだから、おまえは純正で2世だろうと言われたら、またそこでガーンと来て。直系だろうとかって。何なの、2世とか直系とかって。わかんない。叔母さんが生まれて、おばあちゃんから出た子どもが父親で、そこから出て、昔の民族の人って見たこともないし、何かそういう催し物に参加したときに見たことはあるけど、それが何かも分からず育ってきて、普通の生活のように当たり前に育ってきたのに、どうして差別みたいに言われるのかなと、小学校のときから思ってきたし、ましてや大人で結婚してからも父親がアイヌでお前は2世だとか、だからどうしたのって思うんだけど。
- ・(アイヌの自覚は) 結婚した後ですね。母が、ぼそっと「よかったね、お前は濃くないからって」。で、何が濃いのかな、薄いのかなって思って。
- ・小学校3年生くらい、クラスの子が言って、あっ、そうなんだと思って。親に聞いたらそうだっていう話だったので。
- ・小学生のときはあんまりぱっとしてなかったんですけど、中学頃になるとある程度、こう回り見ててそのいじめられてる子とか見てたり、あっというのがあったし、そうだな、うちもっていうのが、多分父とか見てると父は分かりやすい人だったんで、うちもそうだなって思って。一時逃避しようじゃないけど、わたし、もらいっ子でしょって母に言ったことがあったんですけど。お前どう見ても、うちの父さんそっくりだ、お前は父さんの子だって言われて、やっぱりかって思って。中学頃にはきっとうちもそうだな、自分もそうだなっていうのは自覚っていうか、そうだなって、そう自覚はしましたね。
- ・最初の相手の父親はやっぱり内地の人だから、うちと同じさ。うちも父親内地だから。母親どっちの母親も自分の母親も混ざって薄くなってる者 同士だから多分同じだと思います。お互いにいまだに別れたけど、そのことに対して一切ふれないし会話しても、うーんって自分がそうだとも言 わない。お互いに言わなかったね。
- ・一番最初に知ったのは小学校 2 年生のときに、学校帰りに同級生の子たちが $4\sim5$ 人周りにいて、「お父さんとお母さん、どっちアイヌ?」って 聞かれたんですよ。それでアイヌってなんだろうって思ったんですよね。それで家に帰って父親に聞きました。
- ・アイヌの人ってほんとになんちゅうんだろう、血が荒いっていうか、気性が荒いっていうのかな、それが一番。

老年層はどうだろうか。老年層では壮年層以上にいじめや中傷の経験からアイヌであることを 意識した者が多い。「小学校ね、物心ついてバカにされた」「やっぱり、学校、中学の頃からだよね、 バカにされて、あーそうかなと思って」「アイヌ、アイヌってバカにされてね、ああ、わたしらアイ ヌなんだと思って」など、周囲の人に揶揄された経験が大きい。

また老年層で特徴的なのは、アイヌの血筋について親だけでなく、その上の代まで説明できる者が多かったことである。「父方の孫じじはシャモ(和人)なんだけど。孫じじは内地生まれで道内で結婚…(中略)日高に来てアイヌと一緒になったの。わたしの孫ばあさん、入れ墨入れとったもの、口に。そして、それと一緒になって出来た子どもが今の私の父親ですね。それも一応半分シャモになるね。半分シャモで半分」や、「アイヌの血筋。父方は全員和人。母方は祖母は和人。祖父はアイヌの血が25%、その上の曾祖母が半分アイヌの血が入っていたと聞いている。曽祖父は和人。母が受け継いでいるアイヌの血は12.5%なので本人は6%くらいになる。」と、アイヌの血筋であることのルーツについて詳しい。

ただし老年層の中にも、親がアイヌであることについて、あえて話をしなかったという例もある。「親からはない。親は一切そういうこと言わなかった人」や、「母親が、〇〇ちゃん、そんなことしてね、言われたからったって、全然何も気にすることないよって言ってたからね。中学の頃にアイヌの勉強している友だちから言われたときも。そんなことなんか覚える必要ないよって言われたの」と、親が子どもについてアイヌであることやアイヌの文化を伝えようとする環境ではなかったという例もある。

- ・小学生の頃、5年からその、イナウを見て、あ、これはアイヌの血筋なのかなっていう記憶を、そして来る人たちの話し聞いたり。で、父がほらその火にむかってね、いわゆる当時でいえばそのストーブですよね、に向かってそういう先祖供養みたいなことのまねっちゅうのかな、をやっているのを見て、あ、あれはアイヌの行事の一つなのかなっていうふうに自然にそれを受け入れたって感じね。
- ・小学校ね、物心ついてバカにされた。そのとき、でも「ああ、俺はアイヌだ」とそう思ってました。だけど、それを堂々とね「いや、俺はアイヌだよ」ってね、そういうふうに言い切れたかというと、やっぱりそれは言い切れない部分やっぱり、恥ということはないんだろうけど、差別されてる何かがあって、心の中にそれが残ってるから。
- ・物心ついたときから、もうみんなから言われるからね。今だからこんなアイヌ、アイヌって言えるけど、全然恥ずかしくて言われないですよ。生 活が全然違ったから。
- ・父方の孫じじはシャモなんだけど。孫じじは内地生まれで道内で結婚、2回してるんですね。日高にきてアイヌと一緒になったの。わたしの孫ばあさん、入れ墨いれとったもの、口に。そして、それと一緒になって出来た子どもが今の私の父親ですね。それも一応半シャモになるね。半分シャモで半分。そして、私の母親のほうは東北なんです。だから○○といったらほとんどみんなシャモに近いんだけど、昔のことだからちょっとアイヌが混じればアイヌ、アイヌと馬鹿にしたからね。…だけどアイヌといったら昔からいっぱい毛が生えて、だけどわたしらとか○○は毛がないんです。薄い、ほれ、足をみてもわかるでしょう。毛ないでしょう。ほれ。
- ・まあ40代くらいからはもうアイヌだと思ってたな。いや、30代だな。
- ・やっぱり、いじめが始まってからだろうね、アイヌって「ばば、アイヌって何?」って言ったら「わしらのことだ」って。その頃は口も入れ墨してあったり、手も入れ墨してあったり「ふーん、そういえばシャモの人いないなぁ」と思って。
- ・中学に入ってからですね。同級生は沢山いましたけど、みんなアイヌでしたから。
- ・母親が「○○ちゃん、そんなことしてね、言われたからったって、全然何も気にすることがないよって言ってたからね。」中学の頃にアイヌの勉強している友だちから言われたときも。「そんなことなんか覚える必要ないよ」って言われたの。
- ・三男がそうやってね、アイヌだからつきあえないって言われたのは、ちょっとショックというか。それから次男が嫁さんもらうと言ったときも、お前何か言われたのと言ったら「いや親に会ってないから何もいわれない」って。
- ・やっぱり、学校、中学の頃からだよね。バカにされてあーそうかなと思って。だからもうバカにされとったからね。子どもにだけは惨めな思いさせたくないって思ってね。アイヌとは結婚しないって。
- ・アイヌ、アイヌってばかにされてね、ああ、わたしらアイヌなんだと思って。アイヌだって、そうだよね、口染めたばあちゃんだって、うちのばあちゃんの妹でも1人いたんだからね。 ばあちゃんだと思わなかった。
- ・小学校4年生か5年生。その「アイヌ」って言われたの。4年生、ばあさんに聞いたの。母親、小学校1年生のときに亡くなったから。思ったけど、大したあれよ、頭のなかにこびりついて残るほど考えなかった。
- ・親からはない。親は一切そういうこと言わなかった人。山から下りてきて、ちょっと歩いてたら、ああ、あれはアイヌだって。最初は何言ってんのかなぁって思ったけど、だんだんと年いくに連れ、気づいただけで、だれからも教えてもらったわけでもないし、どこに働いても差別はなかったよ。そういう点ではね。
- ・アイヌの血筋。父方は全員和人。母方は祖母は和人。祖父はアイヌの血が25%、その上の曾祖母が半分アイヌの血が入っていたと聞いている。曾祖父は和人。母が受け継いでいるアイヌの血は、12.5%なので本人はアイヌの血は6%くらいになる。曾祖母がアイヌであるということについては、25、6歳に聞いた。曾祖母が写っている古い写真があり、それをきっかけに叔母さんから曾祖母がアイヌの血を引いているという話を聞いた。曾祖母はきれいな人だった。母の父方のきょうだいは彫りが深くて、その面影があるように思った。
- ・血筋はアイヌ。父母、祖父母、曾祖父母はアイヌ(祖父母の代について、早く亡くなっているのではっきりわからないけれどアイヌだと思う)。 子どもの頃から親や近所の大人など周りを見ていて、自分がアイヌであることに気づいていた。親や近所のアイヌ民族は何かあれば行ったりきたりしていたから、なぜだとは思っていた。
- ・(アイヌ民族として意識することは)ありますね。やっぱり一応、なんだかんだといったってアイヌの血を引いてるから。シャモにはなれないですね。 みんな、混血、混血と言うけど、中身はみんなアイヌなんですね。(アイヌの人は) わかるね。だけど今だったらもう開けてるから、だんだんア イヌの血がみんな薄くなってるからわからないよ、今なら。だけど昔はやっぱり徹底してわかったね。見た目で分かりますね、奥目が多いから。 アイヌの人は目が引っ込んでる奥目が多いんです。

第2節 結婚と次世代への意識

第1項 結婚時の状況

青年層 9 人のうち結婚の経験を持つ者は 7 人であるが、アイヌであることが結婚の障害になった者はみられなかった。ただし、それはアイヌであるという民族性をまったく考えなかったということではない。「混ざってるからって相手には最初に言うようにした」「うちはそういう(アイヌ民族の)血が入ってるからね」などにみられるように、アイヌであることが結婚後に知られ問題とならないように、初めに伝えているというものである。

また、アイヌの血が濃くなることを恐れて、結婚相手には和人を選んだという人もある。その場合、自分自身がアイヌであることを伝えることにもとまどいがあったと述べている。

このように青年層では、結婚に際して嫌な経験をした人は少ないものの、自分がアイヌ民族であることをまったく考えなかったわけではない。

アイヌの血筋の濃さでいえば、青年層は壮年層や老年層と比較して薄いといえるが、結婚となると、濃さというよりも、アイヌの血筋であるか否かが問題であり、自らのルーツを意識しないわけにはいかない現状であったといえる。

表1-9 結婚時の状況 (青年層)

- ・結婚する際にはとくに苦労はしていない。民族性を考慮することも、これ全然なかった。
- ・混ざってるからって相手には最初に言うようにしたんですね。(つきあう相手は)何も言ってこないですね。相手も何も言ってこないから。軽蔑とかそういうものもないから。口に出さないだけで何か思っているのかもしれないけど。
- ・(民族性を考えたことは)全然ありません。ではなくて、普通に好きになったから。
- ・(結婚するときに問題は)何もないですね。(結婚相手はアイヌだってことを)知っています。「アイヌの踊り行って来る」って普通にしゃべってるんで。相手は北海道の人。
- ・20歳で結婚、アイヌの踊りをしていた頃、アイヌの格好で出会っているから。自分のこともある意味アイヌだって最初から分かってもらってたし。 (民族性を考えたことは)なかったですね。全然言うこともなかったですし、ましてやそれこそ初めてつきあったのも○○でアイヌばっかりでしたからね。
- ・未婚。(恋愛のときに民族性を考えたことは)「いや考えたことないですね」。
- ・もともと結婚相手は、本州からやってきてアイヌっていうものどんなものか知らないんで、でもこっちで旅してて、アイヌってもの知って、なんかかっこいいと思って、尊敬しているみたいで、うーん・・・とは言ってましたね。やっぱり、アイヌの人とは結婚したくないと思って、子どもに、ほらそういう濃い血筋が出たら嫌だなと思って和人を選ぶようにしてました。自らアイヌだってことは言ったことも(ないし)、言えなかった。うん、隠してましたね。(それによって相手の態度がかわるのが)うん、怖い。でもそういう人じゃなかったんで堂々と言えた。
- ・反対はなかった。(民族性を考えたことは)ないですね。向うもそういうふうには思ってないと思うんで。
- ・普通に自分で「うちはそういう (アイヌ民族の) 血が入ってるからね」っていう感じでは言ってます。(それで苦労したことは) ない。(もとの結婚相手も) 多分そうだと思うんですよね。

壮年層26人のうち、結婚経験をもつのは21人である。今回の調査の壮年層は、父母ともにアイヌである比率が半数近い、つまりアイヌ民族の血筋がいわば濃いといえる。

そのような壮年層において、アイヌ民族であることが結婚の際にどのように影響したのだろうか。 全体をみると「とくに問題にならなかった」とする者がもっとも多い。しかしそれとは逆にアイ ヌであることが障害になったという者もある。「アイヌであることを理由につきあえないと言われ た」「向うの親に反対された」「おまえアイヌだべって言われましたからね。中略…何しにそんな相手 と結婚しなきゃダメなんだって…後略」などというものである。

また結婚の際には問題とならなかったものの、結婚後にアイヌ民族であることを指摘され嫌な思いをした者もみられた。なかには差別されたくないとの思いから、結婚相手にアイヌを選んだとする者や、青年層でもみられたように、結婚時や交際の際に相手にアイヌであることを告げたとする者もいた。またそれとは逆に、「アイヌであることを言ってはいけない」、「アイヌの人と結婚すると血が濃くなるからダメだ」、と親に言われ、結婚相手にアイヌを避けたとする者もみられた。

このように壮年層は青年層に比べ、困難な経験をもつ人が多くみられ、結婚の際に民族性をめぐる困難や障害を乗り越え、結婚に至ったという例が多くみられた。

表1-10 結婚時の状況(壮年層)

- ・23歳で恋愛結婚。結婚の際にはとくに何もなかった 自然に恋愛結婚。
- ・相手がアイヌ。結婚前から知っていたがとくに気にしなかった。両親の反対もない。
- ・21歳で相手と知り合って(中略)親戚だよって言われたときに、ああ、みたいな。普通に、別に驚きはなかったと思います。
- ・20過ぎた頃につきあっていた相手がアイヌであることを理由につきあえないといわれた。アイヌだから結婚できないと・・・そんなの2~3回あった。「シャモでなくてアイヌに声かけりゃよかったのにな」。今の結婚相手は和人だが、相手の親に言われたとか、自分の耳には入ってこなかった。 結婚相手の家も複雑で親と疎遠。
- ・23歳で結婚した。中略・・・最初の結婚相手はアイヌ、とくに嫌なことは言われない。今の相手は「まあ、ちょっと入っているのかもしれませんね」 向うもパツイチなんで、両親も他界してるんで(わからない)。
- ・結婚するときの困難は「全然ない」。子どもの結婚の際も、相手は和人だが、問題になったこともない。
- ・結婚の時には、普通にお見合いして結婚したんですけど、そういう血筋があるからという話し合いはしなかったんですけど、生まれた子どもが、産毛を背負ってて毛深いじゃないですか。赤ちゃんって。ましてや3月生まれで体に脂肪がたくさんたまるときは体を保護するときに体毛がすごくついて生まれるんですけど、そしたらすごく猿みたいに毛深くて、お前に似てるからというような。ただそういうことから始まって、毛深いとか毛深くないとか。
- (民族性を考えたことは)別にないですね、そんな。
- ・29歳で結婚。まあ遠距離で電話でつきあっているときは何も言いませんし、まあ見てればわかるんじゃないかっていうものはあった。ただ結婚決めてからね、曽祖父の写真、昔の着物着て、熊持ってる写真あったんですが、それを見せて、うちはこういううちなんだよって、もう嫌とは言えない時期にきてそういうことを言いましたよね。・・・返事は求めないですし。それでもいいかって言って。ダメだっちゅうったらどうすんのよって話ですからね。(向うの親に反対されたことも)なかった。
- ・(アイヌだと) 確実に思ったのは、結婚した後に結婚相手に言われた言葉がショックでした。

- ・「母さんと父さんの子に生まれたから、こんなにみったくなくて毛深くうまれた」って言ったんだそうだ。いや申し訳ないことを言っちまったもんだ。で、子ども生まれて子どもにそって言われたらどうしようみたいなね、自分で言ったくせに。(結婚に際しては)逆に、あえてアイヌを選んで、選びましたね。ていうのは、違う人と結婚した時に、やっぱり人種差別って肌が、まず肌から差別されたり軽蔑されたりするのは嫌だから絶対アイヌの人としか結婚しないと思ったし、ちょっとあれだね、言ってることちがうかもしれないけど。
- ・向うの親に反対されましたね。それこそ、やっぱりアイヌの子でしょうみたいな感じで。でも関係なく、一緒になりましたけど。(相手は)気にしてなかったですね。そっから親の縁切って会ってないですね。だからいいかって。それっきりですね。
- ・高校生の頃から知ってたんで。休みの日、遊んでる仲間の1人だったんで。(民族性は)ないです。最初に、向うも見て分かるし、ね、別にそれでどうだっちゅうこともないし、気にはしたことないよってことは言ってくれてますね。理解してくれてます。
- ・義父が北海道だったらアイヌ文化のどうのこうのとか、弟さんも北海道っていったらアイヌのやつあるよねって話はしたけど、あるねって感じで、普通に話はしたし。それについて、やんや、やんや言われたのはない。
- ・18で結婚、20で子ども、22で離婚。(アイヌであることを) 母親から絶対にいっちゃダメって。アイヌの人と一緒になったらまた血が濃くなって お母さんみたいにいじめられて育つから絶対ダメだダメだって朝から晩まで言われてる環境で育ってるから、自分は余計警戒心もって育ったんだ けど。やっぱり相手方の家族はアイヌの人嫌ってるみたいで、たまたま自分はそんなにひどく出てないのでしらばっくれてますけど、そうだって ことは言ってません。言いません。(子どもの結婚相手は) ちょっとでも薄い、うちと同じ感覚なら許せるけど、うちよりちょっと濃くなるとちょっとなって、やっぱりちょっと待ってよって言うと思う。親と同じく。なぜだろう、やっぱり苦労したからかな。そういうことに対して。
- ・29歳で結婚。(苦労したことは)ない。(民族性を考慮すること)全然ないです。
- ・(結婚相手は) 北海道の人間じゃないので、あまりそういうことは気にしていないと思う。そういう面ではすんなり。中略・・・相手が○○なので、遠いからこっちなんてほとんど分からないでしょ。だからアイヌという認識もほとんどなかったと思う。こっちにきてから、昔はウタリ協会っていったから「集まりにいくわ」「へー」みたいな。別段そんな何もわかっていないのが現状ですよね。
- ・うちの母親は自分はアイヌ民族だっていうことを相手に必ず伝えなさいって言ってました。
- ・(結婚の苦労は) ありましたよ。おまえアイヌだべっていわれましたからね。いや相手のほうの実家にね、何しにそんな相手と結婚しなきゃダメなんだって、まして○○だなんでって怒られました。アイヌの色出さないようにしましたよ、結婚式は。(つきあっているときアイヌの血筋であることを) 話しましたよ。関係ないって言ってましたよ。だから一緒になったんじゃないんですか。20歳過ぎてるんだから一緒になろうって、家をでてきたっていったら語弊あるけど。
- ・お見合いした帰りに父親が「アイヌの人だったね」とは言いました。(なぜ言ったのか) うーん、そこは聞かなかったんですけど、やっぱりアイヌの人と一緒にさせたくなかったのかな。
- ・45、6まで(見合い) そんなことばっかりやってたけどね。(民族性は) いや、どうなの、あんまり気にしてないんじゃないの?自分らはちょっと 気にするけど、向うはあんまり気にしてないようだから、あんまり考えたことないけど。

老年層の結婚時はどうだったのだろうか。結婚経験を持つ21人の老年層をみると、アイヌであることが結婚や交際の障害となったという声は壮年層ほど多くはないようだ。多くの人が結婚する際に、アイヌであることが障害とはなっていなかったと述べている。

アイヌであることで嫌な思いをした人の中には「(結婚後) きょうだいがアイヌだ、アイヌだって。 きょうだいが7人いるんですけども、まずそれはひどかった」や、「(結婚相手に) アイヌ、アイヌ とバカにされて」と、具体的に何かがあり言われたという理由ではなく、アイヌ民族であるという だけで結婚相手やその親族に揶揄されたというものである。

ただしこのような例は老年層全体からみると、ごくわずかであり、先に述べたように多くはとく にアイヌであることが問題とはなっていないと述べている。

ではその要因はなんだろうか。それぞれの発言をみると、アイヌであることをわかっていた、相手もアイヌであった、アイヌではないがアイヌと近い関係にあった、一緒になるという気持ちが強く民族性は考えなかったということが多いことがわかる。

表1-11 結婚時の状況(老年層)

- ・最初の相手はシャモで、幼なじみ。だから向うのお母さんも何も反対しなかったし、娘のように可愛がってくれました。その後、離婚。2人目はアイヌ。もうきょうだいが「アイヌだ、アイヌだ」って。きょうだいが7人いるんですけども、まずそれはひどかった。自分たちもそんなくせに(アイヌの血筋なのにアイヌとの結婚を反対する)。
- ・20で結婚した。恋愛結婚、同じ静内の人で、親同士がわかってたからそれで結婚した。まだ若いから親に反対された。同じ部落、相手もアイヌ、今でいうバツー。
- ・結婚は19歳、私の親は若いし、姑、小姑いるし反対した。叔父の一人が「今度結婚したらね、何も血筋がないのに、なして選ぶんだって言ったから、それだって意味わかんないわさ、わたし」。民族性を考慮したことはない。
- ・見合いだからわかって一緒になったと思うけど。今それこそ、そんなの嫌なら最初から見合いしないし。(その話をしたこともない)(民族的なことを)気にしていなかった。
- ・22歳で結婚。(結婚するときに苦労したことは)「ない」(民族性を考えることも)別にあんまりないですね。自分はアイヌ人であって結構ですと思ってたから。別に、いやだとは思わない。やっぱり同じ人間だと思ってるから。別にどうってことない。ただ、陰口聞いたりするとなんで、って。・・・ あんまり自分がアイヌ系でいやだったとかそんなことは考えていない。
- ・婚約まではいったが婚約者が亡くなった。相手はアイヌの人。自分がイチャルパとかをやるから多分和人ではうまくいかないかなと思ってたから。 かえって今のアイヌの子は嫌がるかもしれんけどね、イチャルパとかやってると。

- ・1人目と結婚したのが19歳のとき。そして次の人と一緒になった。結婚相手は両方ともシャモ。だからアイヌ、アイヌと馬鹿にされて。一番先の相手に。仕事場で知り合って結婚したけども、実際にはアイヌでバカにされた。
- ・25歳かな。そのときに、そこね親の反対はあったけどね当然。もう大して、どこの馬の骨かわからないと。うん。で、アイヌだからってっていう 反対ではなかったように記憶はあるんですけど。そんな感じ。うん。そのアイヌだということで当然わかってもらって結婚したからね。だから言 葉は、まあアイヌ、要するに差別のない社会を目指して頑張るってことで結婚したみたいなもんで。
- ・毛深いから恥ずかしいなと思ったけども。毛深い子どもを生むわけにいかんから、和人の人と結婚しただけ。1人目も2人目もそうだよ、と思って結婚したけど、1人目の人半分混ざってた。「なんでこんな毛深い子ども生まれたべと思って気になりながらいて。あれば新聞配達にいって、スネ見て「あれ言うけどごめんね」「いいじゃん、いまさら、生んでしまって」って言ったら「そうだよな、母さんしらなかったもん。ごめんな」って。
- ・結婚し再婚。アイヌであることは知っている。相手も転々としてた人だから。だから別に仲良くおつきあいしてるよ。相手のきょうだいとも。
- ・いや、そういうことはなかったですね。まあ、向うも初婚ではなかったからね。このちっちゃい町でさ、だいたい僕、みんな知ってますから。中略・・・それまで縁がなかったというのか、縁をのがしたというのか。多分縁を逃してたんだね。その中にはさ、やっぱり「ああ、この人、アイヌだから嫌だ」というのもあったと思うよ。うん、結構ね、紹介されたりさ、そういうこともあったんで、見合いしたこともあるし、だから、その中でそういうのがあったかもしれない。あえて言うこともないけど。
- ・結婚相手はやっぱりそういうウタリ関係、アイヌ関係の人に育てられたシャモなんだけど。だけども、そういう風に育てられたから、向うもそんなに気にしないでいたから、アイヌちゅうのは全然気にしないみたいだった。そっちのほうは大した問題ないと思うけどね。別にどうっちゅうことなかったような気するけども、できればやっぱり馬鹿にされるから、やっぱりシャモの人ほしかったんでないかと思うよ。
- ・(民族性のことを話し合うことは)ないね。(アイヌだとは)分かってたと思うよ。当時なんて人たくさん使ってたから。みんなから「社長」っていわれてるから何の文句もなかったんじゃないか。
- ・4 回結婚したけど、アイヌは今の相手だけ。あとはシャモ。今の相手の父親はアイヌ、母親は混ざりアイヌ、半シャモ。ああ、それはありました ね。向うの親元に。そういう関係でこれは隠し看板なしにね、まるっきりアイヌではないけども、アイヌの血引いてるよ、まあ3分の1か4分の 1は引いてますよということは、これは絶対ばれることだからね。それは最初から言う。言って聞かす。そのほうが自分も楽だし、隠してるよりね。それでやむものだったらしょうがないもん。だからそれもあって、まあ親元は頭からくれないっていったんだよね。
- ・民族性を考慮したことはない、苦労もない。私はシャモ、主人がアイヌの人。
- ・(結婚で苦労したことは)ないです。
- ・まあどうこうした訳でないけど、一緒になるんだっていう気持ちしかなかったから、それでどうこうって言われてもわからない。前の相手とは恋 愛結婚。(今の時には)再婚だから、それで言われたくらいかな。(民族性は)今も考えてないし、自分がやることに対しては認めてちゃんと一緒 にやってもくれるし。だから別にそういうのはないですね。
- ・別に関係ないな。相手もアイヌの血統だから。結婚相手は平取の奥の○○だから。母親のほうは、もう、ほんとにもう、父親も和人様だ。(相手の) 母親がアイヌ、アイヌの血統書取ったら今でもアイヌのバーってでてくる。父親は和人。
- ・結婚する前にとくに苦労したことはなかった。恋愛や結婚をするときに民族性についてとくに考慮したことはなく、結婚できれば誰でもいいと思っていた。 母親もそういう考えだった。 結婚する前に相手にアイヌであることは話したが、何も言われなかった。 アイヌであることについて何も反対はなかった。
- ・20歳のときに人に紹介されて結婚した。相手の両親がどう考えていたかわからないが、相手は旭川に叔父さんがいて、近文のアイヌコタンに何回 も行ったことがあり、アイヌのことは若いときから見ていたので、自分がアイヌであることは分かったけれど、気にしていなかったと思う。

結婚についてそれぞれの年齢層をみると、壮年層で他の年代と比較して困難な経験が多少多いことが目につく。しかし、それ以外はどの年代にも共通してみられることのほうが多い。

結婚の際に民族性を考慮した人たちと、しなかった人たちの両方があり、考慮したとする人たちの理由として共通なのが、血が濃くなるというものである。この場合の血とは、身体的な特徴、毛深さやホリの深さ、つまり見た目でアイヌと分かることがマイナスに作用すると考えていることである。また結婚の際にアイヌであることを伝えたとする者も、民族性を考慮した結果であるといいかえてよいだろう。後でわかって何か言われるよりも、結婚の前に伝えたほうがよいと、自分からあるいは親にすすめられ、伝えたという例がみられた。

「民族性を考慮した」に対して、「考慮しなかった」とする人たちの理由をみると、それは結婚に 対する情熱が強かったといえるのではないだろうか。結婚したかった、相手が好きだったという、 ごく自然な感情が民族性を考慮することに勝っていたといってよいだろう。

これらの意識や経験は、前回の札幌やむかわの調査と大きな違いはみられず、むしろ同じ傾向であるといえる。結婚については年齢層が低いほど、困難な経験はみられないものの、結婚がアイヌであるという民族性を自分の内面で捉え直す契機になっている。いいかえれば、自らがアイヌ民族であることを認識し決断をしなければならないのが結婚であるといえよう。

また、各年代の部分ではふれなかったが、どの年代にも少なからずみられる経験があった。それは離別経験の多さである。現在の結婚が2度目、3度目であるというものだ。離婚の理由としては、相手が働かない、暴力を振るうなど結婚生活を維持するのが困難という理由が多くみられた。そこからは、対象者のこれまでの生活の困難性が推察された。なぜそのような経験が多いかについては、生活全体の状況や、ジェンダーに対する意識など関連する部分との深い考察が必要であり、今後深

い分析の必要を感じる。

第2項 次世代への意識

アイヌ民族として自らのルーツをどのように捉えるかについては温度差があった。また結婚に際しても、経験上の差があるものの、アイヌ民族であることに向き合わなければならない現実があったこともすでに確認した。とくに結婚相手がアイヌであるか否かを考える際に、その要因の一つとして大きかったのが、将来生まれる子どもの存在であった。

通常子育てに対して人々が抱く感情として考えられるのは、子どもを生む段階で生じる心配や期待と、子どもを育てる段階で生じる心配や期待である。

子どもを生む段階で生じる心配で多かったのは、子どもの血筋に関することである。とくに、毛深いなどの身体的特徴について気にかけている人が多くみられた。「子どもがほしい、子ども生みたいから、(アイヌは)嫌だなと思った。また毛深いの生まれるの」や、「やっぱり自分たちでもアイヌの血を濃くすると毛深くなったりとかっていうのがあって、嫌な…何か足だしたくないとか、何かそういうのってあるじゃないですか。…後略」などである。またそれら身体的特徴については、実際に子どもが生まれた後も心配なこととして続いていた。

さて、期待についてはどうだろう。子どもを育てる段階で生じるものに関しては、まず学歴に対する期待があった。自らが教育を受けることができなかったため、子どもには教育を受けてほしいと考えるものである。そのため、アイヌ民族が利用できる奨学金を利用したという人は多い。アイヌ協会に入会する際の理由として、高校や大学の奨学金を受けるためという理由も多い。そのように進学の経済的な補填として、アイヌといういわば属性を利用しているといえるが、それを次世代にどのように伝えるかについては、むしろ消極的な印象を受ける。

自分の子どもにアイヌであることに誇りをもち生きてほしいと考えている人はけっして多くはない。アイヌであることのアイデンティティをどう育てるかという考えをもっている人はごく少数であり、多くが自分の子どもには押し付けないとする考えである。多くの人がアイヌというよりも、和人と「おなじ人間である」ことを重視することが、アイヌであることを伝える意思を弱らせていると考えることができる。

しかし、そのような中でも、次世代に伝えたいという気持ちを強くもっている人もいる。「アイヌ同士で結婚して、子どもをもうけたって事は、この子をどうやって育てるか、アイヌとして恥じない、恥じないんだっていう風に仕向ければ子どもも育ちやすいんじゃないかと思って。だから自分が、子どもが毛深いって言われたら、お父さんもお母さんも毛深いからね。だからお前はね、それでいいのって。言った友達悪くないの。お父さんも毛あるし、だから○○も毛があるのっていう風に自覚するように育てようねって」と、アイヌであることを、「恥じない」というプライドや、それを次の世代に伝えていこうとする意思がみられる。

表 1-12 子育てに関する考え

- ・(自分は高校行きたかったが行けなかった) だから子どもらには高校だけは行かせましたね。頑張って。(老年)
- ・子どもが3人、3番目が1年でやめたけど、あとの2人は3年間。1か月3万5千円だと思うけど。子どもが学校に行くようになったら、何かいいことったら変だけどあれしたら協会でもってあれするからいいんじゃないのって。(老年)
- ・(自分は高校行きたかったが行けなかった)「だから何とかして子どもだけはと思ったけど、子どもも子どもで私がそういうあれで学校行きたかったけど怪我でいかれなかったから、あんた方は何もないんだからちゃんと学校いきなさいよって。それでも、もう行きたがらないで、高校も行かずに早く仕事についたほうがいいって息子も早々と。娘には和裁ならいなさいよって。娘は中学でて専門学校。(老年)
- ・成長とともに子どもも毛深くなってくるでしょうからちょっとは心配ですよね。(壮年)
- ・息子は眉毛のこととかすでに気にしているから、かわいそうだなと思うんです。去年ぐらいからですね。学校で息子が毛深いとか言われるらしいんですよね。それを言われると、私がお母さんに責めたように責められるとちょっとね。なんとも言えないですね。(青年)
- ・ウタリ対策の奨学金はもらった。助かりました。アイヌでよかったと思って、それで。やっぱり高校入るとなったらそういうのも必要になるよってことを聞かされて。保存会は今子どもらも入っています。孫も入ってる。全員入ってます。(老年)
- ・娘たちも、(アイヌ、アイヌじゃない) 全然私は気にしてません。(青年)
- ・子どもがほしい、子ども生みたいから、(アイヌは)嫌だなと思った。また毛深いの生まれるの。そうやって結婚して、その人、和人だと思って 結婚したんやけん、混ざりだったの。だから今みたいに調べることもできない。(老年)
- ・夫婦でアイヌだし、やっぱり自分たちが何気にこう、いい思い出がなかったんだけれども、やっぱりそれを分かっててアイヌ同士で結婚して、子どももうけたってことは、この子をどうやって育てるか、アイヌとして恥じない、恥じないんだっていう風に仕向ければ子どもも育ちやすいんじゃないかって思って。だから自分が、子どもが毛深いって言われたら「お父さんもお母さんも毛深いからね。だからお前はね、それでいいのって。言った友達悪くないの。お父さんも毛あるし。だから○○も毛あるの」っていうふうに自覚させるように育てようねって。(壮年)
- ・やっぱりね、今こういうふうになって3人子どもいるけど、最初の子はやっぱり目鼻立ち整ってる。2番目はまったくシャモの人の子だから薄まってる。毛深さはあるんだけど、どの子もあるんだけど長男ほどでない。長男は本当に・・・やっぱり、顔が毛むくじゃらってわけじゃないんだけど、やっぱり目鼻立ち整っちゃってるから、やっぱり次男もちょっと毛深くなったから出てきてるけど、娘はまったくもってわかんないね。あれね。でもやっぱり毛深さからいったらね、長男が一番足のスネ毛とか見てたらやっぱり一番濃いね。細い割にはね。(壮年)
- ・(自分の子どもには) ここにいればそうなるだろうし。外に出ればわからないですよ。(手伝うかどうかは) 子ども次第。(壮年)
- ・息子には協会に入れって強制はしませんよね。本人がしたかったらすればいいだけの話で。(壮年)
- ・父親も母親もアイヌでしょ。主人も父親も母親もアイヌでしょ。主人のお母さんってすごいきれいな人なんですけど、やっぱり自分たちでもアイヌの血を濃くすると毛深くなったりとかっていうのがあって、嫌な・・・何か足出したくないとか、何かそういうのってあるじゃないですか。プールに入りたくないとか。それなのにわたしまた濃くしてしまってるんですよ息子に。中略・・・アイヌの人と一緒にならないほうがいいからね。生まれてくる子どもがかわいそうかなってことは2,3回言ったことあります、息子に。(壮年)
- ・(娘がアイヌ文化にふれるのは)やっぱりものを覚えるってことはよいことだから、別に私は何も言わないで。ただ普通にカマキリ踊ってよとか言って。やっぱりお母さんが病気だし、会話なくなるじゃないですか。そういうときに踊ってよとか言って踊ってもらったりとかして。(牡年)

おわりに

本章ではアイヌの人々の家族形成について、生まれ育った家族と結婚によって新たに形成した家族という2つの家族の中で、アイヌであることをどのように捉え生活してきたかを、年齢層に注目しながら明らかにした。

自らが生まれ育った家族における経験は、これまでの調査結果と同様に年齢層が高いほうがアイヌ文化などにふれる経験が豊富であり、アイヌであることを自然と知ったというケースが多い。一方で若い世代では、子どもをもつまで、あるいは、アイヌ協会に所属するまで、自分のルーツに気が付かなかったという例もみられるなど、アイヌであることの認識に年代による違いがみられた。

また新しく家族を形成する際、つまり結婚については、年齢層による経験の違いは多少あるものの、どの年代においても結婚を契機にして、アイヌ民族であることと向き合う経験をしている。結婚相手がアイヌであるか否か、自らがアイヌであることを伝えるか否かなど、ある意味で選択を迫られる。なかには相手に対する思いが強いため、その選択をすることなく結婚した場合もみられるが、多くの者は決断をしたのち、結婚に至っている。

また自分の子どもをどのように育てたいかについては、アイヌ民族であることのマイナス面への 心配が多くみられた。そのため、わが子にアイヌ民族であることを積極的に伝えていこうとする考 えはごく少数であり、子どもが望めばという消極的な期待でしかない。つまりアイヌとしての文化 や伝統あるいは誇りは、各個人の選択事項であり、子どもが望まなければそれを受け継ぐ機会は低 いといえる。

本調査の対象地域である新ひだか町は、アイヌ民族の歴史のなかでも重要であり中心的な地域で

ある。アイヌの血筋でいえばこれまでのむかわや札幌の調査と比較すると、どの年代もアイヌの血筋を多く引き継いでいるという結果であった。それでも年齢層が若くなるほどアイヌの血筋が薄まっている事実は変わらない。新ひだかにおけるこの事実は、他の地域における結果以上に重く受けとめる必要があろう。

このようにアイヌの血筋や、アイヌとしての意識を次の世代にどうつなげていくのかは、混血が進む現状において重要な問題である。だがそれをどのように考えるのかは、個人的な問題でもあり難しい。一方で、次の世代へつなげるという視点に立てば、現在のようにアイヌ文化や人にふれる経験が少ない中では、よほど意識的に育てなければ、子ども自身がアイヌであると意識することも、それを引き継ぎたいと望む可能性も低いだろう。そういう意味でも、親がどのような意識を持ち次の世代につなげていくかこそが、重要なポイントであるといえるのではないだろうか。

注

- 1)本章で用いたデータは、インタビュー調査の際、ICレコーダで記録したものをそのまま文字に 起こしたものを使用している。ただし、個人が特定されないよう表現を工夫している。
- 2)1人だけ父親がアイヌであったかどうか確認できないケースがあった。
- 3)1人だけ父親がアイヌであり、母親が不明というケースがあった。
- 4)道内の他の地域におけるアイヌの人口比は1%前後であり、日高を除きもっとも高いのは宗谷 支庁の2.2%である。日高支庁の9.2%という人口比は群を抜いて高い。

参考文献

小内透,2012,「調査報告のまとめ」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター、196-201.

北海道環境生活部,2007、『平成18年北海道アイヌ生活実態調査報告書』北海道環境生活部.

(品川ひろみ)

第2章 アイヌ民族の階層形成

野崎 剛毅 國學院大學北海道短期大学部准教授

第1節 分析の視点

本章では、新ひだか町のアイヌ調査をもとに、アイヌ民族の人々の階層が何によって規定されているのかを検討する。

アイヌ民族の階層形成過程については、札幌市とむかわ町のアイヌ民族を対象に同様の調査票を用いた分析をおこなっている(野崎 2012)。そこでは、対象者を年齢(「青年層」「壮年層」「老年層」の3段階)×性別で6つのカテゴリーにわけ、それぞれの階層形成過程を検討している。その結果、①男女問わず青年層がきわめてきびしい生活環境に置かれていること、②男性壮年層、男性老年層では学歴社会がある程度機能し、学歴が到達階層に影響を与えていること、③女性にとっては階層形成に結婚が与える影響がきわめて大きく、結婚相手の前に出身階層や学歴などの影響力がほとんど意味のないものになってしまっていること、などの知見が得られている。本章においては、これらの知見を参考に階層形成の要因を探っていくこととする。

本章で使用するデータは以下のとおりである。2012年9月に新ひだか町でおこなったアイヌ民族への聞き取り調査データのうち、アイヌの血を引いている者で本章での分析に必要な情報が確実に把握できる48ケースを分析対象とする。北海道などが使用している定義では、アイヌの血を引く者と養子、婚姻などにより家族になった者もアイヌ民族としている。それでもアイヌの血を引いていない者を分析から除外するのは、本章でおこなう検討が各人の生い立ちや婚姻・養子縁組等以前におこなわれる教育などを中心としているためである。また、野崎(2012)においては各人の出身階層や学歴、職業経験などを表として提示しているが、今回の新ひだか調査は母集団となるアイヌの人々が前回の札幌、むかわ調査よりも少ないため、個人の特定を避けるためにも提示する表などは最少限にとどめている。

分析の対象者は表 2-1 のとおりである。30代以下の青年層は 9 人で、もっとも若い対象者は21歳である。青年層の平均年齢は30.7歳であるが、男性が27.0歳であるのに対し女性は33.6歳と男女で大きな差がみられる。20代の 3 人は全員男性であり、女性の最年少は31歳である。壮年層の平均年齢は48.1歳で、男性は50.0歳、女性は46.5歳である。老年層は平均年齢67.6歳、男性が68.0歳、女性が67.3歳である。最高齢は女性の78歳である。全体では男性が45.8%、女性が54.2%と女性の方が若干多くなっており、各世代でもわずかずつではあるが女性が $1\sim 2$ 人多い。

表2-1 対象者の内訳

単位:人、%

| 24 / 4-4-H | • | | 7 1 7 41 7- |
|--------------|-----------|-----------|-------------|
| | 男性 | 女性 | 計 |
| 青年層(~ 30代) | 4 (44.4) | 5 (55.6) | 9 (100.0) |
| 壮年層(40代、50代) | 11 (47.8) | 12 (52.2) | 23 (100.0) |
| 老年層 (60代~) | 7 (43.8) | 9 (56.3) | 16 (100.0) |
| 計 | 22 (45.8) | 26 (54.2) | 48 (100.0) |

分析に使用する主な変数は以下のとおりである。まず、出身階層としては「15歳時の生活」を使用する。これは、中学校を卒業するころの家族の暮らしぶりを聞いたものである。それぞれの回答をおおまかに「豊か」「普通」「苦しかった」の3段階に分類している。また、わかる範囲ではあるが親の職業も随時参考にする。表2-2をみると、青年層では男女とも「普通」と「苦しかった」が同数で「豊か」と答えた者はいなかった。壮年層では、男性の場合やはり「普通」と「苦しかった」が同数であるのに対し、女性は「豊か」が2人いた。「普通」が6人、「苦しかった」が3人である。老年層になると、「豊か」から「苦しかった」までが出揃い、男女とも「豊か」が1人ずつで「普通」と「苦しかった」がほぼ同数となっている。

表2-2 15歳時の生活

単位:人

| | | 豊か | 普通 | 苦しかった | 不明等 | 合計 |
|---------------|----|----|----|-------|-----|----|
| 青年 | 男性 | 0 | 2 | 2 | 0 | 4 |
| 年 | 女性 | 0 | 2 | 2 | 1 | 5 |
| ——— 壮 年 | 男性 | 0 | 5 | 5 | 1 | 11 |
| 年 | 女性 | 2 | 6 | 3 | 1 | 12 |
| 老年 | 男性 | 1 | 2 | 2 | 2 | 7 |
| 年 | 女性 | 1 | 3 | 4 | 1 | 9 |
| ———— 計 | 男性 | 1 | 9 | 9 | 3 | 22 |
| п | 女性 | 3 | 11 | 9 | 3 | 26 |

到達階層は、現在の職業と個人年収、世帯年収で判断をする。現在の職業では、男性は農林漁 業がもっとも多く、ついで建設・採掘が4人と続いている。その他は「専門・技術」と「事務」 が2人ずつ、「サービス」「保安」「生産工程」「輸送・機械運転」「運搬・清掃」がそれぞれ1人ずつ である。無職も3人いるが、全員が老年層で定年後の人々である。女性に関しては、無職が19人 と圧倒的に多い。特に老年層は9人全員が、青年層は5人中4人が無職である。女性の無職はほ とんどが専業主婦あるいは定年であるが、なかには親の介護という者もいた。それ以外では、「運 搬・清掃」が3人、「サービス」が2人、「事務」と「販売」(生命保険の営業)が1人ずつであった。 年収は男女差が非常に大きい。表2-4で個人年収をみると、全体では男性が297.6万円であ るのに対し女性は77.1万円と4分の1の水準になっている。もっとも個人収入が多かったのは老 年層男性であり、「700~800万円」であった。これは、家賃収入によるものである。世帯年収に 関しても、個人年収ほどではないものの大きな男女差が存在する。男性は世代差が非常に小さく、 青年層、壮年層が400.0万円、老年層が392.9万円である。女性は青年層の290.0万円から徐々に下 がっていき、壮年層では220.0万円、老年層では150.0万円、平均で210.9万円であった。男女を合 わせた平均をみると、個人年収が180.0万円、世帯年収が300.0万円である。いずれにしても全般 に低い水準であることにはかわりなく、北海道の平均年収581万円1)と比較して半分程度となっ ている。

表2-3 現在の職業

| | | 専門技術 | 事務 | 販売 | サービス | 保安 | 農林漁業 | 生産工程 | 輸送・機械運転 | 建設・採掘 | 運搬・清掃 | 無職 | 合計 |
|----|----|------|----|----|------|----|------|------|---------|-------|-------|----|----|
| 青年 | 男性 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 |
| 年 | 女性 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 5 |
| 壮年 | 男性 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 4 | 0 | 1 | 3 | 1 | 0 | 11 |
| 年 | 女性 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 6 | 12 |
| 老年 | 男性 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 7 |
| 车 | 女性 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 9 | 9 |
| 計 | 男性 | 2 | 2 | 0 | 1 | 1 | 6 | 1 | 1 | 4 | 1 | 3 | 22 |
| | 女性 | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 19 | 26 |

単位:人

表 2 - 4 個人年収 単位:人

| | | なし | ~ 100 万 円 | 100 ~ 200 万 円 | 200 ~ 300 万 円 | 300 ~ 400 万 円 | 400 { 500 万 円 | 500 ~ 600 万 円 | 600 万 円 〜 | 不明 | 合計 | 平均(万円) |
|----|----|----|--------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|--------------------|----|----|--------|
| 青年 | 男性 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 225.0 |
| 年 | 女性 | 2 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 90.0 |
| 壮年 | 男性 | 0 | 0 | 3 | 1 | 2 | 2 | 2 | 0 | 1 | 11 | 340.0 |
| 年 | 女性 | 2 | 4 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 12 | 95.5 |
| 老年 | 男性 | 0 | 1 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 7 | 278.6 |
| 年 | 女性 | 3 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 9 | 43.8 |
| 計 | 男性 | 0 | 1 | 7 | 4 | 4 | 2 | 2 | 1 | 1 | 22 | 297.6 |
| #T | 女性 | 7 | 8 | 8 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 26 | 77.1 |

表 2 - 5 世帯 年収 単位:人

| | | なし | ~ 100 万 円 | 100 ~ 200 万 円 | 200 ~ 300 万 円 | 300 ~ 400 万 円 | 400 ~ 500 万 円 | 500 { 600 万 円 | 600 万 円 〜 | 不明 | 合計 | 平均(万円) |
|--------|----|----|--------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|--------------------|----|----|--------|
| 青年 | 男性 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 4 | 400.0 |
| 年 | 女性 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 5 | 290.0 |
| 壮年 | 男性 | 0 | 0 | 2 | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 | 11 | 400.0 |
| 年 | 女性 | 0 | 1 | 3 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 12 | 220.0 |
| 老 | 男性 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 7 | 392.9 |
| 老 年 | 女性 | 0 | 4 | 2 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 9 | 150.0 |
| 計 | 男性 | 0 | 1 | 3 | 4 | 4 | 4 | 2 | 3 | 1 | 22 | 397.6 |
| īΤ | 女性 | 0 | 5 | 7 | 6 | 2 | 3 | 0 | 0 | 3 | 26 | 210.9 |

出身階層と到達階層とを媒介するものとしては、本人の学歴と結婚の有無を使用する。

本調査対象者の最終学歴をみると、青年層では男女合わせても大学進学者が1人もいなかった。高等専門学校が1人と専門学校が1人いるだけである。また、女性をみると、5人中3人が高校へ進学していない。わが国では1970年代にはすでに高校進学率が90%を超え、高校全入時代となっていることを考えると、この数字の特異さが際立つ。なお、高校進学者2人のうち1人は中退しているため、高校を卒業した者は1人だけである。壮年層では、大学へ進学した者が2人いる。ただし、そのうち1人は中途退学している。青年層と異なり、壮年層では男性のほうが学歴が低くなっており、高校へ進学しなかった者が3人いる。女性では10人が高校へ行き、全員が卒業している。老年層になるとさらに事情はかわり、男性で7人中4人が高校へ進学していない。さらに、中学校も最後まで通っていない者が2人、小学校の途中から学校へ行かなくなった者が1人いる。女性はさらに極端であり、9人中、高校へ進学した者は1人もいなかった。なお、「そ

の他」の4人のうち、2人は中学卒業後、1人は高校卒業後に職業訓練学校へと進学した者である。もう1人は中学卒業後に専修学校高等課程へ進学した者である。

表 2-7 は、結婚の状況をまとめたものである。青年層も結婚している者が多く、未婚である者は男女 1 人ずつであった。なお、うち 1 人は未婚ではあるが、子どもが 2 人いる。また、離婚経験者が 1 人いる。壮年層は未婚が男性 3 人、女性 2 人である。離別、死別の者も青年層に比べて増えている。表でいう「離別」は離婚を経験して現在未婚状態にある人である。離婚を経験して現在再婚、再々婚である者も含めると、壮年層の女性 5 人、男性 1 人が離婚を経験していることになる。老年層となると、一度も結婚したことがない者は 1 人もいない。かわりに死別が増え、男性 1 人、女性 3 人となっている。なお、もっとも多いもので現在 4 回目の結婚をしている者もいる。

以上をふまえて、以下に各世代の階層形成過程を検討していく。

表 2-6 最終学歴

単位:人

| | | 小学校 | 中学校 | 高校 | 専門学校 | 高専 | 大学 | その他 | 合計 |
|-----------|----|-----|-----|----|------|----|----|-----|----|
| 青年 | 男性 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 4 |
| 年 | 女性 | 0 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| 壮 | 男性 | 0 | 3 | 4 | 1 | 0 | 2 | 1 | 11 |
| 年 | 女性 | 0 | 1 | 9 | 0 | 0 | 0 | 2 | 12 |
| 老年 | 男性 | 1 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 |
| 年 | 女性 | 2 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 9 |
| ———— 計 | 男性 | 1 | 6 | 8 | 2 | 1 | 2 | 2 | 22 |
| FΙ | 女性 | 2 | 11 | 11 | 0 | 0 | 0 | 2 | 26 |

注1)数字には中途退学者を含む。

表 2-7 既婚、離別、死別等

単位:人

| | | 未婚 | 既婚 | 離別 | 死別 | 合計 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 青年 | 男性 | 1 | 3 | 0 | 0 | 4 |
| 年 | 女性 | 1 | 3 | 1 | 0 | 5 |
| 壮年 | 男性 | 3 | 7 | 0 | 1 | 11 |
| 年 | 女性 | 2 | 6 | 3 | 1 | 12 |
| 老年 | 男性 | 0 | 6 | 0 | 1 | 7 |
| 年 | 女性 | 0 | 4 | 2 | 3 | 9 |
| 計 | 男性 | 4 | 16 | 0 | 2 | 22 |
| | 女性 | 3 | 13 | 6 | 4 | 26 |

第2節 青年層の階層形成過程

青年層の特徴は出身階層と現在の到達階層の間にほとんど関連がみられないことである。表2 - 8 は、15歳時の生活と最終学歴別に平均個人年収と平均世帯年収を出したものである。ここで特徴的なのは、たとえば女性の15歳時の生活別平均年収において、個人年収は15歳時「普通」のほうが150.0万円と「苦しい」の75.0万円より高く、逆に世帯年収では「苦しい」のほうが350.0万円と「普通」の150.0万円より高くなっているように、一方のカテゴリーの個人年収が高いと、世帯年収はもう一方のカテゴリーのほうが高くなるというねじれの関係にあることである。また、職業などをみても年収との関連性はほとんどみられない。結果として、最終学歴も個人年収も平準化しているため、ほとんど差異が見出だせないのが青年層の現状といえるだろう。

ただし、女性については、離婚している1人と未婚の1人はともに個人年収が100~200万円であり、子どもはいるものの他に収入のある者がいないため、世帯年収も同じカテゴリーとなっ

ている。なお、男性の未婚者は両親と同居しているため、個人年収は $100 \sim 200$ 万円と高くはないが、世帯年収は $300 \sim 400$ 万円と高くなっている。

階層形成過程という観点でみれば、青年層は男女とも、まだ階層分化が生じる状態ではなく、 また、到達階層にそもそも差が生じていないため、かえって出身階層による有利不利もないとい う状態になっているといえる。

表 2-8 15歳時生活別、最終学歴別平均年収

単位:人

| | | N | 平均個人年収 | 平均世帯年収 |
|-------|-----------|---|---------|---------|
| | 15歳時「普通」 | 2 | 250.0万円 | 400.0万円 |
| HI M4 | 15歳時「苦しい」 | 2 | 200.0万円 | 400.0万円 |
| 男性 | 高校 | 3 | 250.0万円 | 383.3万円 |
| | 高専 | 1 | 150.0万円 | 450.0万円 |
| | 15歳時「普通」 | 2 | 150.0万円 | 150.0万円 |
| 女性 | 15歳時「苦しい」 | 2 | 75.0万円 | 350.0万円 |
| 女性 | 中学 | 2 | 100.0万円 | 250.0万円 |
| | 高校 | 3 | 75.0万円 | 350.0万円 |

第3節 壮年層の階層形成過程

壮年層では、男性に関しては個人年収が「 $500 \sim 600$ 万円」(2人)から「 $100 \sim 200$ 万円」(3人)まで、到達階層の違いがはっきりと表れてきている。そして、そこには15歳時の生活や学歴がはっきりとした影響を与えている。15歳時の生活が「普通」だった者の平均個人年収は410.0万円で、「苦しい」とこたえた者は300.0万円であった。また、大学・専門学校と高校進学者の平均個人年収がともに450.0万円であったのに対して、中学卒業で就職した者の平均は175.0万円であった。

ここから2つの知見が導き出される。すなわち、「壮年期になると、出身階層が到達階層に及ぼす影響力が強くなる」ことと、「その出身階層の違いは学校教育によって覆せる可能性がある」ことである。そして、この2点を考慮した際に重要な意味合いを持ってくるのが進学に関するウタリ対策援助の存在である。

表 2-10では、壮年期男性の出身階層別最終学歴と平均年収、そしてウタリ対策の奨学金を使用したかどうかの関係を示している。たとえば15歳時の生活が「普通」であった 5 人のうち、 2 人が大学・専門学校へと進学し、そのうちの 1 人はウタリ対策の奨学金を使用していた、ということである。表 2-10からは、15歳時「普通」から高校、大学、専門学校へ進学した 4 人のうち 2 人が、そして15歳時「苦しい」から大学、高校へ進学した 3 人のうち 2 人がウタリ対策奨学金を使用していたことがわかる。そして、表 2-9 でみたように、15歳時「普通」と15歳時「苦しい」の間には平均年収の大きな差があるが、「普通」 \rightarrow 「大学」と「苦しい」 \rightarrow 「大学」の間にはとんど差が生じていないことがわかる。出身階層と到達階層の再生産構造を、ウタリ対策奨学金が埋める可能性が示唆されているのである。

女性の場合は、出身階層や学歴によって個人年収の違いは生じているが、それらは結婚したかどうかによって相殺されており、世帯年収はほとんど差が表れていない。実際に、現在夫がいる者(既婚)といない者(未婚・離別・死別)とを比較すると、個人年収は夫ありの50.0万円に対して夫なしが133.3万円となっているが、世帯年収では夫なし150.0万円に対し夫ありが290.0万円となっている。出身階層や学歴などのもつ影響力が結婚の有無によってすべてみえなくなってい

表 2-9 15歳時生活別、最終学歴別平均年収

単位:人

| | | N | 平均個人年収 | 平均世帯年収 |
|----|----------------|----|---------|---------|
| | 15歳時「普通」 | 5 | 410.0万円 | 430.0万円 |
| | 15歳時「苦しい」 | 4 | 300.0万円 | 425.0万円 |
| 男性 | 大学・専門学校 | 3 | 450.0万円 | 616.7万円 |
| | 高校 | 4 | 450.0万円 | 450.0万円 |
| | 中学 | 4 | 175.0万円 | 200.0万円 |
| | 15歳時「豊か」 | 2 | 50.0万円 | 不明 |
| | 15歳時「普通」 | 6 | 125.0万円 | 200.0万円 |
| | 15歳時「苦しい」 | 3 | 83.3万円 | 216.7万円 |
| 女性 | 高校 | 10 | 100.0万円 | 225.0万円 |
| | 中学 | 2 | 75.0万円 | 200.0万円 |
| | 夫あり (既婚) | 6 | 50.0万円 | 290.0万円 |
| | 夫なし (未婚・離婚・死別) | 6 | 133.3万円 | 150.0万円 |

表2-10 出身階層別最終学歴と平均年収、奨学金の有無(壮年期男性)

| 15歳時生活 | 最終学歷 | 奨学金 | 平均個人年収 | 平均世帯年収 | | |
|----------|-------------|-----|---------|---------|--|--|
| 普通(5人) | 大学・専門学校(2人) | 01人 | 450.0万円 | 500.0万円 | | |
| | 高校(2人) | 01人 | 500.0万円 | 500.0万円 | | |
| | 中学(1人) | _ | 150.0万円 | 150.0万円 | | |
| 苦しい (5人) | 大学(1人) | 01人 | 450.0万円 | 850.0万円 | | |
| | 高校(2人) | 01人 | 350.0万円 | 350.0万円 | | |
| | 中学(2人) | _ | 200.0万円 | 250.0万円 | | |

第4節 老年層の階層形成過程

老年層は、ほぼ全員がすでに定年を迎え、職業生活からリタイアしている。また、定年までの 職歴をみても、その多くが職を転々とかえていたり、あるいは個人経営の仕事などをしていたた めか国民年金の受給者が多く、結果として定年後の収入はほとんど差がない状態になっている。

女性は 9 人全員が無職であり、個人収入(年金や生活保護を含む)は 3 人が無収入、 4 人が 100万円未満、 1 人が $100 \sim 200$ 万円、 1 人が不明(生活保護受給)であった。そこには出身階層による差も、学歴による差も、あるいは配偶者の存在による差もほとんど意味のないものとなっている。あえて差を見出だすならば、現時点で夫がいる者の世帯年収が平均200.0万円であるのに対し、夫がいない(離別もしくは死別)者は100.0万円と半分になっていることくらいである。

男性の場合、女性よりはバラエティにとんだ現状となっており、個人年収も100万円未満が1人、 $100 \sim 200$ 万円が2人、 $200 \sim 300$ 万円が2人、 $300 \sim 400$ 万円が1人、それ以上が1人となっている。7人のうち、現在も働いているのは4人である。4人の平均年収は250.0万円である。一方、すでに働いていない者は3人であるが、そのうちの1人は先にもふれたように、多額の家賃収入を得ているため、年収も突出して高い。他の2人は最低限の年金だけで生活しており、平均年収は100.0万円であった。なお、女性でみられた配偶者の有無であるが、男性の場合は7人中6人が既婚者であり、配偶者がいない者が死別の1人しかいないため、この点の検証はできない。

男女とも、到達階層に対する学歴の影響もほとんど見られない。しかし、これはそもそも学歴の影響を検討できるほど、学歴の違いがないというのが事実である。また、現時点の年収の低さが、果たしてリタイアしたためだけであるのかといえば、必ずしもそうとはいえない状況がみられる。何人かからは引退直前の職業の状況が聞けているものの、たとえばみずから独立して会社を経営していた者であっても、ほとんど実入りを残せないままに引退を機に会社を閉じていたり、また、

そもそも多くの対象者は転職が非常に多いため、引退間際でもあまり収入が増えていなかったりする。今回の調査では2名ほど、いわゆる「成功者」に分類できるような経歴を残した高齢者がいたものの、その2名を例外とするならば、出身や学歴にかかわらず大きな財産を残すことができなかった事実が、静内のアイヌ高齢者の大きな特徴であったといえるだろう。

第5節 まとめ

以上、新ひだか町のアイヌ民族の階層形成過程をみてきた。最後に得られた知見をまとめておこう。

札幌とむかわの調査から得られた知見とあわせると、①青年層の厳しい生活環境については、本調査では少し異なる傾向が見られた。男性については、青年層が3つの年齢階層のなかでもっとも低くなっている。ただし、その平均値は225.0万円であり、札幌・むかわ調査の200.0万円よりも高い。また、壮年層が340.0万円と、札幌・むかわ調査の426.7万円よりも90万円近く低いため、結果としては青年層の相対的な厳しさは緩やかなものになっている。一方、女性に関してはすべての年齢層で本調査は札幌・むかわ調査を大きく下回っている。特に老年層は43.8万円と、札幌・むかわ調査の半分以下の水準で、青年層よりもはるかに低い。これは、札幌・むかわよりもはるかに厳しい新ひだか町の経済状況と、新ひだか町におけるとくに女性の無職率(専業主婦率)の高さがうかがえる結果となっている。

表2-11 個人年収の比較

| | | 男性 | | 女性 | | | | |
|---------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|-------------------|------------------|--|--|
| | 青年層 | 壮年層 | 老年層 | 青年層 | 壮年層 | 老年層 | | |
| 本調査 札幌・むかわ | 225.0万円 200.0万円 | 340.0万円 426.7万円 | 278.6万円 258.3万円 | 90.0万円 122.7万円 | 95.5万円 130.4万円 | 43.8万円 91.2万円 | | |

注)「札幌・むかわ」の数字は野崎 (2012) による。

②男性壮年層と老年層において学歴を介在した階層形成が成立しているという点については、 本調査でも壮年層にはそのような傾向がみられた。すなわち、学歴の高い者が低い者よりも高い 収入を得ていた。ただし、老年層においては、このような傾向はみられなかった。これが世代的 な問題であるのか、コーホートの問題であるのかについては、さらなる吟味が求められるだろう。

③女性において、出身階層や学歴などよりもだれと結婚するのかが階層形成に重要であるという知見については、本調査においてもまったく同様の傾向がみられた。とくに壮年層においては、事実上の生活水準を決める世帯年収において、夫がいる者といない者の間に大きな断絶があった。 夫のいない女性の年収の低さも含めて、新ひだかのアイヌ社会が、女性が自立して生きていくことが難しい社会となっていることがわかるのである。

これらの他に、階層形成という点では新ひだか町の地域的な特色とかかわり1つの知見が得られる。すなわち、階層分化を考える場合に、そもそもいわゆる「高い到達階層」というものが存在しないという点である。男性に関していえば、壮年層では、ある程度の到達階層の分散がみられた。だが、青年層では、個人年収の差がほとんどついてない。これ自体は、札幌・むかわ調査でも見られた世代的な特徴であると考えられる。ただ、新ひだか町の場合は老年層においても、

階層の分化がほとんどみられないのである。女性においてはいうまでもなく、彼女たちの到達階 層は単純に配偶者の有無で決定される。新ひだか町の階層形成の特色は、あまり好ましくない意 味において、到達階層と出身階層の間を媒介する要因が明確にはみられないという点にある。本 調査においては、そもそも「高い到達階層」というものが想定しにくいのである。これはもちろん、 新ひだかの人々が不幸な人生を送っているということを意味するのではない。たとえば老年層の ある女性対象者は、そのままドラマにできそうな波瀾万丈の人生を語ったうえで最後に、「今は 幸せです。孫に囲まれて」と話を結んだ。この女性は晩年になってからこの言葉を出せるという 点では幸福な人生を歩んだということもできるだろう。何をもって幸福とするか、成功とするか は人によって様々である。しかし、少なくとも本調査の対象者には、安定した職業について高い 給与を受けるという階層移動的にみた成功を成し遂げた者はほとんどおらず、多くの人びとが不 安定な雇用と多くの転職、低く抑えられた賃金のなかで生活をしているのである。これは、比較 的安定したといえる大企業がなく、また札幌はもちろん、むかわにとっての苫小牧のような、近 くて通えるような都市もないという新ひだか町の事情を反映しているといえるだろう。このよう な環境の影響を直接的に受けて、生まれや教育が有利にも不利にも働かず、努力による上昇移動 が難しい現状にさらされているのが新ひだかのアイヌの人々の最大の特徴といえるのかもしれな V١.

注

1)「平成23年家計調査」(総務省統計局)にもとづき、北海道の平成23年月別実収入を1月から12月まで足したもの。ただし、この数字は勤労者世帯のものである。

参考文献

野崎剛毅,2012,「階層形成過程と階層分化の要因――階層形成過程としての生活史」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,95-108.

(野崎 剛毅)

第3章 アイヌ差別の諸相 ―民族差別と民族内差別―

菊地 千夏 | 北海道大学大学院教育学研究院専門研究員

はじめに

本章ではアイヌの人々の語りの中から「差別」に関する内容に注目する。アイヌ社会では、和人からアイヌへの差別のみならず、アイヌ同士でも差別やいじめがみられることが明らかとなっている(濱田 2012)。これは、民族内の血の濃さにもとづいていたり、アイヌの中でも「朝鮮アイヌ」として朝鮮人との混血がより差別されたりする傾向をさしている。このようにアイヌの多様性が増していく中で、差別もより多様化・複雑化していく可能性は無視できないだろう。しかし他方で、和人との混血が進んだ結果、とくに若い世代に多いのは、まったく差別を受けたことがなかったり、そもそも自分がアイヌの血筋であることすら知らなかったりするというケースである。このような世代が出現しつつある現在、改めて差別問題に注目していくことには戸惑いもあるが、しかしかといって、現代でもアイヌ差別が消滅しているわけではない。

以下では、こうした多様な差別の現状を念頭においたうえで、新ひだか町のアイヌの人々 52人¹⁾ のインタビューデータを参考に、現代アイヌの差別の諸相を明らかにしていく。その際、道内の別の地域(札幌市・むかわ町)で行った調査(小内編 2012)との比較を視野に入れ、ジェンダーと世代を視点とした分析を行う。加えて以下では、和人によって語られるアイヌ差別の実態も明らかにするために、新ひだか町の住民40人から得られたインタビュー結果も適宜参照していく。つまり、和人からのアイヌ民族差別と、アイヌ社会における民族内差別の両方に注目し、最後に現代のアイヌ差別の特徴に関して考察を行う。

第1節 ライフコース上の被差別体験

まず、これまでの生活の中で、アイヌであることを理由にした差別を受けたことがあるかどうかに関して、全体の50.0%が差別を受けた経験があることがわかる(表 $3-1\cdot2$)。男女別にみると、男性40.0%、女性59.3%が該当し、女性のほうがより被差別経験が多い(表3-1)。さらに世代別を確認すると、被差別経験率は青年層で低く、壮年層・老年層で高くなっている(表3-2)。こうしたことから全体の傾向として、差別を受けた経験は男性の青年層に少なく、女性の壮年層・老年層に多くなるといえるだろう。

表 3-1 被差別経験(男女別)

| | あり | なし | 合計 | 被差別経験率(%) |
|----------|----------|----------|----------|--------------|
| 男性 女性 | 10 16 | 15 11 | 25 27 | 40.0 59.3 |
| 計 | 26 | 26 | 52 | 50.0 |

表 3-2 被差別経験(世代別)

| | | あり | なし | 合計 | 被差別経験率(%) |
|----------|-----|----|----|----|-----------|
| 青年層 | 20代 | 0 | 3 | 3 | 0.0 |
| 月十唐 | 30代 | 2 | 4 | 6 | 33.3 |
| 壮年層 | 40代 | 9 | 5 | 14 | 64.3 |
| 11.11/19 | 50代 | 5 | 5 | 10 | 50.0 |
| 老年層 | 60代 | 6 | 6 | 12 | 50.0 |
| 老平厝 | 70代 | 4 | 3 | 7 | 57.1 |
| 計 | | 26 | 26 | 52 | 50.0 |

第1項 被差別経験に関するアイヌの語り

(1) 青年層×男性(計4人中被差別経験者0人<以下、同様>)

では世代ごとの被差別に関する語りに注目していこう。

はじめに青年層の男性については、差別を受けたことがある者が皆無という状況である。4人中 1人は、最近自分がアイヌであることを知ったために、民族を理由にしたいじめにすらピンと来ないという。また、残りの3人も「周りでいじめはあったが、自分にはそういうのはないし、嫌い」「自分の世代ではアイヌだからいじめというのはない」と語る。学校でのいじめは現代の社会問題の1つとなっているが、さしあたり若い男性にとって「アイヌであること」はいじめの理由になりにくくなっているといえるだろう。

(2) 青年層×女性(計5人中2人)

女性の青年層の場合、差別を受けたという割合は5人中2人となる。中学生の時、「アイヌの踊りを踊っていると男の子から冷やかされたので、恥ずかしくて顔を隠して踊っていた」と語る女性は、いじめを受けたという感覚ではないものの、冷やかされたのを機に長らく踊りから遠ざかった。同じく、いじめを受けたと明言しているわけではないが、学生時代に「あ、ドック」(かつての「あ、犬」=「アイヌ」)という言葉を投げかけられた女性もいる。

また別の女性は、学生時代、アイヌとして外見がわかりやすい者に対するいじめはけっこうあったと語る。しかし本人は「顔がそういうふうに見えないんで、そこが救われていたと思う」という。こうした語りから、ここ10年くらいの間にもとくに学校の中でアイヌであることに対する「からかい」や「冷やかし」等の差別はあったことがわかる。

さらに、実際には差別を受けていなくとも、自分への差別が起きないように努力してきたという 女性もいる。彼女は、アイヌ民族であることに劣等感を持っている。自分の場合は見た目ではアイ ヌとわからない顔立ちだけれども、クラスの中には「ひどいアイヌ (の風貌) の方」もおり、「そ の子はやっぱり友達はいなかった」、「そういう子は、あまり高校には進学してこなかった」と語る。 彼女自身、過去の詳しい事情はわからないもののアイヌは差別されると教えられてきたので、自分 の血筋を必死で隠してきた。同じ高校にいた親戚はアイヌ民族に多い姓だったので、堂々と親戚だ とは言えなかったという。こうした意識はまだ継続しており、自分の子どもにもアイヌの血筋であ ることは隠しているという。

以上のように、本人が差別を受けていない場合でも、周囲での差別的な状況に関する語りが目立つ。アイヌである対象者らが自分より血の濃い外見をもったアイヌに対して、民族内の序列を意識

していることがわかる。

加えて、青年層では男性よりも女性のほうに細やかな被差別の語りが多く感じられる。女性のほうがより敏感に、周囲で起きている被差別状況を記憶し、客観的に捉える傾向にあるといえるだろう。

(3) 壮年層×男性(計10人中5人)

 $40 \sim 50$ 代になってくると、男女ともに被差別経験率は $5 \sim 6$ 割に上がってくる。それは学生時代のいじめ・差別だけでなく、恋愛や結婚の際の経験が加わるからといえるかもしれない。

壮年層の男性の中で、恋愛や結婚における被差別を経験した2ケースに注目したい。はじめに恋愛においてアイヌを理由に断られたという50代の男性である。20代の頃に好きになった女性と1年半くらい交際をしたが、突然、「あなたとはもう付き合えません。〇〇〇人だから」というメモをもらった。しばらくして〇の中にアイヌという三文字が入ると気づいたとき、「シャモに対する、怒り心頭がこみ上げてきた」という。その後別の和人と交際しても、結婚の話となると身辺調査が入り、2回ほど駄目になってしまったという。最終的な結婚は30代半ばと遅くなってしまった。

別の40代男性の場合、学生時代から「アイヌ」と「貧困」を理由に馬鹿にされたり、リレーの選手になれなかったり、つらい思いをした。教師も差別に加わっていたと考えている。高校を経て漁師になってからは、差別というほどではないけれども、船内の共同浴場で、毛深いのをからかわれたこともあった。そしてお見合いした際には、相手の実家からアイヌであることと漁師という職業を理由に反対された。最終的には先に子どもを授かったこともあり、漁業組合関係者の地位のある和人に相談して助けてもらった。しかし相手の家からは結婚式に一切アイヌの色を出さないことを求められ、神前の結婚式を行った。この男性の事例から、学校、就労、結婚というライフステージにおいて差別が起きる可能性がうかがえる。

(4) 壮年層×女性(計13人中9人)

では被差別経験率がより高くなる壮年層の女性ではどうか。従来から女性に顕著な悩みとして、体毛の濃さの問題が挙げられている(小野寺 2012a; 菊地 2012など)。本調査も例外ではなく、たとえば、学生時代の「毛深いよな」という陰口がその後もトラウマになったというケース、和人の夫に「メノコ」(アイヌの女子という意味)と呼ばれ、「お前に似たから子どもも毛深いんだ」と罵られたというケースなど、体毛のことに心を痛めている女性は数多い。また、体毛の濃さはアイヌであることへの認識にも大きく影響し、ある50代女性は、小学校に上がる前から友達と自分を比べ、「肌が違う」と悟っていた。そして成人して出産するときも自分の体毛はより濃くなるし、出産したわが子をみても体毛が濃いためにまた再認識し……というふうに、日常のあらゆる場面で体毛によってアイヌであることを意識させられてしまう。それが他人からの差別に結びつかなくとも、女性たちの心にネガティブなしこりとなっていることはいうまでもない。

このように、男性に比べて女性は見た目の問題によく言及しているという特徴がある。

先述した和人の夫に「メノコ」と呼ばれた女性の父親はアイヌであり、木彫りの仕事をしていた。 それゆえ小学校時代に父親が参観日に来ると、木屑まみれで「髭もさもさ」だったので、「お父さんっ てすごい顔の人だね」とか「お父さんが毛むくじゃらなのはおまえも似てるな」などとなじられ、「泣 きながら帰ってきたこともちょくちょくあった」。小学校時代に、「何かつるつるしたきれいな子が いて、私なんかは髪がぼっさり厚くて、ちょっとまゆげが太くてという、見た目的にきれいだなという系と、ちょっと重いなという系があるなと」気づき、自分をアイヌだと認識した。結婚してから生まれた子どももまた毛深かかったため、夫から「おまえたち2人に脱毛剤かけてやるか」と言われ、泣きながら身内に相談したこともある。現在でも自分の容姿のことを言われると、「心がきしむというか、グッとなることはある」と語る。

さらに青年層の女性にみられたのと同様に、50代の女性にも、差別が起きることを懸念し、アイヌであることを極力隠しているという事例がある。この女性の場合、母親がアイヌであり、昔から差別で苦労してきたという。そのため、「結婚するときはウタリじゃなくて普通の人と結婚しなさい」というのが母の遺言である。社会人になって、一度だけ気を許した相手に打ち明けたとき、急に見下したように馬鹿にした言葉をかけられた。その後は一切、他人の前ではアイヌであることを公言しなくなったという。差別を避けるためにアイヌであることを隠すという生き方は、女性に特徴的なあり方といえる。

(5) 老年層×男性(計11人中5人)

最後に老年層の経験を確認したい。被差別経験率は老年層全体では壮年層と変わらず $5\sim6$ 割となっている。しかしその内容に注目すると、まず男性の場合、より壮絶な体験や、現在でも深く心の傷となっているという経験談が目につく。

4歳の時に終戦を迎えたという70代の男性は、当時はいじめがひどく学校に行くことができず、10歳で奉公に出た。和人には「アイヌ、アイヌ」と馬鹿にされ、「スパルタ教育」の教師には理不尽に叩かれたり、バケツを持たされたりした。アイヌの特徴として「奥目である」ことを挙げ、当時は「半分シャモの血が入っていても」「見た目でわかる」ため、「徹底してやられた」という。男性は「1回いじめられたら死ぬまで忘れられない」と語る。

同じように学生時代にひどい差別を受けたという男性も、いつも「天に向かって、何で俺は生まれた」と自問していたと語る。この男性も教師からの差別を挙げ、教室に行っても机がなく、なおさら学校に行かなくなってしまったのは「先生が悪かったと思う」と考える。ただ、1人だけ話のできる教師がおり、その教師は泣きながら話を聞いてくれたり、アイヌの味方をしてくれたりもした。

また別の70代男性は小学校時代と青年期に差別を受けたという。小学生の時、自分は関係のない事件の濡れ衣を着せられ、上級生につままれて職員室に連れて行かれた。教師にはまず「挨拶が悪い」とバチーンと叩かれ、踏んだり蹴ったりの暴力を振るわれた。男性は、「楽しい思い出はない」、「死んでも忘れられないようなつらいこともあった」と述べている。 2人の男性から「死ぬまで」あるいは「死んでも」という言葉が出てきているのが印象的である。

以上はどれも70代男性のケースであり、戦後、就学率が安定していない1950年前後の記憶である。 和人からの差別ばかりか、教師からの差別もが横行していた時代であることがわかる。しかもどちらかといえば、教師からの差別のほうがつらい経験として強調されている。慕ったり尊敬できたりする教師もいる中で、それとは正反対に体罰を加える教師の存在は、より強烈なエピソードとして記憶に残りやすいのではないだろうか。

(6) 老年層×女性(計9人中5人)

次に、老年層の女性の場合、男性のような身体的な暴力の語りは出てこない。ある女性が述べるように「言葉の暴力」が中心といえる。

60代女性は、小さい頃に男の子から「おまえアイヌだべ」といわれ、「何このやろう。『アイヌ』って何よ」というふうにけんかをした。そしてこれをきっかけに親にアイヌとは何かを聞き、自分の民族を認識したという。

同じく、言葉によって「子どもの時はよく馬鹿にされた」と語る70代女性は、「ああ犬来た、ああ犬来た」と言われたことを親に相談すると、「犬は四つ足で歩くけれども、おまえは人間だからちゃんと二本足で歩くべ」と慰められたという。

以上のように、身体的な暴力がないぶん、男性よりも深刻さに欠けるように思えるが、学生時代は「黒人と白人並みに」差別に苦しんだと語る女性もいる。60代の彼女は、いじめがあるので学校には行かず、河原で時間をつぶしていたので、教育をほとんど受けていないという。小1までの間に両親とは死別したため、祖母に育てられた。学校でいじめにあっても相談できる人がおらず、「ほんとに生きてる意味がないっていう感じ」、「両親がいない、じじもいない、誰もいないから恨むわけでもない、自分自身を嘆いただけかな」と回想する。また、学生時代に「楽しかったことは一度もありません」と言い切っている。ただ、比較的教師には恵まれ、いじめられたときにいじめっ子を叱るなどしてくれた。社会に出てからは一切差別がなくなったので、両親からアイヌの血を引いたことを誇りに思い、現在では「血統書付きのアイヌだ」と自負している。そのきっかけとしては、一度北海道を離れ、再度戻ってきたときにシャクシャイン法要祭の様子を見て感激し、アイヌの血筋であることに自信をもったという。

この女性をはじめとして、これまでにみてきた各世代、男女別のエピソードでは学生時代のいじめ・被差別経験が中心となっている。就労以降の差別はないと語る者がどちらかといえば多く、全体を通して、就職の際や職場での被差別エピソードはほとんどうかがえなかった。

加えていえば、これまで被差別エピソードのある者にばかり注目してきたが、被差別経験がないと答える者も一定程度は存在する。その数は青年層ほど多いが、壮年層や老年層に至っても、「自分自身にいじめはなかった」という60代女性や、子どもの頃にけんかは多少したけど、特別な被差別経験はなかったという50代男性、そもそも「学校に行っていないのでいじめはない」と語る60代女性などがいる。

第2項 和人が語るアイヌへの偏見と差別

では和人の語りのなかに、アイヌの人々への差別はどれほどうかがえるだろうか。 和人のインタビューデータは年齢に偏りがあるため、ここでは差別の内容に沿ってみていく。

(1) 漠然とした偏見

ややアイヌへの偏見が読み取れる例として、たとえば、60代の和人男性は、「アイヌの人はでたらめ」、「アイヌの人はいいかげん」という考えをもっている。ただその根拠となるのは、酒席でのアイヌの人とのかかわりであり、「酒を飲んだら、だらしない」。「酒飲まないときはおとなしいんだ。喧嘩なんかしない。飲んだら、ふだん我慢しているのかな。だから出るのかな」と語る。そして同時に、「悪い人もいるけど、いい人もいるよ。アイヌの人で」、「アイヌの人って酒飲んだら、だら

しないも(ん)。だらしなくない人もいるけど」というように、一部の酒癖の悪いアイヌへの思いから、アイヌ民族全体への「でたらめ」「いいかげん」という価値観が形成されているように思われる。

このように漠然とした偏見を含む語りは、他にも散見される。仕事でのかかわりから、アイヌと和人の農業経営の仕方に対して、「アイヌの方はどちらかといいますと、知的な部分がやっぱり低いかもしれません」と述べる和人女性、和人は職場での人間関係に気を遣いながら発言するが、「アイヌの人らはあとあとのことまで考えないでウワーっと言う」との見解を示す和人男性など、それぞれの経験に即してアイヌへのイメージが語られる。また、本人はアイヌへの偏見がなくとも、親から、アイヌは「なまけて何もしないとか、お酒飲んでばっかりいるとか、喧嘩すると気が荒い」などと言い聞かされて育ったという和人女性もいる。最後の事例から、やはり和人においても年長世代のほうがアイヌに対してマイナス・イメージをもつ割合が多いのではないかと推定できる。

さらに、差別というほどではないがアイヌへの思いとして、アイヌ民族のみを対象とした金銭的援助等の政策に関して、「それっておかしい」(70代和人女性)と考える者は少なくない。「ウタリ協会からお金を借りて学校へ行ったとか、そういう人がいっぱいいるんですよね。だからね、そういうのがずるいというか、甘えているというか。だから、町の人から優遇されているんじゃないと言われるゆえんなのかも」(50代和人女性)と語られるように、優遇政策があるからこそ、アイヌが怠惰になっていくのではないかという考え方がある。

しかし一方で、以下のようにアイヌの肩をもつ意見もある。

「アイヌ人はずるいとかね、なまけものとかね、そういうことを言う人がいますよね、差別感は持ちたくないけどそうだと。実際につきあってみてそうだと言う人がいますよね。でもそれっていうのは結局、(歴史的に)差別されてきたから裏返しとしてね、そういう行動をとるのかもしれないしね。やっぱり裏切られてきたらね、ずるくもならないと。なまけものっていうのは、仕事だってろくな仕事与えられなかったでしょうからね」(60代和人男性)

明治時代以降、和人から理不尽な民族差別を受けてきたアイヌの歴史をふまえた場合、現在のアイヌのあり方を単純に非難すべきではないという考えである。このように、すべての和人がアイヌへのマイナス・イメージをもっているわけではないものの、全体を通して漠然とした偏見の語りは目につきやすい。

(2) あからさまな結婚差別

こうしたなかで、和人からのアイヌ差別が明確に表れるのは、結婚相手にアイヌの人々を避けた がるという傾向においてである。ある60代の和人男性はアイヌ女性との交際経験をもつという。し かし、「アイヌの人と結婚しようとは思わなかった」。

「結婚だけは。親も結婚はアイヌはやめたほうがいいんじゃないかなといったかもしれないし、いってないかな・・・はっきりしていない。でも俺自体が結婚しようとは思わなかった。知らないでつきあっていたら一緒になったかもしれないけど。見た目でアイヌという感じの人と結婚しようとは間違っても一緒になろうとは思わなかった。友達づきあいはいますよ」

同様に別の50代男性(和人)からは、アイヌの人と日常では交流があり、仲良くもしているが、 結婚となると「冗談じゃない」との差別心を持ってしまうことが語られている。

「死んだ親父に『メノコでもいいから再婚するように』といわれた。『メノコでもいいから』、 差別的なことだよね。心の中で冗談じゃないよといっていたね。すごい差別しているね。潜在 的だな。それは。さっきの設問で仲良くしていましたというけれど、普通に仲いいけど、別に 俺のなかでは、アイヌだから差別したり、いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれ ないけど、わからないけどさ、記憶にないから。潜在的に別な人というのはあったから、だから、 親父にそういわれても潜在的に冗談じゃないと心の中で蔑視してると思うんだよね」

以上のように、自分自身がアイヌとの結婚を選ばないというケースは和人男性の側に目立つ。その際、親の代からのアイヌとの結婚を避けてほしいとの思いを引き継いでいることがわかる。

さらに老年層が孫の世代にまでアイヌとの結婚に難色を示すケースもある。70代の和人女性は、子どもは既婚だけれども、もし孫が結婚相手にアイヌの人を連れて来たら、「ちょっと悩むかな」と語る。昔から地域でアイヌの家族を見てきている中で、「顔はやっぱり普通の人(和人)とは違う」との思いがあり、「何代かで」「(身体的特徴が)出てくる」ことを心配している。

このように、アイヌとの結婚を避けようとする和人の側には、身体的特徴の遺伝を憂慮する部分が共通している。混血によって徐々に血が薄まっていくという考えもあるけれども、アイヌと和人の子どもにアイヌの特徴が出てこなくとも、その孫の世代や、何代か後に出てきたりする可能性への懸念がうかがえる。結婚に際しては和人からのアイヌ民族差別が拭いがたく残っているといえる。

第3項 小括

以上、アイヌと和人双方が語る民族差別の状況をみてきた。

アイヌの人々の語りから、ライフコース上で差別が起きやすいのは、学校、就労、結婚のうち学校段階が圧倒的に多いことがわかった。これは本調査では青年層の男性以外に共通しており、近年の調査とも同様の傾向である(野崎 2012;菊地 2012)。その際、被差別エピソードとして語られやすいのは和人からアイヌに対するものが中心となっていた。しかし、青年層の女性にみられたように、クラスメートのアイヌの友人と自分の容姿を比較する語りもあった。これはつまり、アイヌ民族内における偏見といえるだろう。

また、就労の際の被差別経験は少なかったものの、恋愛や結婚の際のエピソードはないわけではなかった。とくに和人の語りに注目したことによって、アイヌと和人の結婚には大きな壁があることが示された。アイヌの人々による結婚の語りは壮年層男性のケースばかりだったので、恋愛や結婚、出産、子育てという各段階におけるアイヌ女性の実態にも目を向ける必要がある。

そして、ここまでの分析では世代ごとの大まかな特徴しか把握できていないため、若い世代になるにしたがって差別がなくなりつつあることに関して、アイヌ差別がどのように変化してきているのかを明らかにする必要がある。

これらをもとに次節では、ジェンダーと世代という2つの枠組みで4つの課題を追求する。 まず第1項にて、アイヌ女性の結婚に対する意識やパートナー選択における考え方に注目する。 第2項では、同じくアイヌ女性のうち子どもをもつケースを取り上げ、母親の視点から見た子ども の世界の被差別状況を確認する。

続いて後半では、世代差に視点を移していく。第3項においては、親世代の現代のアイヌ差別に 対する考え方を明らかにする。そして第4項の中で、親から子どもへの血筋の告知に関する語りに 注目し、アイヌ自身の差別観を検討する。

こうした分析を通じて最後に第3節において、現代的なアイヌ差別の特徴と変化についての考察を行いたい。

第2節 現代のアイヌ差別とその変化

第1項 結婚と出産をめぐる逡巡

アイヌの人々が恋愛や結婚に慎重になるのは、その身体的な特徴が差別の原因の1つとなるため、パートナーに和人を選択し、血を薄めていくという戦略的意向だといわれている(小内・梅津 2012)。従来の知見と同様に、本調査でも、アイヌ女性が語る結婚や出産時の被差別経験の内容は詳しい。

ある60代の女性は、「絶対アイヌの人とは」「一緒になろうと思わなかった」。「毛深い子どもを生むわけにいかんから、和人の人と結婚した」という。彼女自身もアイヌの血筋だが、子どもの頃に見た唇に入れ墨をしたおばあさんが「恐ろしくて、恐ろしくて」たまらなかったという。さらに自分の手にも濃い毛が生えているのに対して、大嫌いとまではいかないが、何となく、嫌だと思っていた。こうした年少時代からのアイヌに対する偏見が、結婚相手を選ぶ際の基準になっていると考えられる。他にも、「子どもにだけはみじめな思いさせたくないって思って」アイヌとは結婚しなかったという70代女性の事例もある。

アイヌ女性が結婚相手にアイヌ男性を選びたくないというのは、民族内差別として捉えることができよう。ある女性は次のように語る。「結婚するんだったら、見た目ですごい人がいるでしょ。いうたら男の人で毛深さがすごい、もうもうの人とかって、しょっちゅうみるでしょ。それをみると、こういう人と結婚したら子どもかわいそうだよなとか。思ったりしたことはありますね」。こうした語りは客観的にみれば、「加害者の側から語られる民族内差別」(濱田 2012: 164)といえるだろう。

一方で、アイヌであることにコンプレックスがあり、和人との恋愛や結婚にむしろ臆病になって しまうこともありうる(菊地 2012)。ここでは、50代の女性のケースに注目したい。

彼女はかつて、「母さんと父さんの子に生まれたから、私こんなにみったくなくて、毛深く生まれた」と親に言ったことがある。申し訳ないことをしてしまったと反省しているし、もし自分の子どもにそういわれたらどうしようという思いもあわせもつ。彼女は和人と結婚する勇気をもっていなかったため、パートナーにはアイヌを選び、子どもは「アイヌとアイヌの子だから、アイヌとして育てるべきだ」と考えた。結婚に際して、かりに和人と結婚した場合、「肌から差別されたり、軽蔑されたりするのは嫌」だし、そもそも和人とは結婚したくないというより自分に自信がもてないために「できない」と語る。

この女性が和人と結婚できなかったのは、パートナーからアイヌ差別を受けたくなかったからである。被差別を憂慮して行動が決まっていくような場合、その差別観はすでにアイヌ自身の中に根づいているものである。このケースでは女性がアイヌである自分自身を卑下してしまうというよう

な意味合いをもつため、「被害者の視点で語られる民族内差別」(濱田 2012: 160) といえるだろう²⁾。 アイヌ女性の結婚・出産に関する語りには、民族内差別の様相が色濃く表れている。

第2項 子どもの差別と親の憂慮

子どもをもつアイヌの人々の中には、子どもへの差別を憂慮するケースもある。10代の息子がいる30代女性は、本人はいじめや被差別を経験したことはない。だが、息子は年頃になって眉毛を気にしたり、学校で毛深いことをからかわれたりしている。「それを言われると、私が(自分の)お母さんに責めたように責められると、ちょっとね。何とも言えないですね」と語る。彼女は昨年アイヌ協会に登録しようとしたが、「息子にやめてと言われて」、彼女自身も家族も未入会のままだという。10代という若い世代でも、アイヌであることによる「からかい」が生じていることがわかる。自分の子どもの話ではないが、現在40代の女性は、わが子(20代)の学生時代を回想して以下のように語る。

「子どもの様子みてると、そういうの(被差別)が全然感じられないですよね」、「だけどそういいながらみてても、私の子どもの年代の同じような子たちでも、見た目、わっ、かわいそうだなって女の子もいるんですよ。もうひど過ぎ。わあって。そういう子はやっぱり、ちょっとみんなからあの子嫌って感じで、嫌われてるっていうか、友だち少ないし、その子も大人しいしっていうのがあるし、それをみると私たちの年代でもああいう子はいたなっていうのがあるから、どっか引け目を感じながら生きてる子たちはまだいるような気がしますね」

「さりげなく子どもに『なになにちゃん友だちいるの?』とか聞いたら、『えー、なになにちゃんなんかいないよう』とかっていってたり、『なんか気持ち悪いじゃん』とかって娘もいってたりするから、何がつったら、『見た感じさ、全然女の子っぽくないよね』とかいってたりはしたんで。私も私で、そういわれて、今考えてみると大人気ないと思うんですけども、もっとちょっと良い感じのこといってあげられれば良かったんですけど。私も私でそっかあ、みたいな感じで。押しもしなかったんですよね」

このように最近でも、「見た目でわかる子は損」(同上女性)と言い切られてしまう現実がある。 現在、大人世代にはアイヌの血筋であることがわかっても、子ども世代では単に「見た目」の問題 として、エスニシティが認識されないままいじめや被差別が起きる可能性も否めない。

第3項 差別の再生産

では現代における差別について、アイヌの人々はどのような見解をもっているだろうか。

2人の男女は、「アイヌ」という言葉自体が差別の温床になっていると考えている。そのうちの 1人、50代の男性は、「仕方ない、そういう言葉があるんだから」と諦めつつ、アイヌの言語や文 化を残しながらも、日本でのアイヌ民族に関する教育が不十分である現状に憤りを抱いている。も う1人の40代女性も、「『アイヌ』自体が何か差別の言葉のように聞こえちゃって」「あまり好きじゃ ない」と語る。 「アイヌ」という言葉は協会名の変遷をみてわかるように、「差別語」としての機能を指摘する声も多く、日常の差別の引き金になりうる。第1節で示したように、「あ、犬」という差別語が「あ、ドック」としていまだに使われてもいる。

「アイヌ」という言葉に慎重になるあまり、アイヌの人とはつきあいにくいと考える和人もいる。 ある和人の女性は、その場にアイヌの人がいると知らず、「アイヌの人はわからない」という発言 をしてしまい、アイヌの人を怒らせてしまったことがあった。「『アイヌ』という言葉を出すとアイ ヌの人は反発する。自分でいうのはいいけれど、人にいわれるのは抵抗があるようだ」と語る。こ うした経験の結果、アイヌの人には「なるべく近寄らない」というふうにもなっていく。

以下のアイヌ女性は、若い世代にアイヌ差別が引き継がれていくことに関して、「年上」の責任 だと考えている。

「若い子どもたちが『アイヌ、アイヌ』ってばかにするのは、親がやっぱりそういう姿勢っていうか目線でみてるから、今の子どもたちも何か差別や軽蔑するような言い方で言葉を使ってると思うんですね。だから、何でしょう。年上の指導者というか、これから子どもたちを担っていくような者というかね、そういう人たちがもう少し、何だろう、配慮していってほしいなとは思いますよね。

別にアイヌだからって、別に悪いことしたわけではなくね、ごく普通にみんなと変わらない人間、民族なので、何というのでしょうね、偏見や差別っぽいのがちょっと、だんだんだんだんなくなっていけばいいなとは思いますよね。誰だって、男の子も女の子もそうですけど、好きこのんで毛深く生まれてきたわけではないのでね、身体的な中傷をされるのはちょっと心外かなって思いますね」

たしかに、年長者から下の世代に伝わっていく限り、アイヌ差別はなくならないだろう。差別的な意味合いをもつ言葉の伝達ばかりでなく、アイヌの人々への態度、価値観なども同時に引き継がれ、再生産されていく。その際、大きな影響力をもつのは親としての立場だろう。

6人の子どもをもつアイヌ男性は、子どもがパートナーを選ぶ際にアイヌであるか否かを気にするような家庭に対して、次のような考えを示す。

「やっぱそういうのもいるけど、同級生とかの、こっちの子どもの同級生の親にもいるけど、親がそうなら子どもも考え一緒ですもん。ってことは、そういうとことはつきあいしないっすからね。子どもも」「自然と子どもたちもわかってくるからっすね」。「あすこ(あそこ)の親がこんなこといってたんだよっていうことが耳に入って来たら、子どもも同じようなんだねってことになって。そっからあわないっす」

アイヌを差別する気持ちをもつ親の子どもは同じく差別するので、その家庭とはつきあわないという。一般的にもこうした傾向が強いのであれば、アイヌへの差別は現代でも解消されないまま、互いに歩み寄ることもなしに残存していくことになるだろう。

以上のことから、現代のアイヌ差別は民族内外において、親から子を基本とした、上の世代から

下の世代への再生産という形で今もなお残っているといえる。

第4項 血筋の告知と親子関係

しかし民族内において、アイヌである親が自分の子どもに血筋を伝えるか否かという文脈では、 わが子のアイデンティティの構築もさることながら、差別をこうむらないかどうかが懸念される(小 野寺 2012b)。そこには、親としてのできる限りの配慮がある。

ある40代男性は、小学校から中学校にかけて、和人から毛深いことを指摘されるいじめを受け続けた。「親に相談しても、親がシュンとしちゃう」、「『ごめんな』しかいわないですもん」と当時の親とのやり取りを回想する。それが現在では、同じく体毛の濃さで悩む息子や娘と同じやり取りをしているという。「娘に『ほんとに何でこんななってるの?』っていわれたら、『ごめんなあ』って謝るしかない」。「申し訳ないなあ」という思いを抱えつつ、「でもやっぱり、変えられないから。あとは強くなってくれっていうしかない」と語る。息子に、「パパも同じことやってきたよ」と伝えることで、息子もわかってくれているようだという。わが子に対する血筋の告知は、改めて機会をもつというより、こうした会話を通じてなされていくことが多いのではないだろうか。

別の40代男性の場合、学校・就労・結婚のどの場面でもこれといって差別される経験はなかった。しかし、わが子への血筋の告白となると、「避けている」、「自分の方から子どもに伝えるというのは、今でも難しい」と話す。彼の場合、これまでに子どものほうから一、二度、「アイヌって何?」「うちはアイヌなの?」と聞かれ、短い言葉で答えた経験はあるという。ただし、「お前はアイヌの子だとはやっぱりいっていない」。「うちは」を強調して「うちはこういう血だよ」と答え、「お前は、とは出てこない」と語る。

この事例から、子どもへの血筋の告知をめぐる親の迷いや心労が浮かび上がってくる。親の側に ためらいがあるのは、親個人が差別を受けたことがなくとも、従来のアイヌ差別の歴史を意識して いるからに他ならないだろう。「アイヌ」を認知させることは、子ども自身が自らを差別する可能 性を生むことになるのである。

第3節 まとめと考察

これまでの検討を通して、民族内外の差別構造が明らかとなってきた。

第1節ではライフコース上にみられるアイヌの被差別経験と、和人からのアイヌ差別に注目した。まずアイヌの語りから、民族外からの差別は、年長世代によって昔の記憶として語られることが圧倒的に多いことがわかった。学卒後に起きる就労や結婚時の差別があまり把握できなかったのも、時代を経るにしたがってアイヌ民族に対する差別が少なくなってきているからなのだろう。その理由としては、和人との混血が進み、アイヌであることを判断しにくくなっていることや、道内でもアイヌ差別の歴史を知らない和人が増えていることが考えられる。

しかし和人の語りに注目した結果、アイヌとの結婚を避けたがる傾向を読み取ることができた。 アイヌの側にとっては和人との結婚が血を薄めるための戦略であっても、それに抵抗を示す和人からの民族差別はたしかに存在している。ただその際、和人に特徴的なのは、アイヌの人との日常的な交流や、男女交際すらも問題視はしないが、結婚となるととたんに否定的になるということである。民族差別は日常では影をひそめており、結婚の場面になると顕在化しやすいといえる。 翻って、第2節においてアイヌの人々の差別観に注目していくと、民族内差別と捉えられる語りが少なくなかった。具体的には結婚相手の選択において、アイヌではなく和人を選びたいと考えるアイヌ女性が多くみられた。他にもアイヌ女性の語りの中には、アイヌの友人やよその子どもの外見について、民族内差異を意識する様子もうかがえた。

こうしたことから、現代アイヌを取り巻く差別のあり方は、民族内差別より民族差別のほうが相対的に弱くなりつつあるとの仮説が成り立つかもしれない。たしかに、結婚となるとアイヌ差別が顕在化するという状況は、和人社会にもアイヌ差別が解消しがたく残っていることを意味している。しかし、それが年長世代を中心としていることをふまえると、アイヌ民族について無知で、語る言語をもたない和人からの差別は消失していき、アイヌについて知識があり、語ることのできる者たちがアイヌ社会の内側で互いに偏見をもったり、自分を卑下し続けたりする状況が際立っていくと考えられる。ただし、この仮説については、現代を生きる和人の差別観をもう少し体系化したうえで、改めて吟味していく必要があるだろう。

さらに、民族内差別について注意すべき点は、差別観を構成する価値観や態度が、アイヌの家庭の中でうかつに再生産されていっているわけではないということである。親が子どもにアイヌの血筋を告知する場面では、充分すぎるほどの配慮をうかがうこともできた。親がわが子に差別を受けてほしくないと願ったり、血筋を知ってショックを受けてほしくないと思ったりするのは当然のことだろう。しかしだからといって、自分たち家族だけを守り、よそのアイヌの子については知らないとか、アイヌ民族自体がこれからも差別される対象になることについて無頓着であるはずもないだろう。今後の課題として、アイヌの人々が無意識に語るアイヌについての考え方や価値観をどこまで差別の温床として考えるかを再定義していく必要がある。

注

- 1) アイヌとしてインタビューに応じてくれた対象者のうち、本人が和人である(和人かもしれない) という5ケースを除いた。
- 2) ただし、「被害者の視点で語られる民族内差別」としてよりわかりやすいのは、たとえば若い世代のアイヌの人が、同じアイヌでも年上の世代のアイヌは酒癖が悪く、アルコール中毒者や無職の人が多かったといって非難するような場合であろう。本調査では、こうしたアイヌの人が「アイヌ民族」に対して偏見をもつような語りはうかがえなかった。

参考文献

- 濱田国佑,2012,「アイヌ社会における差別の問題――生活史から見る民族内差別」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年 北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,157-68
- 菊地千夏,2012,「アイヌの人々への差別の諸相――生活史に刻まれた差別の実態」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,143-56.

- 野崎剛毅, 2012,「階層形成過程と階層分化の要因――階層形成過程としての生活史」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 95-108.
- 小内透編著,2012,『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 小内透・梅津里奈,2012,「家族の形成と再編」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告 書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,109-21.
- 小野寺理佳,2012a,「アイヌとジェンダー」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 そ の2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書 ――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,61-93.

(菊地 千夏)

第4章 エスニック・アイデンティティの諸相

新藤こずえ|立正大学社会福祉学部講師

はじめに

本章ではアイヌの人々のエスニック・アイデンティティの諸相を考察する。具体的には、アイヌとしての自己意識の形成と変容について、過去から現在に至るまで、どのような経験がエスニック・アイデンティティに影響を与えてきたのかを描く。

エスニック・アイデンティティとは、ある民族集団が歴史的に形成してきた言語・習慣・行動規範・価値観・知識などの文化パターンを基礎とし、その集団内で共有されている態度や感覚といったものであり (Phinney 1990)、エスニシティの差異は、ときとして「生得的」なものと考えられているが、実際にはすべて学習されたものであるという (Giddens 2001=2004)。本章では、アイヌの人々のこれまでの人生におけるエスニック・アイデンティティにかかわる経験のなかでも、とりわけアイヌ文化の体験と運動への関わりに焦点をあて、それらがアイヌとしての現在の生活と将来展望にいかなる影響をもたらすのかについて検討する。

分析の視点としては、アイヌであることの自己意識について、「肯定的」「否定的」あるいは「どちらでもない」という3つの群に分け、それらの意識が過去・現在でどのように変容したかを検討する。その際、世代によってアイデンティティを意識する経験が異なることをふまえ、年齢層ごとに分析を行う。なお、本調査の対象は新ひだか町に在住するアイヌの人々であるが、同じく農山漁村部にあるむかわ町において同様の調査を行った小内・長田(2012)の分析結果を参照しながら、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティを考察する。

第1節 エスニック・アイデンティティの形成と変容

第1項 現在と過去の意識の概要

まず、各人のインタビュー結果全体にもとづいて、現在アイヌであることに対する意識を以下の観点から、3つの群に分類した。①「肯定的である」は、「アイヌであると(堂々と)言える」「アイヌの伝統を継承したい」「アイヌの文化を広げたい」など、現在アイヌであることに肯定的な人々の意識である。②「否定的である」は、「アイヌであると知られたくない」「アイヌであることにコンプレックスをもっている」「ネガティブなイメージがある」など、アイヌであることを隠したいと考えており、アイヌであることに否定的な人々がもっている意識である。③「どちらでもない」は、「アイヌであるととくに意識しない」「民族のことは気にしない」と考えている人々の意識になる。なお、アイヌの養子となった和人や配偶者がアイヌである和人の場合もアイヌの人々と同様の観点から分析した。

全体の結果としては、新ひだかでは、「肯定的である」と「どちらでもない」が同じ割合であり

(49.1%)、「否定的である」者はほとんどいない(1.8%)ということがわかる。むかわ調査では、「肯定的である」者が40.2%、「どちらでもない」者が53.6%、「否定的である」者が6.3%であったことと比べると、新ひだかではアイヌであることに対して肯定的な意識をもつ者が多い(表 4-1)。

表4-1 アイヌであることに対する現在の意識

単位:人、%

| | 肯定的である | | 否定的である | | どちり | うでもない | 合計 | | |
|------|--------|--------------------|--------|------|-------|-------|--------|--------|--|
| | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | |
| 新ひだか | 28 | 49.1% | 1 7 | 1.8% | 28 | 49.1% | 57 | 100.0% | |
| むかわ | 45 | 45 40.2% 7 6.3% 60 | | 60 | 53.6% | 112 | 100.0% | | |

年齢層別にみると、「肯定的である」者は、老年層 (63.6%)、壮年層 (42.3%)、青年層 (32.3%) の順に多く (表4-2)、これは、むかわ調査において「肯定的である」者が老年層 (58.5%)、壮年層 (35.7%)、青年層 (20.7%) の順に多かったことと同様の結果となっている。ただし、いずれの年齢層も「肯定的である」者の割合が、むかわより新ひだかで多くなっている。また、「どちらでもない」者は、青年層において66.7% (むかわ69.0%)、壮年層において53.8% (むかわ59.5%)、老年層において36.4% (むかわ59.5%) を占めている。

表4-2 アイヌであることに対する現在の意識

単位:人、%

| | 肯定的である | | 否定的である | | どちり | うでもない | 合計 | | |
|-----|--------|-------|--------|------------|-----|-------|-----|--------|--|
| | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 実数 構成比 | | 実数 | 構成比 | | |
| 青年層 | 3 | 33.3% | 0 | 0.0% | 6 | 66.7% | 9 | 100.0% | |
| 壮年層 | 11 | 42.3% | 1 | 3.8% | 14 | 53.8% | 26 | 100.0% | |
| 老年層 | 14 | 63.6% | 0 | 0.0% | 8 | 36.4% | 22 | 100.0% | |
| 合計 | 28 | 49.1% | 1 | 1.8% | 28 | 49.1% | 57 | 100.0% | |

次に、新ひだか調査におけるアイヌであることに対する過去と現在の意識は、表4-3のとおりである。全年齢層を合わせた結果としては、現在において「肯定的」である28人のうち、過去からそうであった者はわずか7人であり、9人は「否定的」、12人は「どちらでもない」という者であった。過去において「否定的」であったが、現在は「肯定的」に変化している者は、壮年層で2人、老年層で7人であった。「どちらでもない」に変化している者は、青年層で2人、壮年層で5人、老年層で3人であった。一方、過去において「肯定的」であった者が「否定的」に変化した例はなかった。過去においても現在においても「否定的」である1人を除き、全体的には過去に比べてアイヌであることを「否定的」と捉える者は少なくなっており、「どちらでもない」か「肯定的」な方向に変化している。老年層については「肯定的」な方向への変化が明らかである。壮年層は「否定的」から「どちらでもない」への変化がみられる。

このように、過去から現在におけるアイヌであることに対する意識の変化には、世代による違いがみられる。次項では、年齢層ごとに、いかにしてこのような意識の変容が起こったのか、あるいは変容しなかったのかを検討する。

| | | | | | | 現 | 在 | | | | | |
|--------------|---------|------------|-------------|----|---------|---------|-------------|---------|---------|------------|-------------|----|
| | | 肯尔 | 官的である | | | ī | 否定的である | どちらでもない | | | | |
| | | 肯定的 | 3 100.0% | | | 肯定的 | 0 | | | 肯定的 | 0 | |
| 青年層 (9人) | | 否定的 | 0 | 3 | | 否定的 | 0 | 0 | | 否定的 | 2 33.3% | 6 |
| | | どちらでもない | 0 | | | どちらでもない | 0 | | | どちらでもない | 4 66.7% | |
| | | 肯定的 | 1 9.1% | | | 肯定的 | 0 | | | 肯定的 | 0 | |
| 壮年層 (26人) | 過 | 否定的 | 2 18.2% | 11 | 過 | 否定的 | 1 100.0% | 1 | 過 | 否定的 | 5 35.7% | 14 |
| | どちらでもない | 8 72.7% | | | どちらでもない | 0 | | | どちらでもない | 9 64.3% | | |
| | | 肯定的 | 3 21.4% | | | 肯定的 | 0 | | | 肯定的 | 0 | |
| 老年層 (22人) | 去 | 否定的 | 7 50.0% | 14 | 去 | 否定的 | 0 | 0 | 去 | 否定的 | 3 37.5% | 8 |
| | | どちらでもない | 4 28.6% | | | どちらでもない | 0 | | | どちらでもない | 5 62.5% | |
| | | 肯定的 | 7 25.0% | | | 肯定的 | 0 | | | 肯定的 | 0 | |
| 合計 (57人) | | 否定的 | 9 32.1% | 28 | | 否定的 | 1 100.0% | 1 | | 否定的 | 10 35.7% | 28 |
| | | どちらでもない | 12 42.9% | | | どちらでもない | 0 | | | どちらでもない | 18 64.3% | |

第2項 アイヌとしての意識の形成過程と変容

(1) 老年層

老年層においては、現在、アイヌであることに否定的な意識を有している者はおらず、過去において「否定的」であった10人は、現在、7人が「肯定的」、3人が「どちらでもない」に変化している。また、過去から現在にいたるまで変化のなかった者は、「肯定的」が3人、「どちらでもない」が5人である。

現在、「肯定的」な意識を有している14人のうち、過去においても「肯定的」であった者は3人、「否定的」であった者は7人、「どちらでもない」者は4人であった。これらの人々の意識の形成過程に影響を与えたと考えられる語りに注目してみよう。

(過去も現在も「肯定的」である者)

- お父さんの父親、○○(地区名)の酋長で、その祖父も○○の酋長だったんです。(老年層·女性)
- ・ 今は、あたしはアイヌって、血統書付きのアイヌだって言ってます。ほかの、うちのお父さん たちみたいに半々じゃないから、両親ともあれ (アイヌ) だから、胸張ってますけれども。(老 年層・女性)
- 僕からいうと祖父ね、△△の部落で一応、酋長的な方だったんですね。(老年層・男性)
- ・ 小学生のころ、5年からそのイナウを見て、あ、これはアイヌの血筋なのかなっていう記憶を、 そして来る人たちの話聞いたり(中略)そういう先祖供養みたいなことのものまねっちゅうの かな、をやっているのを見て、あ、これはアイヌの行事の一つなのかなっていうふうに自然に それを受け入れたって感じね。(老年層・男性)

(過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者)

- ・ 静内に来て、シャクシャイン、あんた暇だったら手伝ってくれないかって言われて、いいよって。(中略)「えー、こんな儀式があるんだ」っていうことに目覚めたし、先祖供養って、「あー、すごい立派なことやってるんだな」と思ったのと、そういうあれ(儀式)に参加できる自分が何か嬉しいなという気がして。だから積極的に出るようになった。(老年層・女性)
- ・ 自覚したのは、保存会活動するようなってからかな(中略)踊りとか儀式とか。(老年層・男性)
- ・ もともと趣味でずっと縫い物はやってたんで、和裁も、私、学校で習ってるんで、ある程度 は自分が縫えるのと、あと、その縫い方違ったりはするんですよ。アイヌの縫い方と普通の 一般の縫い方と違ったりするんですけど、今は結構縫いやすいように今の縫い方が取り入れ られてるところとかもあったりするんで。(老年層・女性)

(過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者)

- ・ 隠したくてもね。天に向かって何で俺は生まれたって、いっつも、そうもう天に向かって言ってたもんだよ。うん。なんでアイヌに生(う)まらしたんだって…(中略)(しかし、アイヌの伝統工芸作品製作に取り組み)賞もらったことあるんだよね。(老年層・男性)
- 何だかんだと言ったって、アイヌの血を引いてるから。シャモにはなれないですね。(老年層・ 男性)
- ・ 私も東京や神奈川、あっちのほうへ行ったら、アイヌなんて言われたこともないし、だから 千葉に。たまたま、「あんた、沖縄じゃないかな」と。裸になったら、沖縄の人より毛ないし。(老 年層・男性)

このように、過去も現在も「肯定的」である者は、自らの先祖の存在にふれ、アイヌとしての血筋の確かさや、正統な伝統文化を受け継いでいるという自負がみられる。また、過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者は、シャクシャイン祭りへの参加や保存会活動、アイヌの伝統的な裁縫などの文化活動へのコミットが、アイヌとしての自分を肯定的に捉えられるようになる契機となっていた。過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者は、過去に差別をされた体験とともに、アイヌの血筋であることにネガティブな意識を有している時期があったことにふれ、その後、アイヌであることを活かして取り組んだ伝統工芸作品づくりを通して「賞もらった」ことが誇りになっている。また、このようなポジティブな体験ではなくても、「シャモにはなれない」という諦観という意味合いでのアイヌとしての自己肯定、あるいは都市部での「沖縄の人より毛ない」という他の身体的特徴をもった人々との比較を通じ、自分はまだ「まし」だと思うことがアイヌとしての自分を肯定的に捉えることにつながっていた。

一方、現在において「どちらでもない」8人は、過去において「否定的」が3人、「どちらでもない」が5人だった。

(過去も現在も「どちらでもない」者)

・ 山から下りてきて、ちょっと歩いてたら、やっぱり同じくらいの年の子が、やっぱり言うからね。ああ、あれはアイヌだって。最初は何言ってんのかなあって思ったけど、だんだん年

行くにつれ気付いただけで、誰からも教えてもらった訳でもないし、どこに働いても差別は なかったよ。(老年層・女性)

・ 25,6歳になるまで自分にアイヌの血が流れていることを知らなかったし、家庭ではまったく アイヌとしての生活をしたことはない。(老年層・男性)

(過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

・ 過去のことはまったく知らないし、知りたくもない。アイヌの言葉、伝統行事のことはまったく知らないし、過去のトラウマがあり覚えたいとも思わない。(老年層・男性)

過去も現在も「どちらでもない」者は、自身がアイヌであるということを認識する機会が少ないため、アイヌという理由で差別された経験がほとんどないか、差別的な見方をされた経験があったとしても、感情面での葛藤があまりなく、アイヌであるということでの実際的な不利益を被っていなかった。

また、過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者の語りには、過去に、アイヌであることで差別された経験や、自身がアイヌであることをネガティブな意味合いで捉えていた時期があったことを示唆していた。しかし、現在は、アイヌであることにふれないという対応をすることによって、否定的な感情を消し去ろうとしている意識や、否定的な感情は消えつつあるものの、アイヌ文化を次世代に伝えようとする意識は希薄であることがみてとれる。

(2) 壮年層

壮年層においては、現在、アイヌであることに「肯定的」である11人のうち、過去においても「肯定的」であったものはわずか1人であり、「どちらでもない」が8人、「否定的」が2人だった。

(過去も現在も「肯定的」である者)

・ 父親がアイヌのカムイノミの伝承者で…。(壮年層・男性)

(過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者)

- ・ 最初はアイヌ民族の1人として意識することはなかったけれど、アイヌ協会の仕事を手伝ったり、アイヌ民族の踊りを見たりする時にだんだんと意識するようになった。(壮年層・女性)
- ・ 極力、協会に入ってからはいろんな行事とか参加するものは参加して。(壮年層・女性)
- ・ シャクシャイン像見て感動。自分もこうなれたら良いなあっていうの。(壮年層・女性)
- ・ 向き合えるようになったのは、年齢だし、結婚して、子ども生んでから、だからもう30過ぎてから、うん。夫婦でアイヌだし、やっぱり自分たちが何気にこう、いい思い出がなかったんだけれども、やっぱりそれをわかっててアイヌ同士で結婚して、子どももうけたっていうことは、この子をどうやって育てるか、アイヌとして恥じない、恥じないんだっていうふうに仕向ければ、子どもも育ちやすいんじゃないかと思って。(壮年層・女性)
- ・ 受け入れたっていうことでしょうね。開き直ったといってもいいかもしれないし。受け入れ たんだね。(壮年層・女性)

- ・ 私は一生懸命悩んだんだけどね。それでそうやって、アイヌとアイヌの子だから、アイヌと して育てるべきだって。(壮年層・女性)
- ・ やっぱりお客様ってアイヌの人を見たくてくるっていうか、会いたくてくるっていうか、そ ういう方も中にはいらっしゃるので、「アイヌですよ」っていう部分は多いんですよ。だから、 うーん、やっぱりアイヌなのかなって思いますけど。(壮年層・女性)
- ・ いまは自分は (アイヌであることを) 当たり前だと思ってんで、意識していないのかもしれませんけれども、ときどき「あ、やっぱり」っていうことはやっぱり考え方だとか、もちろん外見はもちろんですよ。(壮年層・男性)

(過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者)

- ・ 年寄りの人たちと対等っていったらおかしいけど、言ってることがわかるくらいにはなりたいよね。でも、ほとんど半分以上わかりませんからね。(アイヌ語を)しゃべられたらね。(壮年層・男性)
- ・ 話掛けてくる人はアイヌの事についてこれはどういうふうにとかっていうふうに聞かれたと きに、自分の中で知ってなきゃいけないことがあるんだなっていうのがわかりましたね。(壮 年層・女性)

過去も現在も「肯定的」である者は、父親がアイヌのカムイノミの伝承者であり、アイヌ文化 の継承に誇りを感じることができる環境で生活してきたとみられる。

過去は「どちらでもない」が現在は「肯定的」である者は、アイヌ協会での行事や文化活動に参加するなかで、アイヌであることを肯定的に捉えることができる機会をえている。また、アイヌであることを「受け入れ」、あるいは「開き直」ることや、「当たり前」と思うこと、子どもを「アイヌとして育てる」というスタンスを決めたことが、肯定的な意識となる契機になっていた。

過去は「否定的」であったが現在は「肯定的」である者は、過去にアイヌであることによるネガティブな経験を有していながらも、現在、アイヌである自分が、アイヌ語を話せないことや、アイヌ文化について他者に尋ねられたときに説明する知識をもっていないことにもどかしさを感じ、アイヌの言葉や文化を学ぶ意欲が生じたことが、肯定的な意識を有することにつながっている。

一方、現在においてアイヌであることについての意識が「どちらでもない」14人のうち、過去においてもそうであった者は9人であり、「否定的」であった者が5人であった。また、現在においても過去においても否定的な意識を有しているものは1人であった。

(過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

- ・ 小さいときは毛深いのは気にしましたよ。あと、子どもが毛深いのは嫌だなっていうのは ちょっとありますけどね。自分の血はあまり引いて欲しくないなと。とりあえずうちらの時 代よりは、教育がある程度しっかりしてきているから、そういう偏見というのは減りました よね。(壮年層・男性)
- ・ 意識するといったら、自分が生まれてきて、今度自分の子どもを産むと、その自分の子ども が見た目的に毛深いかどうかとかって気になるんですよね、すごく。私のせいでこの子たち

が毛深いんじゃないかとかと思って… (中略)顔に特徴があって、目鼻だちがはっきりしてて、いいと思うところはあるんですよ。(壮年層・女性)

・ (シャクシャイン祭りなどの行事を) 自分がこうやって一緒にやっているというのが自分もア イヌっていうことだから。(壮年層・女性)

(過去も現在も「どちらでもない」者)

- ・ アイヌ民族のひとりであると自覚したことはないし、自覚するようなきっかけもなかった。 アイヌ協会に入っているが、自分自身がアイヌ民族のひとりであると考えたことはない。普 段心がけているアイヌ文化や関わってみたいと考えているアイヌ文化はない。(壮年層・女性)
- ・ 普段から考えたことはないですけど、そういう話が出たりすると間違いなく血筋はもってる なっていうのはある。(壮年層・女性)

(過去も現在も「否定的」である者)

・ 小さい時からそういうもんだって思ってるから、わかってるんだけど周りにわからないよう にしてるっていうのかな、それが現状です。(壮年層・女性)

過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者は、男性も女性も毛深いという身体的特徴について否定的な感情をもっており、そのことによって過去に自分が経験した苦労を自分の子どもにさせたくないと心配しているが、現在は、偏見や差別についての「教育がある程度しっかりしてきている」ことや、むしろアイヌとしての身体的特徴について「目鼻立ちがはっきりしてて、いいと思うところはある」という肯定的な意識が芽生えていることが、過去の否定的な意識を相殺している。

過去も現在も「どちらでもない」者は、アイヌ民族であると自覚するきっかけがなかった者と、 血筋はもっているということは認識しているものの、そのことについて特別な意識は有していない 者が含まれている。

一方、過去も現在も「否定的」である者は、子ども時代から、アイヌであるということを「周りにわからないように」することが当たり前の環境のなかで育ち、現在もアイヌであることを極力 隠しているという状況であった。

(3) 青年層

青年層においては、現在、アイヌであることに「肯定的」である3人は過去から「肯定的」な 意識を有していた。一方、現在、「どちらでもない」意識をもつ6人のうち2人は、過去において は「否定的」な意識を有していた。

(過去も現在も「肯定的」である者)

・ ちゃんと大人の考えになる高校出てからとか、社会人になってからいろいろ。伝統的なこと 見たり聞いたりして。いろいろ歴史を知るとやっぱり…。もうこの文化は絶やさない方がい いなって思いますね。(青年層・男性)

- ・ なんだかんだ嫌々でもアイヌ語弁論大会に出されてアイヌ語も教えて貰って。その時に、弁 論の内容を書くのにちっちゃい時の思い出とか、それこそ聞かれたんですけど、その時に初 めてあれもアイヌ文化だったんだなとか、再認識する部分があったりとかで。(青年層・男性)
- ・ アイヌ文化でそれこそ理想としたのは、ばあさんの兄さんみたいに将来なりたいなとは思い ましたね。木彫りしながらシャケ食って酒飲んでみたいな。(青年層・男性)
- ・ 小さいころから保存会入ってて、踊ることが当たり前で、儀式に参加することが当たり前に なってしまってたので。(青年層・女性)

(過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者)

- ・ 自分が意識しなくても周りに意識されるんで、劣等感ありますよね。(青年層・女性)
- ・ アイヌとして知られずに生活しながらも、アイヌ文化引き継いで活動していきたい。アイヌ として積極的に生きていきたい、なんていうのはないけども。(青年層・女性)

(過去も現在も「どちらでもない」者)

- ・ 通常生活ではあまり意識はしてこなかったんですけど、一応そうなんだよということで(母親に)教育されてというか。(青年層・男性)
- ・ アイヌとして積極的に生きていきたいっていう訳ではないし、別に普通に? (アイヌ民族に) 見られればそれで良いし、別に自分で意識してる事だから、積極的にって訳じゃないけど。(中略)別に普通に、自分見られても良いっていうか、自分でも意識してるから、別にそのまま、今もこれからも、普通に。(青年層・女性)

過去も現在も「肯定的」である者は、アイヌ文化にふれる機会や、肯定的な意味合いでアイヌ について学ぶ機会を豊富に有していただけでなく、自らがアイヌ語や木彫り、踊りなどを他者に披 露するという経験を有しており、アイヌであることに積極性を見出していた。

一方、過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」者は、過去においても現在においても、 アイヌであることについて「劣等感」があることに変わりはないが、アイヌ文化の楽しさや重要性 を認識しており、「アイヌとして知られずに生活しながらも、アイヌ文化引き継いで活動していき たい」というアンビバレントな感情をもっていた。

過去も現在も「どちらでもない」者は自らがアイヌであることを認識していながらも、そのことについて「とくに意識してこなかった」し、これからもアイヌであることについて積極的でもなく消極的でもなく「普通に」生活していきたいということであった。

(4) まとめ

アイヌであることに対しての意識は、家族や家族以外のアイヌの人々との交流と、そこでの経験で付与される、「アイヌ性」ともいうべきものへの捉え方によって異なっている。アイヌであることについての「肯定的」な意識は、どの年齢層であっても、アイヌ文化を通してえられる楽しみや、活発にアイヌ文化を行っている周囲の人間関係からもたらされる自己肯定感によって醸成されている。一方で「否定的」な意識をもつにいたる背景には、直接的に自らが差別的対応を受けて嫌

な思いをした経験のほか、家族をはじめとする周囲の人々の、「アイヌであることは隠すべきことである」といった感情を幼少期から抱かせられるといった経験がある。これは、老年層や壮年層に顕著であった。このような傾向は、むかわ調査でもみられた(小内・長田 2012)。

一方で、アイヌであることについて、現在、肯定的でも否定的でもない意識である人々には、過去に否定的な意識であったが、現在は、アイヌ文化等にふれたり、差別的対応をされる経験が減少したりするなかで、否定的な意識が薄らいできている場合が多い。しかし、とくに青年層において、そもそもアイヌであることを意識する機会がないことによって、どのような意識ももてないとするならば、それは、民族としてのアイデンティティが世代を追うごとに失われつつあることを示唆している。しかしながら、このことは一方で、アイヌとしての肯定的な意識をもつにいたるための経験をする余地がまだ残されているともいえるのではないだろうか。

第2節 アイヌ文化の体験と影響

第1項 アイヌ文化の体験

前節でみたとおり、アイヌ文化の体験が、アイヌであることのエスニック・アイデンティティに影響をもたらしている。ここでは、具体的にどのような文化体験がエスニック・アイデンティティに影響をおよぼしているのかを検討する。

まず、実践しているアイヌ文化の有無について、現在、実践している文化がある者は新ひだかで47.4%、むかわで66.1%であり、新ひだかではむかわよりも文化を実践している者が少なかった(表4-4)。

表4-4 アイヌ文化の実践

単位:人、%

| | | 実践して | いる文化 | | 今後実践したい文化 | | | | |
|-------------|----------------------|------|----------|--|-----------|----------------------|----|----------------|--|
| | | あり | なし | | | あり | なし | | |
| 新ひだか むかわ | 27 47.4% 74 66.1% | | 30 38 | | | 38 66.7% 97 86.6% | | 33.3% 13.4% | |

しかし、年齢層別にみると、新ひだかでは、青年層において文化を実践している者の割合が 66.7%であり、むかわの48.3%よりも多かった。新ひだかでは、文化を実践している者の割合は、青年層 (66.7%)、老年層 (59.1%)、壮年層 (30.8%) の順で多かったが (表 4-5)、むかわでは、老年層 (75.6%)、壮年層 (69.0%)、青年層 (48.3%) の順であった。

表4-5 アイヌ文化の実践

単位:人、%

| | | 実践して | いる文化 | | 今後実践したい文化 | | | | | |
|-----|----|-------|------|----------|-----------|-------|----|-------|--|--|
| | | あり | | なし | あり | | | なし | | |
| 青年層 | 6 | 66.7% | 3 | 33.3% | 7 | 77.8% | 2 | 22.2% | | |
| 壮年層 | 8 | 30.8% | 18 | 69.2% | 17 | 65.4% | 9 | 34.6% | | |
| 老年層 | 13 | 59.1% | 9 | 40.9% | 14 | 63.6% | 8 | 36.4% | | |
| 合計 | 27 | 47.4% | 30 | 30 52.6% | | 66.7% | 19 | 33.3% | | |

実践しているアイヌ文化の内容をみてみると、女性では、保存会での踊りや歌、縫い物や料理が多く、男性ではカムイノミ、イナウ、木彫りなどであった。以下では、アイヌ文化の実践の内容を、家庭での日常生活に組み込まれて実践されているアイヌ文化、シャクシャイン祭りなどアイヌ協会の行事や保存会への活動への参加を通して行われる文化体験の2つの視点から、その内容と関わりについてみていく。

(1) 日常生活に組み込まれたアイヌ文化

子どものころのアイヌ文化については、老年層でアイヌ語を日常会話として使用する家族や入れ 墨、囲炉裏を中心とした生活、伝統的な家屋(チセ)に住むこと、イナウを捧げる、カムイノミ、トゥ スクルにみてもらうなどの経験をしている者が多かったが、壮年層では、アイヌ語、入れ墨につい て見聞きしたことがある者がいるものの、チセでの生活や囲炉裏のある住宅での経験者はいなかっ た。青年層では、祖母がアイヌ語を話しているのを聞いたことがある1人を除き、日常生活におい てこれらの伝統文化を経験した者はいなかった。

老年層と壮年層を中心に、日常生活の中で経験したアイヌ文化についてみてみると、アイヌ語や入れ墨について見聞きしたという者が多い。「兄弟同士、学校では子ども同士では日本語を話していたが、大人同士ではアイヌ語を話していた」(老年層・男性)、「母の姉や父の姉妹は入れ墨を入れていた。祖母も入れ墨をしていた」(老年層・男性)というように、家族や親戚など身近な人々がアイヌ語を話したり入れ墨をしたりしていた。しかしながら、「もう…婆ちゃんが入れ墨入ってた人だけど、おまえらはアイヌ語を覚える必要ないって言って」(老年層・男性)、「叔母はいつもハンカチで入れ墨を隠していた。若い人に入れ墨をじろじろ見られとても傷ついていた」(老年層・男性)、「子ども心にそれ(アイヌ語)を聞くのがとても嫌だった。まわりはそれを聞いていていじめの種にする」(老年層・男性)、「子ども同士でアイヌ語を話すと生意気だと大人に怒られた。話したいとは思わなかった」(老年層・男性)というように、アイヌ語や入れ墨に対して否定的な意味づけがなされていた。

その他のアイヌ文化には、「生まれた家は茅葺の家だった」(老年層・男性)、「女の人が亡くなったら、チセ作って… (燃やした)」(老年層・女性)、「日常茶飯事カムイノミ」(壮年層・女性)、「母のお婆ちゃんが、祈祷師みたいな人だったんです」(壮年層・女性)、「風邪を引いたり何かしたら、神の力を借りて、ハレオガミってね、それはよくアイヌの人が風邪を引いたら子どもの調子が悪いときは、アペカムイってね」(老年層・男性)のようにさまざまなものがあり、アイヌ語や入れ墨に比べると否定的な捉え方はなされておらず、現在においても形を変えて、継承されているものがある。

「月1のカムイノミっていうのがあって、月1回それこそ必ず1番大きいチセに集まって、みんなでお祈りするっていうのがあって、それがもう習慣になってますけどね」(青年層・男性)、「自分で作ったんですよ。ちっちゃい囲炉裏。持ち運びできる、ポータブル囲炉裏を」(青年層・男性)などのように、青年層は、子どもの頃に日常生活の中でアイヌ文化を経験していないにもかかわらず、子ども期以降に学ぶ機会をえることにより現在の生活の中にアイヌ文化を取り入れている。その契機となっていたのが、アイヌ協会の行事や保存会への活動参加である。

(2) アイヌ協会の行事への参加や保存会での活動体験としての文化

現在、アイヌ文化を実践している人々の多くが関わっているのが、アイヌ協会の行事への参加や 保存会での活動である。

壮年層は、青年層や老年層に比べ、アイヌ文化を実践している者の割合は低くなっている (30.8%)。理由としては、仕事や子育てのために、継続的なアイヌ文化活動への参加が困難である ことが考えられるが、そのなかにおいて参加できるものが、アイヌ協会の行事である。「今は、ただアイヌ協会に入ってお手伝いしながら、ああ、そういえばこういう風にやった、いやぁ、昔こん なやり方でなかったよなとか、そのくらいはわかりますけど」(壮年層・男性)、「協会に入ってます から、いろんな今のシャクシャインの儀式にも出てますし、イチャルパやりますし。でも、個人ではイナウも何もありませんから」(壮年層・男性)というように、個人の日常生活ではアイヌ文化を 実践していないものの、アイヌ協会が実施する行事は、人々をアイヌ文化につなぎとめる役割を担っているとみられる。また、つなぎとめるだけでなく、「協会っていうの知って、年に1回のシャクシャイン祭りのお手伝いから参加させてもらってくうちに、そのアイヌとしての自覚、誇りまではまだ ないですけどね」(壮年層・女性)というように、アイヌとしての「自覚」や「誇り」を意識するような機会にもなっている。

青年層や老年層においても、「同年代が(アイヌの伝統的な踊りを)踊ってるのを見たらちょっとやってみようかなって。そこで初めて踊りを見せて貰った感じですかね」(青年層・男性)、「何か踊っているの見たら、やっぱり血が入っているせいか、自分もやってみたいっていう気持ちになった」(老年層・女性)というように、行事をきっかけに踊りの保存会に誘われ、全国各地での伝統文化普及啓発のためのイベントで踊りをはじめた者もいる。老年層の女性は、その活動が認められて、賞を受けることとなり、アイヌの踊りを披露することは「楽しいことばっかり」と語っている。

しかし、小学生のときに、踊りを同級生に見られ、「アイヌ、アイヌってばかにされた」(青年層・女性)というネガティブな経験をした者や、踊りに興味があるものの「息子とか弟とかに踊りのあれ (保存会)に入ると言ったら、やめてくれと言われたんで入れないんですけど」(青年層・女性)というように、文化活動へのコミットを希望しながらも、周囲の反対にあって実現できていない者もみられる。

このように、アイヌ協会の行事は、これまでアイヌ文化にかかわってこなかったアイヌの人々が、 主体的に文化活動を行うきっかけを提供しているといえるだろう。だが一方で、そのようなきっか けを活かして、継続的に活動をしたいという、積極的な意味でのエスニック・アイデンティティの 芽生えを阻害する要因が、アイヌ以外の人々やアイヌの人々自身、その家族にも残されている。

第2項 アイヌとしての今後の生活への意識

前項では、これまでのアイヌ文化の体験についてみてきたが、ここでは、アイヌとしての今後 の生活の意識を、今後実践したいアイヌ文化とのかかわりからみていく。

本調査では、アイヌとしての今後の生活の意識について、「アイヌとして積極的に生きていきたい」「極力アイヌであることを知られずに生活したい」「とくに民族は意識せず生活したい」の3つの選択肢からもっとも近いものについて回答を得たが、いずれにもあてはまらないという者もいたため、これに「その他」の意識も加えた。

その結果、全体としては、「とくに民族は意識せず生活したい」が50.9%でもっとも多く、次いで「アイヌとして積極的に生きていきたい」が36.8%、「極力アイヌであることを知られずに生活したい」が1.8%であった。いずれにもあてはまらない「その他」も10.5%あった。表4-6では、「アイヌとして積極的に生きていきたい」を「積極的」、極力アイヌであることを知られずに生活したい」を「消極的」、「とくに民族は意識せず生活したい」を「どちらでもない」として表記した。むかわ調査に比べ、「積極的」である者は少なく、「どちらでもない」者が多くなっている。この結果を、現在の意識との対比でまとめたものが表4-7である。

表4-6 アイヌであることに対する今後の意識

単位:人、%

| | 積極的 | | 消極的 | | どちらでもない | | その他 | | 合計 | |
|-------------|----------|----------------|--------|--------------|----------|----------------|-----|-------|-----------|------------------|
| | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 |
| 新ひだか むかわ | 21 67 | 36.8% 59.8% | 1 4 | 1.8% 3.6% | 29 41 | 50.9% 36.6% | 6 | 10.5% | 57 112 | 100.0% 100.0% |

注) むかわ調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記

表4-7 アイヌであることに対する今後の意識

単位:人

| | 瑪 | 在 | 今後 | | 現在 | | 今後 | | 現在 | | 今後 | |
|--------------|-----|----|---------|----|-------------|---|---------|---|------|----|---------|----|
| 青年層(9人) | | 3 | 積極的 | 2 | 2 0 0 | 0 | 積極的 | 0 | | 6 | 積極的 | 2 |
| | | | 消極的 | 0 | | | 消極的 | 0 | 1 | | 消極的 | 0 |
| | | | どちらでもない | 0 | | | どちらでもない | 0 | | | どちらでもない | 3 |
| | | | その他 | 1 | | | その他 | 0 | | | その他 | 1 |
| 壮年層 (26人) | 肯定的 | 11 | 積極的 | 6 | 否定的 | 1 | 積極的 | 0 | | 14 | 積極的 | 0 |
| | | | 消極的 | 0 | | | 消極的 | 0 | J.F | | 消極的 | 0 |
| | | | どちらでもない | 4 | | | どちらでもない | 1 | ち | | どちらでもない | 12 |
| | | | その他 | 1 | | | その他 | 0 | どちらで | | その他 | 2 |
| 老年層 (22人) | | | 積極的 | 11 | | 0 | 積極的 | 0 | 8 | | 積極的 | 0 |
| | | | 消極的 | 1 | | | 消極的 | 0 | ない | 8 | 消極的 | 0 |
| | | | どちらでもない | 1 | | | どちらでもない | 1 | | | どちらでもない | 8 |
| | | | その他 | 1 | | | その他 | 0 | | | その他 | 0 |
| 合計 (57人) | | 28 | 積極的 | 19 | | 1 | 積極的 | 0 | | 28 | 積極的 | 2 |
| | | | 消極的 | 1 | | | 消極的 | 0 | | | 消極的 | 0 |
| | | | どちらでもない | 5 | | | どちらでもない | 1 | | 28 | どちらでもない | 23 |
| | | | その他 | 3 | | | その他 | 0 | | | その他 | 3 |

現在、アイヌであることに肯定的な意識をもっている28人のうち、今後も積極的に生きていきたいという者は19人(67.8%)である。むかわでは、どの世代においても、「肯定的」である人々は、例外なく将来にわたって「肯定的」であり続けることが明らかになっているが、本調査では、現在、肯定的な意識をもっている者がすべて、今後、積極的に生きていきたいというわけではなかった。しかし、表4-5の今後実践したい文化をみてみると、66.7%が実践したい文化があるとしており、壮年層、老年層に比べ青年層ではその割合が高くなっている。また、現在、実践している文化がある壮年層は30.8%にとどまっているものの、今後実践したい文化があると答えた壮年層は65.4%に達している。これは、壮年層は仕事や子育てのために多忙な世代であることから、現在はアイヌ文化活動には携わることが困難であるものの、いずれは、自分たちが継承していかなければならないという意思のあらわれなのではないだろうか。

今後実践したい文化の具体的なものとしては、アイヌ語、踊り、刺繍、料理、カムイノミ、イナウ、着物作り、アイヌの伝統的な儀式 (婚礼、葬儀など)、ムックリなど多様であった。また、子ども世代に踊りや刺繍を習わせたいという希望も語られていた。この中には、「アイヌ語をきちんとしゃ

べってみたいね。勉強したいなって思ってる。アイヌだけどアイヌ語をろくにしゃべれないからね。それは、自分が情けないと思うよ」(壮年層・男性)というように自身がアイヌ文化としての言語を身につけたいというものや、「伝統的なことだからやっぱりカムイノミとかさ、そんなもの。そういうことをやっぱり僕もできれば覚えたいし。ということは、イナウを捧げるこういう行事も伴ってくるし」(老年層・男性)、「まだ若い子がいるんで、その若い子たちも何か一生懸命やってるっていうのがあるんで、できるだけ参加して、そういうのは役に立てるようにはしたいなとは思ってますね」(壮年層・女性)といった、次世代に継承するものとしてのアイヌ文化を盛り立てて行きたいという思いが読み取れる。

一方、「自分の見て来たアイヌ文化はあるが、それを今の人に伝えようと思ってもできない」(老年層・男性)、「今からこういうの(アイヌの伝統文化)やっても、まあ残すのはいいと思うけども、大変だと思うよ。ほとんどわからないんだから。今の若い人ね」(老年層・男性)という老年層の悲観的な見方があった。だが、青年層では「アイヌ同士が、アイヌ自身もやっぱり外に向けて発信するっていう意識をもっともっていかなきゃだめなのかなっていうのは思いますね」(青年層・男性)といった前向きな将来展望も語られていた。

しかしながら、今後実践したいアイヌ文化の多さに比べると、今後アイヌとして積極的に生きていきたいという者の割合は低くなっている。ここには、アイヌ文化を大切にしながらも、アイヌであることをことさら強調することなく、自然に生きていきたいという意識がかいまみられる。

- ・ 今までもとくに意識してこなかったので、積極的と言われるとあれなんですけど、そうだということは理解しながら、これからも通常のとおり。意識せずでもないし、積極的でもないし、中間ぐらいですね。(青年層・男性)
- ・ 別に「私アイヌですよ」と積極的に別に生きることもないと思うし。隠すこともしたくないし。 何なんだろうな。でも別にアイヌとしての活動はしていきたいなっていう。(青年層・女性)
- ・ アイヌであろうが、朝鮮人であろうが、黒人であろうが、ひとりの人間としてどこの社会に おいても認められる世界に共通する人間の生き方があると思う。アイヌ文化はちゃんとある けれど、アイヌ民族だからということではなく、そういう方向に憧れ希望を持っている。(老 年層・男性)
- ・ 恥じることでもないし、隠すことでもないので。アイヌとして生きていく。アイヌとしてっていうか、普通に。(青年層・男性)

このように、アイヌ文化を実践することと、アイヌとして積極的に生きていくことは関連しているものの、同じではない。それは、アイヌという意識を取り戻す実践がアイヌ文化の活動であるのかもしれず、アイヌ文化へコミットする機会を増加させることが、アイヌとして積極的に生きていきたいという人を増やすことにつながるのかもしれない。

また、とくに意識せずに生きていきたいというケースは、老年層であれば、アイヌであるからこ そ経験せざるをえなかった差別的な経験を背景にして、そういった差別が表面的には薄らいでいる 現在においてはアイヌであることを意識しなくても生きていくことが可能であるという側面と、ア イヌであることを、そもそも意識していない、あるいは、意識しなくてもアイヌであることを自然 と受け入れているという側面があるのかもしれない。

これまでの結果をふまえ、過去、現在、今後(将来)の時間軸に沿って分類したものが表4-8であるが、過去に比べ、現在はアイヌであることを肯定的/積極的に捉える人々の割合が増加している一方で、現在から今後の意識については、アイヌであることを「意識しない」という層が多くなっている。エスニック・アイデンティティの視点からは、アイヌであることに対して、「どちらでもない」あるいは「意識しない」という人々の、背景をより詳しく探ることが今後の課題となるだろう。

表4-8 アイヌであることに対する過去・現在・今後の意識

単位:人、%

| | 肯定的/積極的 | | 否定的/消極的 | | | っらでもない 意識しない | | その他 | 슴計 | |
|----------------|---------------|-------------------------|--------------|-----------------------|----------------|-------------------------|-------------|-----------------|----------------|----------------------------|
| | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 | 実数 | 構成比 |
| 過去 現在 今後 | 7 28 21 | 12.3% 49.1% 36.8% | 33 1 1 | 57.9% 1.8% 1.8% | 17 28 29 | 29.8% 49.1% 50.9% | - - 6 | - - 10.5% | 57 57 57 | 100.0% 100.0% 100.0% |
| 合計 | 56 | 32.7% | 35 | 20.5% | 74 | 43.3% | 6 | 3.5% | 171 | 100.0% |

第3節 運動への関わり方――アイヌ協会への加入と関わりの現状

これまでみてきたように、過去に比較して現在はアイヌであることに対するエスニック・アイデンティティは肯定的に捉える者が多くなっている。しかし、現在肯定的な意識を有していたとしても、それが今後、アイヌとして積極的に生きていきたいという意識と直接つながっているわけではないことも示唆された。こういった意識は、アイヌ民族としての社会運動への関わり方にどのような影響をおよぼしているのだろうか。

ここでは、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティと運動への関わり方をアイヌ協会への加入と関わりの現状からみていくこととする。アイヌ協会への加入はいわばアイヌの人々の組織化の形態であり、アイヌ政策への希望やコミットメントのための基盤であるとするならば、アイヌの人々がいかなるスタンスでアイヌ協会に関わっているのかは、運動への関わり方を推察するうえで重要であると考えられる。

アイヌ協会は「アイヌ民族の尊厳を確立するため、その社会的地位の向上と文化の保存・伝承及び発展を図ること」を目的とした社団法人であり、さまざまな事業を行っているが、上山(2012)はそれらの事業をおよそ次の3つに整理している。すなわち、①アイヌの人々の生活向上に関する事業、②アイヌの文化の保存・伝承・発展に関する事業、③アイヌの人々の社会的地位の向上に関する事業である。

本調査の対象者については、84.2%がアイヌ協会に加入している(表4-9)。アイヌ協会への加入の経緯については、「家族が加入していたので」、「親に勧められて」、「結婚を機に」という家族のつながりによる加入のほかに、「シャクシャイン祭りに参加して」加入したいという気持ちになったというものや、「仕事関係で勧められて」、「仕事関係でメリットがある」などの理由があげられていた。これらをふまえ、協会の加入の動機は、2つに大別することができる。

ひとつは、協会が主催するアイヌの伝統文化に関連する行事などに中心的あるいは裏方として 関わることで、アイヌ文化に親しみながらアイヌ文化の保存・伝承・発展に寄与する機会を得ると いう動機での加入であり、いまひとつは、教育費の給付貸付や住宅資金の貸付など、協会に加入することによって制度が利用しやすくなるというメリットを考慮しての加入である。ひとつめの理由については、前節のアイヌ文化の実践という観点から推し量ることができるが、ふたつめの理由については、とりわけ、こういった制度を利用する必要性が高いと考えられる壮年層において、アイヌ協会への加入率がもっとも多くなっていることからも(88.5%)、加入の動機が制度利用のメリットにあると窺うことができる。加入の時期についても、自らが世帯をもったことをあげる者も多く、子育てや住宅の必要性が生じた時期に合わせて加入しているとみられる。

表4-9 アイヌ協会への加入

単位:人、%

| 年齢層 | 加力 | 入している | 加入 | していない | 不明 | | |
|------------------------------------|---------------|-------------------------|-------------|-----------------------|-------------|----------------------|--|
| 青年層 (9人) 壮年層 (26人) 老年層 (22人) | 6 23 19 | 66.7% 88.5% 86.4% | 3 2 2 | 33.3% 7.7% 9.1% | 0 1 1 | 0.0% 3.8% 4.5% | |
| 合計 (57人) | 48 | 84.2% | 7 | 12.3% | 2 | 3.5% | |

- ・ そのアイヌに生まれたがゆえに、アイヌで生まれたおかげで、息子もその協会の学費援助してもらってっていう、これは素晴らしい制度だと思うし、感謝して高校卒業させたっていうこと、それはもう子どももわかっている。(壮年層・女性)
- ・ やっぱり、こうやって色々援助して頂いたり何なりという部分、反面自分らも何かしら出来 る範囲でやらなきゃいけないのかなっていうふうに思います。ただ、もらって、はい終わりっ ていう訳にもいかないと思うんで。(壮年層・男性)
- ・ もちろん僕も奨学金制度だったり受けてたんですけど、結局は自分の息子にもそういう協力 してもらえるんで、親から協力してもらえるんだったら入ったほうがいいんじゃないかいと いうことで。(青年層・男性)
- ・ ゆくゆくはお世話になるだろうという頭もあるんで、うん、今のうちからでもね、ちゃんと入って貢献、その時ばっかりお世話になるんじゃなくって、今からちゃんと、うん、やってこうと思って。(青年層・女性)

現在、協会の活動にあまり参加できていない壮年層においては、教育費の給付貸付や住宅資金の貸付制度を利用することを想定して、「のちのち世話になる」、「世話になったあとは奉公しなければ」といった語りもみられる。アイヌ協会が主催するシャクシャイン祭りなどの行事に裏方として関わることは、アイヌの伝統文化を普及・啓発、継承の役割を担うという一方で、こういった制度を利用するにあたっては、日頃からアイヌ協会との関わりをもち続けながら、何らかの寄与をしておかなければならないという心構えがあるようである。だが、老年層からは、制度を利用し終えると、すぐにアイヌ協会を辞める者もいるという批判や、給付貸付の制度自体が不十分であるとの声も上がっている。

・ 奨学金があるから、そしたら大学にやるかっていう話じゃないわけよ。(中略) 奨学金はもう ほんとにある程度、学費でもさ、アパート代でもただぐれえにする。そうしないとね、アイ

ヌの子弟にね、高等教育なんか受けさせられねえ。スタートラインが違ったんだもの、基本的に。(壮年層・男性)

こうしたアイヌ協会を通してなされるアイヌの人々への支援策が不十分であるという声を、アイヌ協会が国や北海道に申し立て、あるいは問題提起するという役割を担うことについては、「(政策提言の面で)協会に頼れない」(青年層・女性)という見方がある。他方、アイヌ協会に加入してから運動に熱心な人々に出会い、「アイヌの人ってなんかほんと(中略)恐いっていうかなんていうんですか。熱いんですよね」(青年層・男性)という一歩引いた印象をもつ者もいる。ここからは、自らが運動の主体となり、アイヌ協会という組織を通じてアイヌ政策を前進させようとする意識が希薄であることがみてとれる。しかし、とりわけ若い世代が何らかのかたちでアイヌ協会にコミットすることは、エスニック・アイデンティティが個々人のみのものではなく、アイヌ民族が集団としてそのアイデンティティを次世代につないでいく可能性を探ることにつながるだろう。

以上のことから、アイヌの人々によるアイヌ協会への関わりには、アイヌ文化継承の主体としての関わりと、制度の利用者としての客体としての関わりの両面がある。とりわけ後者については、個人あるいは世帯がそのメリットを直接的に受けられることが、青年層や壮年層のアイヌの人々が協会に加入する際の動機になっており、まずは自分の生活を守るということが主眼におかれているといえる。全体としては、アイヌ協会が提供するアイヌ文化の体験が、民族の誇りを取り戻すあるいはアイヌ民族である自分を肯定的に捉える機会になっていると同時に、経済的なメリットが一般の人々をアイヌ協会につなぎとめているという側面を無視することはできない。したがって、アイヌ協会への加入と関わりは、アイヌ文化の保存・伝承・発展に携わるという動機と、教育費や住宅資金の制度利用にメリットを感じての動機が絡まり合いながら、人々のエスニック・アイデンティティに影響をおよぼしているといえるだろう。

おわりに

本章では、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティについて、その形成と変容を、過去・現在・未来の軸に沿って検討してきた。ほぼすべての人が、アイヌであることについて、過去は「否定的」であった者であっても現在は「肯定的」あるいは「どちらでもない」という意識を有するようになっており、現在において「否定的」である者は1人のみであった。したがってアイヌの人々のエスニック・アイデンティティは概して肯定的になってきているといえる。また現在、アイヌであることについて「肯定的」である者は老年層に多く青年層で少なかった。一方で「どちらでもない」という意識を有する者は青年層が多く老年層で少なかった。このことは、老年層や壮年層が過去、アイヌであることについて否定的な意識をもたざるをえなかった経験から、現在、さまざまなアイヌ文化にふれ、民族としての誇りを取り戻すプロセスを経てきたことがあげられる。これに対し、青年層は否定的な意識をもつという経験をしていないと同時に、肯定的なエスニック・アイデンティティをもつにいたるアイヌ文化の経験も多くないという背景がある。したがって、現在の青年層が、今後さまざまなアイヌ文化等の経験を経ることで、アイデンティティが変化していく可能性もありうる。

家族のなかでは途絶えているアイヌの伝統文化を経験する機会を提供できるのは、アイヌ協会や

保存会であり、エスニック・アイデンティティの醸成という意味で、アイヌ協会が果たす役割は大きいといえる。しかしながら、人々のアイヌ協会への加入の動機は必ずしもアイヌ文化の保存や継承というわけではない。とりわけ青年層や壮年層にとっては、現在と将来を見据え、実際の生活に役立つ教育費の給付貸付や住宅資金の貸付といった制度の利用に備えて協会に加入するという意味合いも大きい。これらのことから、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティの形成には、アイヌ文化の経験のみならず、現代を生きるアイヌの人々の生活にとって直接的に有益である給付貸付事業等の制度の存在が、今後も影響を与え続けるであろう。

参考文献

- Giddens, A., 2001, *Sociology*(4th ed.) (Cambridge: Polity Press).松尾精文ほか訳, 2004,『社会学』 而立書屋
- 小内透・長田直美, 2012,「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 169-81.
- Phinney, J. S., 1990, "Ethnic Identity in Adolescents and Adult: Review of Research", Psychological Bulletin, 108(3), 499-514.
- 上山浩次郎,2012,「エスニックな社会運動への参加と意義-アイヌ協会がもつ生活上の意味」小内 透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 ——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究セン ター,183-93.

インターネット資料

社団法人北海道アイヌ協会のホームページ

http://www.ainu-assn.or.jp/about01.html

(新藤こずえ)

第5章 アイヌの先住民族メディアの現段階

小内 純子 | 札幌学院大学社会情報学部教授

はじめに

本研究チームは2012年度から4か年の計画で、北欧のサーミと日本のアイヌ民族のおかれている状況に関する比較研究に着手している。研究チームにおいて筆者が担当するのは両地域における先住民族メディアに関する比較研究である。したがって、本章の目的は、アイヌ民族が利用しているメディアの展開と現状について把握し、最終的に北欧(今年度はスウェーデン)との比較を試みることである。先住民族メディアの定義とそれを所有することの意義、および問題意識について、詳しくは『調査と社会理論』研究報告書29の第8章第1節を参照してほしい。

フィンランドセンター北海道事務所が主催する「サステナビリティ・ウィーク2011 北海道ーフィンランドデイズ」(2011年10月28日~11月2日)の一環として、11月1日、2日に開催された国際シンポジウムの「先住民族と教育」セッション6.2は、「先住民族の言語:言語の継承と保護におけるメディアの役割と重要性」というテーマで行われている。報告者は、日本側が萱野志朗、フィンランド側はイナリYLEサーミラジオのディレクター、ユハニ・ノウスニエミである¹⁾。エフエム二風谷放送(通称FMピパウシ)ディレクターおよび萱野茂二風谷アイヌ資料館館長という肩書きで登壇した萱野志朗は、報告において、現在、アイヌ民族自身がもつメディアとして、「アイヌタイムズ」と「FMピパウシ」の2つをあげている。そこで、本章ではこの2つのメディアをとりあげ、アイヌ民族のなかでどのような位置をしめているのかを検討することから始める²⁾。

第1節 アイヌタイムズの誕生と現段階

アイヌタイムズは、歴史上唯一のアイヌ語の新聞である。萱野志朗自身が中心になり1996年秋に結成されたアイヌ語ペンクラブを発行元に、1997年3月20日に創刊されている。初代会長の萱野は、当時、新聞の取材に答えて、「言葉は民族のアイデンティティーを確立するための中心となる『道具』である」 $^{3)}$ 、「アイヌ語はまだ生きているということを知ってもらい、アイヌ語を学ぶ人たちのすそ野を広げたい」 $^{4)}$ と創刊の目的を語っている。ペンクラブの会員は、当初アイヌ語を学ぶ20~40歳代13人からなり、うち6人がアイヌであったという $^{5)}$ 。アイヌの人たちと和人の人たちの協力のもとにスタートしている。1998年以降、会長は二代目野本久栄が担っている。

新聞は、A 4 判12ページで年 4 回発行の季刊紙で、発行部数は当初1,000部であった。発行直後は反響も大きく全国から500部の購入希望があり、ポーランドやロシアの研究者からの引き合いもあったが、その一方で道内の読者は初めから少なかったという 6)。その後、発行部数は500部となり、現在に至っている。この15年間途切れることはなく、2012年 7 月17日現在、第55号が発行されている。

この新聞の最大の特徴は、文字をもたないアイヌ語を文字で表記しようとした点にある。これまでにも「アイヌ新聞」が刊行されたことはあるが、いずれも日本語が用いられていた⁷⁾。そのため、アイヌタイムズでは、話し言葉をカナとローマ字の併用によって表記し、ローマ字は必要に応じて例外アクセント表記も用い、アイヌ語にない新しい言葉には漢字をそのまま充てるなどの工夫がされている。母語話者でない会員たちが多いこともあり、編集作業には多くの困難がともない、表記方法に関しては試行錯誤が続いているようである⁸⁾。和訳をつけることに関しては読者からの要望もあり、ペンクラブ内でも当初から議論があったというが、「アイヌ語自体が埋没しかねない」という理由からアイヌ語のみの発行となった。しかし、第4号からは日本語訳を収めた「アイヌタイムズ日本語版」を3ヵ月遅れで、次号発行時に出すようになっている。

札幌市内の書店(サッポロ書店)で購入できるほか、定期購読の場合は、Aコース:アイヌタイムズ本紙のみ、購読料1,500円(1年、4号分)、Bコース:アイヌタイムズ本紙+日本語版付き、購読料2,300円(1年、4号分)となっている。ただし日本語版のみの購読はできない。一貫してアイヌ語の普及にこだわった対応がとられている。

内容は、時事問題から四季折々の話題、アイヌ民族に関わる出来事や人物に関するものまで幅広く、とくに枠は決められていない。ちなみに、第53号の見出しと内容は、「とても大きな地震がありました」(東日本大震災について)、「千葉大学にて」(千葉大学でアイヌ語研究をする大学院生の投稿)、「娘が生まれて」(アイヌ語の子守歌の話)、「福島第一原発」(放射能の影響について)というものである。

第2節 エフエムニ風谷放送(FMピパウシ)の開局と現段階

エフエム二風谷放送、通称FMピパウシが開局したのは2001年4月8日のことである。開設者は萱野茂(2006年5月6日没)、萱野志朗の父である。設立の経緯については、萱野(2008)に詳しい。萱野茂は、1970年頃から国際会議でカナダやノルウェーなどを訪れた際、現地で先住民族が運営するラジオ局などを訪問し、「アイヌ民族も自前のラジオ局を持ちたい」と考えるようになっていたという。それが実現する直接のきっかけは、札幌市東区でコミュニティFM放送局の立ち上げを目指していた松崎霜樹と加藤知美と知り合ったことであった。「FMラジオをアイヌ語の普及に役立てたい」という萱野の希望にこたえ、松崎と加藤はミニFMの放送というかたちでこの実現をサポートする。この事業も、アイヌの人たちと和人の人たちの協力のもとにスタートしている。

放送免許が必要で初期投資額も大きいコミュニティFM放送局に対して⁹⁾、ミニFM放送局は免許を必要とせず、機材一式も20万円程度で購入できるため、簡単に開局することができるというメリットがある。ただし、微弱電波を用いるため可聴範囲はきわめて狭く、数十メートル四方に限定されてしまうという限界もある。ただ、萱野茂が私財を投じて行う事業である以上、ミニFMを選択したことは現実的であった。こうして、2001年5月6日、私立・二風谷子ども図書館の一室をスタジオとして、萱野茂のほか、2人のボランティアによるラジオ放送がスタートした。2006年5月に萱野茂が亡くなって以降は、萱野志朗が編集局長として引き継いでいる。

放送は月1回、第2日曜日11時から12時までの1時間である。当初、もう少し放送回数を多

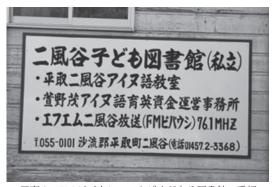


写真1 FM ピパウシのスタジオがある図書館の看板



写真2 スタジオの準備風景

くしたいという希望もあったが、無理のない範囲でスタートするということで月1回に決まった。放送がスタートしてすでに11年を経過し、2012年12月9日(日)の放送で140回を数えている。アイヌ語を交えた放送で、1時間の放送内容は、①地域のニュース、②季節のお話、③インタビューコーナー、④アイヌ語ーロ会話(後にアイヌ語ワンポイントレッスンに改称)、⑤朗読のコーナー(アイヌ語による英雄叙事詩や神謡など)が基本型である。必要に応じて録音音源も用いている。ちなみに、140回目の放送内容は、以下のとおりである。

- ■オープニング「ヤイト レンペコイキ」(担当:萱野志朗)
- ■地域のニュース(仙石裕子)
- (1) 12月8日、第32回目のクリスマスコンサート 札幌こどもミュージカル (独自取材ニュース)
- (2)日高の剣士、ダブルV 義経剣心会2連覇小学生団体(2012年11月15日 北海道新聞より)
- (3)ほっかいどう100の道 42 イザベラ・バードの道 (11月18日 北海道新聞より)
- (4)アイヌ工芸品にお墨付きを(11月20日 北海道新聞「ひだか」版より)
- (5)北海道@トロムソ 北欧に住むアイヌ女性(11月29日 北海道新聞より)
- (6)ウエピリカ 関根真紀さん (11月30日 北海道新聞より)
- ■わいわいがやがや テーマ:雪 司会進行=萱野志朗
- ■「萱野茂二風谷アイヌ資料館」からのお知らせ(仙石裕子)
- ■アイヌ語ワンポイントレッスン(95) (萱野志朗、荒 宏樹) 内容:出身地の尋ね方と答え方 「あなたの村は何と言いますか?」
- ■「kamuyyukar (神謡)」の紹介と解説 「イワンレクト°シペ」(六つ首の化け物) 語り:阿部春江さん、解説:萱野志朗
- ■「ピリカ カンピソシ」(良い本)の紹介NO.16 (大野徹人) レラの会編『レラ・チセへの道 一こうしてアイヌ料理店ができた— 』現代企画、1997年
- ■エンディング(萱野志朗、仙石裕子、荒 宏樹) 10)

先に指摘したように、ミニFM放送の可聴範囲は数十メートル四方に限られ、直接このFMピパウシの発する電波を受信してラジオ放送を聴くことができるのは、二風谷子ども図書館の周辺

にいる人たちだけである。この直接電波を受ける方法以外に、放送を聴くために次の3つの方法 がある。

1つは、神戸市長田区にあるコミュニティFM放送局「FMわいわい」が、2006年3月から電話回線を使い同時放送を行っており¹¹⁾、インターネット放送も行っているので、「FMわいわい」を経由すれば、どこにいてもリアルタイムで放送を聴くことができる。2つ目は、「FMウィング」(帯広市)と「FMいーにわ」(恵庭市)という道内の2つのコミュニティFM放送局で録音放送を行っている。前者は、第3日曜日朝8時から9時、後者では毎週土曜日8時から9時(第3土曜日以外は再放送)に放送がある。「FMいーにわ」はインターネット放送を行っておらず、「FMウィング」はインターネット放送には取り組んでいるが放送時間外のため、この2つの局の録音放送を聴くことができるのはこれらの放送局の可聴範囲に住む地域の人たちに限られる。3つ目は、HP「国際先住民族ネットワーク」の「FMピパウシ」のコーナーにオンデマンド形式で保存されており、1回目からすべての放送を聴くことができる。このサイトは、室蘭工業大学の教員の協力で維持されており、更新が行われるのも速い。ちなみにこのサイトへのアクセス数は、2012年12月12日で41,160を数える。以上の3つの方法のうち一番アクセスしやすいのは3番目の方法である。

第3節 アイヌタイムズとFMピパウシの認知度

それでは、以上2つのアイヌ民族のもつメディアはアイヌ民族のなかでどのように利用されて いるのであろうか。われわれが2012年9月に新ひだか町で実施したアイヌの方々57人に対する インタビュー調査結果からみていく。表5-1は、アイヌタイムズの購読状況を示したものであ る。読んだことがあるという人は「購読して読んでいる」(1人)、「購読していないが読んだこ とがある」(2人)を合わせて3人のみで、そもそもアイヌタイムズの存在を知らないという人が 約9割を占めている。このようにアイヌタイムズのアイヌ民族内における認知度はきわめて低い。 一方、FMピパウシに関しては42.1%の人が知っていると答えている(表5-2)。これまでに 何度か北海道新聞の日高版にFMピパウシ関連の記事が掲載されたことがあるということで、そ れがこの認知度につながっているようである。年齢別には50代、60代で高く、30代の認知度は 16.7% にとどまっている (表 5-3)。しかし、実際に聴いたことがある人は、FMピパウシの スタッフに知り合いがいて録音したものを送ってもらい聴いたことがあるという人1人にすぎな い12)。新ひだか町の住民がFMピパウシの放送を聴くためには、インターネットを用いる必要が ある。先の3つの方法のうち、1番目か3番目の方法が可能で、特に3番目は比較的簡単にアク セス可能な方法である。しかし、実際に聴いたことがある人は皆無で、インターネットラジオで 聴くことができることを知っている人も3人(5.5%)にとどまった。約9割は、「知らない」と答 えている (表5-4)。アイヌ民族がもつメディアは、その影響力という点ではかなり心許ない 結果となった。

表5-1 アイヌタイムズの購読状況

| 表5-1 アイヌタイムズの購読状況 | | 人、% |
|---|------------------------|----------------------------------|
| 購読して、読んでいる 購読しているが、読んでいない 購読していないが、読んだことはある アイヌタイムズは知っているが、読んだことはない アイヌタイムズがあることを知らない | 1 0 2 2 52 | 1.8 0.0 3.5 3.5 91.2 |
| 計 | 57 | 100.0 |

資料:インタビュー調査より作成

表 5-2 FMピパウシの認知度

| | | 人、 70 |
|---------------|----------|--------------|
| 知っている 知らない | 24 33 | 42.1 57.9 |
| 計 | 57 | 100.0 |

資料:表5-1に同じ

表5-3 年齢別FMピパウシの認知度

| I. | 0/ |
|-------------------------|----|
| \mathcal{N}_{λ} | 70 |

| | 知ってる | 知らない | 計 | 認知度 |
|-----|------|------|----|------|
| 20代 | 1 | 2 | 3 | 33.3 |
| 30代 | 1 | 5 | 6 | 16.7 |
| 40代 | 7 | 9 | 16 | 43.8 |
| 50代 | 7 | 4 | 11 | 63.6 |
| 60代 | 7 | 6 | 13 | 53.8 |
| 70代 | 1 | 7 | 8 | 12.5 |
| 計 | 24 | 33 | 57 | 42.1 |

資料:表5-1に同じ

表5-4 インターネットラジオでの聴取について (無回答を除く)

| 表5-4 インターネットラジオでの聴取について (無回答を除く) | | 人、% |
|--|--------------|--------------------|
| インターネットラジオでFMピパウシの放送を聞いたことがある インターネットラジオで聞けることは知っているが、聞いたことはない インターネットラジオで聞けることを知らない | 0 3 52 | 0.0 5.5 94.5 |
| 위· | 55 | 100.0 |

資料:表5-1に同じ

また最近では、YouTubeでもアイヌ関連の番組をみることができるが、その点についても尋ね てみた。だが、実際に見たことがあると答えた人は2名にすぎなかった。ネット社会とはいえ、 調査対象者にはインターネットを利用するという人は少なく、まだまだ一般的なメディアには なっていないことがわかる。

以上のように、アイヌタイムズの発行やFMピパウシの放送は、萱野親子が中心になり、細々 ではあるが息長く続いてきている試みではある。しかし、先住民族メディアの成熟度という点で はまだまだ不十分であり、アイヌ民族の生活の中に位置づいているとはいえない状況にあること がわかる。

第4節 メディア環境に対する評価

以上のように、アイヌ民族がもつとされるメディアは、必ずしもアイヌ民族内において、十分 な読者やリスナーを獲得できているわけではない。インタビューを通して、多くのアイヌの人々 は、テレビや新聞といった主流メディアからアイヌ関連の情報を得ていることがわかった。それ では、そうした主流メディアが流す情報に関して、どのように評価をしているのであろうか。「常 日頃のアイヌに対する報道について感じていることはあるか」と尋ねてみた。

その結果、3分の1の人は「特にない」と答えている。「感じていることがある」という人の 意見としては、次のようなものがあげられる。

まず、報道されることに対する否定的な意見がある。長い差別の経験を通じ、今でも「アイヌのことは聞きたくない」という人が存在する。「何か話したら、アイヌ民族とかって言うでしょう。見たくない。そういう言い方もね。ウタリの方がいい」(60代、女性)、「アイヌはアイヌなんだけど、私たちにしたらそのアイヌって言葉がもうグッとくるのさ。だから、テレビでもアイヌとかウタリとかっていう言葉を聞くとガーンときちゃうから、なんか聞きやすい表現に変えてほしい。その言葉自体がすっごい嫌なの。なんなんだろう」(50代、女性)といった意見である。

その一方で、そうした考えを改めた人、また時代の変化を歓迎する声もある。「子どもの頃は、 ほんとにそういうニュース報道が嫌いでしたね。放送でアイヌって言葉を流してほしくない。存 在を隠してほしかった。子どもの頃はいじめられているっていうことで、関わり合いたくなかっ たですね。でも結婚して、子育てして、アイヌ協会にも加入して、こう自分の見方、その世間を 見る見方を変えたら、やっぱもっともっと出ていくべきなんだなって思うようになった。ほんと ここ数年ですね。拒否してた自分と受け入れる自分とが、こう入れ替わった感じですね」(40代、 男性)、「メディアに出るようになり、こうしてつきあってもらえる、そういう時代になったんだ なと思う。アイヌのことが報道されるようになっていい時代になったと思う」(70代、男性)、「い いんじゃないかなと思うけどね。今いい時代になったから、文句言うのもバチ当たるんじゃない かな。いやほんと。昔からみたらね。大きな顔してアイヌなんて、話できなかったからね。いい 時代になったと思うよ」(70代、男性)、「ずいぶんと時代も進歩したもんでね。いま普通に小学校 とかでも、二風谷の小学校じゃなくて、どっか別の地域でも、アイヌ語とか踊りとか交えて教え たりするんでしょ。授業に取り入れるっていうのか、学校が取り入れるっていう。すごい時代に なったなあって、思うね。でもそうやって普通に文化として入っていけたらいいんじゃないかい」 (50代、女性)、「昔より多いですよね。北海道新聞なんか見ていると多いですよね。記事だけじゃ なくて、いろんなことを書いてありますよね、文化についてみたいなことも。ああいうのは良い のかなと思っては見ていますけど」(40代、男性)。

さらに、取り上げ方に対する注文の声も聞かれる。「ニュースで入ってたんですけど、途中で切らないで最後まで見せてほしいなあと思うね。テレビ局の人間も、そんなもん適当で映せばいいっていう考えあるんじゃないの、わかんないけど。映さなくてもいいものを映してみたりしてるからね」(60代、女性)という意見のほか、地域的な取り上げられ方の違いを指摘する意見も複数存在した。「もうちょっと静内がね、盛んになってくれればねと思って。白老とか、登別とか、阿寒とかのほうが力入れてますよね。ここはシャクシャイン祭りがあって、その時ちらっとしか、テレビのニュースに出ない。何かあるっていったら白老とか、向こうばっかり取り上げられて、静内が何もしてないみたいにみえる」(40代、女性)、「場所によって、儀式とかやり方が違うんで。静内はけっこう偏っていて、長細いんで、浜の人の言葉と山の人の言葉が違ったりするんですよ。言葉が違ったりとか、イントネーションがちょっと違ったりとかってあるんですよね。そうすると、そんな言葉は静内では使ってないということで、毎度ゴタゴタする」(40代、女性)。前者は静内(新ひだか町)が白老、登別、阿寒などに比べて取り上げられることが少ないことを、後者は静内にあっても地区によって言葉やしきたりが違ったりすることに配慮することなく報道されることに対する批判である。

また、ステレオタイプの報道に対する批判の声もある。「何というかな、アイヌは自然と共生

とか、一応そういうふうになってるけど、歴史とかをみれば、そうでもないんだよね。そういう 美化されてる、それで持ち上げてる人らがいるから、それに乗っけられちゃうと、間違ったアイ デンティティを持つというのかな。考古学の人の話を聞いて、その後、いろんな本とかを見たら、 たとえば交易民族だったとか、戦闘力も高かったとかね、そういう歴史をアイヌ民族自体でも知 らない人が多いから、だからそういう言葉と歴史が大事だなと思ってる」(60代、男性)、「メディ アでの取り上げられ方ですけど、やっぱりどうしてもアイヌに対してのまだ一般のイメージって いうのが、鹿狩りですとかアイヌ舞踊、アイヌ語、着物とか、自然と生きていたとか、けっこう ナチュラルな部分の方が語られるじゃないですか。自然と共に生きてるっていう本当に心優しい 民族みたいな。そういう部分ばっかりくみとられちゃうんで、その上澄みだけじゃなくて、その 底にあるドロドロした部分なんかも少しは発信した方がいいのではないか。でも難しいんですよ ね。それを発信しちゃうと反発を買っちゃうっていうのもあったりとか。アイヌ文化って絶対き れいごとじゃないですよ。やっぱり人が築いてきたものだから。きれいごとだけじゃ終わらない と思うんで」(20代、男性)。ここには主流メディアが語るアイヌ民族のイメージに対する違和感 が語られている。

以上のように、以前にくらべ主流メディアに頻繁に取り上げられることによってアイヌ民族は「見える存在」になってきている。と同時に、少なくない人たちが、主流メディアの取り上げ方に対して批判的な意見をもっていることがわかる。主流メディアによって先住民族が語られる時、主流社会側の解釈によってステレオタイプ的な報道が繰り返され、誤ったイメージが作られていく傾向にある¹³⁾。こうした点を是正するためにも、先住民族自身がオルタナティブ・メディアを所有する意味は大きい。

しかし、続いて「アイヌ民族自身が情報を発信すること」に関する質問をしたところ、積極的な意見を述べる者は皆無であった。むしろ、「とくに考えたことがない」という回答が多数を占めるなかで、次のような否定的な意見が散見された。「いや、今の人たちは隠そうとしてる。だんだん変わってきてるとは思うんですけど、やっぱりまだまだ隠す」(40代、女性)、「やっぱり今、若い人でもそうですけど、みんな恥ずかしがってアイヌっていうのを隠す人が多いじゃないですか」(50代、女性)、「もっとはやらなくてもいいと思う。そういうふうにアイヌというのが前面に出すぎると、風当たりも強くなるかなという印象があります。自分だけじゃなくて、自分の身内とかにも迷惑というか。私の家系がそうだったんだなと、私が出ることによって世間にわかったりして」(30代、女性)。

長い差別の歴史のなかで生み出されてきた意識は容易には払拭されず、現状ではこうした考え 方が一般的である。わが国の場合、先住民族の人たちが、自ら積極的に情報を発信するというこ とに対するバリアはまだまだ高いことがうかがわれる。

おわりに

以上、アイヌの先住民族メディアとして「アイヌタイムズ」と「FMピパウシ」を取り上げ、 その実態と認知度を考察し、アイヌの人々のメディアに対する評価についてみてきた。

アイヌタイムズは約16年間年4回の発行、FMピパウシは約12年間月1回の放送を、一度も欠くことなく、萱野父子を中心に、堅実に続けてきている。十分な財源が確保できない中で、その

こと自体は非常に意義があることはいうまでもない。しかし、その情報発信が、アイヌの人々に届いているのかというとその点はやや心許ない。アイヌタイムズの認知度はきわめて低く、FMピパウシはある程度認知はされているが聴かれてはいない。何人かの対象者が、「ここでは放送を聴くことができない」と語っており、インターネットで聴取可能であることも知られていない。これらの先住民族メディアが、十分な視聴者を確保できていないことは、率直に認めざるをえないであろう。

その結果として、新ひだか町のアイヌの人びとは、北海道新聞日高版やテレビのローカルニュースなどの主流メディアからおもにアイヌ関連の情報をえている。そうした主流メディアに対しては、少なからぬ人々が、取り上げ方に対する問題点を指摘している。そのなかには、発信される情報量の地域的格差の問題、ステレオタイプ的な報道に対する違和感など、鋭い問題提起が含まれている。それはオルタナティブ・メディアの必要性を示している。だがその一方で、オルタナティブ・メディアの必要性を積極的に主張する人はほぼ皆無であった。これはこれまでのアイヌ民族を取り巻く厳しい環境によってもたらされた意識であり、現段階の日本の先住民族が置かれている状況を示しているものといえよう。

ところで、本研究のテーマである北欧と比較した場合、この歴然とした違いはなぜ生じているのであろうか。人口比率はともかく、実際の先住民族の人口(いずれも推測値)は、スウェーデンのサーミが約2万人、日本のアイヌは約2万3千人と、それほど大きな違いがあるわけではない。またスウェーデンでも、サーミのための学校「ノマド・スクール」においてスウェーデン語の教育が徹底されたため、サーミ語の使用は家庭内に限定されるようになり、サーミ語が使える人が極端に減少したという歴史をもっている¹⁴⁾。しかし、現状では、ラジオもテレビも公共放送のなかにサーミ語番組の放送枠をもち、全国民に向けて発信できる仕組みをもっている。雑誌も国やサーミ関連の諸団体からの補助金を得て、40頁程度のものが月刊や季刊で発行されている。

ちなみに日本の公共放送NHKは、これまで先住民族に対してどれだけの配慮をしてきたのであろうか。むしろ北海道では、アイヌ問題に積極的に関わってきたのはSTVラジオとSTVテレビであることが知られている。1970年代にはアイヌ問題をテーマにラジオやテレビでドキュメンタリーを作成し、1974年には言語学者・知里真志保の生涯を描いたドキュメンタリー「海が見えない」などが評価されギャラクシー賞を受賞している(札幌テレビ放送創立50周年記念事業推進室 2008)。また、1998年4月から日曜日の朝に15分間(土曜の夜に再放送あり)の「アイヌ語ラジオ講座」をスタートさせ、現在も続いている。ただし、これらはあくまでも主流メディアのイニシアティブで行われているものであり、「広義の先住民族メディア」(伊藤・八幡 2004: 3)には含めることはできない。

スウェーデンと日本の先住民族メディアの現状がなぜこれほどまでに異なるのかといった点に関しては、まだ明確に回答することはできない。アイヌ民族のメディア史をもっと丹念に検討する必要があろう¹⁵⁾。また、スウェーデンの事例からは、国家による補助・制度・立法政策などが重要であると同時に、先住民族側の粘り強い要求運動も欠かせないということがわかる。なかでも財源をどのように確保してきたのかは重要である。この点に関しては、「とりわけ財政的健全性(いかに財政的に自立性が確保されているか)は、先住民族メディアの発展度を評価する上でひとつの大きなメルクマールになると考えられる」(伊藤・八幡 2004: 14)といった意見もある。

この問題に関しては、こうした見解を参考にしつつ、次年度以降の調査研究で明らかにしていきたいと考える。

注

- 1)「サステナビリティ・ウィーク2011 北海道-フィンランドデイズ」国際シンポジウム要旨集を参照のこと。
- 2)小玉(1993)では、北海道ウタリ協会(現北海道アイヌ協会)が発行する機関紙「先駆者の集い」をアイヌ民族のメディアと指摘しているが、われわれの今年度の調査では取り上げなかった。次年度以降の課題としたい。ただし、アイヌ協会のアイヌ組織率は10~20%程度と推測されており(小内編 2010)、協会の機関紙の影響力は限定的であると推測される。
- 3)北海道新聞1997年5月10日(夕刊)。なお、萱野は、1993年に映画「ことばは民族の証-舟つくり編」を自主制作し、山形県国際ドキュメンタリー映画祭93に出品している。
- 4)毎日新聞 1997年3月21日 (朝刊)
- 5)同上。
- 6)注3)と同じ。
- 7) 小川・山田(1998)の第2部に、アイヌが関わった雑誌・新聞などが納められている。
- 8) アイヌタイムズのHP (http://www.geocities.jp/otarunay/taimuzu.html) の「アイヌタイムズ制作 の状況と問題点」の項目参照。また、上野(2004) にも詳しい。
- 9)コミュニティFMに関しては、小内(2003)を参照。
- 10)HP「国際先住民族ネットワーク」(www.aa.alpha-net.ne.jp/skayano/menu.html)参照。2012年12月 25日最終閲覧。
- 11) 2003年4月から2006年3月までは札幌市東区の「さっぽろ村ラジオ」で同時放送が行われていたが、経営者が変わった際に、放送終了となっている。なお、「FMわいわい」は阪神淡路大震災に際して、長田区に住む様々な国籍をもつ人々に向けてミニFM放送を行った2つの放送局が一緒になって開局したコミュニティFM放送局で、現在も多言語放送に取り組むラジオ局として知られる。現在は、韓国・朝鮮語、ベトナム語、タガログ語など10の言語で放送を行っており、その1つにアイヌ語も含まれている。詳しくは、日比野(2006, 2010)を参照のこと。
- 12)八幡が北海道ウタリ協会(当時) 札幌支部会員を対象に行った調査では、FMピパウシの認知度は19人(32%)、聴いたことがある人は1人(2%)という結果になっている(八幡 2005)。
- 13)八幡 (2009) では、カナダの先住民族テレビ局APTNと商業放送局CTVが同じニュースを どのように編集して報道したかを実証的に分析しており興味深い。
- 14)ノマド・スクールは1913年からスタートしている。詳しくは野崎(2012) を参照のこと。また、アイヌ語の衰退過程については上野(2011) に詳しい。
- 15)アイヌ民族に関する指導資料編集委員会編(2006: 66)によれば、1910年代から1930年代にかけて、アイヌ民族の間で日本語による言論活動が活発にみられたという。

参考文献

アイヌ民族に関する指導資料編集委員会編,2006,『アイヌ民族に関する指導資料(改訂3版)』財

団法人アイヌ文化振興・研究推進機構.

- 伊藤直哉・八幡耕一,2004,「先住民族メディアの理論に向けた社会的機能についての考察——関連する国際機関の概観とともに——」『北海道大学大学院国際広報メディア研究科・言語文化 紀要』第47号,1-26.
- 日比野純一,2006,「多文化・多民族社会を拓くコミュニティ放送局」津田正夫・平塚千尋編『新版パブリックアクセスを学ぶ人のために』世界思想社,184-99.
- ————, 2010,「マイノリティの社会参加を促すコミュニティラジオ——FMわいわいを持続可能 にする仕組み——」松浦さと子・川島隆編『コミュニティメディアの未来』晃洋書房, 14-28.
- 萱野志朗,2008,「アイヌ語を伝えるFMピパウシ――先住民の立場から――」松浦さと子・小山 師人『非営利放送とは何か 市民が創るメディア』ミネルヴァ書房,103-12.
- 小玉美意子, 1993,「マイノリティとメディア」香内三郎ほか編『メディアの現在形』新曜社, 241-72.
- 野崎剛毅, 2012,「スウェーデンの先住民教育の現状と課題」『國學院大學北海道短期大学部紀要』第 29号, 71-84.
- 小川正人・山田伸一, 1998, 『アイヌ民族近代の記録』草風館.
- 小内純子, 2003,「コミュニティFM放送局の全国的展開と北海道の位置」札幌学院大学社会情報学部『社会情報』第12巻第2号, 1-14.
- 小内透編著,2010,『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター. 札幌テレビ放送創立50周年記念事業推進室,2008,『札幌テレビ放送 50年の歩み』札幌テレビ放送.

Riggins, H., 1992, Ethnic minority media: an international perspective (Sage Publication).

- 上野昌之,2004,「アイヌ語の復興と普及におけるメディア利用の取り組みについて――アイヌタイムズとFM二風谷放送の事例を中心に」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊11号(2),23-34.
- 八幡耕一,2005,「オルタナティブ・メディアの情報文化学的考察:アイヌ民族関連ラジオ放送の実態調査を事例として」『情報文化学研究』第4巻,7-13.

(小内 純子)

第 2 部

地域住民のアイヌの人々との関わり

第6章 アイヌの人々との接触・交流と社会関係

小野寺理佳|名寄市立大学保健福祉学部教授

第1節 はじめに

本章では新ひだか町の住民のアイヌの人々との交流関係を考察する。以下においては、大きく3つの部分に分けて検討をおこなう。はじめに、生活史におけるアイヌの人々との交流の経験を考察する。 次いで、現在の生活におけるアイヌの人々との交流の実態とその内容を探る。3番目に、和人とアイヌの婚姻という新たな社会関係に着目する。婚姻を、「社交」としての交流ではなく、「家族・親族の形成」としての交流ととらえ、和人とアイヌのカップルへの眼差しを取り上げる。

使用するデータは、『地域住民の日常的な交流の実態とアイヌ文化・アイヌ政策に関する意識調査』と『生活の歩みとアイヌの人々との関わりについてのインタビュー調査』の回答結果である。前者の調査データからは、アイヌの人々との交流関係の全体像を、後者のインタビューデータからは、交流の具体的な形とそれらの経験のなかで形成されてきた(あるいは明らかになってきた)考え方や思い、価値観などがどのように語られるのかをおもにとらえることとする。その際、交流のありようは年代によって大きく規定されると考えられるため、3世代、すなわち、青年層(20~30代)、壮年層(40~50代)、老年層(60代~)について分析をおこなう。インタビュー内容をまとめた表については、紙幅の関係上、典型的な回答や特徴的な回答など主なものを選択して掲げることとする。

第2節 属性

検討の対象とする地域住民は524人、世代別内訳は、青年層89人(17.0%)、壮年層191人(36.5%)、 老年層244人(46.6%)である。老年層がおよそ半数を占め、青年層は2割に満たないという構成比で ある。男女ほぼ半数ずつであり、世代毎の性別比率は表6-1のとおりである。現在の居住地は静内 地区約8割、三石地区約2割であり、世代による違いはほとんどない。

ここで、出生地(表 6 - 2)、本人来住時期(表 6 - 3)、家の来住世代(表 6 - 4)、世帯状況(表 6 - 5)、教育歴(表 6 - 6)、就労状況(表 6 - 7)、職業(表 6 - 8)、世帯収入(表 6 - 9)について各世代の現状を素描する。まず、青年層は、地元(現住所あるいは新ひだか町)生まれが52.3%、地元育ちが50.6%、親の代までに地元に根づいている者が66.3%(「わからない」と回答した者を除いて算出。以下同じ)であり、現在は、55.2%が「夫婦と未婚の子」という世帯構成で生活している。年長世代に比して高等教育機関への進学者が多い(49.5%)ものの、高等教育進学率(専修学校専門課程を含む)の全国平均が1994(平成6)年には 6割を超え、2000(平成12)年以降は 7割を超えている(平成21年版『文部科学統計要覧』就学率・進学率(2-2))状況からすれば低めの教育水準といわざるをない。大学に限っての進学率の全国平均は1994(平成6)年にはすでに30.1%に達しており、当該青年層の16.9%との間にはかなりの開きがある。とはいえ、この地において相対的に高い学歴で

あることは疑いなく、ホワイトカラー的な事務的職業従事者が他世代より多い (26.8%)。この他、専門・ 技術職 (17.9%)、販売職 (12.5%)、サービス的職業 (12.5%) などに従事する。就労率89.5%のうち常 雇率も相対的に高い (53.5%)。世帯収入は400万円以上に58.1%が含まれる。

次いで、壮年層は、地元生まれが60.2%、地元育ちが54.5%、親の代までに地元に根づいている者73.5%で、青年層と同様に「夫婦と未婚の子」という世帯構成が最多である(40.4%)が、50代以降は子世代の独立により世帯規模は縮小する。高等教育機関進学者は青年層より少なく35.7%であるが、この進学率も全国水準(1972(昭和47)年には3割ほどであったのが、1978(昭和53)年以降約5割で推移し、1994(平成6)年には6割に達している)と比較すると低めである。就労率は青年層とそれほど変わらず86.2%、職業をみると、事務的職業従事者(16.2%)の比率が青年層よりも低く、農林水産の分野で働く比率(12.0%)は逆に青年層より高い。管理職の立場にある者が増え(6.8%)、世帯収入では400万円以上が69.0%を占め、青年層より収入水準は上昇する。

最後に、老年層は、地元生まれが45.5%、地元育ちが36.9%、親の代までに地元に根づいている者は58.0%である。老年層では子どもが独立し「夫婦のみ」となった世帯が最多(54.9%)であり、この他、配偶者を亡くすなどによる「一人暮らし」(22.8%)が3世代中もっとも多いことが特徴といえる。この世代の教育歴は義務教育段階まで(33.6%)、高校まで(46.6%)が中心であり、それ以上の教育を受けた者は2割に満たず、前2世代と同じく全国水準に届かない。すでに退職した者が半数以上(56.0%)に上り、就労している場合も常雇率は1割ほど(10.8%)で、農林水産関係(23.0%)やサービス的職業(17.2%)に、パート・自営業・家業手伝いといった立場で携わるというのが主なスタイルである。退職者を多く含むため、世帯収入は他の2世代に比較すれば当然低く、半数超(52.3%)は300万円未満である。

なお、この524人の中には、血筋や婚姻関係・親子関係という点において、アイヌ社会のメンバーたる条件を備えた人々が22人含まれている。具体的には、アイヌの血筋(19人)、和人配偶者(1人)、和人養子(2人)が該当する。世代別にみると、アイヌの血筋の者は、青年層3人、壮年層3人、老年層13人、和人配偶者は壮年層に1人、和人養子は、壮年層1人と老年層1人である。彼らのアイヌとしての自己認識、アイヌ社会への親密性と関わりの程度について問うことはしていないため、アイヌの人々との交流が相対的に深まる要件をもつ人々という括りで考慮することとする(以下、アイヌ系住民と表記する)。

表6-1 世代と性別

| | 度数 | 合計 | | |
|----|-----------|-----------|-------------|--|
| | 男性 | 女性 | 台町 | |
| 青年 | 44(49.4) | 45(50.6) | 89(100.0) | |
| 壮年 | 91(47.6) | 100(52.4) | 191(100.0) | |
| 老年 | 115(47.1) | 129(52.9) | 244(100.0) | |
| 合計 | 250(47.7) | 274(52.3) | 524 (100.0) | |

^{*}不明・無回答を除く。以下、全表において同じ。

表6-2 出生地

| | 度数 (%) | | | | | | | | | | |
|----|----------------------|----------------------|----------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-------------------------|
| | 現住所 | 新ひだか町 | 道内 | 東北 | 関東 | 中部 | 近畿 | 中国• 四国 | 九州 · 沖縄 | 外国 | 合計 |
| 青年 | 21(23.9) 34(17.8) | 25(28.4) 81(42.4) | 29(33.0) 62(32.5) | 2(2.3) 2(1.0) | 4(4.5) 6(3.1) | 0(0.0) 1(0.5) | 5(5.7) 1(0.5) | 1(1.1) 0(0.0) | 1(1.1) 4(2.1) | 0(0.0) 0(0.0) | 88(100.0) 191(100.0) |
| 老年 | 28(11.7) | 81(33.8) | 107(44.6) | 8(3.3) | 6(2.5) | 0(0.0) | 1(0.3) | 1(0.4) | 2(0.8) | 6(2.5) | 240(100.0) |
| 合計 | 83(16.0) | 187(36.0) | 198(38.2) | 12(2.3) | 16(3.1) | 1(0.2) | 7(1.3) | 2(0.4) | 7(1.3) | 6(1.2) | 519(100.0) |

P<.001

表6-3 本人の来住時期

| | 度数 | 合計 | |
|----------------|-----------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|
| | 生まれてからずっと | चिंग | |
| 青年 壮年 老年 | 45(50.6) 103(54.5) 90(36.9) | 44(49.4) 86(45.5) 154(63.1) | 89(100.0) 189(100.0) 244(100.0) |
| 合計 | 238(45.6) | 284(54.4) | 522(100.0) |

P<.01

表6-4 家の来住世代

| | | 合計 | | | | |
|----------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|-----------------------------|---------------------------------------|
| | 自分の代 | 親の代 | 祖父母 | 祖父母より前 | わからない | [H] [H] |
| 青年 壮年 老年 | 27(30.3) 48(25.8) 98(41.2) | 13(14.6) 49(26.3) 49(20.6) | 19(21.3) 51(27.4) 63(26.5) | 21(23.6) 33(17.7) 23(9.7) | 9(10.1) 5(2.7) 5(2.1) | 89(100.0) 186(100.0) 238(100.0) |
| 合計 | 173(33.7) | 111(21.6) | 133(25.9) | 77(15.0) | 19(3.7) | 513(100.0) |

P<.001

表 6-5 世帯状況

| | | 度数 (%) | | | | | | | |
|----------------|----------------------------------|---------------------------------|----------------------------------|------------------------------|--------------------------------|----------------------------|---------------------------------------|--|--|
| | 一人暮らし | 夫婦のみ | 夫婦と未婚の子 | 夫婦と既婚の子ども | 三世代同居 | その他 | 合計 | | |
| 青年 壮年 老年 | 13(14.9) 26(13.8) 54(22.8) | 7(8.0) 47(25.0) 130(54.9) | 48(55.2) 76(40.4) 26(11.0) | 4(4.6) 12(6.4) 12(5.1) | 10(11.5) 21(11.2) 9(3.8) | 5(5.7) 6(3.2) 6(2.5) | 87(100.0) 188(100.0) 237(100.0) | | |
| 合計 | 93(18.2) | 184(35.9) | 150(29.3) | 28(5.5) | 40(7.8) | 17(3.3) | 512(100.0) | | |

P<.001

表6-6 教育歴

| | | 合計 | | | | | | |
|----------------|---------------------------------|------------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|----------------------------|---------------------------------------|--|
| | 義務教育 | 高校 | 専修学校 | 短大・高専 | 大学 | その他 | | |
| 青年 壮年 老年 | 9(10.1) 20(10.5) 80(33.6) | 34(38.2) 101(53.2) 111(46.6) | 16(18.0) 28(14.7) 16(6.7) | 13(14.6) 17(8.9) 10(4.2) | 15(16.9) 23(12.1) 18(7.6) | 2(2.2) 1(0.5) 3(1.3) | 89(100.0) 190(100.0) 238(100.0) | |
| 合計 | 109(21.1) | 246(47.6) | 60(11.6) | 40(7.7) | 56(10.8) | 6(1.2) | 517(100.0) | |

P<.001

表 6-7 就労状況

| | | 度数 (%) | | | | | | | |
|----------------|-------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|------------------------------|------------------------------|----------------------------|----------------------------------|----------------------------|---------------------------------------|
| | 経営者・役員 | 常雇の 一般従業者 | パート等 | 自営業主 | 家族従事者 | その他 | 無職 | 学生 | 合計 |
| 青年 壮年 老年 | 0(0.0) 19(10.1) 16(6.9) | 46(53.5) 70(37.0) 25(10.8) | 15(17.4) 42(22.2) 31(13.4) | 4(4.7) 18(9.5) 16(6.9) | 7(8.1) 10(5.3) 13(5.6) | 1(1.2) 4(2.1) 1(0.4) | 9(10.5) 26(13.8) 130(56.0) | 4(4.7) 0(0.0) 0(0.0) | 86(100.0) 189(100.0) 232(100.0) |
| 合計 | 35(6.9) | 141(27.8) | 88(17.4) | 38(7.5) | 30(5.9) | 6(1.2) | 165(32.5) | 4(0.8) | 507(100.0) |

P<.001

表6-8 職業

| | | 度数 (%) | | |
|----------|-----------|------------|-----------|------------|
| | 青年 | 壮年 | 老年 | 合計 |
| 事務的職業 | 15(26.8) | 19(16.2) | 9(10.3) | 43(16.5) |
| 保安的職業 | 3(5.4) | 0(0.0) | 1(1.1) | 4(1.5) |
| 販売的職業 | 7(12.5) | 18(15.4) | 6(6.9) | 31(11.9) |
| 技能工・生産工程 | 5(8.9) | 9(7.7) | 10(11.5) | 24(9.2) |
| 運輸・通信的職業 | 1(1.8) | 6(5.1) | 5(5.7) | 12(4.6) |
| 専門・技術的職業 | 10(17.9) | 22(18.8) | 9(10.3) | 41(15.8) |
| 管理的職業 | 0(0.0) | 8(6.8) | 5(5.7) | 13(5.0) |
| 農林水産的職業 | 5(8.9) | 14(12.0) | 20(23.0) | 39(15.0) |
| サービス的職業 | 7(12.5) | 18(15.4) | 15(17.2) | 40(15.4) |
| その他 | 3(5.4) | 3(2.6) | 7(8.0) | 13(5.0) |
| 合計 | 56(100.0) | 117(100.0) | 87(100.0) | 260(100.0) |

P<.05

表 6-9 世帯収入

| | | 度数 (%) | | 合計 |
|-----------|-----------|------------|------------|------------|
| | 青年 | 壮年 | 老年 | 一百百 |
| なし | 1(1.8) | 2(1.6) | 4(2.6) | 7(2.1) |
| 100万円未満 | 0(0.0) | 3(2.4) | 8(5.3) | 11(3.3) |
| 100~200 | 5(9.1) | 6(4.9) | 27(17.9) | 38(11.6) |
| 200~300 | 9(16.4) | 15(12.2) | 40(26.5) | 64(19.5) |
| 300~400 | 8(14.5) | 12(9.8) | 18(11.9) | 38(11.6) |
| 400~500 | 5(9.1) | 17(13.8) | 14(9.3) | 36(10.9) |
| 500~600 | 8(14.5) | 11(8.9) | 10(6.6) | 29(8.8) |
| 600~700 | 5(9.1) | 18(14.6) | 10(6.6) | 33(10.0) |
| 700~800 | 5(9.1) | 15(12.2) | 6(4.0) | 26(7.9) |
| 800~900 | 2(3.6) | 4(3.3) | 1(0.7) | 7(2.1) |
| 900~1000 | 2(3.6) | 1(0.8) | 4(2.6) | 7(2.1) |
| 1000~1500 | 4(7.3) | 10(8.1) | 5(3.3) | 19(5.8) |
| 1500~ | 1(1.8) | 9(7.3) | 4(2.6) | 14(4.3) |
| 合計 | 55(100.0) | 123(100.0) | 151(100.0) | 329(100.0) |

P<.01

第3節 生活史における交流

『地域住民の日常的な交流の実態とアイヌ文化・アイヌ政策に関する意識調査』には、生活史におけるアイヌの人々との交流経験を直接問う質問が置かれていないため、交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験に注目する。そのうえで、インタビュー調査への回答から、アイヌ文化との接触経験も含めて、どのような経緯でアイヌの人々との出会いがあり、どのような関係が結ばれたのかをみていくこととする。

第1項 交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験

アイヌ文化との接触経験には2通りある。1つは「現場での体験・見聞」であり、もう1つは「知識として学んだ経験」である。以下においては、この2つの経験についてみていく。

まず、アイヌ文化を現場で体験あるいは見聞した経験について考察する。2つの接触経験のうち、アイヌの人々との直接的な交流のきっかけとなるものがあるとすれば、それはおもにこちらであろう。回答結果をみると、体験したことがある者は全体としては2割を下回る。この低調な数値をふまえて世代差を確認すると、この数値は世代が上がるほど高く、老年層(24.7%)の体験率は青年層(6.1%)の4倍に達する(表 6-10)。さらに、世代による違いは体験した文化の内容にも表れている(表 6-11)。すなわち、青年層においては歌・踊り(100%)、アイヌ語(40.0%)、工芸(20%)といった芸能、美術工芸、語学が中心であるのに対して、老年層ではカムイノミ(44.2%)や伝統的な婚礼(20.9%)・葬儀(20.9%)などの宗教的・伝統的行事も多く含まれる点である。壮年層は、青年層と老年層の中間的な傾向をもつ。

このように、世代によって体験・見聞の量と内容が異なるのは、そもそも生活圏において日常的におこなわれていたアイヌ文化の量と内容が異なっているからである。老年層の幼年時代には、アイヌ部落と呼ばれる地区があり、入れ墨をしたアイヌ女性と行き交うことも珍しいことではなく、アイヌの人々の宗教的儀式や伝統的行事を見聞きすることも日常的であった。しかしながら、日々の生活のなかでそうした特別の場所や光景を目にする機会が次第に減っていけば、若い世代になるほど、たとえば入れ墨のような「一見してアイヌ文化とわかるものを身にまとう人々」に出会うことなく、ましてや、アイヌの伝統的・宗教的な行事にふれることなく育つことになる。若い世代にとってのアイヌ文化は、むしろアートや語学という非日常的な興味関心の対象として「求めて体験される」ものとなっていると思われ、生活のなかでの自然発生的な交流のきっかけとなる体験をする機会は相対的に少ない状況に置かれてきたといえる。

次に、アイヌ文化との接触経験のもう1つ、すなわち、アイヌ文化を知識として学んだ経験についてみる。この場合は、「何を学んだか」ではなく、「誰から学んだか」に注目する必要がある。教わる相手がアイヌの人々であったならば、そこに何らかの交流が生まれる可能性があったと考えることができるからである。そこで、アイヌ文化についての知識が獲得された経緯について、世代毎に上位3つを取り出してみると、「施設や展示物」(青年層63.3%、壮年層47.7%、老年層47.1%)と「情報メディア」(青年層40.5%、壮年層40.9%、老年層30.1%)は3世代共通であるが、3つ目についてはまったく異なる(表 6-12)。青年層では、「学校の授業や行事」(48.6%)、壮年層および老年層では、「アイヌ文化の団体」(壮年層27.3%、老年層27.9%)という結果である。すなわち、アイヌ文化を知識として学ぶ場として近年その有効性をもっとも発揮しつつあるのは学校だということができるのであり、青年層は、知識を獲得するプロセスにおいても、アイヌの人々と出会う機会が相対的に少ない環境にあるといえる。

それに対して、壮年層・老年層においては、上記「アイヌ文化の団体」に加え、近所の人や友人など身近な人々を通してアイヌ文化に触れたとの回答が青年層に比較して多い。具体的には、「子どもの頃からアイヌ部落があり、同級生もおり、お歯黒やヘカチ、メノコ等、色々と聞いていた」「職場」「地元のお祭り」(以上、壮年層)、「町職員としての立場から参加」「クラスメートにいた」「シャクシャイン祭り」「仕事上、案内を受けて参加した」(以上、老年層)といった回答がみられる。日々の生活のなかでアイヌの人々の様子を見聞きし、彼らがおこなう行事に参加する機会があれば、また、職務として

参加する機会があれば、そうした体験の際に傍らにいる人々が教師となり、理解の仕方や振る舞い方を教えることになったであろう。

このアイヌ文化の体験の有無における世代的特徴、すなわち、老年層において相対的に体験率が高く青年層において低いという全体の傾向はアイヌ系住民に関しても同じであるが、アイヌ系住民についてみると青年層の体験率はゼロであり、世代間の差はさらに拡大する(表 6-13)。このことは、若い世代においてはすでに家庭文化がアイヌ文化を伝える場になっていないこと、さらには、アイヌの人々とのつながりもまた希薄であることを示唆するものである。

以上、交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験を世代毎に整理すると次の3点となろう。1点目は、老年層は、日常生活のなかでアイヌの人々と行き交い、彼らが自身のためにおこなっている宗教的儀式・伝統的行事を見聞きする経験をし、周囲からそれについての知識を得ていったといえること。つまり、彼らにとってアイヌの存在は肌で感じられるものであり、交流の契機は生活の中に豊かに存在したと考えられることである。2点目は、世代が若くなると、日常生活においてアイヌの人々を見かけたり、儀式や行事を体験・見聞したりする機会は少なく、彼らは、アイヌの人々との自然発生的な交流のきっかけが相対的に少ない状況に置かれてきたこと。3点目は、アイヌ系住民に限っていえば、アイヌ文化の体験の有無にみる世代格差は大きく、とくに若い世代においては、アイヌの血筋であることがアイヌの人々との交流をもつことにつながるとはいいがたいことである。

表6-10 アイヌ文化の体験の有無

| | 度数 | 合計 | |
|----|------------|-----------------------|------------|
| | 体験・参加したこと有 | 体験・参加したこと有 体験・参加したこと無 | |
| 青年 | 5(6.1) | 77(93.9) | 82(100.0) |
| 壮年 | 26(15.2) | 145(84.8) | 171(100.0) |
| 老年 | 44(24.7) | 134(75.3) | 178(100.0) |
| 合計 | 75(17.4) | 356(82.6) | 431(100.0) |

P<.01

表6-11 体験したことがあるアイヌ文化 (複数回答)

| | B | 度数(応答者数の%) | | Δ=I. (Δ=I.₩-∞n/) |
|-----------|----------|------------|----------|------------------|
| | 青年 | 壮年 | 老年 | 合計(合計数の%) |
| カムイノミ | 0(0.0) | 12(46.2) | 19(44.2) | 31(41.9) |
| 伝統的な婚礼 | 0(0.0) | 0(0.0) | 9(20.9) | 9(12.2) |
| 伝統的な葬儀 | 0(0.0) | 2(7.7) | 9(20.9) | 11(14.9) |
| イナウ | 0(0.0) | 2(7.7) | 5(11.6) | 7(9.5) |
| 神聖な場所 | 0(0.0) | 1(3.8) | 5(11.6) | 6(8.1) |
| タブー | 0(0.0) | 2(7.7) | 3(7.0) | 5(6.8) |
| まじない | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(2.3) | 1(1.4) |
| 夢見 | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| アイヌ語 | 2(40.0) | 5(19.2) | 4(9.3) | 11(14.9) |
| ユカラ | 0(0.0) | 5(19.2) | 5(11.6) | 10(13.5) |
| 歌と踊り | 5(100.0) | 16(61.5) | 13(30.2) | 34(45.9) |
| 工芸 | 1(20.0) | 5(19.2) | 8(18.6) | 14(18.9) |
| 伝統的狩猟 | 0(0.0) | 3(11.5) | 3(7.0) | 6(8.1) |
| 料理 | 0(0.0) | 5(19.2) | 9(20.9) | 14(18.9) |
| その他 | 0(0.0) | 1(3.8) | 1(2.3) | 2(2.7) |
| 合計(合計数の%) | 5(6.8) | 26(35.1) | 43(58.1) | 74(100.0) |

表6-12 アイヌ文化を何を通して知ったか (複数回答)

| | 度数 (応答者数の%) | | | | | | | 合計 | |
|---------------|-------------|----------|----------|--------------|--------------|----------|-----------|---------|------------|
| | 家族や親戚 | 近所の人 | 友人 | 学校の授業 や行事 | アイヌ文化 の団体 | 情報メディア | 施設や展示物 | その他 | (合計数の%) |
| 青年 | 5(13.5) | 4(10.8) | 4(10.8) | 18(48.6) | 5(13.5) | 15(40.5) | 23(63.3) | 0(0.0) | 37(14.2) |
| 壮年 | 9(10.2) | 9(10.2) | 12(13.6) | 10(11.4) | 24(27.3) | 36(40.9) | 42(47.7) | 6(6.8) | 88(33.7) |
| 老年 | 18(13.2) | 29(21.3) | 27(19.9) | 4(2.9) | 38(27.9) | 41(30.1) | 64(47.1) | 5(3.7) | 136(52.1) |
| 合計 (合計数の%) | 32(12.3) | 42(16.1) | 43(16.5) | 32(12.3) | 67(25.7) | 92(35.2) | 129(49.4) | 11(4.2) | 261(100.0) |

表6-13 アイヌ文化の体験の有無 (アイヌ性別)

| | | 度数 | 度数 (%) | |
|----|-------|------------|------------|------------|
| | | 体験・参加したこと有 | 体験・参加したこと無 | 合計 |
| 青年 | 和人 | 5(6.3) | 74(93.7) | 79(100.0) |
| | アイヌ | 0(0.0) | 3(100.0) | 3(100.0) |
| 壮年 | 和人 | 25(14.9) | 143(85.1) | 168(100.0) |
| | アイヌ | 1(100.0) | 0(0.0) | 1(100.0) |
| | 和人配偶者 | 0(0.0) | 1(100.0) | 1(100.0) |
| | 和人養子 | 0(0.0) | 1(100.0) | 1(100.0) |
| 老年 | 和人 | 41(24.1) | 129(75.9) | 170(100.0) |
| | アイヌ | 3(37.5) | 5(62.5) | 8(100.0) |

^{*3}重クロス表については有意確率は記載しない。以下、同じ。

第2項 アイヌの人々との出会い

続いて、インタビューデータをもとに、これまでの生活、とくに子どもの頃におけるアイヌの人々との交流がどのように語られるのかをみていく。順番としては、交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験について整理してから、アイヌの人々との交流経験、交流にまつわる思いや意識を考察する。

まず、アイヌ文化との接触経験についてみる。とくに子どもの頃に関して、アイヌの文化的行事や慣習がおこなわれている様子を見聞きした経験を問うと、入れ墨をしている人を見たという経験をあげる者がもっとも多い(表 6-14)。「口のまわり、何でなのか、どうしてこんなのするのかなと思いました。子どもの頃、こういうおばあちゃんがいるのをよく見たことがありましたね」(壮年女性)、「もうとなり近所にいたよね。わかる?昔ね、こう入れ墨していた人」(老年女性)、「(入れ墨は)結婚しているという意味。あれは見たことありますね」(壮年男性)というように、壮年層や老年層の幼い時期においては、入れ墨をした女性を見かけることは当たり前の光景であったことがうかがわれる。この他、イナウ(壮年男性)、チセ(壮年男性)、田植えや稲刈りのときに神に祈る(老年女性)といったことがあげられている。このように日常生活のなかでアイヌの人々を見かける機会が少なからずある環境では、実際の交流の機会も相対的に多かったと思われる。そこで、子どもの頃のアイヌの人々との実際の交流を確認すると、その交流場面は大きく分けて2つあることがわかる。ひとつは生活の場面(表 6-15)であり、もう1つは学校の場面(表 6-16)である。

1つ目、生活の場面についてみると、家族ぐるみあるいは親同士の付き合いに連なる形での出会いと交流をあげる者が多い。近所の遊び友だちというだけではなく、いわゆるお隣さん同士の日常的な助け合いのなかで、食べ物を分けてもらう(「魚をもらったり。漁師をやっていたから。何でかよく

わからなかったけど、ただ食べ物をもらったり、そうですね。仲良くしていたほうだと思います」(壮年女性))、農作業や水産加工を手伝いに行く(「私達もむこう田植えだとか稲刈りに手伝いにいくようになって、秋にするめ取れるようになるとむこうでイカのするめを作るのを手伝いに行ったり、そういうお付き合いはずっとしていたんですよね」(老年女性))、お守りをしてもらう(「親たちが忙しいものですから、私を親たちがエカシに預けて、仕事に出て行くわけです」(老年男性))という経験をしている。

したがって、子どもの意志というよりは親のライフスタイルや意向でもたらされた交流といってよい。子どもとしてはいつの間にか交流関係のなかに巻き込まれていたのであり、「どうしてあすこの家とお付き合いするの」(老年女性)と親に聞くのであるが、「田植ったら「行きなさい」。稲刈りったら「行きなさい」」と言われるままである。このように、アイヌの人々との交流が開始・維持されるかどうかは親の意識に大きく左右され、親に従い、親の姿勢に倣う形で子どもはアイヌとの交流の仕方を身につけていったということができる。そのなかでも、とくに、親がアイヌの人々との関係をどう表現するかということは、子どもにとっては彼らとの距離感が定められるうえで大きな影響があったと思われる。たとえば、ある老年女性は、「(父の)友だちがアイヌの酋長の息子だと言っていましたけどね。私が小さい時にそういう話をしていました。私自身はわからないんですけど、ただあの人は友だちなんだって。アイヌの酋長の息子って」と、父親の言葉を印象深く受けとめた経験を語るのである。

しかしながら、彼らは、特定のアイヌの人々との交流をもつ一方で、親あるいは周囲の人々のなかにアイヌへの差別的感情があることにも気づいている。「たしかに仲良くはしていましたけれど、やっぱりアイヌ民族と和人の関係が、やっぱり、ちょっと両親からも言われていましたのでね」(壮年男性)、「親は年をとっているから、わかってたんでしょうね、子どもよりは。アイヌという偏見はけっこうあったみたい。陰ではなんか言っていたような気がするんですよね」(壮年女性)、「(アイヌの子と和人の子が仲良くないということは)いや、そうでもなかったですけれど。でもやっぱり、遊んでいるとね、やっぱり辺りの人がすごい言い方をして、何でこんな差別するのかと思うこともけっこうありましたけどね。自分たちはそういうあれが全然なかったですから。あの、浜って、浜の人ってとくにうるさい。すごく人種差別をする。そして、言葉がきたないでしょ」(老年女性)などの発言がある。

2つめ、学校の場面における交流経験を取り出してみると、アイヌの子どもがクラスに占める割合によってはその存在に多少の違和感をもつ者もいたようであるが(「学校へ行っていても「いや、どうして」っていう感じのこともありましたよ。まずクラスで45人いるうちの10人くらいはいたこともありましたからね」(老年女性))、クラス運営において差別的なことがおこなわれたとの指摘はなく、クラスメートとして普通に交流していたというのが共通する回答である。この場合、インタビュー回答者の念頭にあるのは主に小学校段階であったと推察され、親密度は異なるにせよ、子ども同士の関係としてごく一般的なものであったとの印象に落ち着いているように思われる。

もっとも、学校においても、当時の彼らがアイヌの人々に対して何の違いも感じないでいたわけではなく、「小さい頃は母親から「あんまり遊ぶんでないよ」と言われたことはありましたけどね」(壮年男性)と語るように、大人の側の差別的な雰囲気を察知していた者もあれば、アイヌのクラスメートの不登校問題に関わってクラス全体で話し合い、「みんな順番、順番で担当を決めて、今日はあんたたちが迎えに行く番、今日はあんたたちが迎えに行く番」(壮年女性)といった助け合いをするなか

で、アイヌの人々へのいじめや家庭問題の存在を知ることになった者もいる。「ただですね。つねになんか認識はしていましたけど。あの方はアイヌの人、私達は違うという認識は多分、その地区に住んでいたすべての人はもっていたと思います。だからといって、悪口を言うとか、仲良くしないとかということはそういうことは一切なく、違うという認識はつねに頭のなかにありましたね」(老年女性)という言葉が、この「あからさまな差別ではないが異質な存在としてつねに意識される」という状況をよく言い表している。生活場面での交流に比べると、学校の場面での交流は、クラスメートとしての主体的な関わりも多かったという意味で、アイヌという存在について自ら考える契機ともなったように見受けられる。

さて、これらアイヌの人々との交流経験について、アイヌ系住民(老年男性3人)はどのように語っているのだろうか。この3人のうち、2人は子どもの頃から自分がアイヌであることを知っていた者であり、1人は25.6歳の時に曾祖母がアイヌであることを知らされた者である。子どもの頃のアイヌ社会との距離は三人三様で、前二者は、差別を受けた当事者として語りながらも、一方は親からアイヌ文化について詳しく教えられた(「自分は長男なので、父の手伝いをさせられた」)と語り、もう一方は親がアイヌ文化を教えてくれなかった(「母は強烈な差別を受けていた。それで自分にはまったくアイヌの言葉、伝統、文化を教えてくれなかった」)と語る。これに対して、後者は、「アイヌの人たちと普通につきあいはあったけれど、特別アイヌの習慣にふれたことはない」、「自分自身は、アイヌの子をバカにするような差別感はなく、違う人がいるのだなというふうに思っていた」と述べている。「アイヌの人たち」「アイヌの子」という表現には、自分とアイヌの人々との間に境界線を引き、自分は「こちら側」の人間であるとの思いや主張がみえる。彼は自分のアイヌの血について知った時、「特別何か感じることもなかったし、昔のことだから、ありうると思った」と述べるものの、和人サイドの人間であるとの立場は揺らいでいないように見受けられる。

アイヌに対する差別については、彼らはそれに気づいていたことを認めている。「アイヌ民族以外との関わりではみんながみんなではないけれど、差別されたという雰囲気はあった」(老年男性)、「大人の中にはアイヌを蔑視するような雰囲気はあった(「きたない」とか「臭い」など)」(老年男性)と述べるように、あからさまな差別とはいえないまでも何か違った空気があることを子どもながらに感じ取っている。学校生活についても、「アイヌの血が混じっていても自分はアイヌではないというふうに言う子どもはいた」(老年男性)と述べており、アイヌの子どもにとっての学校は用心深さを要する場所であったと考えられる。

注目されるのは、和人中心の地域社会で生きるための姿勢である。父親から様々な儀式のやり方を教えられてきたと語る老年男性でさえ、「アイヌというよりは、一地域住民として、人間という立場に立つとみんな同じだと思っている。アイヌというよりは人間としての道を踏み外さないことが大事」と語り、自身が地域住民としての立場を重視してきたことを強調する。これらの姿勢が、結果として、地域のなかに居場所を確保するための方策として働いてきたということだと思われる。

以上、生活史におけるアイヌ文化やアイヌの人々との接触・交流の経験については3点にまとめられるだろう。1点目は、とりわけ老年層にとっては、日常風景のなかでアイヌの人々を見かける機会が少なからずある環境で育ち、実際の交流の機会も相対的に多かったと思われること。2点目は、壮年・老年層が子どもの頃、彼らは、親同士が交流するなかで相対的に多くの交流を経験したこと。その際、

周囲の大人社会にアイヌ差別が存在することを薄々感じながらも、自身が意図的にアイヌ差別をすることはなかったと認識していること。3点目は、アイヌ系住民のアイデンティティのありようとそこに基盤をおくアイヌへの視線は多様なものでありながら、それぞれが地域社会で生きるためのアイヌとしての身の処し方をもっていると思われることである。

では、これらの接触・交流の体験を経て、現在の生活における住民とアイヌの人々との交流はどういったものになっているのだろうか。

表6-14 子どもの頃見聞きしたアイヌ文化

| | | ●は和人住民 ■はアイヌ系住民 |
|----|----|--|
| 壮年 | 男性 | ●入れ墨している人もいたし、チセはなかった。イナウはあったかな。小さい頃だから、それくらいかな。(入れ墨をしている人は)今はもういないですね。僕らの小さい頃だから40年前くらいはまだいましたけどね。イナウはありますよ。けっこう。ここの自治会50戸くらいありますからね。そのうちアイヌ民族の人が10軒くらいありますので。 ● (入れ墨は) 結婚しているという意味。あれは見たことありますね。…だからもうアイヌの人=貧乏だからな。…僕小学校の時に、親じゃなくて近所の年上の人にそっちに行くなと言われたことあるね。行くなと言われると子どもだから行きたくなるからさ、3,4人で見に行くと、記憶にあるのが、町道とか道路は変わらないんだけど、ロープが張ってあって、ベニヤ板にマジックか墨で、○○部落と書いてあるのが置いてある。そこから風が吹くと何か匂いが違うというか、おっかないっていうか、そういえば、かすか目の奥に何かチセというか三角のチセとかあったような気がしないでもないね。小学校2年とか3年生の時の記憶だけど。 |
| | 女性 | ●ないんだよね。それが。あったかな。記憶にないね。全然。あ、これは知ってる。入れ墨をした人は見たことがありますね。 口のまわり。何でなのか、どうしてこんなのするのかなと思いました。子どもの頃、こういうおばあちゃんがいるのをよく 見たことがありましたね。あと、わからないですね。入れ墨くらいですね。 ●子どもの頃は入れ墨している人はたくさんいました。おばあちゃん達はみんなこういうふうにして、ちゃんと口に入れ墨していました。していましたね。見ました。お友達のおばあちゃんがしてたんですよね。小学校の時、入れ墨。 |
| 老年 | 男性 | ■アイヌ文化、アイヌ語に囲まれて育った。父はお酒がコップ一杯でも手に入るとストーブのふちを開けて、神々や仏に感謝お礼をして、村の安全、家庭安全、子供達の健やかな成長を祈る。その時に自分は長男なので、父の手伝いをさせられた。…母は幸い入れ墨をされていなかったが、母の姉や父の姉妹は入れ墨を入れていた。祖母も入れ墨をしていた。母親の世代には入れ墨をしている人が近所にたくさんいた。知り合いのおばあさんも入れ墨をしていた。母親の世代には入れ墨をしている人はいなくなった。漆器は家にあり、見たことがあった。イナウも見たことがある。先祖供養も見たことがある。カムイノミは見たことがあるけれど参加しようという気にはならないし、参加したことはない。これからもかかわろうとは思わない。そういうふうになってしまった。母は強烈な差別を受けていた。それで自分には全くアイヌの言葉、伝統、文化を教えてくれなかった。アイヌは学校には同級生がいましたね。部落、部落があるからね。そこには入れ墨をした人はいましたよ。入れ墨はありますね、既婚者ね。あとは、その頃は交通機関も発達していないから、そういう所まで、あんまり歩いて行かなければならないから。そんなに部落行かないし。 ■祖父母の代でも全くアイヌの伝統文化はやっていなかった。近所にアイヌはたくさんいた。入れ墨をしている人もたくさんいた。チセを見たことがある。アイヌの人たちと普通につきあいはあったけれど、特別アイヌの習慣にふれたことはない。●入れ墨した人は見たけど。何のために、何だかわからなかったな。…こっちの下の方にいた。おばあちゃんね。もう亡くなったけど。これ、子どもの時か。えりもにはいない。ここに来てから、〇〇に来てからいる。何だべと思ったわ。えりもにはいないんだわ。アイヌの人。子どもの時のアイヌはあんまりわからないんだわ。●ほとんどなかったですね。日高町の場合はいなかったですね。 |
| | 女性 | ●近くには住んでいなかったんですけど。この辺ではね。○○という所にはそういう人達は多かったんですよ。そこではやっぱり、田植えだとか稲刈りに行ったら、我々がやっていないようなことをやるね。仕方ないんだ。そういう人達のしきたりだからと親がよく言っているのは聞いたんですけど。それ自体はこの辺でやっているのって見たことないですね。(田植えや稲刈りの時に何か神様にお祈りしているというようなことを見たことは)ある。…まず、目のふちと入れ墨がすごかったんですよ。そういう関係で、そうだね。まず入れ墨の人が多かったですね。女の人はほとんど全部。今は見れないですもね。いや。いないね。○○はいなかったね。だけどね。○○(小学校から…注)はもうとなり近所にいたよね。わかる?昔ね、こう入れ墨していた人。それから、荷物持つのにここにかけて。そうやって歩いている人。うちの隣のおばあさんも何人かいますよ。(他に見かけたアイヌ文化は)いや、ちょっとわからないね。 ●そのことについては全くふれませんでしたね。ただ、多分、その頃からどこなのかしら、○○とか、儀式がありますよね。そういうのがアイヌの人達の間であったというのは聞いたことがあります。(直接見聞きしたことは)私はありませんね。(入れ墨をしている人は)近所にはいなかったんですけど、バスで通学の時に見たことはあります。高校生ぐらいの時ですね。○(入れ墨をしている人は)それはありました。参観日でも、した人来ていましたから。お母さんが。 ●その方入れ墨入っていたのね。同級じゃなくて。けっこうなお年寄りの方だったんですけど、すごく懇意にしていて。ここには入っている。手にも入っている。女の方でね。ちょっと、しょっちゅう来るもんですから、私がたにすると見たことないものですから。私の上に兄が、3つ違いかな、いて、畑の手伝いに来て一緒にやっていると、私達はその方に「おっか、おっか」と言っていたんですけど。日に入れ墨があって、すごいきれいな方で、和人ですものね、って言ったら失礼だけど。もらわれていって、入れられた。気がついたらこうだったと言って。「どうして、おっかあ、口が黒くなっている」とか、「手になんでそうやって」って。でも、その方は嫌がらないで、いろいろなお話してくれましたね。「私はこうやって、もらわれていって、すぐね、(いくつぐらいって言ったかな。)入れ墨を入れられて育てられたんだよ」という話で。ですから、あんまり違 |

和感なく、特別、アイヌだからどうとか、というのは私はなかったですね。…儀式はないですけど。臼で何かこうやって昔つくのありますよね。きびだとか何とか。それはね、見ています。歌いながらこうやって、独特のあれですよね。あれでこうやって。あります。歌ってこうやってやるの。…カムイノミがこうだよとか、実際にやったのは見たことないですけれども、こうやるんだよとか。こうやってやるんだよとか。それから、衣裳を見せてもらったこともあります。すごいですよね。あの衣装。着て見せてもらったり。こうやって、飾りを首からかけたりとか。

表6-15 子どもの頃のアイヌの人々との交流・当時の自分のアイヌの人々への態度・周囲の人々のアイヌの人々への態度

| | | ●は和人住民 ■はアイヌ系住民 |
|----|----|--|
| 壮年 | 男性 | ● (交流は) あった。どっちかというと一緒に遊んでいた程度ですからね。子どもの頃ですから、喧嘩をしたりもしましたけど、それなりにつきあっていましたね。(印象に残っているのは) やっぱり、小学校の頃かな、アイヌの人の家に遊びに行ったことがあったよね。その時にはやっぱり、今あんまり覚えていないけど、宝剣とか、漆器類があったのは記憶にありますね。その時代でしたから、確かに仲良くはしていましたけれど、やっぱりアイヌ民族と和人の関係が、やっぱり、ちょっと両親からも言われていましたのでね。その中で、遊びに行った時に、そういうのがあったなというふうに頭の中には残っていますね。(和人との付き合いとの違いはあったか) そうですね。 |
| | 女性 | ●仲良くですね。私は山のほうに住んでいましたが、下のほうの海側に~さんという人が住んでいたんだけど、とても明るくて足の早い人で、その人とけっこう付き合っていたり、広く浅く。魚をもらったり。漁師をやっていたから。何でかよくわからなかったけど、ただ食べ物をもらったり、そうですね。仲良くしていたほうだと思います。親もそうですね。なんぼか。魚を持ってきてくれたりして、普通に接していました。でも、親は年をとっているから、わかってたんでしょうね、子どもよりは。アイヌという偏見はけっこうあったみたい。陰ではなんか言っていたような気がするんですよね。 |
| 老年 | 男性 | ■子どもの頃の交流ではとくにアイヌ民族だからということは子どもだからなかった。そういう交流は大人同士がやっていた。親は友達同士で交流があったと思う。アイヌ民族以外との関わりではみんながみんなではないけれど、差別されたという雰囲気はあった。青年時代もずっとあったし、そういう扱いは受けて来た。アイヌに対して差別意識をもつ人はいた。 ■子どもの頃から親や近所の大人など周りを見ていて、自分がアイヌであることに気づいていた。親や近所のアイヌ民族は何かあれば行ったり来たりしていたから、何故だとは思っていた。 ■近くにコタンがなかったから、純粋のアイヌはまわりにはいなかったが、ハーフやクォーターで目が大きくて彫りが深く、アイヌの血が入っている子どもはいた。自分自身は、アイヌの子をパカにするような差別感はなく、違う人がいるのだなというふうに思っていた。アイヌと和人の子どもが喧嘩したりする場面は見たことがない。アイヌだからいじめられるということはなかった。大人の中にはアイヌを蔑視するような雰囲気はあった(「きたない」とか「臭い」など)。 ●ただ私の記憶にありますのが、〇〇にいた時には私もまだ3歳か4歳かと思いますが、三角の小さいチセ、家、廊下があって、そこに給ちゃん、エカシですよね。親たちが忙しいものですから、私を親たちがエカシに預けて、仕事に出て行くわけですが、その時の爺さんの名前は親から聞いています。ヤキネクルそういう名前でしたね。結局、オンネクル(年寄り)、おわかりだと思いますがお年寄りなもんですから、そこに住んでいて仕事も何もしていない。せいぜい子どものお守りぐらいで。ここに抱かさった記憶があるんですが、どうも髭が邪魔だったという記憶があります。 |
| | 女性 | ●うちが借家をやっていた時に、そこで○○に住んでいましたから、そして、(家を貸していたアイヌの人は) ある程度親が 年齢になってきて、○○に帰って一緒に暮らすようになって、こっちにいないから私達もむこう田植えだとか稲刈りに手伝 いにいくようになって、秋にするめ取れるようになるとむこうでイカのするめを作るのを手伝いに行ったり、そういらお付 き合いはずっとしていたんですよね。私が、「どうしてあすこの家とお付き合いするの」と聞いたんですって。結局小さい頃、一緒に借家に住んでいたのを知らなかったのね。「どうして、何かあったらあすこにもって行きなさい」と言われるのかな。田植ったら「行きなさい」。稲刈りったら「行きなさい」。そうしたら、親からこういうわけで、あすこずっと2軒借家だったんだ。アイヌの人たちが新婚時代に、ずっと入っていて、親が年齢になったので向こうへ行って田んぼを作ったりするようになったんだ。アイヌの人たちが新婚時代に、ずっと入っていて、親が年齢になったので向こうへ行って田んぼを作ったりするようになったんだって。それを聞いたんですよ。あまりにも何か一緒にいなくても、行き来をしていたもんですから。で、自分の母親はここの人じゃないですから。父親はここで多分生まれ青っていますが、母親は○○から来ているものですからね。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ |

| | ●は和人住民 ■はアイヌ系住 |
|---|--|
| 土年 男 | ●母はよく言うんだけど、あまりアイヌに対しては良く思っていなかったような感じは受けましたけどね。小さい頃は母親から「あんまり遊ぶんでないよ」と言われたことはありましたけどね。ただ、僕らの小学校中学校時代は子どもの数が多かったから、1クラスに50人ぐらいはいましたから、その中には1割まではいませんけど、5人程度はいたかな、やっぱりそれなりには付き合いましたけどね。…中学生の時は50人クラスの中に5人くらい、高校に行くと1人か2人くらい。やっぱりね、アイヌの人は当時、なかなか高校には行けなかったよね。アイヌの人といっても和人とアイヌの人が結婚している人がけっこういますよね。そういう人はだいたい高校に来ていましたよね。ただやっぱり両親が両方アイヌの人というのは、なかなか学校には上がって来なかったような気がしますね。全部が全部というわけではないけど。一概には言えないと思いますね。僕の知っている人で臭さんがアイヌで旦那さんがシャモで、逆の場合もありますからね。それはあまり関係ないですね。●アイヌはクラス50人学級だったらだいだい10人か15人くらいいたんじゃない。…クラスメートね。だからって、よく喧嘩したとか、いじめたとか、いじめられたではなく。普通に気が合うのは仲良くしたし。話をしたことないのは話をしないし、アイヌの人だから特別どうのこうのということはなかった。…特別エピソードはないです。(クラスでのいじめとかは)ないですね。差別的な行為はあったんでしょうけどね。まあ、区別というかね、相手にすれば差別なんでしょうけど。 |
| 女 | ●小学校からなんだけど。アイヌ部落っていうか、アイヌじゃない人もいるんだけど、アイヌが住む土地が決められていたの。そこに住んでいた同級生がいて、途中から学校に来なくなったの。家庭的なことなのか、学校でいじめられたからなのか。かなり濃いの。みんなから軽視されていたのかわからないけど、私はそういうのも疎いから。いじめられたのか、家庭的にお父さんが飲んでいて嫌だったのか、学校に来たくなかったのかということで、学校の中でけっこう話し合ったことがあった。どうやって学校に連れてきたらいいのか。そういう問題があったことがあった。みんな順番、順番で担当を決めて、今日はあんたたちが迎えに行く番、今日はあんたたちが迎えに行く番。という、昔って、すごい、そういうのがあったんですよ。人を助けるというか、そういうのがあったの。みんなでなんとか学校へ連れて来ような、みたいな感じで。みんなで助けようみたいな感じで。でもやっぱり、学校に来なくて、何かがあるんだろうね。子どもだからわからないから。ただ行こうって誘うだけで、空振り。出てこないんだよね。結局、最終的に中学校には来ていたけれどね。中学校では来られるようになっていて。でも、けっこう休みがちだったね。 ●変な言い方ですけれども、本当のアイヌの人達同士で結婚した純粋のアイヌの人達というのは多分何人かしかいなかったと思うけど、何代か過ぎている人はもうたくさんいたと思います。多分3分の1くらいはいたと思います。…全然関係なく、ですね。嫌いな人は嫌いだっただろうけど。今みたいにいじめって、露骨にない時代から。小学校の時は本当に純粋にアイヌという人は多分何人かいたと思うんです。そういう人達は何かあんまり仲良くした、うーん、でも私は全然関係なくお付き合いしたから、わからないんだよね。…家にも遊びに行きましたし、だから全然。親に止められたこともなかったから。結婚する時は、言われたから、何か差別はあったんだと思うけど、私がこう友達同士でつきあうのには言われたこともないです、親からはだめと。…やはり、先生にもよるんでしょうね。私達の小学校の時の先生は厳しかったです。仲間はずれは許されかったから。だから、そういうのもあったんだろうなって。でも、こんなことを言っていいのか、でも、まずごいてす。でも、こんなことを言っていいのか、でも、まがら、そういうのもあったんだろうなって。でも、こんなことを言っていいのか、でも、すから、だから、だから、たから、たから、たから、そういうのもあったんだろうなって。でも、こんなことを言っていいのか、でも、すったから、たから、そういうのもあったんだろらなって。でも、こんなことを言っていいのか、でも、すらいも、まずごいでは、まだけが、まずごとないただろらなって、でも、こんなことを言っていいのか、でも、まがら、そういらのもあったんだろうなって。でも、こんなことを言っていいのか、でも、すがあったんだろらなって、でも、こんなことを言っていいのか、でも、すったいたり、ためにないないないたがないからないました。これでは、まずにないないないでは、まずにないました。これはないないでは、まずにないないないないないないないからないまれていたけないないないないでは、まれないないないないないないないないないないないないないないないないないないない |
| 老年 男 | イヌの人達はだらしないという印象は私のなかにありますね。なんか、貧しさに負けているというのか、何というのか。お金なくて修学旅行も行けないお友達が、お父さんお酒飲んでべろべろになっているとか。そういうのなんかいっぱい見て、そういうのがあって、なんかすごいだらしないという印象はすごいありましたね。子どもの頃は。 |
| | いたということはなかった。 ■友達のなかにはアイヌはいた。アイヌと見た目でわかった子どもはいたが、その頃は隠そうという雰囲気があった。アイヌの血が混じっていても自分はアイヌではないというふうに言う子どもはいた。隠しているとアイヌだとわからない子どももいたと思う。アイヌだけが入学する小学校があった(自分の頃はもうなかったかもしれない)。 ● (クラスのなかに) せいぜい1人か2人ですね。仲のいいというのはいなかったね。…やっぱり、今でいうけっこういじめられていたというのはあるね。僕らあんまりそういう中心的なあれではないから。結局、不登校になるでしょ。そうすると、我々年代が多いけど、ちゃんと1年行かないで、また1年生2回やるとか、その当時の学校というのがあちこちあったから。たとえばここは市街地の学校ですから、そばの通学区域内にいる人はこっちに来ないとならない。そういう意味では学校に来たり来なかったりとかいたよね、そういう人はね。 ● (○○には) いない。クラスにいたかもしれないけど、そういう差別なかったも。子どもの時はだよ。…だけど名字を聞いたらアイヌなんだもね。今になってわかるけどさ。 ●小学校のあたりで、○○あたりで、クラス21人くらいのなかで7から8人くらいはその系の方がいらっしゃいましたね。…小学校の頃ですと、そういうような差別うんぬんというのはございませんでしたね。ただし、意見が合わない、喧嘩、子ども達の喧嘩ですね。こうなりますとやっぱり「おまえアイヌでないか」とかそういうようなことは出ましたね。 |
| 女 ———————————————————————————————————— | ●学校へ行っていても「いや、どうして」っていう感じのこともありましたよ。まずクラスで45人いるうちの10人くらいはいたこともありましたからね。 ● (小学校のクラスにアイヌの子は)いたと思うけど。あんまり。(本当のあれっだっていう人いないも。したって。かたっぽ、シャモの人で内地の人と結婚しているから、けっこう。あんまり、子どもの時そんな気にしないでいるけど。おそらくそういう人はたくさんいたと思うよ。: 夫〉…そんなにかわらないんじゃないかな。小学校の時はみんな仲良く一緒に、遊んでいて、変わりはなかったと思うよ。 ● クラスに何人かの方はアイヌでした。数人。クラスは30人から40人くらい。(アイヌの子だということは) その地区にいる人達はみなさんわかっていましたね。それまであまりにも普通にそういう人達がいるから、お隣にいたりとか、だから、いじめという感覚は全くなかったですね。もう (アイヌの人がいるのが) ごく普通でしたから、あたりまえだったので。… (クラスメートとの友達関係は) 普通に。(印象に残っていることは) 別にない。普通ですから。ただですね。つねになんか認識はしていましたけど。あの方はアイヌの人、私達は違うという認識は多分、その地区に住んでいたすべての人は持っていたと思います。だからといって、悪口を言うとか、仲良くしないとかということはそういうことは一切なく、違うという認識はつねに頭のなかにありましたね。 ●普通に学校に来て、別にいじめたわけでもないし、いまだに普通につきあっているから。何も、別々になっていないし、普通に同じに授業でも何でも受けていたし、アイヌって、差別した覚えもないし。何人のクラスで10人かそこらくらいいたかな。いじめているふうもないし、私もそういう記憶もないし。まわりでもね、あんたがアイヌだからどうとか、というような記憶は私のなかでは全然ないんですよ。意識はないし。いじめているふうも見たことないし。へたしたら今のほうがあるのかな、もしそうであれば。 |

第4節 日常生活における交流

さて、子ども時代あるいは就学期間を過ぎると、アイヌの人々との交流¹⁾の舞台は、地域(近隣、町内会、子どもの学校関係など)、職場、趣味のサークルなどに移行する。そこにおいてどのような関係が築かれているのかをみていく。

第1項 アイヌの人々との交流

以下においては、アイヌの人々との交流状況に関して、交流の頻度と内容について世代毎の違いを とらえてから、交流の多寡を左右する条件を探る。

はじめに、アイヌの人々との交流「頻度」をみると、頻度は年代が上がるほど高くなっている。交流が「よくある」「たまにある」の合計比率は、青年層29.5%、壮年層56.8%、老年層64.6%である(表 6-17)。交流頻度が青年層においてもっとも低く、壮年・老年層では相対的に高いという傾向は、アイヌ系住民がアイヌの人々と交流する場合も同様である(表 6-18)。この数値の違いをもたらす理由としては2 点考えられるだろう。

1点目は、生活史のところでも述べたように、日常生活圏にアイヌの人々がいるのかどうか、という点である。とくに老年層においては、先述のように、生活史においてアイヌの人々と出会うチャンスを相対的に多くもってきたことから、アイヌの人々との交流は、差別や摩擦や対立も含めて、きわめて日常的なものととらえられてきたと思われる。つまり、彼らにとっては、この土地で生活することはすなわち何らかの形で交流関係をもつことを意味していたと思われる。

これに対して、より若い世代になると、「一見してアイヌと思われる容貌の人々をよく見かけること」、「彼らが自分たちとはまったく異なる生活習慣をもっていること」、あるいは「彼らが自分たちと比べものにならないほどの貧しい生活をしていること」など、これまでアイヌの特徴とされてきた諸点を年長世代ほど頻繁に目にすることは減ってくる。これは、和人との婚姻が増え、そこに誕生する子どもにはアイヌとしての特徴が薄まっていることや、アイヌの人々の生活レベルが全体として上昇したことなどの客観的状況の変化、そして、アイヌのことは学校の授業で学ばれる「知識」となり、つねに自分の身近な問題として自覚されるとは限らないという主観的状況の変化が影響していると考えられる。その結果、実際は交流があるにもかかわらず、それが「アイヌの人々との交流」であると気づかれていない場合、または、アイヌの血筋に頓着しないゆえに「アイヌの人々との交流」であるかどうかに無関心である場合も考えられ、そうした事情が低い数値として表れたという見方もできよう。

2点目は、ライフスタイルのなかで、アイヌの人々との交流が自分の暮らしにおいて必要と認識されている、もしくは交流に対する積極的な思いがあるかどうか、という点である。とくに20代において交流が少ない(「よくある」「たまにある」の合計が20代24%、30代31.7%)のは、20代には学生や独身者が相対的に多く含まれており、彼らは、社会での様々な交流において、とりわけ近所付き合いのような生活場面での社交において「一人前」の付き合いをすることをあまり求められない(期待されない、あるいは猶予されている)と考えられるからである。それを示すように、近所付き合いや自治会活動への参加状況をみると、青年層の動きは著しく低調である(表6-19、表6-20)。近所の人との交流において「つきあいなし」が11.5%、「道で会えば挨拶程度」が60.9%、つまり、約7割は挨拶もしないか、あるいは挨拶のみの関係である。また、青年層では自治会活動へ「まったく参加しない」

が42.0%を占め、他 2世代における不参加率が壮年層15.4%、老年層4.2%であるのとは対照的な状況である。

次いで、交流の「内容」について各世代の特徴を探る。アイヌの人々との交流が「よくある」「たまにある」と回答した者にその内容を尋ねた結果を数値の高い順に3つ並べると、青年層では「職場付き合い (50.0%)」「学生時代からの付き合い (37.5%)」「近所付き合い (28.1%)」、壮年層では「職場付き合い (45.1%)」「近所付き合い (45.1%)」「逆所付き合い (45.1%)」「逆生時代からの付き合い (36.3%)」、老年層では「近所付き合い (50.0%)」「職場付き合い (29.3%)」「趣味の付き合い (25.0%)」となる (表6-21)。3世代の交流内容を見比べると、若い世代では、教育年数が長期化し、なおかつ卒業後の年月が浅いために、学生時代からの付き合いが継続されていると思われ、就職後はそこに職場の人々との交流が加わる形となる。職業生活が自身の生活のなかで重要な位置を占めるようになるにしたがって、仕事仲間としてのアイヌの人々との交流を維持することは好悪だけではなく必要なことにもなっていくだろう。30代になると徐々に家庭をもつ者が増え、壮年層では、働き盛りの世代としての職場の付き合いと地域の一員としての近所付き合いが重視されるようになる。同じ地域住民として、あるいは近隣住民として、アイヌの人々とも親しく交流することが求められるだろう。老年層は退職世代であり、あるいは就労していても職業中心の生活ではなくなる者が増えるため、職場での付き合いの比重は低下し、近所付き合いや余暇の時間における交流の割合が増える。アイヌの人々との交流は人生の各世代においてこのように変わっていくとみることができる。

では、これらアイヌの人々との交流の多寡を左右する条件としてどのようなものがあるのだろうか。 というのも、この交流は、1点目、近所付き合いという形で展開される場合は、様々な近隣諸関係の ひとつとして位置づけられるという意味において住民の地域参加の仕方と深く関わると考えられ、2 点目として、職場付き合いとしておこなわれる場合は、アイヌの人々が多く就職する、あるいはアイ ヌの人々とともに働く機会の多い仕事であるかどうかが大いに関わると考えられ、3点目として、ア イヌの世界への親近感や知的好奇心によってより積極的に取り組まれるとすれば、アイヌ文化の体験 の有無や体験したいという意欲の程度、アイヌ文化の知識の程度とも関わると考えられるからである。 まず、1点目についてみる。交流のありようを、「近所の人たちとの交流」「地域の自治会活動や行 事への参加」といった地域の諸活動と関わらせてみると(表6-22、表6-23)、青年層においては それほどクリアに違いが表れないが、壮年層と老年層においては、互いの家を行き来するような親し い近所付き合いをしている者はアイヌの人々との交流も多い傾向にあることは明らかである。近隣に アイヌの人々が居住しているという環境を考えるなら、これは当然といえるだろう。また、自治会活 動への積極度との関連をみると、これについても、壮年層と老年層では、近所付き合いと同様に、活 動に積極的に参加する者ほど「交流がよくある」「たまにある」の比率は高くなる傾向がうかがえる。 その際、交流が女性が中心となって担われていること(表6-24)は、生活場面での交流では「主婦」 が活躍する余地が大きいことを意味するが、老年層、すなわちリタイヤ層においては男性の参加が女 性と並ぶほどに増える点も注目される。これは、男性が「地域デビュー」すること、それまでの職場 付き合いが退職後は近隣の友人としての付き合いに移行することが理由と考えられる。

さらに、地域活動とはいえないが、地域への思いという意味での定住志向との関連をみると、定住 志向が強いほどアイヌの人々との交流が多い傾向がある(表 6 - 25)。近隣と友好的な交流関係をも つことが、この地に長く居住し、今後も引き続き居住したいと考える者にとっては、必須の課題であ ることは間違いない。「家や土地があるからここを離れられない」という理由は、ここを自分の土地と思い定めているとも諦めているとも受け取れるが(青年層46.3%、壮年層66.4%、老年層68.4%)(表6-26)、離れがたいということはこの地が気に入っているからでもあり、3世代のうちもっとも定住志向の強い老年層において、新ひだか町に対する肯定的な感情はもっとも強い(表6-27)。したがって、とくに老年層としては、自身が将来とも暮らしていくであろう居住環境の整備の一環として、アイヌの人々との交流関係への関心がもたれている現実があると推察される。

続いて2点目について考察する。交流のあり方と職業との関係をみると、ホワイトカラーに分類される職業とブルーカラーに分類される職業とでは異なる傾向が認められる。すなわち、世代に共通する点として、販売的職業、技能工・生産工程に関わる職業、運輸・通信的職業、農林水産的職業、サービス的職業のような、ものを作る、運ぶ、売るといった体を動かす類の仕事に就く者においては、ホワイトカラーの職業従事者よりも交流の頻度が高い(表6-28)。これらの職業においては、アイヌの人々と同僚あるいは同業者となる可能性が高いということであり、そこにおいて自然に仕事仲間としての交流が始まると考えることができる。一方、ホワイトカラーである事務的職業に就く者においては、交流が「よくある」から「ほとんどない」まで回答が散在しているものの、「ほとんどない」の比率が比較的高いことが指摘されよう。また、同じくホワイトカラーである専門・技術的職業と管理職については、世代が上がると交流頻度が高くなるが、このことは、アイヌの人々を雇用・指導・監督する立場としての付き合いが増えることを意味すると考えられる。

最後に3点目について。まず、アイヌ文化についての知識、アイヌ文化の体験、アイヌ文化の体験 希望について問うた結果を掲げる。すると、アイヌ文化で知っているものがあるという者は青年層 40.7%、壮年層48.4%、老年層60.1%、アイヌ文化の体験有の者は青年層6.1%、壮年層15.2%、老年層 24.7%、今後アイヌ文化を体験したいという者は青年層11.9%、壮年層15.5%、老年層20.8%である(表6-29、前掲表6-10、表6-30)。これらの回答結果をアイヌの人々との交流のあり方と関わらせてみる(表6-31~33)。すると、アイヌ文化についての知識がある者、アイヌ文化の体験をしたことがある者、将来アイヌ文化を体験したいという希望をもっている者において、それぞれより頻繁な交流がおこなわれている。もとより、近所付き合いや職場付き合いという形での交流は、どちらかといえば、必要に迫られて開始される類の交流である。しかしながら、交流を継続させる基盤として、相手への興味・関心の有無は重要と考えられるのであり、「交流がよくある」層はこうした知的な部分に支えられているとみることができる。

上記 $1 \sim 3$ 点に関してアイヌ系住民をみると、近所の人たちとの交流や地域の自治会・行事への参加に積極的であるほど、そして、アイヌ文化に関する知識・体験・体験希望をもつ者において、そうではない者に比して交流が多いという結果である。ただし、アイヌ文化の知識・体験・体験希望の有無についていえば、和人においては、それらをもたないことが直ちに交流から遠ざかってしまうのに対して、アイヌ系住民においては、和人と比較すれば、知識・体験・希望の有無にかかわらず一定の交流は保持される傾向があるといえそうである(表 $6-34\sim36$)。

以上、日常生活におけるアイヌの人々との交流の様子をみてきた。整理すると5点にまとめられる。 1点目は、世代が高いほどアイヌの人々との交流が多く、青年層の交流活動は低調であること。2点目は、近隣での社交活動の主役は壮年・老年層であり、近所付き合いや自治会活動に積極的に参加す る者、定住志向が高い者において相対的にアイヌの人々との交流が盛んであること。3点目は、職業によってアイヌの人々との職場付き合いの程度に違いがあること。4点目は、アイヌ文化についての知識や体験をもつ者、アイヌ文化の体験希望をもつ者において交流が多いこと。5点目は、アイヌ系住民においても、和人住民同様に、アイヌ文化に関する知識・体験・体験希望をもつ者において交流が多いことである。

しかし、友人関係のように「求めて築かれ、解消も自由な交流」とは異なり、近隣関係や職場関係の交流は「嫌ならやめる」ことがそれほど容易ではない。交流の相対的な多さが差別意識の相対的な少なさを必ずしも意味するわけではない点に注意が必要であると思われる。

表 6-17 アイヌの人々との交流

| | | 0.51 | | | |
|----------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|---------------------------------------|
| | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | 合計 |
| 青年 壮年 老年 | 14(15.9) 47(25.4) 64(27.4) | 12(13.6) 58(31.4) 87(37.2) | 16(18.2) 32(17.3) 43(18.4) | 46(52.3) 48(25.9) 40(17.1) | 88(100.0) 185(100.0) 234(100.0) |
| 合計 | 125(24.7) | 157(31.0) | 91(17.9) | 134(26.4) | 507(100.0) |

P<.001

表6-18 アイヌの人々との交流 (アイヌ性別)

| | | | 度数 | (%) | | 승計 | | |
|----|-------|----------|----------|----------|----------|------------|--|--|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | 合計 | | |
| 青年 | 和人 | 13(15.3) | 12(14.1) | 16(18.8) | 44(51.8) | 85(100.0) | | |
| | アイヌ | 1(33.3) | 0(0.0) | 0(0.0) | 2(66.7) | 3(100.0) | | |
| 壮年 | 和人 | 45(24.9) | 58(32.0) | 30(16.6) | 48(26.5) | 181(100.0) | | |
| | アイヌ | 1(50.0) | 0(0.0) | 1(50.0) | 0(0.0) | 2(100.0) | | |
| | 和人配偶者 | 1(100.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | | |
| | 和人養子 | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | | |
| 老年 | 和人 | 56(25.5) | 82(37.3) | 42(19.1) | 40(18.2) | 220(100.0) | | |
| | アイヌ | 7(53.8) | 5(38.5) | 1(7.7) | 0(0.0) | 13(100.0) | | |
| | 和人養子 | 1(100.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | | |

n.s.

表6-19 近所の人たちとの交流の程度

| | | 合計 | | | | | | |
|----------------|------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|------------------------------|---------------------------------------|--|--|--|
| | つきあいなし | 道で会えば挨拶程度 | 会った際に世間話 | 互いの家を行き来 | | | | |
| 青年 壮年 老年 | 10(11.5) 8(4.3) 6(2.5) | 53(60.9) 93(49.5) 70(29.5) | 21(24.1) 78(41.5) 122(51.5) | 3(3.4) 9(4.8) 39(16.5) | 87(100.0) 188(100.0) 237(100.0) | | | |
| 合計 | 24(4.7) | 216(42.2) | 221(43.2) | 51(10.0) | 512(100.0) | | | |

P<.001

表6-20 自治会活動への参加

| | | 合計 | | | |
|----------------|--------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------------|
| | 積極的に参加 | ある程度参加 | あまり参加しない | まったく参加しない | 日日 |
| 青年 壮年 老年 | 6(6.8) 37(19.7) 65(27.2) | 23(26.1) 76(40.4) 141(59.0) | 22(25.0) 46(24.5) 23(9.6) | 37(42.0) 29(15.4) 10(4.2) | 88(100.0) 188(100.0) 239(100.0) |
| 合計 | 108(21.0) | 240(46.6) | 91(17.7) | 76(14.8) | 515(100.0) |

P<.001

表6-21 アイヌの人々との交流の内容 (複数回答)

| | | | 度 | 数(応答者数の% | 6) | | | |
|----------------|---------------------------------|----------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|----------------------------|----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------------|
| | 近所付き合い | 職場付き合い | 趣味の付き合い | 子どもを介し た付き合い | インターネット | 学生時代 | その他 | 合計 |
| 青年 壮年 老年 | 9(28.1) 51(45.1) 82(50.0) | 16(50.0) 51(45.1) 48(29.3) | 4(12.5) 17(15.0) 41(25.0) | 4(12.5) 30(26.5) 10(6.1) | 0(0.0) 0(0.0) 0(0.0) | 12(37.5) 41(36.3) 26(15.9) | 7(21.9) 18(15.9) 23(14.0) | 32(100.0) 113(100.0) 164(100.0) |
| 合計 | 142(46.0) | 115(37.2) | 62(20.1) | 44(14.2) | 0(0.0) | 79(25.6) | 48(15.5) | 309(100.0) |

表6-22 アイヌの人々との交流×近所の人たちとの交流

| | | | 度数 (%) | | | 合計 |
|----|----------|----------|----------|----------|----------|------------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | |
| 青年 | 近所付き合いない | 1(10.0) | 1(10.0) | 2(20.0) | 6(60.0) | 10(100.0) |
| | 道で挨拶程度 | 6(11.3) | 7(13.2) | 12(22.6) | 28(52.8) | 53(100.0) |
| | 会った際に世間話 | 5(23.8) | 4(19.0) | 2(9.5) | 10(47.6) | 21(100.0) |
| | 互いの家行き来 | 1(33.3) | 0(0.0) | 0(0.0) | 2(66.7) | 3(100.0) |
| 壮年 | 近所付き合いない | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 8(100.0) | 8(100.0) |
| | 道で挨拶程度 | 22(23.9) | 31(33.7) | 16(17.4) | 23(25.0) | 92(100.0) |
| | 会った際に世間話 | 21(28.4) | 24(32.4) | 14(18.9) | 15(20.3) | 74(100.0) |
| | 互いの家行き来 | 3(33.3) | 3(33.3) | 2(22.2) | 1(11.1) | 9(100.0) |
| 老年 | 近所付き合いない | 2(33.3) | 1(16.7) | 0(0.0) | 3(50.0) | 6(100.0) |
| | 道で挨拶程度 | 11(15.9) | 24(34.8) | 13(18.8) | 21(30.4) | 69(100.0) |
| | 会った際に世間話 | 35(29.7) | 45(38.1) | 23(19.5) | 15(12.7) | 118(100.0) |
| | 互いの家行き来 | 16(42.1) | 15(39.5) | 6(15.8) | 1(2.6) | 38(100.0) |

表6-23 アイヌの人々との交流×自治会活動への参加

| | | | 度数 | (%) | | 合計 |
|----|----------|----------|----------|----------|----------|------------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | |
| 青年 | 積極的に参加 | 1(16.7) | 1(16.7) | 1(16.7) | 3(50.0) | 6(100.0) |
| | ある程度参加 | 5(21.7) | 3(13.0) | 5(21.7) | 10(43.5) | 23(100.0) |
| | あまり参加せず | 4(18.2) | 4(18.2) | 4(18.2) | 10(45.5) | 22(100.0) |
| | まったく参加せず | 4(10.8) | 4(10.8) | 6(16.2) | 23(62.2) | 37(100.0) |
| 壮年 | 積極的に参加 | 12(33.3) | 12(33.3) | 7(19.4) | 5(13.9) | 36(100.0) |
| | ある程度参加 | 21(28.8) | 26(35.6) | 11(15.1) | 15(20.5) | 73(100.0) |
| | あまり参加せず | 9(19.6) | 13(28.3) | 10(21.7) | 14(30.4) | 46(100.0) |
| | まったく参加せず | 5(17.9) | 5(17.9) | 4(14.3) | 14(50.0) | 28(100.0) |
| 老年 | 積極的に参加 | 18(27.7) | 29(44.6) | 9(13.8) | 9(13.8) | 65(100.0) |
| | ある程度参加 | 37(27.0) | 53(38.7) | 29(21.2) | 18(13.1) | 137(100.0) |
| | あまり参加せず | 8(38.1) | 4(19.0) | 4(19.0) | 5(23.8) | 21(100.0) |
| | まったく参加せず | 1(10.0) | 1(10.0) | 1(10.0) | 7(70.0) | 10(100.0) |

表 6-24 アイヌの人々との交流×性別

| | 度数 (%) | | | | | |
|---------------------------------------|--------|----------|----------------|----------|----------|------------|
| | | よくある | よくある たまにある あまり | | ほとんどない | 合計 |
| 青年 | 男性 | 9(20.5) | 6(13.6) | 9(20.5) | 20(45.5) | 44(100.0) |
| | 女性 | 5(11.4) | 6(13.6) | 7(15.9) | 26(59.1) | 44(100.0) |
| ————————————————————————————————————— | 男性 | 21(23.9) | 26(29.5) | 15(17.0) | 26(29.5) | 88(100.0) |
| | 女性 | 26(26.8) | 32(33.0) | 17(17.5) | 22(22.7) | 97(100.0) |
| 老年 | 男性 | 29(25.4) | 50(43.9) | 16(14.0) | 19(16.7) | 114(100.0) |
| | 女性 | 35(29.2) | 37(30.8) | 27(22.5) | 21(17.5) | 120(100.0) |

表6-25 アイヌの人々との交流×定住志向

| | | | 度数 | (%) | | 合計 |
|----|---------|----------|----------|----------|----------|------------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | |
| 青年 | ずっと住みたい | 10(26.3) | 5(13.2) | 6(15.8) | 17(44.7) | 38(100.0) |
| | 移りたい | 2(14.3) | 2(14.3) | 2(14.3) | 8(57.1) | 14(100.0) |
| | 移る予定あり | 0(0.0) | 3(27.3) | 3(27.3) | 5(45.5) | 11(100.0) |
| | わからない | 2(8.3) | 2(8.3) | 5(20.8) | 15(62.5) | 24(100.0) |
| 壮年 | ずっと住みたい | 31(29.2) | 38(35.8) | 16(15.1) | 21(19.8) | 106(100.0) |
| | 移りたい | 8(29.6) | 6(22.2) | 5(18.5) | 8(29.6) | 27(100.0) |
| | 移る予定あり | 2(18.2) | 2(18.2) | 2(18.2) | 5(45.5) | 11(100.0) |
| | わからない | 5(12.8) | 12(30.8) | 9(23.1) | 13(33.3) | 39(100.0) |
| 老年 | ずっと住みたい | 59(29.9) | 77(39.1) | 31(15.7) | 30(15.2) | 197(100.0) |
| | 移りたい | 2(18.2) | 1(9.1) | 3(27.3) | 5(45.5) | 11(100.0) |
| | 移る予定あり | 1(33.3) | 1(33.3) | 0(0.0) | 1(33.3) | 3(100.0) |
| | わからない | 2(9.1) | 7(31.8) | 9(40.9) | 4(18.2) | 22(100.0) |

表 6-26 定住志向 今の場所にずっと住みたい理由 (複数回答)

| | | 度数(応答者数の%) | | | | | |
|----------------|----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|-----------------------------|---------------------------------------|
| | 生活環境がよい から | 人間関係がよいから | 親の面倒をみる ため | ここに土地や家 があるから | 職場や学校が近 いから | その他 | 合計 |
| 青年 壮年 老年 | 14(34.1) 46(41.8) 94(45.6) | 8(19.5) 20(18.2) 34(16.5) | 12(29.3) 39(35.5) 11(5.3) | 19(46.3) 73(66.4) 141(68.4) | 18(43.9) 25(22.7) 10(4.9) | 4(9.8) 3(2.7) 13(6.3) | 41(100.0) 110(100.0) 206(100.0) |
| 合計 | 154(43.1) | 62(17.4) | 62(17.4) | 233(65.3) | 53(14.8) | 20(5.6) | 357(100.0) |

表6-27 新ひだか町について感じること 「とてもそう思う」「ある程度そう思う」の合計

| | 度数 (%) | | | | | | |
|----|----------------|------------------|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| | 住民のまとまり が強い | 新しい住民も 馴染みやすい | 自由にものが 言える | 日常的付き合い がさかん | 文化・習慣を 大事にする | 昔からの住民 の意見強い | 新しいものを 取り入れる |
| 青年 | 30(34.1) | 45(51.2) | 30(34.1) | 32(36.4) | 43(48.9) | 54(62.0) | 19(21.6) |
| 壮年 | 75(40.8) | 107(58.1) | 76(41.3) | 85(46.2) | 85(46.5) | 116(63.1) | 55(29.9) |
| 老年 | 121(56.5) | 158(70.3) | 132(61.7) | 117(54.4) | 129(60.2) | 104(48.6) | 94(43.5) |

表6-28 アイヌの人々との交流×職業

| | | | 度数 | (%) | | 合計 |
|----|----------|---------|---------|----------|----------|-----------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない |] F [] |
| 青年 | 事務的職業 | 1(7.1) | 4(28.6) | 3(21.4) | 6(42.9) | 14(100.0) |
| | 保安的職業 | 0(0.0) | 0(0.0) | 2(66.7) | 1(33.3) | 3(100.0) |
| | 販売的職業 | 1(14.3) | 2(28.6) | 0(0.0) | 4(57.1) | 7(100.0) |
| | 技能工・生産工程 | 3(60.0) | 0(0.0) | 1(20.0) | 1(20.0) | 5(100.0) |
| | 運輸・通信 | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | 0(0.0) | 1(100.0) |
| | 専門・技術的 | 3(30.0) | 2(20.0) | 2(20.0) | 3(30.0) | 10(100.0) |
| | 管理的 | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| | 農林水産的 | 0(0.0) | 1(20.0) | 0(0.0) | 4(80.0) | 5(100.0) |
| | サービス的 | 1(14.3) | 1(14.3) | 0(0.0) | 5(71.4) | 7(100.0) |
| | その他 | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 3(100.0) | 3(100.0) |
| 壮年 | 事務的職業 | 5(26.3) | 4(21.1) | 1(5.3) | 9(47.4) | 19(100.0) |
| | 保安的職業 | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| | 販売的職業 | 5(27.8) | 8(44.4) | 3(16.7) | 2(11.1) | 18(100.0) |
| | 技能工・生産工程 | 1(12.5) | 5(62.5) | 0(0.0) | 2(25.0) | 8(100.0) |
| | 運輸・通信 | 1(16.7) | 4(66.7) | 0(0.0) | 1(16.7) | 6(100.0) |
| | 専門・技術的 | 7(35.0) | 2(10.0) | 7(35.0) | 4(20.0) | 20(100.0) |
| | 管理的 | 2(25.0) | 4(50.0) | 2(25.0) | 0(0.0) | 8(100.0) |
| | 農林水産的 | 2(15.4) | 5(38.5) | 3(23.1) | 3(23.1) | 13(100.0) |
| | サービス的 | 6(33.3) | 5(27.8) | 2(11.1) | 5(27.8) | 18(100.0) |
| | その他 | 1(33.3) | 1(33.3) | 1(33.3) | 0(0.0) | 3(100.0) |
| 老年 | 事務的職業 | 2(22.2) | 3(33.3) | 1(11.1) | 3(33.3) | 9(100.0) |
| | 保安的職業 | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | 1(100.0) |
| | 販売的職業 | 2(33.3) | 1(16.7) | 2(33.3) | 1(16.7) | 6(100.0) |
| | 技能工・生産工程 | 2(20.0) | 4(40.0) | 2(20.0) | 2(20.0) | 10(100.0) |
| | 運輸・通信 | 1(20.0) | 4(80.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 5(100.0) |
| | 専門・技術的 | 4(44.4) | 3(33.3) | 0(0.0) | 2(22.2) | 9(100.0) |
| | 管理的 | 1(20.0) | 2(40.0) | 1(20.0) | 1(20.0) | 5(100.0) |
| | 農林水産的 | 7(36.8) | 8(42.1) | 4(21.1) | 0(0.0) | 19(100.0) |
| | サービス的 | 3(20.0) | 7(46.7) | 2(13.3) | 3(20.0) | 15(100.0) |
| | その他 | 2(28.6) | 2(28.6) | 2(28.6) | 1(14.3) | 7(100.0) |

表6-29 アイヌ文化の知識の有無

| | 度数 | (%) | 合計 | |
|----|------------|------------|------------|--|
| | 知っているものがある | 知っているものはない | | |
| 青年 | 35(40.7) | 51(59.3) | 86(100.0) | |
| 壮年 | 88(48.4) | 94(51.6) | 182(100.0) | |
| 老年 | 128(60.1) | 85(39.9) | 213(100.0) | |
| 合計 | 251(52.2) | 230(47.8) | 481(100.0) | |

P<.01

表6-30 アイヌ文化の体験希望の有無

| | 度数 | (%) | 合計 | |
|----------|----------------------|------------------------|--------------------------|--|
| | 体験・参加を希望 | 体験・参加を希望せず | िं ही | |
| 青年 | 10(11.9) | 74(88.1) | 84(100.0) | |
| 壮年 老年 | 26(15.5) 33(20.8) | 142(84.5) 126(79.2) | 168(100.0) 159(100.0) | |
| 合計 | 69(16.8) | 342(83.2) | 411(100.0) | |

n.s.

表 6-31 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の知識の有無

| | | | 度数 (%) | | | | |
|----|-------|----------|----------|----------|----------|------------|--|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | | |
| 青年 | 知っている | 7(20.6) | 6(17.6) | 11(32.4) | 10(29.4) | 34(100.0) | |
| | 知らない | 7(13.7) | 6(11.8) | 5(9.8) | 33(64.7) | 51(100.0) | |
| 壮年 | 知っている | 27(31.4) | 27(31.4) | 16(18.6) | 16(18.6) | 86(100.0) | |
| | 知らない | 18(19.8) | 29(31.9) | 15(16.5) | 29(31.9) | 91(100.0) | |
| 老年 | 知っている | 41(33.3) | 41(33.3) | 21(17.1) | 20(16.3) | 123(100.0) | |
| | 知らない | 18(22.2) | 31(38.3) | 14(17.3) | 18(22.2) | 81(100.0) | |

表6-32 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験の有無

| | | | 合計 | | | |
|----|---------|----------|----------|----------|----------|------------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | ПП |
| 青年 | 体験・参加有 | 1(20.0) | 2(40.0) | 1(20.0) | 1(20.0) | 5(100.0) |
| | 体験・参加なし | 11(14.5) | 9(11.9) | 15(19.7) | 41(53.9) | 76(100.0) |
| 壮年 | 体験・参加有 | 13(50.0) | 5(19.2) | 5(19.2) | 3(11.5) | 26(100.0) |
| | 体験・参加なし | 26(18.6) | 49(35.0) | 22(15.7) | 43(30.7) | 140(100.0) |
| 老年 | 体験・参加有 | 18(40.9) | 15(34.1) | 3(6.8) | 8(18.2) | 44(100.0) |
| | 体験・参加なし | 35(24.2) | 46(35.9) | 26(20.3) | 25(19.5) | 128(100.0) |

表6-33 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験希望の有無

| | | | 合計 | | | |
|----|------|----------|----------|----------|----------|------------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | 日前 |
| 青年 | 希望あり | 4(40.0) | 0(0.0) | 1(10.0) | 5(50.0) | 10(100.0) |
| | 希望なし | 8(11.0) | 11(15.1) | 15(20.5) | 39(53.4) | 73(100.0) |
| 壮年 | 希望あり | 10(41.7) | 5(20.8) | 4(16.7) | 5(20.8) | 24(100.0) |
| | 希望なし | 26(18.7) | 49(35.3) | 23(16.5) | 41(29.5) | 139(100.0) |
| 老年 | 希望あり | 17(51.5) | 8(24.2) | 3(9.1) | 5(15.2) | 33(100.0) |
| | 希望なし | 27(22.5) | 43(35.8) | 25(20.8) | 25(20.8) | 120(100.0) |

表 6-34 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の知識の有無 (アイヌ性別)

| | | 度数 (%) | | | 1= ^ | |
|-------|-------|----------|----------|----------|----------|------------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | 合計 |
| 和人 | 知っている | 70(29.9) | 70(29.9) | 46(19.7) | 48(20.5) | 234(100.0) |
| | 知らない | 41(18.7) | 66(30.1) | 34(15.5) | 78(35.6) | 219(100.0) |
| アイヌ | 知っている | 6(54.5) | 4(36.4) | 1(9.1) | 0(0.0) | 11(100.0) |
| | 知らない | 1(33.3) | 0(0.0) | 0(0.0) | 2(66.7) | 3(100.0) |
| 和人配偶者 | 知っている | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| | 知らない | 1(100.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) |
| 和人養子 | 知っている | 1(50.0) | 0(0.0) | 1(50.0) | 0(0.0) | 2(100.0) |
| | 知らない | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |

表 6-35 アイヌの人との交流×アイヌ文化の体験の有無 (アイヌ性別)

| | | | - 合計 | | | |
|-------|---------|----------|-----------|----------|-----------|------------|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | |
| 和人 | 体験・参加有 | 29(40.8) | 21(29.6) | 9(12.7) | 12(16.9) | 71(100.0) |
| | 体験・参加なし | 64(19.0) | 103(30.6) | 61(18.1) | 109(32.3) | 337(100.0) |
| アイヌ | 体験・参加有 | 3(75.0) | 1(25.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 4(100.0) |
| | 体験・参加なし | 4(50.0) | 1(12.5) | 1(12.5) | 2(25.0) | 8(100.0) |
| 和人配偶者 | 体験・参加有 | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| | 体験・参加なし | 1(100.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) |
| 和人養子 | 体験・参加有 | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) |
| | 体験・参加なし | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | 0(0.0) | 1(100.0) |

表6-36 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験希望の有無 (アイヌ性別)

| | | 度数 (%) | | | 合計 | | |
|-------|------|----------|-----------|----------|-----------|------------|--|
| | | よくある | たまにある | あまりない | ほとんどない | 合計 | |
| 和人 | 希望あり | 31(45.6) | 13(19.1) | 8(11.8) | 16(23.5) | 68(100.0) | |
| | 希望なし | 56(17.4) | 101(31.4) | 61(18.9) | 104(32.3) | 322(100.0) | |
| アイヌ | 希望あり | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | |
| | 希望なし | 5(50.0) | 2(20.0) | 1(10.0) | 2(20.0) | 10(100.0) | |
| 和人配偶者 | 希望あり | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | |
| | 希望なし | 1(100.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | |
| 和人養子 | 希望あり | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | |
| | 希望なし | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | 0(0.0) | 1(100.0) | |

表6-37 近隣や職場でのアイヌの人々との関わり・交流

| | | ●は和人住民 ■はアイヌ系住民 |
|----|----|--|
| 壮年 | 男性 | ●ここに家を建てたのも別にアイヌの人がいいとか悪いとかということもないし。ここの自治会の人は友達だから。お酒飲んで騒いだ時にアイヌだとかシャモだとかということはありますが、そんな程度で、それを根にもってということも別にありません。(自治会の催しなどが)あります。16日も敬老の日でおじいちゃん、おばあちゃんがけっこういるもんですから、生活館に集まって、みんなでお祝いをしました。50軒のうち、30軒くらいしか来ていなかったけれど、そのうちアイヌの軒数が4軒か5軒くらいは来ていましたから。別にここのうちらの自治会ではそういうアイヌだとか和人とかという意識はないから、みんな毎日会っているからさ。若い頃から、ここの家を建てる前からここの自治会にはいたんですよ、僕。そうなんだけど、それで町に家を建てようかと思ったけれど、ここ安く売ってあげるから、ここで家を建てれよ、となって、それで。別にアイヌだからどうだこうだということはいっさいないですね。 |
| | 女性 | ●(職場の病院では)アイヌの人とアイヌじゃない人のすごい差があって、薬自体が、薬を包む薄い四角い薬包紙っていうのが、昔あったのね。その薬包紙すらもアイヌにはくれないの。普通の人達にはくれるの。持っておいでって、すごい差別だったの。袋も全然なし。すごいやっぱり差別がひどかったみたい。…アイヌの友達はいるの。一緒に買い物したり、お食事したりしているけど、あらそうおっていう感じの人もいるんだよね。○○の一緒に働いていた人に「疎いね」って私は言われるんだよね。「どこが」って言うんだけど。年を取ったらわからないんだよね。髪も白いし、そんなふうに見えないんだけど。でも、まわり近所を見たら、ぐるっと、アイヌはいるんですよ。でも、あんまり、そういうことを気にする人もいるし、気にしない人もいるから、あまりおおっぴらに言えないんだよね。気にしている人もいるし。どこまで、そこのところはデリケートな部分だから、言えないんだよね。どこまで、どうやって言っていいのかっていうのがね。となり近所だし。●この辺では、もう、そういう人たちのこと、私達の母の世代は嫌いだ、嫌だって言いますけど。結婚する時に、頼むからやめてくれと言われたことはありますけど。でも私達の代はもうわかる人のほうが少ない。そうかなっていうくらいだから。だから、本当に毛深いなとかむこうかなと思っている人でも全然関係なくお友達にはなれるかな。…本当にお友達のお友達から、こうなんか誘われて、それでもって、お友達になった方なんだけど。…その時にはほんとに「偏見ないの」というふうには言われましたね。私は「ない」と言ったら、「変な人」って言われましたけど、それはすごい印象に残っています、変な人と。でも、すごく一生懸命生きていて、貧しくもないし。だんなさんも一生懸命働いていて。普通の人。全然、私達よりすごい勤勉な人って、思っていましたね。 |
| 老年 | 男性 | ■仕事をして行く上で大変なのは田舎なので普通に人間関係くらい。アイヌということは関係がない。 ■教員をしている時にアイヌの子どもたちがクラスにはいた。○○時代は○○にコタンがあるので、中学校の受け持ちの生徒にアイヌはいたけれど、差別はなかったと思う。教員をしていた最後の1年間は○○中学校で働いた。○○という姓が多かった。先生のなかに和人には温かく、アイヌの子に冷たいという傾向があった。アイヌの子は全体の3分の1から半分はいたかもしれない。同じことをしても、和人は怒られないけれど、アイヌの子は怒られるということがあった。自分はアイヌの肩をもつわけではなかったが、アイヌも和人も平等と考えていた。和人で一番優秀な子がいたずらをしたことがあった。自分は教員生活でげんこつを食らわせることはめったになかったが、その時にげんこつを食らわせた。すると、アイヌの子に喜ばれ、今までそんなことをしてくれた先生はいないと言って、アイヌの子とも達の人気者になった。 ● (自分の会社では現在アイヌの血筋の者を3人雇っている関係もあり)必ずカムイノミには鮭が必要だから、それは毎年うちで出している。寄付したり、安く。今はもう寄付とかは今はだめになっていて、そういうのはだめだということで、ある程度お金はいただかないと出せませんから。(寄付はだめだが)現実的には部落の行事があったら酒の一本でも出せと強要されるし。…選挙のこともあるけれど、アイヌの人で建設会社を作っていて、うちあたり、燃料、ガソリンとか、そういうのを現場に運んで行ったり。そういう人が成功しているから、そういう人の会社の新年会に招待されたり、会社の運動会だからと行ったり。選挙ではその人が応援している国会議員を頼むと言われたり。たまに晩一杯飲みに行ったりすると、けっこう従業員でいたり、純粋ではないけど、混血だったり。あとは、うちで使っているから、選挙幹部で親戚の人がいたり。この辺ならごく普通ですね。日常。好んでも好まなくても。油入れに来たとか魚買いに来たとか。町内会もあるし。あんまり気になるようなことはないですけどね。 ● 9月の23日頃、イチャルパ、シャクシャイン祭りに、行くのさ。何年もやったことあるよ。したらね、そこでは終わったら酒はあんまり飲まないんだ。自分ら部客に帰ってきたら、飲むのさ。したら、喧嘩が始まるんだ、仲間同士で、「運転手さんも終わったら来てくれ」と言われるんだ。行かないと怒るんだわ。「アイヌのめがからあんた、きたないと思って食わないのか」とかね、おおもので、それなのたりまた。今もまだ最初に教えた子どもと付き合っていますよ。もう65過ぎていますけどね。だから、初めからそういう感じは何もないですね。みんな平等で、たまに会ってもね、一緒に一杯飲んで、騒いで、カラオケに行って、だから、そんな感じは何もないですね。 |

- ●私はそれなりのおつきあいはございます。アイヌという言葉それ自体を、要するに本当に同化がされていますんで、本当に アイヌという血筋の方はいらっしゃいますけど、なかなか「私はアイヌです」と名乗る方は少ないです。そういうような関 係上、私どももアイヌという言葉を出していいのかどうかというのはあります。私自体はそういうお友達もおりますので、 この方ですと容易にその話はいたします。でも、やはり一般的にそういう話ができるかどうかというのはございますね。そ して、自分たちが「私はアイヌです」と言える方はそういらっしゃいません。この地区では。…私はもともと山林関係の仕 事もしたことがございますので、その時に相当アイヌの人がたが作業に来ておりましたので、そういう関係上アイヌの人が たとおつきあいはするようになりましたね。…〈もう本当に失礼なんですけど、私達こうあんまりないでしょ、私もほんと に若かったから、今になったら失礼なことをしたと思うんですけど、お茶を出したあと、消毒していたの。わからないも ね、普通なんだよ、なんでもないことなのに。こわかったの。やさしんですけど、顔がこわいんですよ。自分も子どもの頃 一緒に遊んでいるのに、大人の人を見た時にすごく怖い感じしてね。でも、そうやって、お話しているうちに盛り上がった りしてね、楽しかったけどね。そんなに悪い人ばっかりいないんだから、良い人もいっぱいいるから。知らないからそうい うことをしてしまって、今になったら、申し訳なかったと思って。陰でそんなことしてね。申し訳ないとは思うけど。今こ こにもおりますよ、たくさん。…妻〉〈私ここの保育所にいたんですけど。その子のお母さんが出してくれたお茶を飲んだ り、お菓子を食べたり、そして、子どもをだっこしたりすると、そのお母さんが「私みたいなのの子どもを大事にしてくれ るんだね」って。「うちに来て、こうやってお菓子食べてくれるんだね」って言われて。「何言ってるの、みんな同じでしょ、 そういう事言わないでちょうだい」って。それからもうすごく子ども達も、私好きなんです、今は。もう、いっつも声掛け するし、あの、うちの阿波踊りやっているけどね、阿波踊りにもいます、そういう人達が。大きなお兄ちゃんにでも、私 ○○○していますから、怒ることはいっぱいありますけど。お母さんが見ていても、子どもも喜んでくれるし、近づけるん ですよね。気持ちをわかってもらえる。言葉で言わなくてもわかってもらえる。この辺ではそういうふうにしておつきあい しています。お父さんも全然そう言う人でないから。…妻〉〈私達家族でつきあっている方がいます。その方は最初は絶対 アイヌということは口にしないし、言われるのも嫌でいたんですけど、お父さんと家族ぐるみのつきあいしていますから、 自分のほうから言う、そして、お父さんとそっちのほうの勉強もしていますから、何でも教えてくれたり、本当にいいお付 き合いしていますけどね。…妻〉
- ●○○時代は、ずいぶんアイヌの人との付き合いはありましたよ。PTAの役員にアイヌのお父さんがなっていて、その子どもが9人いてとか。家内が亡くなった時に○○の見える所に埋めておきたいと思って、そしたら、そのとなりにアイヌの人の父さんが亡くなって墓を作っていたから、うちの墓もついでに作ってねと頼んだのはアイヌの子どもでした。アイヌの子どもといっても教え子ですけどね。…アイヌの当時娘さんが給食を作りに学校にちょっと勤めていて、給食をおばさんとその娘さんとで作っていたんですね。そうすると、学校の教員のなかでもいろいろありまして、今は変わったんでしょうけどね、その当時は「アイヌの作ったものを食べれるか」ということを言うような人がいて。…友達たくさんいるんですよね、アイヌの人でね。詩を書いたり、彫り物したり、そして、文化連盟に所属していて、一生懸命版画で彫って色美しい年賀状をくれたり。静内町の賞を僕もらったりするでしょ。そうするとお祝にね、版画を作って送ってくれたりする。アイヌというとその人の顔を思い浮かべたりする。何か一生懸命生きてきて、全くアイヌの人全般には触れられないけれど、そんな全般はわからなくていいんだ。
- 女性
- ●私はここで生まれ育って、そして借家していた時にアイヌの人が新婚で入って来て、その人達とずっとおつきあいしていて、今でもだから、そこのじいちゃん、ばあちゃんも亡くなったけれど、子どもさんたちとはおつきあいしていますけれどね。この辺はとくに多いところだと、本当にもうひとかたまり。でも、この10年くらいでなくなりましたよね。(10年くらい前は)ある程度の年齢、年の人がいたから、そんな感じはしましたけれども、その娘さん息子さんたちは、普通の人たちと結婚して、そして帰って来てそこで生活するようになったから、もう本当に、そう言われれば今あまりそういう感じはなくなってきている。
- ●ここに、引っ越してきたらね、ここの裏みんなそうなんだよ。半分そう。奥さんがね。〈39年に来た頃。この辺の人なんてずっとほとんど、そうだよ。かたっぽは内地の人たちと結婚して。: 夫〉。内地の人って。そういう人わからないでもらうんだから。だからけっこう多いですよ。だから親戚周りずっと。この間も不幸があったんだけどね。そういう人がたって親戚ってすごく多いのね。となり近所みんな親戚。〈親戚がみんな近いことについては〉いいです?いいかな。悪いかな。善し悪し。あんまりあっても。〈普通の人よりはやっぱり、近所付き合いは、それはあるわな、あの人たちは。あの人達は輪がまるいっていうか、普通の人達は菱形か何かかもしれないけれど、あの人達はまるい。: 夫〉…ほんと、ここに引っ越してきてびっくりしたんだわ。ずっといるんだよ。立派な家に入っていて。立派な家に入って。うちみたいなボロ屋でないんだわ。〈だんながほとんど、ここら辺の人達は内地の人。だんながアイヌという場合もあるけれど、珍しい。アイヌ同士で結婚しているのは、昭和30年40年近くなってからだったら、そんなにいないでないかな。同士で結婚しているのは珍しいよ。女の人はね、外人と結婚するようなもんでよ。: 夫〉
- (町内にアイヌの方は) 住んでいます。普通にお隣同志でお付き合いしている。(アイヌだということは皆知っているのか) そう思いますね。(言葉に出して、ということはあまりないのか) そうですね。
- ●私達ももう農協に買物に行ったって姉の友達にも会うけど、普通どおりに挨拶して話もするし、同級生は「遊びに行くよ」って、普通につきあうから。つまはじきするわけでもないから。普通どおりにいます。常時遊ぶっていったら変ですけど。うちの旦那は同級生とそんなに遊ばないけど、私達はちょこちょこ会いますから、普通どおり、何の偏見もなく接していますから。同じです。何も何かするわけでないもね。
- ●私本当にね、アイヌの子の担任をした記憶ないなあ。担任をずっとしているけど。○○にずっといて、9年担任しているけど。いじめがあって、どうだとか。いましたよ。そういう子、いましたけど、親からあれされたという記憶がないですものね。きっとその時には何代か、あれして来ているから。昔と違って失礼な言い方なんですけど、アイヌっていう感じしましたよね。あの独特のが、ありましたでしょ。今はわからないですよ。ほんとに。生活も全く同じ。ないですね。きっと今ぽっとあってもわからない。いるんですよ。もう何代かにこうやって。

第2項 近隣住民としてのつきあい

次に、インタビューデータより、日常生活においてアイヌの人々とどのような交流がおこなわれているのかをみる(表6-37)。語られているのは、ほとんどが「近所付き合い」としての交流についてである。たとえば、仕事関係の付き合いとしては、自分の会社でアイヌの人々を雇用している関係上、彼らの行事に招かれたり、アイヌの人々が経営する会社との付き合いが生まれたりしたケース(老年男性)、山林関係の仕事をしていたときにアイヌの人々が作業に来ており、そこで付き合いが生まれたケース(老年男性)があげられるが、数としてはわずかなものである3)。

そこで、「近所付き合い」としての交流に焦点を当ててみると、近隣のアイヌの人々との関係については、差別をすることなく、「普通に」付き合っているという趣旨の回答ばかりである。「お酒飲んで騒いだ時にアイヌだとかシャモだとかということはありますが、そんな程度で、それを根にもってということも別にありません」(壮年男性)、「私はここで生まれ育って、そして借家していた時にアイヌの人が新婚で入って来て、その人達とずっとおつきあいしていて、今でもだから、そこのじいちゃん、ばあちゃんも亡くなったけれど、子どもさんたちとはおつきあいしていますけれどね」(老年女性)、「普通にお隣同士でお付き合いしている」(老年女性)といった発言が聞かれる。

このように、アイヌの人々との交流が「普通に」おこなわれる、あるいは、「普通に」おこなわれ ることを後押しする条件・環境としては3点考えられよう。1点目は、個人的な友人関係が成立して いることである。「ここの自治会の人は友だちだから。…別にここのうちらの自治会ではそういうア イヌだとか和人とかという意識はないから、みんな毎日会っているからさ」(壮年男性)、「アイヌの友 だちはいるの。一緒に買い物したり、お食事したり…」(壮年女性)、「同級生は「遊びに行くよ」って、 普通につきあうから。…私達はちょこちょこ会いますから、普通どおり、何の偏見もなく接していま すから。同じです」(老年女性)、「私達家族でつきあっている方がいます。その方は最初は絶対アイヌ ということは口にしないし、言われるのも嫌でいたんですけど、お父さんと家族ぐるみのつきあいし ていますから、自分のほうから言う、そして、お父さんとそっちのほうの勉強もしていますから、何 でも教えてくれたり、本当にいいお付き合いしていますけどね」(老年男性の妻)といった言葉からは、 個別に親しい関係が築かれることがアイヌ全体への偏見や差別へと簡単に巻き込まれないための力と なることがわかる。このことは、いいかえるなら、アイヌの人々の境遇への理解や気遣いが深められ ることである。たとえば、前記の壮年女性は「そういうことを気にする人もいるし、気にしない人も いるから、あまりおおっぴらに言えないんだよね。気にしている人もいるし。どこまで、そこのとこ ろはデリケートな部分だから、言えないんだよね。どこまで、どうやって言っていいのかっていうの がね。となり近所だし」と述べている。

2点目は、この地に暮らす者としてアイヌの歴史を多少とも知っていることである。この地がアイヌの人々にとって先祖代々の土地であるという認識が、いくぶんかは、和人からの排他的な発言の抑止力となっている部分もあると思われる。それをよく示す言葉としては、「アイヌの人にしてみれば、勝手に日本人が北海道の土地をいいように好き勝手に取ったという言い方が正しいかどうかわからないけれど、そう考えて行けば、アイヌの人たちは過去のいきさつからしてもそうだと思う。現実的に北海道の土地を返せと、そんなことにはならないと思うけど」(壮年男性)、「今でもそういう人がたはどっちかというとね、原住民だから。この辺は、結局、明治維新で政府の政策で入植したり、そうするとこの辺は新潟県の方から来たり、淡路島から来たり、福井県、岩手県から来たり、そういうかたまってくるから。そうすると今まで何事もなくアイヌは生活していたんだから」(老年男性)、「やっぱり北海道だけじゃないでしょうけどアイヌの人方ね。やっぱり先住民族だからね。北海道で言うとさ。和人なんかあとからきて、ぶんどっちゃったみたいなところが結構あるわけでね、物の本なんか読んでみますとね」(老年男性)というものがある。

3点目は、アイヌと和人のカップルが増加したことである。「今は混血進んでいるから。純粋なアイヌはいなくなっている。だいたい4分の1とか8分の1とか、半分とか、今わからないね。ちょっと毛深いなとか」(老年男性)といった現状認識が語られる。混血が進んだことにより、「アイヌ」「和人」

という単純な区分の仕方は現実には意味をなさなくなってきている。かつてはアイヌの人々に特徴的とされた生活習慣も、若い世代になるほど、そして混血が繰り返されるほど消えていき、周囲の住民からすれば、アイヌの人々に対して抱かれていた特殊なイメージは薄れていくだろう。また、これまでアイヌ差別のきっかけとしてその特徴的な容貌があげられてきたことを考えるならば、混血により、外見上アイヌの血筋と判別できない人々が出現していることは、容貌を中傷する類の差別的行為を減少させる方向に働くだろうと推察される。

以上、日常生活におけるアイヌの人々との交流の中心は近所付き合いであり、そこにおいては、彼らを特別扱いすることなく、差別することもなく、「普通」の交流がおこなわれている。この「普通」の交流が成立するうえでは3つの条件・環境があると考えられる。1点目はアイヌの人々との間に個人的な友人関係が成立していること。2点目はこの地がアイヌの人々のホームベースであることが知られていること。3点目はアイヌと和人のカップルが増加し、アイヌの人々のとくに容貌に関わる違いが見えなくなりつつあることである。では、近所付き合いとは異なる交流も同様に「普通」におこなわれているのだろうか。

第5節 結婚による結びつき――和人とアイヌのカップルへの眼差し

人と人との交流のあり方には、家族・親族関係の成立とそこで新たに生じる親密・濃密な交流も含まれる。最たるものは結婚だろう。結婚はきわめて私的な交流であると同時に、社会的・法的に承認された関係性という意味ではきわめて公的な交流ともいえるのであり、これを問うことによって、住民の本音が浮かび上がることが予想される。

和人とアイヌの結婚の増加傾向については、近隣や職場でのアイヌの人々との関わり・交流(前掲表6-37)が語られるなかでも指摘されており、その語りのなかには、そうした結婚への忌避的感情やアイヌとの結婚を選択する和人に対する「同情」が表明されているものがある。たとえば、「この辺はとくに多いところだと、本当にもうひとかたまり。でも、この10年くらいでなくなりましたよね。(10年くらい前は)ある程度の年齢、年の人がいたから、そんな感じはしましたけれども、その娘さん息子さんたちは、普通の人たちと結婚して、そして帰って来てそこで生活するようになったから、もう本当に、そう言われれば今あまりそういう感じはなくなってきている」(老年女性)、「だんながほとんど、ここら辺の人達は内地の人。だんながアイヌという場合もあるけれど、珍しい。アイヌ同士で結婚しているのは、昭和30年40年近くなってからだったら、そんなにいないんでないかな。同士で結婚しているのは珍しいよ。女の人はね、外人と結婚するようなもんでよ」(老年女性の夫)という発言の細部をみると、和人と結婚することが「普通の人たちと結婚」、アイヌと結婚することが「外人と結婚するようなもん」と表現されている。また、アイヌ女性と結婚する和人男性については「内地の人って。そういう人わからないでもらうんだから」(老年女性)と評されている。こういった言葉は、アイヌの人々を異分子ととらえる感覚をもつ者が存在することを示すものといえる。

ここで重要なのは、それらの住民の態度にみえる二重性、すなわち、周囲のアイヌの人々を特別視することなく、彼らと普通に付き合っていると言いながらも、結婚に関しては否定的であるという点である。そして、その二重性について自身は無自覚、無頓着であるように思われる。この態度は、和人とアイヌの結婚を、一般論としてではなく当事者の問題(住民自身あるいは住民の身内の結婚)と

して問うたときも同様である(表 6-38)。その場合、結婚を望まない・反対する理由を一言でいえば、その結婚によって生きづらさを被りたくない・被らせたくないということになるが、もう少し具体的に示すと3点にまとめられるだろう。

1点目は、いうまでもなく、アイヌ差別がまだ存在することである。ある老年女性は、自分の同僚(和人)がアイヌ男性と結婚しようとしたとき、職場で大問題となり、職場が女性の両親を呼んで結婚をやめるよう説得した一件を挙げて、「表面上は何も言わなくても、仕事の差別とか生活的な差別とか潜在的にあると思いますね」と語る。そうした差別を避けるために、「アイヌはきれいな人が多い」、「アイヌの人に関しては友だちだったら全然気にしない」と言いつつも、こと結婚については「俺自体が結婚しようとは思わなかった。知らないでつきあっていたら一緒になったかもしれないけれど。見た目でアイヌという感じの人と結婚しようとは間違っても一緒になろうとは思わなかった」(老年男性)と述べるのである。また、同じ男性は、自分の娘の結婚についても、「見た目が100%アイヌだなとわかったら、〈ここから出て行きなさい〉と言うだろうね。見た目にあんまりわからないようだったらいいけどね。だからその人がハーフやクォーターだったら許せるけどね。両親がアイヌだったらやっぱりやめておけと言うだろうね」と反対の意志を示している。

2点目は、1点目と深く関わるが、そのカップルの間にアイヌとわかる特徴を備えた子どもが誕生 する可能性があることである。新しい世代(自分の子どもや孫)がそのためにもし差別の対象となり、 苦労することが予想されるなら、その結婚はなされるべきではない、という考え方である。外見を気 にすることは理屈では説明できないところもあり、それゆえに根深い。アイヌの容貌については、「やっ ばり見ているとだんだん出てくるんだよね。年齢とともに、小さい時は全然かわらないかな、可愛い なと思っていても、その人が結婚したとか、年齢、年が経つとなんとなく出てくるもね。性格じゃな くて、顔。顔はやっぱり普通の人とは違う」(老年女性)、「1番目の子どもはわからないけれど、2番 目3番目になったら、はっきり。 どっちかにふられるらしい」(老年女性)といった発言が聞かれる。 「子 ども1人しかつくらなかった。…どっちかにいくかわからないから」(老年女性)といったケースもあっ たという。しかしながら、実際のところ、アイヌの血筋を避けて結婚相手を探すことは可能なのか。 この点については、難しいというのが正直なところであろう。和人とアイヌの血をひく人々はすでに 多くおり、一見してアイヌとはわかりにくい人々も現れているからである。しかし、地元で生まれ育っ た者としては見分けることができる(「私はこういう土地で生まれたので、日高管内で生まれたから わかるけど」(壮年女性))。そして、わからなければわからないまま結婚できるけれども、わかってし まう以上避けようとする気持ちがなくならず、そのことに囚われてしまうというジレンマを抱えるの である。

そして3点目は、アイヌの人々の同化願望が指摘されていることである。この同化願望については、「静内では、私の印象としては、アイヌの方々は、今は、本物でない方が多くなりつつあり、シャモ(和人)と結婚している人が多いです」(壮年女性)という言葉があり、この他、アイヌ系住民である老年男性も「アイヌ民族は内心同化願望をもっている。民族としての誇りをどこにもっているのかな…と思う。アイヌの女性はシャモと結婚するのが願い。アイヌの男性も同じで、同化願望があり、同化する傾向にある」との言葉を残している。ここでは同化願望という語の定義は示されていないが、アイヌの人々の歴史を考えるならば、和人との結婚によって少しでも安定した居場所(差別や差別の構造がもたらす様々な生きづらさのない居場所)を得たいという願いだと理解することができる。アイヌの人々の

側にこうした考え方を認めるならば、和人住民としては防衛的な心情に傾くことも考えられる。

なお、アイヌ系住民(老年男性3人)の妻はいずれも和人であるが、その妻との結婚に際して自分のアイヌ性が問題になったことはなく、娘の結婚に際しても問題になることはなかったと回答している。しかし、「妻にアイヌであることは話したが、何も言われなかった。…妻の親からは何も反対はなかった。…次女が結婚する時に向こうの両親から何か言われるようなことはなかった」という表現をみると、結婚におけるアイヌ性とは、そのことにむやみにふれることなく、「反対しない」という形で承認されてきたものであって、今もまだそういうものであることがわかる。「反対しない」という承認態度の背後には上記のような本音があったということも考えられる。結婚が継続される限り本音が聞かれる機会は少ないだけで、和人とアイヌの結婚をめぐってはつねに複雑な思いが取り巻いていることはたしかといえよう。

以上、和人とアイヌのカップルへの眼差しをめぐっては、「特別視せず普通に付き合う」「結婚はしない・させない」という二重の態度が存在することが示された。理屈、理念、理想としては、当事者の結婚意志を尊重すべきとしながらも、現実問題としてはアイヌの人々との結婚に対して前向きとはいえない態度である。その理由は3点にまとめられる。1点目は、差別が現実に存在すること。2点目は、アイヌとわかる容貌の子どもが誕生する可能性が心配されていること。3つ目は、アイヌの人々の側の同化願望に対する反応である。これは自身あるいは子・孫の結婚というきわめてプライベートな問題であることから、その回答も建前と本音が混在する複雑な思いが込められたものになっているといえるだろう40。

表6-38 結婚に際しての民族性の考慮の有無(自分や家族について、あるいは一般論として)

| | | ●は和人住民 ■はアイヌ系住民 |
|----|----|---|
| 青年 | 男性 | ●全然気にしないですね。 |
| 壮年 | 男性 | ● (結婚時に和人かアイヌかを気にしたことは) それは別にありませんでしたね。 ●いや。死んだ親父よく言っていたな。アイヌの女の人のことをメノコというのだけれど、死んだ親父に「メノコでもいいから再婚するように」と言われた。メノコでもいいから、差別的なことだよね。心の中で冗談じゃないよと言っていたね。すごい差別しているね。潜在的だな。それは。さっきの設間で仲良くしていましたというけれど、普通仲いいけど、別に俺のなかでは、アイヌだから差別したり、いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれないけど、わからないけどさ、記憶にないから。潜在的に別な人というのはあったから、だから、親爺にそう言われても潜在的に冗談じゃないと心の中で蔑視してると思うんだよね。…アイヌの女性が、この子良い子なのになかなか貰い手ないね、かわいそうだよなというのはあったよね。そういう人はやっぱり本州出身の人と結婚するね。 |
| | 女性 | ●わからないね。相手がアイヌかどうかも知らない人がいるんだよ。私はこういう土地で生まれたので、日高管内で生まれたからわかるけど。○○辺りで全然わからないでごく自然に恋愛して結婚して。~の○○だって、奥さんアイヌなんだけど。本人に「今度アイヌの調査来るんだ」と話したんだけど、言っていいのかなと、その人もけっこう嫌がっていたの。やっぱり差別されていたから。こんなこと言っていいのかなと思ったんだけど。その旦那さんの○○という人は普通の人なんだけど、奥さんがアイヌの民族だったの。普通に恋愛してちゃんとやっている。だから、わからない人はわからない。何も気にしない人は気にしない。 ●母は私達にお友達を連れて行っても何も言わなかったけど、結婚する時にはちょっと考えてと言われた。母ってあまり差別のない人だから、そういうことを言わない人なんですけれども、それはちょっと考えてと言われた。母かろいろ差別されていたり、見ているんじゃないでしょうかね。(娘の結婚については)私は別に多分、親は見させてもらいますけど、それは誰を連れてきても多分同じだと思います。でも、そんなんでは。うち、夫もおまえが連れて来た人ならだれでもいいというほうなので。私達がだめだと言っても、多分好きなら一緒になるし、それでもって反対した後に、お父さんとお母さんが反対したから、私達こうなった、別れるとか別れないとか言われるようになった時にそうなったと言われるのもいやだし。選ぶのは娘だと思っているし。そういう意味では誰を連れてきても。でも相手の親はちゃんと見させていただきます。 |
| 老年 | 男性 | ■20歳(昭和28年)の時に妻とは人に紹介されて結婚した。妻の両親がどう考えていたかわからないが、妻は○○に叔父さんがいて、○○のアイヌコタンに何回も行ったことがあり、アイヌのことを若い時から見ていたので、自分がアイヌであることはわかったけれど、気にしていなかったと思う。 |

- ●○○にいる時からアイヌについては知っていた。結婚する時にアイヌかどうかは気にしていた。アイヌとはやばいな、結婚してはいけないなという気持ちはあった。でもつきあったことはある。ものすごくきれいな人だった。アイヌはきれいな人が多い。全然わからない。あれ、と思うくらいきれい。アイヌかなとは思えない人だった。アイヌの人と結婚しようとは思わなかった。…アイヌの人に関しては友達だったら全然気にしない。別に何ということもないし一緒に遊んでいても違和感はない。…結婚だけは。親も結婚はアイヌはやめたほうがいいんじゃないかなと言ったかもしれないし、言ってないかないはっきりしていない。でも俺自体が結婚しようとは思わなかった。知らないでつきあっていたら一緒になったかもしれないけれど。見た目でアイヌという感じの人と結婚しようとは問違っても一緒になろうとは思わなかった。友達付き合いはいますよ。…見た目で気にする。よくアイヌはきたないという人がいる。根性がきたない、ひねくれているという人がいるが、でも俺の友達ではそういう人はいなかった。相手も人を見るしね。…娘がアイヌの友達を連れてきてもなんとも思わないが、結婚すると言ったらちょっと待ってくれやとなる。娘は離婚したが、離婚した相手の兄弟がアイヌと結婚している。別れていなければ親戚になるよね。むこうで親は反対したらしい。それは気にはなるけれど、でも一緒になったら仕方がないね。今からうちの娘が再婚すると言って、見た目が100%アイヌだなとわかったら、「ここから出て行きなさい」と言うだろうね。見た目にあんまりわからないようだったらいいけどね。だからその人がハーフやクォーターだったら許せるけどね。両親がアイヌだったらやっぱりやめておけと言うだろうね。
- ■恋愛や結婚をする時に民族性について特に考慮したことはなく、お嫁さんに来てくれれば誰でもいいと思っていた。母親もそういう考えだった。結婚する前に妻にアイヌであることは話したが、何も言われなかった。妻の親からは、妻が若かったので少し抵抗はあったが、自分がアイヌであることについて何も反対はなかった。…次女が結婚する時に相手にアイヌの血を引いていることを話したかどうかは知らないが、向こうの両親から何か言われるようなことはなかった。
- ●親は感じるかもわからない、本人同士はないんじゃないですか。僕の知っている範囲でも親が反対しているから別に暮らしているという人はいますけどね。どっちかというと男の方がアイヌで嫁さんが日本人というのが多いんじゃないですか。今はほとんど同化してきているから、ちょっとわからないね。アイヌの血が混じっているかどうかわからないね。見ただけでけわ
- ■結婚についてはアイヌ民族かどうかということで気にすることはなかった。妻は○○で生れ、戦争中に疎開して○○に来た。 …アイヌ民族は内心同化願望を持っている。民族としての誇りをどこに持っているのかな…と思う。アイヌの女性はシャモ と結婚するのが願い。アイヌの男性も同じで、同化願望があり、同化する傾向にある。
- ●アイヌの人みんなシャモの奥さんもらうんだよ。シャモの人でもらっている人もいるけど。男も女もそうかもしれないけど、アイヌの人はシャモの人にくっつきたいんだわ。どうしてなのかな。俺の弟だってね。弟の嫁さんアイヌなんだよ。もうくっつきたくて、みんなそれは駄目だと言うわな。反対というよりも、そんなの誰も相手にしなかったわな。知らない間にそうやって、くっついてしまっているから。もちろん、そういう結婚式挙げるわけでもないし。俺らもあんまりわからなかったけど。アイヌの人って、しっつこくね、やっぱりシャモの人がいいのか、しつこく来て来て、そして一緒になったんでないか。俺はあんまりわからないけど、聞きもしないけど。(弟の妻について)くっついたもの。アイヌだからって差別していないよ。普通に。むこうもアイヌのこと言うけど、俺らそういうこと口に出せないしさ。お酒を飲んでいても自分でアイヌのことを言うよ。それを何もどうだとかごうだとか誰も言わないし。昔はそんなこと考えられなかったけどね。昔はアイヌの人が自分でアイヌだと言ったら大変なことになったよ。そんなこと少しでもシャモの人がいったら大変なことになるよ。今はもうたいしてアイヌってね。あんまり今は差別ないんじゃない。
- ●特別ないですね
- ●私はやっぱり、民族が違うからとか、そういう考え方は毛頭ございません。(好きになった人がアイヌかどうかは全く気にしない?) そうですね。(遊ぶお友達はいましたけど。また、そちらの方もそちらの人と一緒になる方が多かったですね。・・・・妻)
- ●前にアイヌの人が食事を作って、学校の給食を作ってくれて、その時に「長男がアイヌの人が好きだったら、お嫁にもらうか」と聞かれて「それでいいと思うよ」とその時言ったんだけどね。今はアイヌだから結婚しないとか、そういうことは問題にならないと思うんだけど。朝鮮の人、中国の人。要するに東南アジアの有色人種の人がずいぶん日本に来て、結婚する時代になっているでしょ。僕らが子どもの頃過ごした時と全く違う。自分の息子や娘が誰を連れてきてもいいと思うね。いいと言ったと思うね。そうでないと自分の中で矛盾してどうもならないね。
- 女性
- ●やっぱり、私はそれまで結婚とかそういう考えていなかったですけれど。いや、よく「こうなんだ。つきあっている人がこういう人なんだけど、なんぼ反対してもね」というのは聞きましたけれど、でも「今の時代はね」と言うと「いや、そうじゃないよ。いつか必ず出るはずだ。」という話はよく聞きましたけどね。でももうこの10年くらいはそういう話はないですよね。民族も何もそれが普通だと思って。(自身の結婚について)いや、それまで考えていなかったですよね。
- ●やっぱり、一緒にはさせたくないね。子ども。子どもは結婚しているから、孫だね。あのね、やっぱり見ているとだんだん 出てくるんだよね。年齢とともに、小さい時は全然かわらないかな、可愛いなと思っていても、その人が結婚したとか、年齢、 年が経つとなんとなく出てくるもね。性格じゃなくて、顔。顔はやっぱり普通の人とは違う。でもれ、最近私はそういう人 達と交流もあって、性格はいいよ。お母さんたちはいいよ。その、子供さ。だから、これから子どもたちはもう結婚してい るけれど。孫がもしアイヌの人を連れてきてもどうだろうね。一緒にさせるかな…ちょっと悩むかな。私もうだいぶ昔から 見ているからね。けっこう交流もあって。やっぱり結婚となったら。普通の交際とかは全然関係ないよ。だけど、結婚となっ たらちょっと考える。…親のほうを見れば、ああやっぱりなと思って。やっぱり、アイヌ同士で結婚しているのではないから、 こうね。薄くなって、若い時ならきれいに見えるからさ。1世、2世になってやっぱり純シャモ?でないからね。
- ●うちの親戚のなかではないと思いますね。昔、○○で仕事をしていた時に同僚だった女性なんですけど、その人は○○の出身なんですよね。地元のアイヌの方とおつきあいして、今結婚しているんですけれども、その事については、職場一同で大問題になりました。30年くらい前でしたが、私はなぜこんなに反対するのかがよくわからなかったんですけど、職場自体はその女性の両親を呼んで説得したりとか。だから、結局、潜在的にそういう差別があるということなんですね。表面上は何も言わなくても、仕事の差別とか生活的な差別とか潜在的にあると思いますね。その時は本当にびっくりしましたね。
- ●偏見でみるということはないよね。私達より上の人は結婚する時にはちょっと言う人はいましたけれども。今はそんなに。何もないね。うちら和人でしょ、だから、両方の親は何も言わなかったし。私の親もちょっと変わっていると言えば変わっているかもしれないけど、1人だけは外国人と結婚しているのがいるから。兄弟の1人が外国人と結婚しているから。外国に今住んでいますけど、だからって反対はしていないから。誰を選ぶというのもそんなに反対しなかったと思いますね。…〈俺らの友達で、いたんだ。だけどその人もアイヌと思わないで結婚しているけど、子ども1人しかつくらなかった。男の子は何ぼか見れば、(アイヌ)かなってわかるけど。したから、どっちかにいくかわからないから。1番目の子どもはわからないけれど、2番目3番目になったら、はっきり。どっちかにふられるらしい。…夫〉

第6節 交流と「共通なるものとしての差異を承認すること」

以上、住民とアイヌの人々との交流のありようをみてきた。上の世代ほどアイヌに関する「記憶」が多いなかで多くの交流をもち、異質な存在との思いや好悪の感情が鮮やかであるのに対して、世代が若くなるとアイヌに関する「学び」が増える一方で交流は低調で、アイヌの人々への強い感情を必ずしももつわけではない、という状況がある。そして、そうした状況において展開される交流とは、「特別視せず普通に付き合う」一方で、「結婚相手としては否定する」という二重の態度に支えられたものであった。

最後に、必要なアイヌ政策を問うた回答結果、すなわち、今後に向けてのアイヌの人々へのスタンスと、アイヌの人々との交流の関わりについて考える。まず、必要なアイヌ施策についての考え方をみると、正しい理解の提供や特別の施策を不要とする考え方については、交流頻度の高低にかかわらず一定の賛同者がいる。しかし、人権尊重の社会の必要性は交流が多い者においてより多く選択される。雇用対策・経済的援助・教育支援など財源が必要なものについても、交流が多いほど必要性が理解されている。交流が相対的に多ければ、差別的状況を見聞きする機会も相対的に増え、支援の必要性への理解が深まるためと思われる(表6-39)。したがって、世代別にみると、老年層(すなわち、交流が相対的に多い年代)においてのみ、これらの項目が選択される比率が高めである(表6-40)。このように、アイヌの人々との交流は彼らが置かれている状況と必要な支援を理解するという意味で一定の意味があるといえる。

しかし、むしろ注目すべきは、「理念として、人権尊重と文化保存と正しい理解の必要には賛成するが、実際に特別扱いすることには反対」という考え方が世代の共通理解としてあることである。そして、アイヌ文化を後世に残す際の主導権のありかについては、アイヌ自身や地域に委ねようとする考え方が年代が下がるほど増えていく(表 6-41)。つまり、ここから引き出せるのは、文化も人権も主導権も尊重するという態度が主流になりつつあること、その態度は今後さらに強調されるようになるだろうということである。

彼らのこうしたスタンスには、スコットの「何かを共有することで成り立つ普遍化すなわち同化を 求めるのではなく、個々人に共通なるものとしての差異を承認する」という視点がみられるようにも 思われる(スコット 2012)。これは、社会においてこの種の問題が注目され、さかんに議論されるよ うになり、国際法上でも先住民の権利が認められるようになってきたという世界的な流れのもとにあ るものといえよう。学校教育において先住民について学ぶ機会が増えたことや教育水準の上昇(とく に若い世代については)、メディアの発達などが有効に働いた結果と考えられる。アイヌの人々の人 権が尊重されず差別が色濃く存在していた時代に比較すれば、よい傾向であることは間違いない。

しかし、アイヌの人々との交流を考えるとき、この現況を無条件に是と判断してもよいのかという 疑問も同時に生じる。すなわち、「差異を認めること」が、結果として、2つの事態を引き起こすと 考えられ、現にそれを思わせるような発言が聞かれるからである。

1点目は、「差異を認めること」がアイヌの人々への関心を弱め、無関心を浸透させ、表面的な交流が主流となることである。もし、同化を必然と考えるならば、同化の対象として、あるいは同化を拒む・同化ができない者を排除の対象として、いずれにしても、アイヌの人々に対して強い関心を抱かざるをえないだろう。これに対して、「差異を認める」という表現は、理念としては、人権尊重・権利回復に向けての積極的な動きをも含めたイメージをまとうものであるが、現実における「差異を

認める」とは、現状を放置する・無視することを容認することにつながる場合も考えられる。「アイヌがこういうことをしたらいいとかとくに何にも思わない。アイヌの人がどうのこうのとかそういうことに関してはいっさい何も思いません」(老年男性)、「(政策について思うことは) いやいや、全然ないです。変わるということもないから。そんなに興味ないから。あんまり考えたことないから」(老年女性) といった発言がある。あるいは、すでに必要な同化が完了しているという理解のもとに、もうこのへんでよいのではないかという意味で同化を求めなくなるだけ、という場合もある。後者はある種の達成感をともなうものであり、インタビューにおいても「すっかり同化している」といった内容の発言が複数聞かれている。「同化政策は完成したとは言わないけれど、成功しているじゃないですか」(壮年男性) といった発言が端的なものである。無関心が民族の自主自立という原則によって「正当化」されるということならば、そこで展開される交流の質もそれを映したものにならざるをえないだろう。

2点目は、1点目とも関わることであるが、「差異を認めること」が「無関心」につながり、その ことがアイヌの人々に対する無自覚の優位意識を固定化することである。つまり、アイヌ問題につい て無関心であることは、和人とアイヌとの交流をフラットなものとして考えることを必ずしも意味し ない。さらにいえば、自分の考え方のなかにこうした優位意識があるかもしれないことに自ら気づく チャンスを失うことである。たとえば、インタビューにおいては、アイヌの人々が和人との結婚を望 んでいるという発言がたびたび聞かれるが、先に指摘したように、そこには、和人優位の意識がある ことは否定できない。この他にも、アイヌの人々との関係を語る言葉には、無自覚ながら和人を上に 置く(置いてしまう)ものがみられる。一例として、「日本の場合はアイヌに対して「この野郎」と 言う人はいないでしょ。むこうはインディアンを一番下に見ているでしょ。白人、黒人、インディア ンだから。こっちはそんなことないでしょ。シャモが上でアイヌが下というふうに思う人はいないと 思う。シャモが上でヘカチが下だということないでしょ。だからみんな一緒だから別に一緒にやりな さいということで。ヘカチと言ったら怒られるもね。…差別的なものはもう今ないんじゃないかと思 うけどね」(老年男性)といった言い方がある。これが差別の自覚なく発言されているとしても、対等 であること・尊重することとの隔たりを感じさせる言葉である。無自覚・無頓着な優位意識がある限り、 「特別視せず普通に付き合う」一方で「結婚相手としては否定する」という交流態度は残っていくと 思われる。

アイヌの系統の住民が望む施策とは人権尊重 (70.6%) に加えての雇用対策 (35.3%)、教育支援 (29.4%)、経済的援助 (17.6%)、補償 (17.6%)であり、主導権というよりは既得権の方に関心があるように思われる (表 6 - 42)。これは住民全体の意識の傾向とは大きく異なるものである。今後、アイヌと和人の混血がいっそう進んでいくなかで、住民vsアイヌの人々という単純な構図で交流を語ることは難しくなるだろう。交流がどのような表現で語られるとき、その内実は両者にとってよりよいものになっているのだろうか。「すべての人に共通なるものこそ差異である」という感覚が本来の意味で浸透し、その感覚が無関心や無自覚の序列意識 (場合によっては、序列意識があるからこその成功者への嫌悪)につながらないようにしていくにはどうすればよいのだろうか。交流を考えるうえで重要な課題である。

表6-39 アイヌの人々との交流×アイヌ施策 (複数回答)

| | | | | 度 | 数(応答者数 | %) | | | | 合計 |
|----------------------------------|--|--|---|--|---|--|--|--|--|---|
| | 人権尊重 | アイヌ語 | 雇用対策 | 教育支援 | 経済的援助 | 補償 | 正しい理解 | 不要 | その他 | (合計数の%) |
| よくある たまにある あまりない ほとんどない | 81(63.8) 90(59.2) 41(47.7) 61(47.3) | 47(37.0) 65(42.8) 35(40.7) 45(34.9) | 19(15.0) 15(9.9) 3(3.5) 13(10.1) | 19(15.0) 16(10.5) 7(8.1) 8(6.2) | 13(10.2) 10(6.6) 2(2.3) 8(6.2) | 14(11.0) 16(10.5) 6(7.0) 8(6.2) | 47(37.0) 69(45.4) 37(43.0) 54(41.9) | 43(33.9) 64(42.1) 31(36.0) 46(35.7) | 16(12.6) 10(6.6) 6(7.0) 11(8.5) | 127(25.7) 152(30.8) 86(17.4) 129(26.1) |
| 合計 | 273(55.3) | 192(38.9) | 50(10.1) | 50(10.1) | 33(6.7) | 44(8.9) | 207(41.9) | 184(37.2) | 43(8.7) | 494(100.0) |

表 6-40 施策 (複数回答)

| | | | | 度 | 数(応答者数) | %) | | | | 合計 |
|----|-----------|-----------|----------|----------|---------|----------|-----------|-----------|----------|------------|
| | 人権尊重 | アイヌ語 | 雇用対策 | 教育支援 | 経済的援助 | 補償 | 正しい理解 | 不要 | その他 | (合計数の%) |
| 青年 | 37(42.5) | 28(32.2) | 6(6.9) | 6(6.9) | 6(6.9) | 9(10.3) | 43(49.4) | 29(33.3) | 12(13.8) | 87(17.2) |
| 壮年 | 91(48.7) | 70(37.4) | 12(6.4) | 10(5.3) | 8(4.3) | 11(5.9) | 76(40.6) | 79(42.2) | 15(8.0) | 187(40.0) |
| 老年 | 151(65.1) | 97(51.8) | 33(14.2) | 35(15.1) | 20(8.6) | 26(11.2) | 94(40.5) | 80(34.5) | 18(7.8) | 232(45.8) |
| 合計 | 279(55.1) | 195(38.5) | 51(10.1) | 51(10.1) | 34(6.7) | 46(9.1) | 213(42.1) | 188(37.2) | 45(8.9) | 506(100.0) |

表6-41 アイヌの歴史や文化の残し方

| | | 度数 | (%) | | 合計 |
|----------------|----------------------------------|-----------------------------------|----------------------------------|----------------------------|---|
| | アイヌ自身で | 日本の国で | 地域毎に | その他 | [] [] [] [] [] [] [] [] [] [] |
| 青年 壮年 老年 | 25(29.4) 47(25.8) 49(22.7) | 22(25.9) 67(36.8) 101(46.8) | 30(35.3) 59(32.4) 58(26.9) | 8(9.4) 9(4.9) 8(3.7) | 85(100.0) 182(100.0) 216(100.0) |
| 合計 | 121(25.1) | 190(39.3) | 147(30.4) | 25(5.2) | 483(100.0) |

P<.05

表 6-42 アイヌ施策 (複数回答) (アイヌ性別)

| | | | | 度 | 数(応答者数) | %) | | | | 合計 |
|------|-----------|-----------|---------|---------|---------|---------|-----------|-----------|---------|------------|
| | 人権尊重 | アイヌ語 | 雇用対策 | 教育支援 | 経済的援助 | 補償 | 正しい理解 | 不要 | その他 | (合計数の%) |
| 和人 | 267(54.5) | 191(39.0) | 45(9.2) | 46(9.4) | 31(6.3) | 43(8.8) | 209(42.7) | 182(37.1) | 42(8.6) | 490(100.0) |
| アイヌ | 12(70.6) | 5(29.4) | 6(35.3) | 5(29.4) | 3(17.6) | 3(17.6) | 6(35.3) | 2(11.8) | 2(11.8) | 17(100.0) |
| 和人妻 | 1(100.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(100.0) |
| 和人養子 | 2(100.0) | 1(50.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 0(0.0) | 1(50.0) | 1(50.0) | 2(100.0) |

第7節 おわりに

この地における住民とアイヌの人々との交流においては、一般社会からの(外界からの)眼差し、同じ地域に暮らす者としての眼差し、加えては、血筋がもたらす眼差し、という3つの眼差しの混交や交錯がみられる。個々の地域住民は、自身のもつ多様な条件に規定されながら、これらのバランスを時々の状況に合わせてアレンジし、自身の立ち位置をつねに調整しつづけなければならない。そして、その調整の結果得られる立ち位置は、世代によってどんどん変容していく。

しかしながら、アイヌの人々との、よりオープンで自由で屈託のない交流が展開されるとしても、 その奥底には無関心や和人優位という意識の種が潜んでいる可能性を我々は忘れてはならないだろう。

注

1)近所の人との交流については、「道で挨拶」「世間話」など具体的な選択肢が提示されているのに対

して、アイヌの人々との交流については、「よくある」「たまにある」というような主観的なものさしでその頻度をたずねており、何をしたら交流頻度が高いことになるのかについては個々の判断に委ねられている。「交流」という語から何がイメージされるのかは世代によって異なることも考えられるため、この点についてはさらに探る必要があろう。

- 2)インタビュー中、アイヌ系住民はいずれも近所付き合いに関する発言をとくにしていない。
- 3)アイヌ文化を体験しながらの交流としては、熊猟の後に誘われて一緒に酒を飲んだこと(壮年男性)、シャクシャイン祭りで炭火焼のアキアジを買い、アイヌの儀式を見たこと(老年女性)、展示会に行ってアイヌ刺繍を体験したこと(老年女性)などがあげられている(表 6 43)。その体験については、アイヌの人々と回し飲みをした壮年男性は「初めての時はやっぱり凄いなと思いましたね。凄いとしか思いませんでしたよ」と感想を述べ、シャクシャイン祭りに出かけた老年女性の夫は「静内の酋長と、阿寒とか向こうの酋長みたいのとか、そういう人が来るんだ。かなりの人だよ。始まった時だったら。アイヌの人ばっかり。アイヌはやっぱりな、話の種にもなるし、若いうちから1回くらいは見といてもためになることだと思うよ」と語る。その語り口をみる限り、一回性の異文化体験の思い出として記憶されるにとどまるものも多いように思われる。
- 4)自身のなかにある二重性に気付いたという例もごくわずかながらある。離別経験のある壮年男性は、 父親から「メノコでもいいから再婚するように」と言われたときの自分の反応を思い出し、「心の 中で冗談じゃないよと言っていたね。すごい差別しているね。潜在的だな。それは。さっきの設問 で仲良くしていましたというけれど、普通仲いいけど、別に俺のなかでは、アイヌだから差別したり、 いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれないけど、わからないけどさ、記憶にないから。 潜在的に別な人というのはあったから、だから、親爺にそう言われても潜在的に冗談じゃないと心 の中で蔑視してると思うんだよね」と語っている。

表6-43 アイヌ文化についての知識・体験・体験希望

| | | ●は和人住民 ■はアイヌ系住民 |
|----|----|--|
| 壮年 | 男性 | ●ここにいたら、そういうふうにアイヌの人達が熊獲ったから、酒飲みに来ないかと誘われて、その時に初めて、そういうアイヌ文化を知るようになった。15年くらい経つかな。熊の頭の毛を剃って、脳みそを出して、窓にかけて、これが本当のあれなのかなと思いながら、みんなで回し飲みして、一応それなりにちゃんとお祈りする人もいましたんでね。初めての時はやっぱり凄いなと思いましたね。凄いとしか思いませんでしたよ。(やってみたいことは)これっていって。いろいろ、静内で鮭漁を見たことがないんだよね。舟を下ろすのは何回も見ているんだけど。鮭漁はやっていたことはあると思うんだけど、見たことがない。 ●初めて接したのは30数年前で、その時にもうこの地域にいるアイヌの人達とはまったく別な世界と思ったから。昔の伝統芸能とかを守るために日々、このシャクシャイン祭りの前にこの人達訓練、練習してやっているんだなというふうにしか思わなかった。(参加してみたいものはない?)そうですね。 |
| | 女性 | ●あの刺し子はすごいしたいです。ユーカラ織はちょっとできないかな。やっている教室みたいなところに連れて行ってもらったから。アイヌの人達に教えている講座に連れて行ってもらったんです。それは募集しているんじゃなくて、その伝承するために若い人に教えているところをちょっと見学させてもらったんですけど、その時は教えてもらえなかったから。すごい忍耐とか、けっこう厚いものだから、すごい大変な作業なんですよね。すごいやりたいと思っています。 |
| 老年 | 男性 | ■普段実践している、あるいは心がけているアイヌ文化については、日常的ということになると、アイヌというよりは、一地域住民として、人間という立場に立つとみんな同じだと思っている。アイヌというよりは人間としての道を踏み外さないことが大事。…関わってみたいアイヌ文化については、夢見も特に大事にしているわけでもない。人に特にアイヌ文化を説明したりすることは考えていない。 ■普段実践している、あるいは心がけているアイヌ文化は、親から教えられてきていないのでとくにない。料理など、小さい頃に見たことがあるのはいろいろある。アイヌ協会の催しでも見たことがあるものはある。協会でやっているのを暇があれば見に行く程度で、実践している文化はない。自分はこの歳でアイヌ文化をやっていないから、今の若い人でやりたいとか、やっているのは偉いと思う。自分は小さい頃の差別が根にあって消えない。だから、ある意味、そこまで関われるか(関われない)という思いがある。 |

■イチャルパは参加したことはある。イナウは知っている。アイヌ語も知っている。歌や踊りも知っている。体験したいという気持ちはない。仕事で教育委員会に入って社会教育に関わっていた。自分はそれまでアイヌの歌や踊りなど組織化されていなくて、芸能などの催しの時に参加する機会がなかったものを、参加してもらうようにした。アイヌの保存会の立ち上げにかかわった。1971 (昭和46) 年頃だった。

温泉が出来た時に、温泉祭りで踊りなどをする芸能発表会があり、自分は〇〇をやったことがあった。そのお祭りの時にアイヌの歌や踊りを入れるようにした。蓬莱山祭りにもアイヌの歌や踊りを入れた。それまでは公的行事にアイヌ文化を入れたことはなかったと思う。

- ●アイヌの人は鮭いっぴき、ほとんど無駄なく使う。僕らは、たとえば内臓は捨てるといったらおかしいですけど、アイヌの人がたは余すところなく全部食べる。料理になんでも使う。そういう面では今でいう、技術が発達して、冷蔵庫とかが発達してきていますから。保管は冷蔵庫でするとか。その当時の人は技術がないから塩引きにしたり、干して取っておくとか。いらない物いっさいないというそういう生活ですね。今の日本で一網打尽に何でもとって冷蔵庫に貯めておく、年が6年中、アイヌは1いるのなら、1しか取らない。鹿でも熊でも何でも、必要なものを必要なだけしか獲らないから、再生産もできたし。それが、日本人が来て物々交換して。アイヌ勘定があるでしょ。始まりに、真ん中に、終わり、10が13くらいになる。問題は、言葉があるけど文字はないから、そういうのが伝承ができないというのが致命傷だと思うね。
- (カムイノミに) お付き合いの関係から、誘われて参加させていただきました。アイヌの方々も自分たちのことについて、詳しい人、またお付き合いのなかでそういう人と一緒に、というあれはございますね。要するにウタリという感覚がございます。親しい人、和人であっても。私自体も北海道にこうやって住んでいるわけですから。アイヌモシリ、これは尊重しなきゃならないし、そういう観点から接しているもんですから、やっぱりそれなりのあれはしてくれますね。シャモにしておくのもったいないと言われるくらいですから。(将来も)まだまだ勉強してみたいと思います。ある程度、資料を持っていますね。カムイユカラなどアイヌの人にお貸していますね。また、そのうちに戻してもらおうと思っていますけど。

女性

- (アイヌ文化といわれても) 内容は全然わからない。アイヌ文化についてこの辺は全然なかったので、わからないですよ。 ○○○○○あたりでそういう (田植えや稲刈りの時に祈る) 儀式をするような話は聞いたんですけれど、○○あたりではそ ういう人は多かったけれど、もう儀式はなかったですね。何かあったら○○のほうに行っていたのではないでしょうか。… 将来参加したいというのもわからないですね。何年か前にここ○○というところにもアイヌが多いんですよね。亡くなった 時に土葬にするのに、そんなにお付き合いはなかったですけれど、やっぱりこう見ていたら何日もなんかやっていて、うち のここに見える所に町の許可をもらって土葬にしましたけれどね。その人はアイヌの人でも偉い人だったみたい。2,3年 したら柵取ってしまいましたけどね。「あ、いっつも~のじいが見えるわ。」と言いながらね。そこの玄関出たら墓地が見え るんですよ。ここから、ちゃんと土葬にした時はきっちり柵があって、見えるんですよね。この辺では有名な人。
- ●シャクシャイン祭りでアキアジを炭火で焼くんですよ。串に刺して、焼くの。おいしそうでしょ。それを買いにいったのね。 町の祭りとはまた別で。シャクシャインって、そこの山になっているんだよね。そこで、やるんだけど、おもにアイヌの人 が集まって。アイヌの人の儀式だよね。〈だから静内の酋長と、阿寒とか向こうの酋長みたいのとか、そういう人が来るんだ。 かなりの人だよ。始まった時だったら。アイヌの人ばっかり。アイヌはやっぱりな、話の種にもなるし、若いうちから1回 くらいは見といてもためになることだと思うよ。: 夫〉
- ●町のなかで、ちょっとした時にあるのね、そういうの。展示会があって。行ったときにやってみるというような感覚で。時間がある時に、たまたま寄ったら、そういうことをやっていたということで。独特な刺繍ですよね。あれは、さしていくのも。それくらいかな。やっているのは独特だなと思って。あとあのムックリは音を出すのが大変ですよね。…いろいろなことをただちょっとやってみたいだけ。おもしろいかな。のちのち、まだ全然そういうことは出来ないけれど、暇になって、何か出来ればということぐらいかな。

参考文献

Scott, J. W., 2007, *The Politics of the Veil* (Princeton University Press). 李孝徳訳, 2012, 『ヴェールの 政治学』みすず書房.

(小野寺理佳)

第7章 アイヌ文化の知識と体験

上山浩次郎|北海道大学大学院教育学院博士後期課程

はじめに

本章では、新ひだかに住む和人の人々が、アイヌ文化とどのような関わりをもっているのかを明らかにする。新ひだかの和人は、アイヌ文化に関してどのような知識と体験をもっているのか。また、そうした知識と体験はどのような生活のなかで得たのか。さらに、そうした知識と体験をもとにしながら、現在のアイヌ文化をどのように評価し将来どのように関わろうとしているのだろうか。

アイヌ民族に関する研究において、アイヌ民族多住地域に住む和人に焦点が向けられることは少ない。たとえば、松本・江川編(2001)において、アイヌの人々の特徴を浮き彫りにするための比較対象としてとりあげられているにすぎない。それゆえ、アイヌ民族多住地域に住む和人がどのような生活を営んでいるのか十分に明らかにされているわけではない。

そこで、本章では、先に示した論点を検討することをとおして、アイヌ民族多住地域に住む和人が、 アイヌの文化とどのような関わりを持ちながら生活しているのかを明らかにしたい。

ここで用いるデータは基本的には「地域住民の日常的な交流の実態とアイヌ文化・アイヌ政策に関する意識調査」(アンケート調査)である。その際、おもに和人の方を対象とした分析を行う。ただし、比較対象としてアイヌの方と判断できた対象者を用いて、和人の方の特徴を浮き彫りにすることも行う。

第1節 アイヌ文化に関する知識・体験

まずは、新ひだかに住む和人の人々が、アイヌ文化に関してどのような知識をもっているのかを検討しよう。表7-1と図7-1にそれを整理した。そこからは、まず、46.7%の住民がいずれかのアイヌ文化の内容を知っていると回答している。他方で、アイヌの人々はどの程度アイヌ文化の内容を知っているのだろうか。同じく表7-1をみよう。そこからは、54.5%の者がいずれかのアイヌ文化を知っていると回答していることがわかる。

ここで、和人かアイヌかという変数とアイヌ文化の知識をもっているかという変数をクロス分析し、そこから χ 二乗値を計算して得られるp値を確認すると、そこでは有意 (5%) な違いはみられない。とはいえ、これらからは、割合をみればアイヌの人々ほどではないものの、新ひだかの約半数の和人の人々が何がしかのアイヌ文化の知識をもっていると判断できる。

では、新ひだかに住む和人の人々は、具体的にどのようなアイヌ文化の知識をもっているのだろうか。同じく表7-1と図7-1を確認していくと、「カムイノミなどの祭事」が24.5%、「工芸(編み物・刺繍・織物・木彫)」が24.3%、「歌と踊り・楽器」が23.7%と、こうしたアイヌ文化に対して全体のうち2割程度の者が内容を知っていることがわかる。また、「アイヌ語」も14.2%とそれなりの者が内

容を知っていると回答している。

しかし、それらのうちの多くは、アイヌの人々が知っていると回答する割合よりも大きくはない。たとえば、「歌と踊り・楽器」は、和人で23.7%なのに対してアイヌの人々は31.8%となっており、「アイヌ語」も、和人で14.2%なのに対してアイヌの人々は18.2%となっている。また、「イナウを捧げる」に関しては、和人が4.1%にすぎないのに対して、アイヌの人々は18.2%となっており回答に大きな違いがみられる(1%有意)。

ただし、和人の人々の方が知っているアイヌ文化も存在している。それは、「工芸(編み物・刺繍・織物・木彫)」であり、アイヌの人々が13.6%にすぎないのに対して、和人の人々は24.3%となっている。とはいえ、基本的には、新ひだかに住む和人の人々は、アイヌの人々よりもアイヌ文化を知っているとはいえないだろう。

以上の点をふまえて、和人の人々についてより詳細に確認していこう。まずは、アイヌ文化の知識について男女の違いはあるのだろうか。表7-2と図7-2をみよう。そこには、これまで確認してきたアイヌ文化の項目を男女別に整理してある。

それによると、「カムイノミなどの祭事」「伝統的な葬儀・先祖供養」「アイヌ語」などで男女差がみられる。具体的には、それぞれ男性の方がそうしたアイヌ文化を回答しやすい。ただし、「カムイノミなどの祭事」「アイヌ語」は10%有意でしかない。そのうえ、その他の多くのアイヌ文化においては男女差がみられないと判断できる。こうしてみれば、先に確認した新ひだか住民のアイヌ文化の知識の状況は、男女差がそれほどみられないと判断することが妥当だろう。

| 衣 / | 1 /1 | ∧ 又1L | プロンスロ印 | ((イロノ) | () / | <i>></i>) | | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|------------|-----------------|-------------|---------|---------------|----------|----------|----------|-------|-----------|---------|-------------------|-----------------|--------|------|-------|--------|
| | | カムイノミなどの祭事 | 祭・新築祝い伝統的な婚礼・地鎮 | 供養伝統的な葬儀・先祖 | イナウを捧げる | 神聖な場所への祈り | や約束事や約束事 | まじない・トゥス | 夢見を大事にする | アイヌ語 | ユカラなど口承文芸 | 歌と踊り・楽器 | 織物・木彫り)工芸(編み物・刺繍・ | 漁法 伝統的狩猟·農法· | 伝統的な料理 | その他 | 回答者数 | 全体 |
| 度数 | 和人 | 124 | 17 | 32 | 21 | 19 | 16 | 4 | 5 | 72 | 34 | 120 | 123 | 41 | 25 | 3 | 237 | 507 |
| | アイヌ | 6 | 1 | 1 | 4 | 2 | 0 | 0 | 1 | 4 | 0 | 7 | 3 | 2 | 2 | 0 | 12 | 22 |
| | 合計 | 130 | 18 | 33 | 25 | 21 | 16 | 4 | 6 | 76 | 34 | 127 | 126 | 43 | 27 | 3 | 249 | 529 |
| 割合 | 和人 | 24.5% | 3.4% | 6.3% | 4.1% | 3.7% | 3.2% | 0.8% | 1.0% | 14.2% | 6.7% | 23.7% | 24.3% | 8.1% | 4.9% | 0.6% | 46.7% | 100.0% |
| H.1 [] | アイヌ | 27.3% | 4.5% | 4.5% | 18.2% | 9.1% | 0.0% | 0.0% | 4.5% | 18.2% | 0.0% | 31.8% | 13.6% | 9.1% | 9.1% | 0.0% | 54.5% | 100.0% |
| - | 合計 | 24.6% | 3.4% | 6.2% | 4.7% | 4.0% | 3.0% | 0.8% | 1.1% | 14.4% | 6.4% | 24.0% | 23.8% | 8.1% | 5.1% | 0.6% | 47.1% | 100.0% |
| χ | 二乗:p値 | | | | 0.002 | | | | | | | | | | | | | |

表7-1 アイヌ文化の知識(和人・アイヌ)

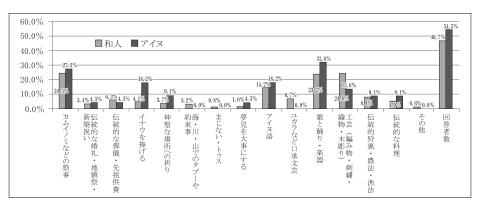


図7-1 アイヌ文化の知識(和人・アイヌ)

表7-2 アイヌ文化の知識(和人)(男女別)

| | | カムイノミなどの祭事 | 祭・新築祝い伝統的な婚礼・地鎮 | 供養伝統的な葬儀・先祖 | イナウを捧げる | 神聖な場所への祈り | や約束事や約束事 | まじない・トゥス | 夢見を大事にする | アイヌ語 | ユカラなど口承文芸 | 歌と踊り・楽器 | 織物・木彫り)工芸(編み物・刺繍・ | 漁法伝統的狩猟・農法・ | 伝統的な料理 | その他 | 回答者数 | 全体 |
|----|-------|------------|-----------------|-------------|---------|-----------|----------|----------|----------|-------|-----------|---------|-------------------|-------------|--------|------|-------|--------|
| 度数 | 男 | 66 | 8 | 20 | 10 | 7 | 8 | 3 | 1 | 40 | 17 | 52 | 51 | 21 | 11 | 2 | 115 | 238 |
| | 女 | 57 | 8 | 11 | 10 | 11 | 7 | 1 | 3 | 31 | 16 | 67 | 71 | 19 | 13 | 1 | 121 | 268 |
| | 合計 | 123 | 16 | 31 | 20 | 18 | 15 | 4 | 4 | 71 | 33 | 119 | 122 | 40 | 24 | 3 | 236 | 506 |
| 割合 | 男 | 27.7% | 3.4% | 8.4% | 4.2% | 2.9% | 3.4% | 1.3% | 0.4% | 16.8% | 7.1% | 21.8% | 21.4% | 8.8% | 4.6% | 0.8% | 48.3% | 100.0% |
| | 女 | 21.3% | 3.0% | 4.1% | 3.7% | 4.1% | 2.6% | 0.4% | 1.1% | 11.6% | 6.0% | 25.0% | 26.5% | 7.1% | 4.9% | 0.4% | 45.1% | 100.0% |
| | 合計 | 24.3% | 3.2% | 6.1% | 4.0% | 3.6% | 3.0% | 0.8% | 0.8% | 14.0% | 6.5% | 23.5% | 24.1% | 7.9% | 4.7% | 0.6% | 46.6% | 100.0% |
| χ | 二乗:p値 | 0.091 | | 0.044 | | | | | | 0.090 | | | | | | | | |

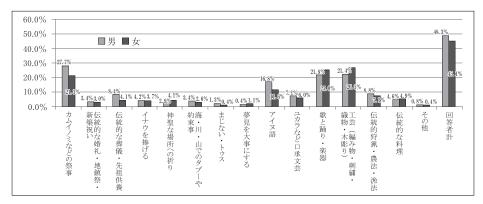


図7-2 アイヌ文化の知識(和人)(男女別)

表7-3 アイヌ文化の知識 (和人)(世代別)

| | | カムイノミなどの祭事 | 祭・新築祝い伝統的な婚礼・地鎮 | 供養伝統的な葬儀・先祖 | イナウを捧げる | 神聖な場所への祈り | や約束事や約束事 | まじない・トゥス | 夢見を大事にする | アイヌ語 | ユカラなど口承文芸 | 歌と踊り・楽器 | 織物・木彫り) 工芸(編み物・刺繍・ | 漁法 伝統的狩猟·農法· | 伝統的な料理 | その他 | 回答者数 | 全 体 |
|-----|-------|------------|-----------------|-------------|---------|-----------|----------|----------|----------|-------|-----------|---------|-----------------------|-----------------|--------|------|-------|--------|
| 度数 | 青年層 | 12 | 0 | 0 | 2 | 1 | 2 | 0 | 0 | 17 | 4 | 15 | 24 | 8 | 3 | 1 | 34 | 86 |
| | 壮年層 | 42 | 4 | 12 | 5 | 7 | 3 | 2 | 1 | 28 | 13 | 54 | 44 | 14 | 10 | 2 | 85 | 186 |
| | 老年層 | 67 | 11 | 18 | 12 | 10 | 9 | 2 | 2 | 24 | 16 | 50 | 52 | 18 | 10 | 0 | 114 | 230 |
| | 合計 | 121 | 15 | 30 | 19 | 18 | 14 | 4 | 3 | 69 | 33 | 119 | 120 | 40 | 23 | 3 | 233 | 502 |
| 割合 | 青年層 | 14.0% | 0.0% | 0.0% | 2.3% | 1.2% | 2.3% | 0.0% | 0.0% | 19.8% | 4.7% | 17.4% | 27.9% | 9.3% | 3.5% | 1.2% | 39.5% | 100.0% |
| нуш | 壮年層 | 22.6% | 2.2% | 6.5% | 2.7% | 3.8% | 1.6% | 1.1% | 0.5% | 15.1% | 7.0% | 29.0% | 23.7% | 7.5% | 5.4% | 1.1% | 45.7% | 100.0% |
| | 老年層 | 29.1% | 4.8% | 7.8% | 5.2% | 4.3% | 3.9% | 0.9% | 0.9% | 10.4% | 7.0% | 21.7% | 22.6% | 7.8% | 4.3% | 0.0% | 49.6% | 100.0% |
| | 合計 | 24.1% | 3.0% | 6.0% | 3.8% | 3.6% | 2.8% | 0.8% | 0.6% | 13.7% | 6.6% | 23.7% | 23.9% | 8.0% | 4.6% | 0.6% | 46.4% | 100.0% |
| χ | 二乗:p値 | 0.016 | 0.059 | 0.031 | | | | | | 0.081 | | 0.072 | | | | | | |

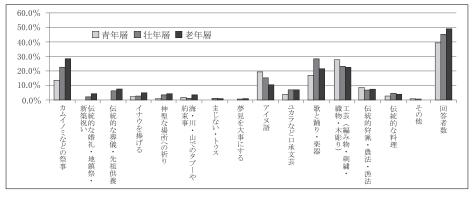


図7-3 アイヌ文化の知識(和人)(世代別)

ただし、世代別にみると、回答傾向に大きな違いがみられる。表7-3と図7-3をみよう。そこには、これまで確認してきたアイヌ文化の知識を世代別に整理してある。具体的には、「青年層(20~30歳代)」「壮年層(40~50歳代)」「老年層(<math>60歳代以上)」の3つの世代に区分した。

まず、そもそもアイヌ文化の内容を知っていると回答する者が世代間で異なっている。すなわち、有意ではないものの、「青年層」で39.5%、「壮年層」で45.7%、「老年層」で49.6%と、世代が高くなるにつれて回答率が大きくなっている。ここからは、古い世代ほどアイヌ文化の知識を知っていることがわかる。

この点を反映して、各個別のアイヌ文化の知識の状況も、多くの場合、高年齢の者ほどそうしたアイヌ文化を知っていると回答している。たとえば、「カムイノミなどの祭事」をみると、「青年層」で14.0%、「壮年層」で22.6%、「老年層」で29.1%となっている(5%有意)。また、「伝統的な葬儀・先祖供養」でも「青年層」で0.0%、「壮年層」で6.5%、「老年層」で7.8%となっている(5%有意)。その他、 χ 二乗値からみれば差があるとはいいがたいものの、割合を比較すれば高い世代ほど高い回答率を示すアイヌ文化が多くみられる。

だが、若い世代ほど知っていると回答しているアイヌ文化も存在している。同じく表7-3と図7-3から、たとえば、「アイヌ語」をみると、「青年層」で19.8%、「壮年層」で15.1%、「老年層」で10.4%となっている(10%有意)。また、「工芸(編み物・刺繍・織物・木彫)」をみると、「青年層」で27.9%、「壮年層」で23.7%、「老年層」で22.6%となっている。他方で、「歌と踊り・楽器」では、「青年層」で17.4%、「壮年層」で29.0%、「老年層」で21.7%と(10%有意)、中間の世代である「壮年層」でもっとも回答率が高いアイヌ文化も存在している。

こうしたアイヌ文化の知識の状況をふまえて、次に、新ひだかの和人の人々が、実際にどのようなアイヌ文化を体験したことがあるのかを検討しよう。表7-4と図7-4にそれを整理した。そこから、まず、何らかのアイヌ文化を体験している者が13.8%であり、アイヌ文化を知っていると回答した者が約半数いた点を踏まえると、アイヌ文化を体験した者はそれほど多くみられないことがわかる。すなわち、新ひだかに住む和人の人々のおおよそ1割程度の者しか、実際にアイヌ文化を体験していないのである。

他方で、アイヌの人々がどの程度アイヌ文化を体験しているかといえば、18.2%の者が何がしかのアイヌ文化を体験していることがわかる。すなわち、新ひだかに住むアイヌの人々のおおよそ 2割の者がアイヌ文化を体験している。しかし、和人と同様、アイヌ文化を知っている者と比べればそれほど大きなものとはいえない点には注意しよう。とはいえ、ここからは、新ひだかの和人は、クロス分析した際に得られる α 二乗値は有意ではないもののアイヌの人々よりもアイヌ文化を体験していないことがわかる。

では、和人の人々は、どういったアイヌ文化を体験しているのだろうか。表7-4と図7-4を確認すると、「歌と踊り・楽器」が6.3%、「カムイノミなどの祭事」が5.9%と相対的に多くみられる。ただし、それ以外のアイヌ文化は、おおよそ2%ほどの回答しかなく、その意味で、多くの新ひだか住民の和人はアイヌ文化を体験しているとはいえない。

表7-4 アイヌ文化の体験(和人・アイヌ)

| | | カムイノミなどの祭事 | 祭・新築祝い伝統的な婚礼・地鎮 | 供養伝統的な葬儀・先祖 | イナウを捧げる | 神聖な場所への祈り | や約束事や約束事 | まじない・トゥス | 夢見を大事にする | アイヌ語 | ユカラなど口承文芸 | 歌と踊り・楽器 | 織物・木彫り)工芸(編み物・刺繍・ | 漁法 伝統的狩猟·農法· | 伝統的な料理 | その他 | 回答者数 | 全体 |
|----|-------|------------|-----------------|-------------|---------|-----------|----------|----------|----------|------|-----------|---------|-------------------|-----------------|--------|------|-------|--------|
| 度数 | 和人 | 30 | 9 | 10 | 6 | 6 | 4 | 1 | 0 | 10 | 10 | 32 | 12 | 6 | 13 | 2 | 70 | 507 |
| | アイヌ | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 2 | 0 | 1 | 0 | 4 | 22 |
| | 合計 | 31 | 9 | 11 | 7 | 6 | 5 | 1 | 0 | 11 | 10 | 34 | 14 | 6 | 14 | 2 | 74 | 529 |
| 割合 | 和人 | 5.9% | 1.8% | 2.0% | 1.2% | 1.2% | 0.8% | 0.2% | 0.0% | 2.0% | 2.0% | 6.3% | 2.4% | 1.2% | 2.6% | 0.4% | 13.8% | 100.0% |
| | アイヌ | 4.5% | 0.0% | 4.5% | 4.5% | 0.0% | 4.5% | 0.0% | 0.0% | 4.5% | 0.0% | 9.1% | 9.1% | 0.0% | 4.5% | 0.0% | 18.2% | 100.0% |
| | 合計 | 5.9% | 1.7% | 2.1% | 1.3% | 1.1% | 0.9% | 0.2% | 0.0% | 2.1% | 1.9% | 6.4% | 2.6% | 1.1% | 2.6% | 0.4% | 14.0% | 100.0% |
| χ | 二乗:p値 | | | | | | 0.075 | | | | | | 0.054 | | | | | |

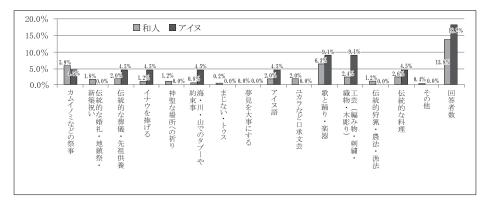


図7-4 アイヌ文化の体験(和人・アイヌ)

また、和人とアイヌの人々を比べると、たとえば「カムイノミなどの祭事」では和人で5.9%、アイヌの人々で4.5%となっている。しかし、それ以外の多くの項目でアイヌの人々ほど体験している割合が高い。ここからも、アイヌの人々と比べた場合、新ひだかの和人の人々はそれほどアイヌ文化を体験しているとはいえないだろう。

続けて、和人の人々の特徴をより細かくみていこう。まず、アイヌ文化の体験に関して男女の違いはみられるのだろうか。表7-5には、表7-1と同様の手順で算出した α 二乗値(α 0 を整理してある。そこからは、「カムイノミなどの祭事」で男性の回答率が高いものの(α 0 を10 のアイヌ文化では男女差があると判断することができない。

ただし、先ほど確認したアイヌ文化に関する知識の状況を反映し、アイヌ文化の体験についても、世代間で違いがみられる。表7-6と図7-6をみよう。そこからは、年齢が低いほどアイヌ文化を体験していないことがわかる。はじめに、そもそもアイヌ文化を体験している人の割合をみると、「青年層」で5.8%、「壮年層」で13.4%、「老年層」で17.4%となっており(1%有意)、世代が低いほど、アイヌ文化を体験していない。

さらに、同じく表7-6と図7-6からアイヌ文化を個別にみると、多くのアイヌ文化で年齢が低くなるほど、そのアイヌ文化を体験していない者の割合が高くなっている。そのうえ、そもそも、もっとも若い世代である「青年層」においては、体験している者がまったくいないアイヌ文化が多い。実際、「青年層」では、「アイヌ語」「歌と踊り・楽器」「工芸(編み物・刺繍・織物・木彫)」という3つのアイヌ文化しか体験されていないのである。

表7-5 アイヌ文化の体験(和人)(男女別)

| | | カムイノミなどの祭事 | 祭・新築祝い伝統的な婚礼・地鎮 | 供養伝統的な葬儀・先祖 | イナウを捧げる | 神聖な場所への祈り | や約束事や約束事 | まじない・トゥス | 夢見を大事にする | アイヌ語 | ユカラなど口承文芸 | 歌と踊り・楽器 | 織物・木彫り)工芸(編み物・刺繍・ | 漁法伝統的狩猟・農法・ | 伝統的な料理 | その他 | 回答者数 | 全 体 |
|----|-------|------------|-----------------|-------------|---------|-----------|----------|----------|----------|------|-----------|---------|-------------------|-------------|--------|------|-------|--------|
| 度数 | 男 | 19 | 5 | 6 | 3 | 3 | 2 | 1 | 0 | 5 | 4 | 18 | 5 | 4 | 7 | 1 | 38 | 238 |
| | 女 | 11 | 4 | 4 | 3 | 3 | 2 | 0 | 0 | 5 | 6 | 14 | 7 | 2 | 6 | 1 | 32 | 268 |
| | 合計 | 30 | 9 | 10 | 6 | 6 | 4 | 1 | 0 | 10 | 10 | 32 | 12 | 6 | 13 | 2 | 70 | 506 |
| 割合 | 男 | 8.0% | 2.1% | 2.5% | 1.3% | 1.3% | 0.8% | 0.4% | 0.0% | 2.1% | 1.7% | 7.6% | 2.1% | 1.7% | 2.9% | 0.4% | 16.0% | 100.0% |
| | 女 | 4.1% | 1.5% | 1.5% | 1.1% | 1.1% | 0.7% | 0.0% | 0.0% | 1.9% | 2.2% | 5.2% | 2.6% | 0.7% | 2.2% | 0.4% | 11.9% | 100.0% |
| | 合計 | 5.9% | 1.8% | 2.0% | 1.2% | 1.2% | 0.8% | 0.2% | 0.0% | 2.0% | 2.0% | 6.3% | 2.4% | 1.2% | 2.6% | 0.4% | 13.8% | 100.0% |
| χ | 二乗:p値 | 0.065 | | | | | | | | | | | | | | | | |

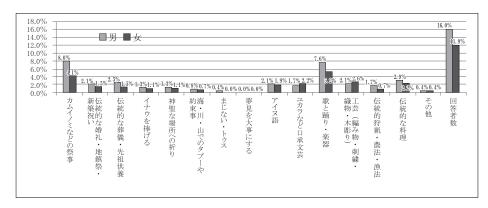


図7-5 アイヌ文化の体験(和人)(男女別)

表7-6 アイヌ文化の体験(和人)(世代別)

| | | カムイノミなどの祭事 | 祭・新築祝い伝統的な婚礼・地鎮 | 供養伝統的な葬儀・先祖 | イナウを捧げる | 神聖な場所への祈り | や約束事 | まじない・トゥス | 夢見を大事にする | アイヌ語 | ユカラなど口承文芸 | 歌と踊り・楽器 | 織物・木彫り) 工芸(編み物・刺繍・ | 漁法伝統的狩猟・農法・ | 伝統的な料理 | その他 | 回答者数 | 全体 |
|-------|--------------|------------|-----------------|-------------|---------|-----------|-------|----------|----------|-------|-----------|---------|-----------------------|-------------|--------|-------|-------|---------|
| 度数 | 青年層 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 | 5 | 86 |
| | 壮年層 | 11 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 5 | 5 | 15 | 4 | 3 | 4 | 1 | 25 | 186 |
| | 老年層 | 19 | 9 | 9 | 5 | 5 | 3 | 1 | 0 | 3 | 5 | 12 | 7 | 3 | 9 | 1 | 40 | 230 |
| | 合計 | 30 | 9 | 10 | 6 | 6 | 4 | 1 | 0 | 10 | 10 | 32 | 12 | 6 | 13 | 2 | 70 | 502 |
| d≈I ∧ | 本 左 屈 | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 5.00/ | 1.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 0.00/ | 5 00/ | 100.00/ |
| 割合 | 青年層 | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 2.3% | 0.0% | 5.8% | 1.2% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 5.8% | 100.0% |
| | 壮年層 | 5.9% | 0.0% | 0.5% | 0.5% | 0.5% | 0.5% | 0.0% | 0.0% | 2.7% | 2.7% | 8.1% | 2.2% | 1.6% | 2.2% | 0.5% | 13.4% | 100.0% |
| _ | 老年層 | 8.3% | 3.9% | 3.9% | 2.2% | 2.2% | 1.3% | 0.4% | 0.0% | 1.3% | 2.2% | 5.2% | 3.0% | 1.3% | 3.9% | 0.4% | 17.4% | 100.0% |
| | 合計 | 6.0% | 1.8% | 2.0% | 1.2% | 1.2% | 0.8% | 0.2% | 0.0% | 2.0% | 2.0% | 6.4% | 2.4% | 1.2% | 2.6% | 0.4% | 13.9% | 100.0% |
| χ | 二乗:p値 | 0.022 | 0.004 | 0.017 | | | | | | | | | | | | | 0.008 | |

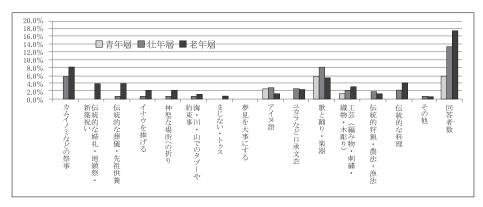


図7-6 アイヌ文化の体験(和人)(世代別)

こうしてみれば、新ひだかに住む和人の人々は、年齢が低くなるほど、体験するアイヌ文化の幅が 狭くなるだけでなく、そうしたアイヌ文化を体験する確率が低くなると整理することができる。

ところで、新ひだかには、アイヌ文化に関連する施設や行事がいくつか存在している。では、そうした施設や行事に、新ひだかの和人の人々はどの程度関わりを持っているのだろうか。表7-7と図7-7をみよう。まず、いずれか1つでも施設に行ったり、行事に参加したりしたことがある者をみると66.9%となっている。具体的な施設や行事を確認すると、「シャクシャイン記念館」が56.4%、「アイヌ民俗資料館」が42.4%、「シャクシャイン法要祭」が17.2%となっている。

| | | シャクシャイン記念館 | アイヌ民俗資料館 | シャクシャイン法要祭 | 回答者数 | 全体 |
|-----|-----------|----------------|----------------|----------------|----------------|------------------|
| 度数 | 和人 | 286 | 215 | 87 | 339 | 507 |
| | アイヌ | 14 | 11 | 8 | 18 | 22 |
| | 合計 | 300 | 226 | 95 | 357 | 529 |
| 割合 | 和人 アイヌ | 56.4% 63.6% | 42.4% 50.0% | 17.2% 36.4% | 66.9% 81.8% | 100.0% 100.0% |
| | 合計 | 56.7% | 42.7% | 18.0% | 67.5% | 100.0% |
| χ二乗 | : p値 | | | 0.022 | | |

表7-7 新ひだかの施設や行事(和人とアイヌ)

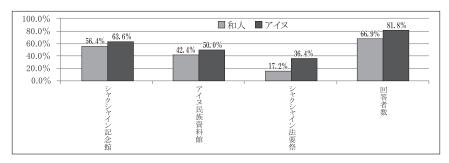


図7-7 新ひだかの施設や行事(和人とアイヌ)

| | | シャクシャイン記念館 | アイヌ民俗資料館 | シャクシャイン法要祭 | 回答者数 | 全体 |
|-----|------|------------|----------|------------|-------|--------|
| 度数 | 青年層 | 31 | 32 | 6 | 44 | 86 |
| | 壮年層 | 111 | 71 | 22 | 123 | 186 |
| | 老年層 | 141 | 110 | 57 | 169 | 230 |
| | 合計 | 283 | 213 | 85 | 336 | 502 |
| 割合 | 青年層 | 36.0% | 37.2% | 7.0% | 51.2% | 100.0% |
| | 壮年層 | 59.7% | 38.2% | 11.8% | 66.1% | 100.0% |
| | 老年層 | 61.3% | 47.8% | 24.8% | 73.5% | 100.0% |
| | 合計 | 56.4% | 42.4% | 16.9% | 66.9% | 100.0% |
| χ二乗 | ::p値 | 0.000 | 0.079 | 0.000 | 0.000 | |

表7-8 新ひだかの施設や行事(和人)(世代別)

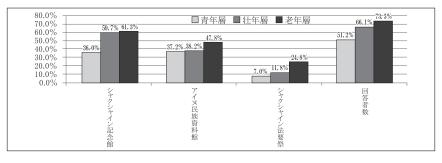


図7-8 新ひだかの施設や行事(和人)(世代別)

他方で、アイヌの人々は、いずれの施設や行事に関しても和人の人々よりも回答する者の割合が高い。具体的には、「シャクシャイン記念館」が63.6%、「アイヌ民俗資料館」が50.0%、「シャクシャイン法要祭」が36.4%となっている。とくに、「シャクシャイン法要祭」に関しては有意な違い(5%水準)がみられる。

その上で、和人の人々の回答をより詳細に確認していくと、ここからも世代によってアイヌ文化の体験の程度に異なりがみられることがわかる $^{1)}$ 。表7-8と図7-8をみよう。まず、いずれか1つでも施設に行ったり、行事に参加したりしたことがある者をみると、「青年層」で51.2%、「壮年層」で66.1%、「老年層」で73.5%となっている。続けて、施設や行事を具体的に確認すると、いずれの施設や行事においても年齢が高くなるほど回答率が大きくなっている。ここからも、世代が高い者ほどアイヌ文化を体験していると判断できよう。

第2節 生活史のなかのアイヌ文化

それでは、先に確認してきたアイヌ文化の知識・体験は、どのような過程で得られたものなのだろうか。はじめに、前節で確認したアイヌ文化の知識をどのような経緯で得たのかという点から検討しよう。表7-9と図7-9をみよう。そこには、前節で確認したアイヌ文化をどこで(誰から)得たのかを整理してある。

それによれば、アイヌ文化の内容を知らないと回答した者を含めた全体のうち、25.2%の和人の者が「施設や展示物」を通してアイヌ文化を知ったと回答していることがわかる。ここでいう「施設や展示物」は、おそらく先にみた「シャクシャイン記念館」などを示していよう。続けて、「情報メディア」が17.9%、「アイヌ文化を普及している団体」が12.6%などと相対的に多くみられ、それらをきっかけにアイヌ文化の知識を得たことがわかる。

| × . | , , , | 2010 11 117 | | , | | | | | | | |
|-----|-------|-------------|-------|------|--------------|------------------------|-------|------------|------|-------|--------|
| | | 家族や親戚 | 近所の人 | 友人 | 学校の授業 や行事 | アイヌ文化 を普及して いる団体 | | 施設や 展示物 | その他 | 回答者計 | 全体 |
| 度数 | 和人 | 29 | 40 | 41 | 32 | 64 | 91 | 128 | 10 | 253 | 507 |
| | アイヌ | 4 | 3 | 2 | 0 | 4 | 3 | 3 | 1 | 12 | 22 |
| | 合計 | 33 | 43 | 43 | 32 | 68 | 94 | 131 | 11 | 265 | 529 |
| 割合 | 和人 | 5.7% | 7.9% | 8.1% | 6.3% | 12.6% | 17.9% | 25.2% | 2.0% | 49.9% | 100.0% |
| | アイヌ | 18.2% | 13.6% | 9.1% | 0.0% | 18.2% | 13.6% | 13.6% | 4.5% | 54.5% | 100.0% |
| | 合計 | 6.2% | 8.1% | 8.1% | 6.0% | 12.9% | 17.8% | 24.8% | 2.1% | 50.1% | 100.0% |
| χ二乗 | €:p値 | 0.018 | | | | | | | | | |

表7-9 アイヌ文化の情報源(和人・アイヌ)

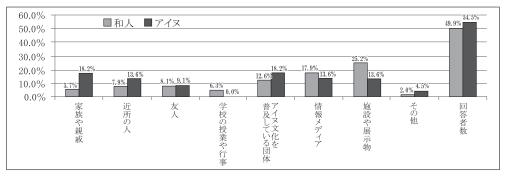


図7-9 アイヌ文化の情報源(和人・アイヌ)

ここで、アイヌの人々がどのような経緯でアイヌ文化を得たのかを確認すると、和人の人々が多く回答していた「施設や展示物」は13.6%、「情報メディア」は13.6%と回答する者が少ない。他方で、和人で回答する者が少なかった「家族や親族」が18.2%、「近所の人」が13.6%とそれなりの回答がみられる。また、「学校の授業や行事」と回答するものがアイヌの人々ではまったくみられない。

以上をみれば、和人の人々は、アイヌの人々と比べて、施設や展示物さらに情報メディアなどのいわば「フォーマルな」経路でアイヌ文化の知識を得てきた特徴があるといえよう。他方で、アイヌの人々は、和人と比べれば、家族や親族さらに近所などのいわば「パーソナルな」経路でアイヌ文化の知識を得てきたといえる。

これらをふまえて、和人の人々の回答をより詳細にみていこう。ただし、表7-10と図7-10からわかるようにここでも男女差はみられない。表7-1で示したものと同様の手順で、 χ 二乗値(0の π 0 を算出したが、いずれも有意な違いはみられなかった。

しかし、ここにおいても世代差がみられる。表7-11と図7-11をみよう。そこからは、いくつか項目において、年齢が高いほど、提示した選択肢を情報源としている者の割合が多いことがわかる。たとえば、「近所の人」をアイヌ文化の情報源とする人をみると、「青年層」で3.5%、「壮年層」で4.8%、「老年層」で11.7%となっている(1%水準)。

とはいえ、それほど世代差がみられない項目もある。たとえば、「施設や展示物」では、「青年層」で26.7%、「壮年層」で22.0%、「老年層」で27.0%と世代間で大きな違いがみられない。また、「情報メディア」でも、「青年層」で17.4%、「壮年層」で19.4%、「老年層」で16.5%となっている。

さらに、若い世代ほど情報源として回答している項目もある。それは、「学校の授業や行事」である。具体的に値を確認すると、「青年層」で20.9%、「壮年層」で5.4%、「老年層」で1.7%となっており、若い世代ほど、「学校の授業や行事」からアイヌ文化の情報を得ている者の割合が多いことがわかる。

| | | 家族や親戚 | 近所の人 | 友人 | 学校の授業 や行事 | アイヌ文化 を普及して いる団体 | | 施設や展示物 | その他 | 回答者数 | 全体 |
|-----|------|-------|------|------|--------------|------------------------|-------|--------|------|-------|--------|
| 度数 | 男 | 14 | 20 | 23 | 13 | 35 | 49 | 57 | 4 | 125 | 238 |
| | 女 | 15 | 20 | 18 | 19 | 29 | 41 | 70 | 6 | 127 | 268 |
| | 合計 | 29 | 40 | 41 | 32 | 64 | 90 | 127 | 10 | 252 | 506 |
| 割合 | 男 | 5.9% | 8.4% | 9.7% | 5.5% | 14.7% | 20.6% | 23.9% | 1.7% | 52.5% | 100.0% |
| | 女 | 5.6% | 7.5% | 6.7% | 7.1% | 10.8% | 15.3% | 26.1% | 2.2% | 47.4% | 100.0% |
| | 合計 | 5.7% | 7.9% | 8.1% | 6.3% | 12.6% | 17.8% | 25.1% | 2.0% | 49.8% | 100.0% |
| χ二乗 | : p値 | | | | | | | | | | |

表 7-10 アイヌ文化の情報源(和人)(男女計・男女別)

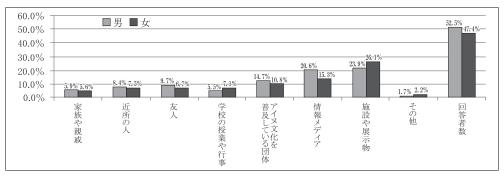


図7-10 アイヌ文化の情報源(和人)(男女計)

表 7-11 アイヌ文化の情報源 (和人)(世代別)

| | | 家族や親戚 | 近所の人 | 友人 | 学校の授業 や行事 | アイヌ文化 を普及して いる団体 | 情報メディア | 施設や展 示物 | その他 | 回答者数 | 全体 |
|-----|------|-------|-------|-------|--------------|------------------------|--------|------------|------|-------|--------|
| 度数 | 青年層 | 4 | 3 | 4 | 18 | 4 | 15 | 23 | 0 | 36 | 86 |
| | 壮年層 | 8 | 9 | 12 | 10 | 24 | 36 | 41 | 6 | 87 | 186 |
| | 老年層 | 16 | 27 | 25 | 4 | 35 | 38 | 62 | 4 | 126 | 230 |
| | 合計 | 28 | 39 | 41 | 32 | 63 | 89 | 126 | 10 | 249 | 502 |
| | | | | | | | | | | | |
| 割合 | 青年層 | 4.7% | 3.5% | 4.7% | 20.9% | 4.7% | 17.4% | 26.7% | 0.0% | 41.9% | 100.0% |
| | 壮年層 | 4.3% | 4.8% | 6.5% | 5.4% | 12.9% | 19.4% | 22.0% | 3.2% | 46.8% | 100.0% |
| | 老年層 | 7.0% | 11.7% | 10.9% | 1.7% | 15.2% | 16.5% | 27.0% | 1.7% | 54.8% | 100.0% |
| | 合計 | 5.6% | 7.8% | 8.2% | 6.4% | 12.5% | 17.7% | 25.1% | 2.0% | 49.6% | 100.0% |
| χ二乗 | ŧ:p値 | | 0.009 | | 0.000 | 0.041 | | | | 0.023 | |

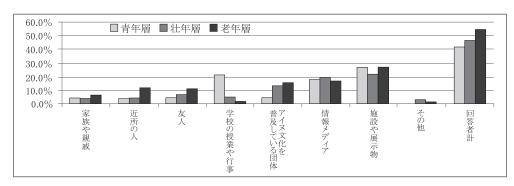


図7-11 アイヌ文化の情報源(和人)(世代別)

以上をみると、全体的にみれば、和人の人々は「施設や展示物」などからアイヌ文化の知識を得ている者が多いものの、世代別の相対的な特徴をいえば、年齢が高い者は、近所や友人などを日常的な生活のなかでアイヌ文化の知識にふれてきた一方で、若い世代では、学校の授業や行事でアイヌ文化の知識を得てきたと整理できるかもしれない。

実際、いくつかのケースの自由回答をみると、世代が高い者において、昔からの近所づきあいや友 人関係という形でアイヌの人々とのつながりがあると判断できるケースがみられる。

問7 (あなたは普段、アイヌの人たちと交流がありますか)の選択肢7 (その他)の自由記述

| 「昔からの友人づきあい」 | (老年層) |
|-----------------|-------|
| 「出生地時代からの付き合い」 | (老年層) |
| 「昔からの知り合い」 | (老年層) |
| 「子どものころからの幼なじみ」 | (老年層) |
| 「昔からの付き合いで」 | (老年層) |
| 「親の付き合いから続いて」 | (老年層) |

また、新ひだか住民に対するインタビュー調査 (「生活の歩みとアイヌの人々との関わりについてのインタビュー調査」) をみると、

「(静内に引っ越してきた時には) もうとなり近所にいたよ。わかる?昔、こう入れ墨をしていた人。(中略) ここに引っ越してきたらね、ここの裏みんなそうだよ。」 【老年層】

「(調査対象者が小さい頃に、借家をしていて、そこにアイヌの方々が住んでいたのだが、) その人達とずっとおつきあいしていて、今でもだから、そこのじいちゃん、ばあちゃんもなくなったけれど、子どもさんたちとはおつきあいしていますけれどね。」 【老年層】

という記述がみられた。

さらに、学校(小学校・中学校・高校など)でアイヌの歴史を学んだことがある者を整理したのが表7-12と図7-12(世代別)である。それによれば、全体で26.5%の者が学校でアイヌの歴史を学んだことがあると回答しているものの世代別に大きな違いがみられる。すなわち、「青年層」をみると、58.8%の者が学校でアイヌの歴史を学んだと回答しているのに対して、「壮年層」では30.8%ほどであり、「老年層」では10.3%にすぎないのである。ここからは、若い世代ほど学校でアイヌの歴史を学ぶ機会があったと判断できよう。

さらに、表7-13と図7-13から、学校でアイヌの文化を体験したかどうかを確認しよう。はじめに全体では4.6%の者が学校でアイヌ文化を体験したと回答している。ここからは、学校でアイヌ文化を体験した者はそれほど存在しないと判断できる。

表 7-12 (図 7-12) 学校でアイヌの歴史を学んだか(世代別)

| 青年層 壮年層 老年層 | ある 47 53 | ない 33 119 | 合計 80 |
|-------------------|----------------|-----------------------------------|---|
| 壮年層 | | | |
| | 53 | 110 | |
| 老任屈 | | 113 | 172 |
| 七十唐 | 21 | 183 | 204 |
| 合計 | 121 | 335 | 456 |
| | | | |
| 青年層 | 58.8% | 41.3% | 100.0% |
| 壮年層 | 30.8% | 69.2% | 100.0% |
| 老年層 | 10.3% | 89.7% | 100.0% |
| 会計 | 26.5% | 73.5% | 100.0% |
| | 壮年層 | 壮年層 30.8% 老年層 10.3% | 壮年層 30.8% 69.2% 老年層 10.3% 89.7% |



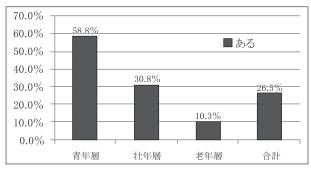
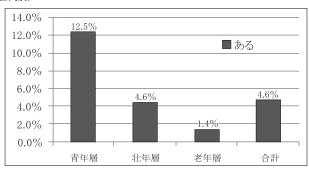


表 7-13 (図 7-13) 学校でアイヌの文化を体験したか(世代別)

| | | ある | ない | 合計 |
|----|-----|-------|-------|--------|
| 度数 | 青年層 | 10 | 70 | 80 |
| | 壮年層 | 8 | 166 | 174 |
| | 老年層 | 3 | 204 | 207 |
| | 合計 | 21 | 440 | 461 |
| | | | | |
| 割合 | 青年層 | 12.5% | 87.5% | 100.0% |
| | 壮年層 | 4.6% | 95.4% | 100.0% |
| | 老年層 | 1.4% | 98.6% | 100.0% |
| | 合計 | 4.6% | 95.4% | 100.0% |

χ二乗値:p値 0.000



| | | 歷史的事項 | 文化習俗 | 見学 | その他 | 忘れた/ 覚えていない | 回答者数 | 全体 |
|-----|------|-------|-------|------|------|----------------|-------|--------|
| 度数 | 青年層 | 19 | 8 | 2 | 2 | 13 | 39 | 86 |
| | 壮年層 | 24 | 6 | 3 | 3 | 8 | 42 | 186 |
| | 老年層 | 10 | 3 | 1 | 1 | 7 | 19 | 230 |
| | 合計 | 53 | 17 | 6 | 6 | 28 | 100 | 502 |
| 割合 | 青年層 | 22.1% | 9.3% | 2.3% | 2.3% | 15.1% | 45.3% | 100.0% |
| | 壮年層 | 12.9% | 3.2% | 1.6% | 1.6% | 4.3% | 22.6% | 100.0% |
| | 老年層 | 4.3% | 1.3% | 0.4% | 0.4% | 3.0% | 8.3% | 100.0% |
| | 合計 | 10.6% | 3.4% | 1.2% | 1.2% | 5.6% | 19.9% | 100.0% |
| χ二勇 | €:p値 | 0.000 | 0.002 | | | 0.000 | 0.000 | |

表7-14 学校でアイヌの歴史を学んだか(自由回答)(世代別)

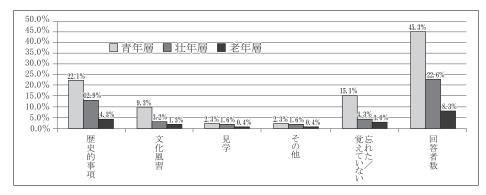


図7-14 学校でアイヌの歴史を学んだか(自由回答)(世代別)

だが、世代別にみると、「青年層」で12.5%、「壮年層」で4.6%、「老年層」で1.4%となっており、若い世代ほど、学校でアイヌ文化を体験する割合が高かったことがわかる²⁾。

こうしてみれば、新ひだかの和人の人々がアイヌ文化を知る経緯には、世代別に異なる特徴があると整理することができよう。

なお、学校でどのようなアイヌの歴史を学んだのかを確認しておこう。表7-14には、学校で学んだアイヌの歴史のうち印象に残ったものをたずねた自由記述の内容を整理してある。それによれば、シャクシャインの乱などの「歴史的な事実」を挙げている者が、アイヌ文化を学んだ事がない者を含めた全体のうち10.6%ほど存在している。また、織物などの「文化習俗」が印象に残っている者が3.4%ほど存在している。ただし、「忘れた/覚えていない」とする者も5.6%ほど存在している。

ここで世代別の特徴をみると、いずれのカテゴリーでも若い世代ほど回答する者の割合が高い。たとえば、「歴史的な事項」では、「青年層」22.1%、「壮年層」12.9%、「老年層」4.3%となっている。また「忘れた/覚えていない」とする者も、「青年層」で15.1%、「壮年層」で4.3%、「老年層」で3.0%となっているのである。こうしてみれば、「青年層」の世代では、学校でアイヌ文化の知識や体験を得ているものの、それを忘れたり、覚えていなかかったりする者もそれなりにみられることがわかる3)。

第3節 アイヌ文化の現状と将来

第1項 アイヌ文化の現状

それでは、新ひだかの和人の人々は、アイヌ文化は現在どの程度残っていると考えているのだろうか。表7-15と図7-15をみよう。まず、「かなり残っている」と「ある程度残っている」と評価している者は43.1% (=5.9%+37.2%) いる。他方で、「あまり残っていない」と「全然残っていない」

と評価する者は29.1% (=26.7%+2.4%) であり、アイヌ文化が残っていると回答する者が多いことがわかる。

しかし、「かなり残っている」と回答する者は少なく、「ある程度残っている」とする者が大半である点には留意すべきだろう。また、「わからない」と回答する者が27.9%と3割近く存在している点にも注意する必要がある。

他方で、アイヌの人々の場合をみると、9.1%の者が「かなり残っている」、59.1%の者が「ある程度残っている」と回答している。その意味で、和人の人々よりもアイヌ文化が残っていると判断している。その代わりに、「わからない」と回答する者がアイヌの人々の中ではまったくみられない。

こうしてみれば、和人の人々は、アイヌの人々と比べて、アイヌ文化の現状について「わからない」と評価する傾向が強いといえよう。その背景には、先に確認したような、アイヌの人々と比べると、そもそも和人の人々がアイヌ文化の知識を知らずまた体験もしていないというアイヌ文化との関わり方があると考えられよう。

この点をふまえて、和人の動向を詳しく確認しよう。表7-16で男女別に傾向を確認すると、女性の方で「わからない」と回答する者の割合が多い。具体的に値をみると、男性では23.0%である一方、女性では32.4%の者が「わからない」と回答している。その代わり、男性で回答する者の割合が高いのは、「ある程度残っている」であり、男性が40.4%である一方で、女性では34.0%の者が「ある程度残っている」と回答している。

| 12 / 1 | .5 /1/ | 文化はこのくりく | 193 CV 3 12 (1) | 17 - 7 4 7 | | | |
|--------|--------|--------------|-----------------|---------------|--------------|-------|--------|
| | | かなり残って いる | ある程度残って いる | あまり残って いない | 全然残って いない | わからない | 合計 |
| 度数 | 和人 | 29 | 184 | 132 | 12 | 138 | 495 |
| | アイヌ | 2 | 13 | 7 | 0 | 0 | 22 |
| | 合計 | 31 | 197 | 139 | 12 | 138 | 517 |
| 割合 | 和人 | 5.9% | 37.2% | 26.7% | 2.4% | 27.9% | 100.0% |
| | アイヌ | 9.1% | 59.1% | 31.8% | 0.0% | 0.0% | 100.0% |
| | 合計 | 6.0% | 38.1% | 26.9% | 2.3% | 26.7% | 100.0% |

表7-15 アイヌ文化はどのくらい残っているか(和人・アイヌ)

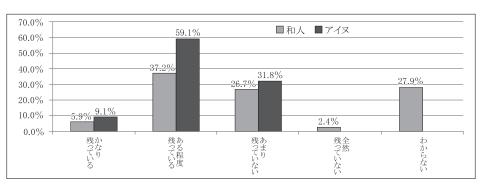


図7-15 アイヌ文化はどのくらい残っているか (和人・アイヌ)

表7-16 アイヌ文化はどのくらい残っているか(和人)(男女別)

| | | かなり残って いる | ある程度残って いる | あまり残って いない | 全然残って いない | わからない | 合計 |
|----|--------|--------------|----------------|----------------|--------------|----------------|------------------|
| 度数 | 男 女 | 11 18 | 95 88 | 69 63 | 6 6 | 54 84 | 235 259 |
| | 合計 | 29 | 183 | 132 | 12 | 138 | 494 |
| 割合 | 男女 | 4.7% 6.9% | 40.4% 34.0% | 29.4% 24.3% | 2.6% 2.3% | 23.0% 32.4% | 100.0% 100.0% |
| | 合計 | 5.9% | 37.0% | 26.7% | 2.4% | 27.9% | 100.0% |

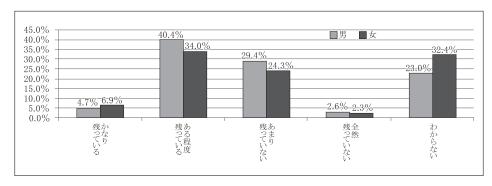


図7-16 アイヌ文化はどのくらい残っているか(和人)(男女別)

さらに、表7-17と図7-17から世代別の動向を確認しよう。そこからは、世代ごとに回答傾向が 異なることがわかる。まず、「老年層」をみると、「ある程度残っている」と回答する者が42.2%、「あ まり残っていない」と回答する者が20.6%、「わからない」とする者が24.7%となっており、全体の傾 向と比べると、やや「ある程度残っている」と回答する者の割合が多い。

次に、「壮年層」をみると、「ある程度残っている」と回答する者が37.0%、「あまり残っていない」と回答する者が33.7%、「わからない」とする者が25.5%となっている。「老年層」と比べると「あまり残っていない」という回答が相対的に多くみられる。このことに起因して、「ある程度残っている」と回答する者と「あまり残っていない」と回答する者の違いがそれほど大きくはみられなくなっている。その意味で、この世代では、残っていると判断する者と残っていないと判断する者とがおおよそ同程度存在している。

そのうえで、「青年層」をみると、「ある程度残っている」と回答する者が22.6%、「あまり残っていない」と回答する者が27.4%、「わからない」とする者が42.9%となっており、もっとも多く回答されているのが「わからない」となっている。

以上をみると、現在アイヌ文化が残っているかという点について、「青年層」という若い世代では、「わからない」という判断が多くみられるものの、「壮年層」という世代では、「残っている」という評価と「残っていない」という評価にわかれており、さらに「老年層」という古い世代では、「ある程度残っている」という評価が多くを占めていることがわかる。その意味で、世代によって、アイヌ文化の現状に対する評価が異なっている。

表 7-17 アイヌ文化はどのくらい残っているか (和人)(世代別)

| | | かなり残って いる | ある程度残って いる | あまり残って いない | 全然残って いない | わからない | 合計 |
|----|-----|--------------|---------------|---------------|--------------|-------|--------|
| 度数 | 青年層 | 1 | 19 | 23 | 5 | 36 | 84 |
| | 壮年層 | 3 | 68 | 62 | 4 | 47 | 184 |
| | 老年層 | 25 | 94 | 46 | 3 | 55 | 223 |
| | 合計 | 29 | 181 | 131 | 12 | 138 | 491 |
| 割合 | 青年層 | 1.2% | 22.6% | 27.4% | 6.0% | 42.9% | 100.0% |
| | 壮年層 | 1.6% | 37.0% | 33.7% | 2.2% | 25.5% | 100.0% |
| | 老年層 | 11.2% | 42.2% | 20.6% | 1.3% | 24.7% | 100.0% |
| | 合計 | 5.9% | 36.9% | 26.7% | 2.4% | 28.1% | 100.0% |

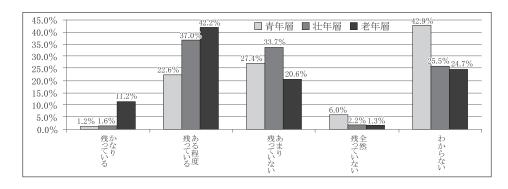


図7-17 アイヌ文化はどのくらい残っているか (和人)(世代別)

次に、世間がもつアイヌ文化への評価について確認しよう。表7-18と図7-18をみよう。もっとも回答する者の割合が多いのは、アイヌの歴史や文化の内容が世間に「あまり正しく知られていない」であり40.6%の者が回答している。また、「正しく知られていない」と回答する者は16.5%であり、正しく知られていないとする者はあわせて57.1%になっている。ここからは、半数以上の者が世間では正しくアイヌ文化が知られていないと判断していることがわかる。ただし、「わからない」とする者も25.9%とそれなりの者が回答している点にも注意を払う必要がある。

他方で、アイヌの人々の回答を確認すると、ここでも「わからない」と回答する者が少ないことが わかる (4.8%)。それゆえ、ここからも、和人は、アイヌ文化の評価について「わからない」とする 傾向がみられることがわかる。

続けて、表7-19と図7-19で和人のうちの男女の違いを確認すると、それほど大きな違いがあるとはいえない。だが、「わからない」と回答する者の割合が、男性20.4%女性30.9%であり、女性の方が「わからない」と回答する者の割合が高いという違いがみられる。

さらに、世代の違いを確認しよう。表7-20と図7-20をみよう。そこからは、世代別にみても、 基本的には先に確認したような傾向をみてとることができる。すなわち、いずれの世代においても、「あ まり正しく知られていない」と回答する者がもっとも多く、さらに「正しく知られていない」と回答 する者と合わせると、ほぼ半数を超えているのである。

表 7-18 世間がもつアイヌ文化への評価(和人・アイヌ)

| | | 正しく知られて いると思う | だいたいは正しく 知られている | あまり正しく 知られていない | 正しく知られて いない | わからない | 合計 |
|----|-----|------------------|--------------------|-------------------|----------------|-------|--------|
| 度数 | 和人 | 10 | 75 | 202 | 82 | 129 | 498 |
| | アイヌ | 0 | 3 | 11 | 6 | 1 | 21 |
| | 合計 | 10 | 78 | 213 | 88 | 130 | 519 |
| 割合 | 和人 | 2.0% | 15.1% | 40.6% | 16.5% | 25.9% | 100.0% |
| | アイヌ | 0.0% | 14.3% | 52.4% | 28.6% | 4.8% | 100.0% |
| | 合計 | 1.9% | 15.0% | 41.0% | 17.0% | 25.0% | 100.0% |

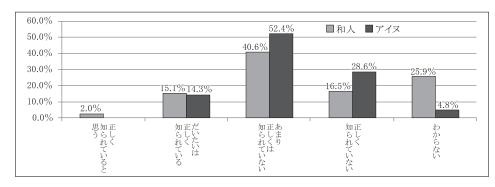


図7-18 世間がもつアイヌ文化への評価(和人・アイヌ)

表7-19 世間がもつアイヌ文化への評価(和人)(男女計・男女別)

| | | 正しく知られて いると思う | だいたいは正しく 知られている | あまり正しく 知られていない | 正しく知られて いない | わからない | 合計 |
|----|----|------------------|--------------------|-------------------|----------------|-------|--------|
| 度数 | 男 | 3 | 41 | 100 | 43 | 48 | 235 |
| | 女 | 7 | 34 | 101 | 39 | 81 | 262 |
| | 合計 | 10 | 75 | 201 | 82 | 129 | 497 |
| 割合 | 男 | 1.3% | 17.4% | 42.6% | 18.3% | 20.4% | 100.0% |
| | 女 | 2.7% | 13.0% | 38.5% | 14.9% | 30.9% | 100.0% |
| | 合計 | 2.0% | 15.1% | 40.4% | 16.5% | 26.0% | 100.0% |

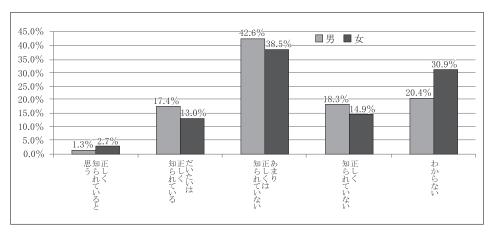


図7-19 世間がもつアイヌ文化への評価(和人)(男女計・男女別)

正しく知られて だいたいは正しく あまり正しく 正しく知られて わからない 合計 いると思う 知られている 知られていない いない 度数 青年層 32 22. 24 86 壮年層 2 23 83 34 43 185 老年層 44 85 26 61 223 合計 10 74 200 82 128 494 割合 青年層 1.2% 8.1% 37.2% 25.6% 27.9% 100.0% 壮年層 1.1% 12.4% 44.9% 18.4% 23.2% 100.0% 老年層 19.7% 38.1% 27.4% 100.0% 3.1% 11.7% 合計 15.0% 40.5% 16.6% 2.0% 25.9% 100.0%

表7-20 世間がもつアイヌ文化への評価(和人)(世代別)

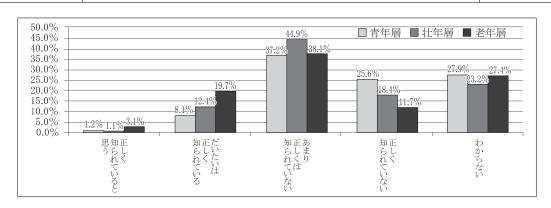


図7-20 世間がもつアイヌ文化への評価(和人)(世代別)

しかし、「正しく知られていない」をみると、「青年層」で25.6%、「壮年層」で18.4%、「老年層」で11.7%となっており、若い世代ほど「正しく知られていない」と回答する者の割合が高い。対して、「だいたいは正しくは知られている」をみると、「青年層」で8.1%、「壮年層」で12.4%、「老年層」で19.7%となっており、年齢が高い者ほど、「だいたいは正しく知られている」と回答する者の割合が高い。その意味で、年齢が低い(高い)ほど、「正しく知られていない」(「正しく知られている」)と回答する傾向がみられる。

第2項 アイヌ文化の将来

それでは、新ひだかの和人の人々は、どのような形でアイヌ文化を後世に残していくべきだと考えているのだろうか。表7-21と図7-21をみよう。そこからは、「日本の国として残すべき」と回答する者が39.3%ともっとも多いことがわかる。ただし、「地域ごとに残すべき」とする者も30.3%と3割程度の者が回答している。さらに、「アイヌの人たちが残すべき」とする者も25.0%と2.5割の者が回答している。

他方で、アイヌの人々はこの点についてどのように考えているのだろうか。同じく表7-21をみよう。だが、そこでは、和人とアイヌの人々では大きな違いがみられない。

続けて、和人の特徴をより詳細にみていこう。まず、表7-22と図7-22からわかるように、男女 差は大きくみられない。

では、世代によって違いはみられるのだろうか。表7-23と図7-23をみよう。まず、「老年層」をみると、「日本の国として残すべき」と回答する者が47.0%、「地域ごとに残すべき」と回答する者が27.2%、「アイヌの人たちが残すべき」と回答する者が21.8%となっており、「日本の国として残す

べき」と回答する者が半数近くに上っていることがわかる。

次に、「壮年層」をみると、「日本の国として残すべき」と回答する者が36.1%、「地域ごとに残すべき」と回答する者が32.8%、「アイヌの人たちが残すべき」と回答する者が26.1%となっており、「日本の国として残すべき」と回答する者がやや高いものの、三者それぞれがおおよそ3割程度になっていることがわかる。

加えて、「青年層」をみると、「日本の国として残すべき」と回答する者が26.8%、「地域ごとに残すべき」と回答する者が32.9%、「アイヌの人たちが残すべき」と回答する者が30.5%となっており、「壮年層」と同様に、3つの選択肢がそれぞれ3割程度の回答者を占めていることがわかる。ただし、「壮年層」と比べれば、「日本の国として残すべき」が相対的にもっとも低い回答者の割合である点が異なっているといえるかもしれない。そして、その代わりに、若い世代である「青年層」では「アイヌの人たちが残すべき」と回答する者の割合が相対的に高くなっている。

以上のようにみれば、第1に、全体としていえば、「日本の国として残すべき」とする見解がもっとも多いものの「地域ごとに残すべき」「アイヌの人たちが残すべき」という見解もそれなりにみられ、その意味で3つの見解が併存しているという点、だが第2に、世代別に検討すると、年齢が高いほど「日本の国として残すべき」という見解がみられるものの、世代が若くなるとそうした考えはやや弱くなり、代わりに「アイヌの人たちが残すべき」という見解が強くみられるようになるという世代間の相違も確認することができよう。

アイヌの人たちが残すべき 日本の国として残すべき 地域ごとに残すべき その他 合計 度数 117 25 和人 184 142 アイヌ 19 5 8 6 0 合計 122 192 148 25 487 割合 和人 25.0% 39.3% 30.3% 5.3% 100.0% アイヌ 26.3% 42.1% 31.6% 0.0% 100.0% 30.4% 100.0% 合計 25.1% 39.4% 5.1%

表7-21 アイヌ文化の残し方(和人・アイヌ)

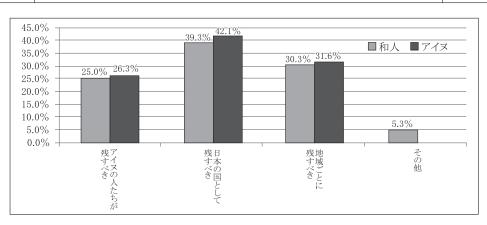


図7-21 アイヌ文化の残し方(和人・アイヌ)

表 7-22 アイヌ文化の残し方(和人)(男女計・男女別)

| | | アイヌの人たちが残すべき | 日本の国として残すべき | 地域ごとに残すべき | その他 | 合計 |
|----|----|--------------|-------------|-----------|------|--------|
| 度数 | 男 | 55 | 92 | 67 | 12 | 226 |
| | 女 | 62 | 92 | 74 | 13 | 241 |
| | 合計 | 117 | 184 | 141 | 25 | 467 |
| 割合 | 男 | 24.3% | 40.7% | 29.6% | 5.3% | 100.0% |
| | 女 | 25.7% | 38.2% | 30.7% | 5.4% | 100.0% |
| | 合計 | 25.1% | 39.4% | 30.2% | 5.4% | 100.0% |

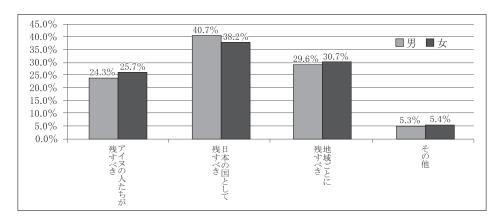


図7-22 アイヌ文化の残し方(和人)(男女計・男女別)

表7-23 アイヌ文化の残し方(和人)(世代別)

| | | アイヌの人たちが残すべき | 日本の国として残すべき | 地域ごとに残すべき | その他 | 合計 |
|-----|------|--------------|-------------|-----------|------|--------|
| 度数 | 青年層 | 25 | 22 | 27 | 8 | 82 |
| | 壮年層 | 47 | 65 | 59 | 9 | 180 |
| | 老年層 | 44 | 95 | 55 | 8 | 202 |
| | 合計 | 116 | 182 | 141 | 25 | 464 |
| | | | | | | |
| 割合 | 青年層 | 30.5% | 26.8% | 32.9% | 9.8% | 100.0% |
| | 壮年層 | 26.1% | 36.1% | 32.8% | 5.0% | 100.0% |
| | 老年層 | 21.8% | 47.0% | 27.2% | 4.0% | 100.0% |
| | 合計 | 25.0% | 39.2% | 30.4% | 5.4% | 100.0% |
| χ二乗 | €:p値 | | | | | |

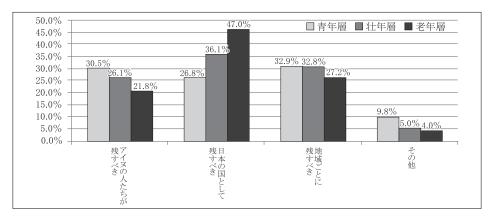


図7-23 アイヌ文化の残し方(和人)(世代別)

なお、若い世代ほどアイヌ文化は「アイヌの人たちが残すべき」と考える背景には、若い世代ほど、 アイヌ文化の現状について「わからない」と回答していることが関連していよう。アイヌ文化の現状 について「わからない」からこそ、それを「わかっている」(と想定される) アイヌの人々が残すべき だと考えていると思われる。

それでは、新ひだかの和人の人々は、個人として、将来アイヌ文化と関わろうとしているのだろうか。表7-24と図7-24にそれを整理した。まず、指摘しておくべきは、将来、体験や参加したいアイヌ文化があると回答した者(男女計)は13.0%と全回答者の1割程度しか存在しないという点だろう。そのなかで、体験・参加したいと回答されているものは、「工芸(編み物・刺繍・織物・木彫り)」の5.1%、「伝統的な料理」の3.4%や「アイヌ語」の2.6%である。しかし、それ以外のアイヌ文化は、1%程度にすぎず、その意味で、多くの新ひだかの和人にとって将来関わろうと考えられているとはいえない。なお、アイヌの人々の動向を確認すると、将来関わりたいと考えている者はいなかった40。

続けて、和人の動向をより詳しくみていこう。まず、男女別に違いはみられるのだろうか。表7-24と図7-24から χ 二乗値(から算出できるp値)を確認すると、「海・山・川でのタブーや約束事」や「伝統的狩猟・農法・漁法」で有意であると判断できる。しかし、その他の多くのアイヌ文化に関しては、男女差があるとはいえない。

漁法 伝統的狩猟・ 全体 伝統的な婚礼 伝統的な葬儀・先祖 神聖な場所への祈り ガムイノミなどの祭事 まじない・トゥス **罗見を大事にする** ユカラなど口承文芸 川山 (編み物・刺繍 農法 度数 238 3 0 6 17 0 10 0 32 268 5 合計 5 0 3 13 4 26 8 17 66 506 割合 男 0.8% 0.8% 0.0% 0.0% 0.8% 2.5% 0.8% 0.8% 2.9% 0.8% 0.8% 3.8% 3.4% 2.9% 0.4% 14.3% 100.0% 1.1% 0.7% 0.4% 0.7% 0.7% 6.3% 1.1% 合計 1.0% 0.4% 0.0% 0.8% 0.6% 0.8% 1.6% 13.0% 100.0% 1.0% 1.4% 0.4% 2.6% 5.1% χ 二乗: p値 0.039 0.002

表7-24 将来、体験・参加したいアイヌ文化(和人)(男女計・男女別)

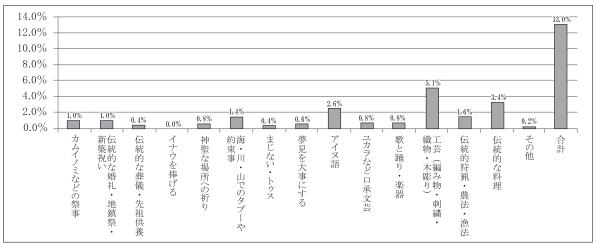


図7-24 将来、体験・参加したいアイヌ文化(和人)(男女計)

表7-25 将来、体験・参加したいアイヌ文化(和人)(世代別)

| | | カムイノミなどの祭事 | 祭・新築祝い伝統的な婚礼・地鎮 | 供養伝統的な葬儀・先祖 | イナウを捧げる | 神聖な場所への祈り | や約束事や約束事 | まじない・トゥス | 夢見を大事にする | アイヌ語 | ユカラなど口承文芸 | 歌と踊り・楽器 | 織物・木彫り)工芸(編み物・刺繍・ | 漁法 伝統的狩猟·農法· | 伝統的な料理 | その他 | 回答者数 | 全体 |
|----|-------|------------|-----------------|-------------|---------|-----------|----------|----------|----------|------|-----------|---------|-------------------|-----------------|--------|------|-------|--------|
| 度数 | 青年層 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 0 | 2 | 2 | 1 | 0 | 7 | 2 | 3 | 0 | 10 | 86 |
| | 壮年層 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 5 | 1 | 2 | 6 | 4 | 5 | 1 | 23 | 186 |
| | 老年層 | 2 | 4 | 1 | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 6 | 2 | 2 | 12 | 2 | 9 | 0 | 32 | 230 |
| | 合計 | 5 | 5 | 2 | 0 | 4 | 7 | 2 | 3 | 13 | 4 | 4 | 25 | 8 | 17 | 1 | 65 | 502 |
| 割合 | 青年層 | 1.2% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 2.3% | 3.5% | 0.0% | 2.3% | 2.3% | 1.2% | 0.0% | 8.1% | 2.3% | 3.5% | 0.0% | 11.6% | 100.0% |
| | 壮年層 | 1.1% | 0.5% | 0.5% | 0.0% | 0.5% | 0.0% | 1.1% | 0.5% | 2.7% | 0.5% | 1.1% | 3.2% | 2.2% | 2.7% | 0.5% | 12.4% | 100.0% |
| | 老年層 | 0.9% | 1.7% | 0.4% | 0.0% | 0.4% | 1.7% | 0.0% | 0.0% | 2.6% | 0.9% | 0.9% | 5.2% | 0.9% | 3.9% | 0.0% | 13.9% | 100.0% |
| | 合計 | 1.0% | 1.0% | 0.4% | 0.0% | 0.8% | 1.4% | 0.4% | 0.6% | 2.6% | 0.8% | 0.8% | 5.0% | 1.6% | 3.4% | 0.2% | 12.9% | 100.0% |
| χ | 二乗:p値 | | | | | | 0.062 | | 0.057 | | | | | | | | | |

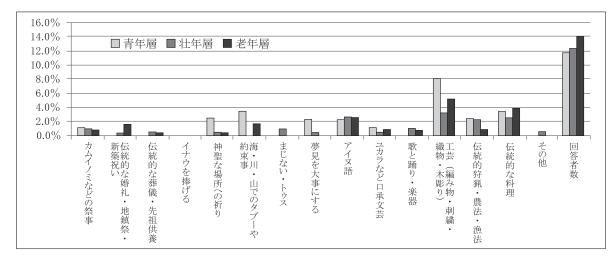


図7-25 将来、体験・参加したいアイヌ文化(和人)(世代別)

では、世代間の差はあるのだろうか。先に確認したように、アイヌ文化の知識や体験については大きな世代間の相違が存在していた。表7-25と図7-25をみよう。しかし、ここでは、世代差があるとはいいがたい。まず、そもそも、将来、体験・参加したいアイヌ文化があると回答する者は、「青年層」で11.6%、「壮年層」で12.4%、「老年層」で13.9%となっており、大きな違いがみられない。

また、個別にアイヌ文化の項目をみても、「海・山・川でのタブーや約束事」や「夢見を大事にする」で有意な違い(10%)があると判断できるものの、その他のアイヌ文化では違いがあるとはいえない。こうしてみれば、将来体験・参加したアイヌ文化があるかどうかという点については、世代間の違いがあるとはいいがたいだろう⁵⁾。

おわりに

以上、新ひだかの和人の人々がアイヌ文化とどのような関わりを持っているのかを検討してきた。 そこからは、アイヌの人々と比べると少ないものの、新ひだかの和人のおおよそ半数の人々がいずれかのアイヌ文化の知識を得ていることがわかった。また、そうした知識は、世代が高い者ほど得ていた。さらに、実際にアイヌ文化を体験している者に関しても、世代が高い者ほどそうした体験をしていた。ただし、アイヌ文化を実際に体験している者は1割程度にすぎなかった。 こうしたアイヌ文化の知識と体験は、多くの場合、アイヌ文化に関する施設や展示物から得られていた。アイヌの人々が家族や親族などの「パーソナルな」経路から知識を得ていたのに対して、和人の人々は、そうした施設などの「フォーマルな」経路から知識を得ていたのである。しかし、和人のうち世代別の特徴をみると、若い世代では学校においてそうした知識や体験を得ていた一方で、年齢が高い者は近所や友人関係など日常生活においてそうした知識や体験を得ていた。ただし、学校で得た知識に関して、忘れてしまっている者や覚えていない者もそれなりにみられた。

アイヌ文化が現在残っているのかという現状評価に関しては、ある程度残っていると回答する者がもっとも多かった。しかし、アイヌ文化の現状について「わからない」と回答する者も多くみられていた。その点は、アイヌの人々が「わからない」と回答する者がいなかった点をふまえると和人の人々の特徴といえる。そのうえ、和人の若い世代ほどアイヌ文化の現状を「わからない」と回答してもいた。さらに、将来的にアイヌ文化を体験したいかといえば、そうした体験をしたいと回答した者は1割程度にすぎなかった。それは世代別にみても同様にみられた。

以上をふまえれば、第1に、アイヌ民族多住地域においても和人は、アイヌ文化にそれほど関わりがあるとはいえないということがわかる。たしかに、新ひだかの半数の人々は、アイヌ文化の知識を知っていた。しかし、実際にアイヌ文化を体験した者は1割程度しか存在しないのである。さらに、将来的に、アイヌ文化と関わりたいと考えている者も1割程度しか存在しない。こうした点が、アイヌ文化に関する多くの施設や行事がある新ひだかにおいて当てはまるという点は強調しておいてよいだろう。

ただ、こうした点は、アイヌの人々においても当てはまるといえる。なぜなら、アイヌの人々のうち半数程度がアイヌ文化の知識をもっていたものの、実際にアイヌ文化を体験した者は2割程度にすぎないからである。その意味で、和人やアイヌにかかわらず、アイヌ民族多住地域である新ひだかの住民がもつ特徴といえるのかもしれない。

とはいえ第2に、和人の人々は、世代が若くなるにつれ、アイヌ文化の知識も知らずそれゆえ体験もしたことがない者が多くなっていることがわかる。そして、その結果として、若い世代ほどアイヌ文化の現状について「わからない」と回答する者が多くなり、さらにはアイヌ文化は「アイヌの人が残すべき」と回答する者が多くなっていると考えることができる。たしかに、若い世代ほど学校を通してアイヌの歴史や文化に接する機会は増えていた。しかし、そうした経験は、忘れ去られたり覚えていなかったりしていた。その点をふまえれば、アイヌ民族多住地域である新ひだかにおいてすら、今後アイヌ文化への関心がより一層もたれなくなっていく可能性があるだろう。

こうみれば、アイヌ民族多住地域である新ひだかにおいて、アイヌ文化は、和人の生活にとってそれほど関わりがあるものではなく、今後さらにその関わりが弱まっていく可能性すらあると判断せざるをえないだろう。

注

- 1)なお、ここでも男女差はみられない(表略)。
- 2)なお、学校でアイヌの歴史を学んだか、学校でアイヌの文化を体験したか両者ともに、男女差がみられない(表略)。
- 3)学校で体験したアイヌの文化についても自由記述があるが、回答数自体が少ないのでここでは

割愛する。ただし、「忘れた/覚えていない」者が相対的に多く、そして若い世代ほどそうした 回答をする割合が多い。

4)ここで、アイヌの人々のなかで、将来アイヌ文化に関わりたいと考えている者がいない背景については、いくつかの可能性が考えられよう。まず、第1に、もうすでにそれなりにアイヌ文化を体験しているために将来新たに体験・参加したいとは考えていないという可能性があるかもしれない。また、第2に、アイヌであるであることを「隠したい」と考えるために、もしくはアイヌ性から「中立的」でありたいと考えるために(→こうしたアイヌの人々のアイヌ性については小内・長田(2012)を参照のこと)、将来新たに体験・参加したいとは考えていないかもしれない。さらに、第3に、ここでの対象者をみると(→付表)、アイヌの人々は、和人の人々と比べると高年齢の者が多いためという可能性も考えられる。一般に、年齢が高いほど、アイヌ文化に限らず新しいことにチャレンジしにくくなると考えられる。そうした点が、アイヌの人々のなかで将来アイヌ文化に関わりたいと考えている者がいない点の背景にあるのかもしれない。

付表 アイヌ性×年齢

| | | 青年層 | 壮年層 | 老年層 | 合計 |
|----|-----|-------|-------|-------|--------|
| 度数 | 和人 | 86 | 186 | 230 | 502 |
| | アイヌ | 3 | 5 | 14 | 22 |
| | 合計 | 89 | 191 | 244 | 524 |
| 割合 | 和人 | 17.1% | 37.1% | 45.8% | 100.0% |
| | アイヌ | 13.6% | 22.7% | 63.6% | 100.0% |
| | 合計 | 17.0% | 36.5% | 46.6% | 100.0% |

5)ここで、将来体験・参加したいアイヌ文化について、世代差がみられない点については、(注4 でも言及したように) 一般に、年齢が高いほど、アイヌ文化に限らず新しいことにチャレンジしにくくなるという点が関係しているだろう。すなわち、こうした点が、アイヌ文化の知識・体験で世代差がみられたのに対して、将来体験・参加したいアイヌ文化について世代差がみられないことの背景にあると思われる。

参考文献

松本和良・江川直子編、2001、『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社.

小内透・長田直美,2012,「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター,169-81.

(上山浩次郎)

第8章 アイヌ政策に対する評価

濱田 国佑 | 大阪商業大学JGSS研究センター ポスト・ドクトラル研究員

はじめに

アイヌ民族は、日本社会において長い間、少数民族として差別の対象となってきた。また、和人とアイヌ民族との間の格差、つまり経済的・社会的な不平等も現在に至るまで、さまざまな形で存在してきたといえる。こうしたアイヌ民族を取り巻く社会的状況が存在する中で、アイヌ民族に対する差別、経済的・社会的不平等の解消を目指して、国や地方自治体によってさまざまな政策が行われてきた。こうしたアイヌ民族に対する諸政策は、地域住民によってどのように受け止められているのだろうか。

近年、多文化主義の先進的地域とされた欧州、あるいはオーストラリアにおいて多文化主義の 限界が指摘され、その反動として単一文化を志向するような動きもみられる。

たとえば1996年から2007年までオーストラリア首相の座にあったハワードはそれまでの多文 化主義的政策を見直すなどの姿勢を見せたほか、1998年には一つの民族によるオーストラリア を掲げる「ワン・ネイション党」が結成され、総選挙でも8~9%の得票率となるなど一定の支 持を集めた。また、欧州においても、ドイツの首相メルケルおよびイギリスの首相キャメロンは、 2010年から2011年にかけて、「現状の『多文化主義』政策はうまくいっていない」という主旨の発 言を相次いで行うなど、多文化主義政策が必ずしもうまくいっていないとの認識が広がりつつある。

一方、日本では、これまで「単一民族国家」であるとの認識が、政治家によってたびたび公言されるなど、多文化主義的な政策の必要性は顧みられてこなかった。しかしながら、1997年にアイヌ文化振興法が制定され、また、2007年には「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が日本を含めた各国の賛成多数で可決されるなどの動きがみられる。さらに、国連宣言を受けて、2008年には衆参両院において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が全会一致で採択されるなど、先住民族の文化を認め、多文化共生を図るような政策の実現に向けた動きが徐々に進みつつあるといえる。

こうした状況の中、アイヌ民族が多く居住する北海道の地域住民は、アイヌ民族に対する政策に対してどのような意識を抱いているのだろうか。本章では、新ひだか町民を対象にした地域住民調査の結果をもとに、アイヌ民族に対する諸政策が地域住民によってどのように受け止められているのかを明らかにしていくことにしたい。なお、地域住民調査の回答者の中には、少数ながらアイヌ民族の人々も含まれている。本章では、和人がアイヌ政策に対してどのような意識をもっているかという点におもな関心があるため、基本的に対象を和人に限定して分析を行った。

第1節 アイヌ政策の概要

アイヌ民族に対して国が取った政策としては、まず1899年に制定された「北海道旧土人保護法」が挙げられる。この法律では、アイヌ民族の人々に対する土地の付与のほか、医療、生活扶助、教育などの保障が定められている。しかしながら、1996年に提出された『ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会報告書』では「昭和10年代以降土地の無償下付の実績がない」、「いずれの施策もアイヌの人々の窮状を改善するために十分機能したとはいえなかった」など、法律が果たした積極的な意義は少ないとの評価が示されている。また、法律自体が差別的な性格をもっていたとも指摘されている。たとえば、小川(1993)は、教育の保障の名のもとに「アイヌの言語・慣習を排除ないし破壊する」役割を果たしたと述べている。

第二次世界大戦後の1961年度には、厚生省(当時)予算の「地方改善施設整備費補助金」に「ウタリ福祉対策費」が計上され、生活環境の改善、住宅の整備、教育の促進などアイヌの人々の福祉向上のための諸施策が実施された(常本 2010)。

ただし、これらの諸施策は、これまで同様「十分な成果を上げることができなかった」(ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会 1996) ため、1974年度から「北海道ウタリ福祉対策」が進められることになったのである。1974年度に開始された第一次「北海道ウタリ福祉対策」では、「アイヌの人たちの自立を助長促進し、社会的・経済的地位の向上を図るため、生活環境の改善、社会福祉の充実、職業の安定、教育文化の向上及び生産基盤の整備等を積極的に推進する」ことを目的として、大きく分けて「地区対策」、「個別対策」、「団体育成」の3つの施策が進められた。「地区対策」の内容として具体的に挙げられているのは、「生活条件の整備」、「就業条件の整備」、「福祉条件の整備」、「教育・文化の振興」であり、「個別対策」としては「住宅資金の貸付」、「雇用対策」、「教育対策」、「福祉対策」が挙げられている。このように「ウタリ対策」として行われている政策は多岐にわたっており、その政策ごとに異なる省庁によって事業が所管されている。そこで、その円滑な実施を図るため1974年5月に「北海道ウタリ対策関係省庁連絡会議」が設置されることになった。

以降、第一次から第四次まで合計28年間にわたって「北海道ウタリ福祉対策」が実施されたものの、1997年のアイヌ文化振興法制定に伴い、文化振興に関わる政策・事業については、「アイヌ文化の振興等を図るための施策に関する基本計画」にもとづいて行われることになった。そのため、生活支援等の施策については、2002年度以降、「アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」という名前で方針が策定されることになったのである(常本 2010)。

「アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」は2002年度から2008年度までの7か年にわたって進められ、2009年度からは現在まで「第二次アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」が実施されている。

この推進方策の目的は、「アイヌの人たちの生活の一層の向上を通じ、社会的・経済的地位の向上を図ること」であるとされ、「生活の安定」、「教育の充実」、「雇用の安定」、「産業の振興」、「民間団体の活動の促進」という5つの基本的方向に沿って事業が行われている。具体的な中身を見ると、「生活の安定」に関しては「生活館整備事業費補助金」、「アイヌ生活向上振興資金貸付金」、「アイヌ住宅改良事業費補助金」などの事業、「教育の充実」に関しては、「高等学校等進学奨励費」、「高等学校通学費補助金」、「専修学校等進学奨励費補助金」などの事業、「雇用の安定」に関しては、「公

共訓練費(アイヌ入校対策費、公共職業訓練手当)」、「アイヌ雇用促進費補助金」、「就職奨励事業 費補助金」などの事業、「産業の振興」に関しては、「アイヌ農林漁業対策事業費」、「アイヌ中小 企業振興特別対策費補助金」などの事業、「民間団体の活動の促進」に関しては「ウタリ協会活動 促進費(ウタリ協会補助金)」などの事業が行われている(札幌市アイヌ施策推進計画検討委員会 第1回配布資料)。

一方、アイヌ文化振興法の制定にともなって策定された「アイヌ文化の振興等を図るための施策に関する基本計画」では、「アイヌ文化の振興」と「理解の促進」が2つの基本的方向として定められ、「アイヌ文化施設管理費(アイヌ民族文化研究センター運営費)」、「アイヌ文化財保存対策費」、「アイヌ文化振興・研究推進機構事業費補助金」、「アイヌ文化振興事業費(「先住民の日」記念事業費補助金)」、「アイヌ文化施設管理費(アイヌ総合センター管理運営費)」といった事業が行われている。

以上をまとめると、現在は「第二次アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」、および「アイヌ文化の振興等を図るための施策に関する基本計画」という2つの計画のもとでアイヌ関連施策が実施されており、それぞれアイヌの人々の生活向上、およびアイヌ文化の振興が図られている。また、生活向上支援については、個人に対する支援、地域に対する支援、団体に対する支援の3つのレベルで事業が行われているといえるだろう。

第2節 アイヌ政策に対する地域住民の意識

第1項 個別のアイヌ政策に対する意識

すでに述べたように、国や北海道は、さまざまな形で「アイヌ政策」を実施してきた。こうした政策に対し、地域住民はどのような意識を抱いているのだろうか。以下では、まず、アイヌ民族に対する施策として重視するものを尋ねた質問への回答の分布を確認しておくことにする。また、比較のためアイヌ民族およびその配偶者、合計22人の回答の分布も併せて示している(図8-1)。

まず、和人による回答結果をみると「差別のない社会をつくる」という回答がもっとも多く、全体の54.5%が選択している。次いで多いのが「アイヌ民族に関する正しい理解の提供」であり、これを選択したのは全体の42.2%となっている。このように、アイヌ民族に対する差別をなくす、正しい理解をもつといった意識の啓発活動が多くの人にとって重要だと考えられていることがわかる。その一方「雇用対策の拡充」、「教育支援の拡充」、「経済援助の拡充」、「土地・資源の補償」といった政策はそれほど重視されていない。これらは、いずれもアイヌ民族の人々に対する個別支援を含んだ政策である。このように、アイヌ民族に対する差別の解消、正しい理解の普及などの意識啓発に関する政策については賛成する人がそれなりに多いものの、アイヌの人々に対する個人的な支援、財政支出を含む政策については、積極的に支持する人が少ない状況だといえるだろう。

一方、アイヌ民族の場合「差別のない社会をつくる」ことが重要だと考える人の割合が、和人と比べて高いことがわかる。また「雇用対策」、「教育支援」、「経済的援助」などについても、同様に重視する人の割合が相対的に高い。ただし、すべての項目に対して無条件に賛同しているわけではなく、「アイヌ語・アイヌ文化を守る」、「正しい理解の提供」などの政策については、むし

ろ和人より重視する割合が低いのである。このようにアイヌ民族の場合、「差別のない社会」、「雇用対策」、「教育支援」など、民族的な不平等の解消につながる政策を支持する傾向が強いといえるだろう。

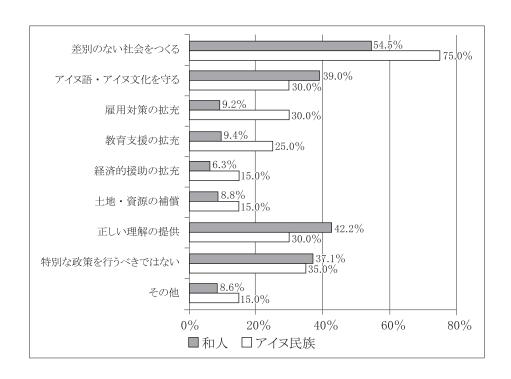


図8-1 アイヌ政策として重視するもの(複数回答)

第2項 アイヌ政策に対する意識の世代的差異

こうしたアイヌ政策に対する意識は、年齢によって差があると考えられる。たとえば、常本 (2010) によると、国や地方自治体によるアイヌ政策は、当初、アイヌ民族の人々の生活向上を図る「福祉対策」が中心であったが、徐々にアイヌ文化の振興やアイヌ民族に対する理解の促進が、政策の中で大きな比重を占めるようになっていったとされる。また、品田 (2010) によると、北海道高等学校教職員組合連合会が1982年にアイヌ文化・歴史等を教える際の手引きを作成したほか、1984年には北海道教育委員会、1985年に札幌市教育委員会によって、それぞれ指導のための資料が作成されている。このように、アイヌ民族やアイヌ文化に対する理解を深めるための教育が実践されることによって、人々のアイヌ政策に対する見方もまた変化している可能性があるといえるだろう。

実際、年齢層によって上記のようなアイヌ政策に対する意識に差はみられるのだろうか。以下の表 8-1 では「 $20\sim30$ 代」、「 $40\sim50$ 代」、「 $60\sim70$ 代」の年齢層ごとに、重視するアイヌ政策の割合を示した。結果を確認すると、「アイヌ民族に対する差別が起こらない人権尊重の社会をつくるべき」を挙げた人の割合は $60\sim70$ 代では63.8%に達する一方、 $20\sim30$ 代では44.0%にとどまっており、年齢層が高いほど、「差別が起こらない社会づくり」に賛同する傾向が強いことがわかる。アイヌ文化やアイヌ民族に関する教育を受けた若年層の方が、「差別が起こらない社会づくり」に

肯定的というわけでは必ずしもないのである。また「雇用対策」、「教育支援」の拡充が重要だとする割合についても、統計的な有意差が見られる。 $60 \sim 70$ 代では $13 \sim 14$ %程度が雇用対策や教育支援を拡充すべきだと考えているのに対して、 $20 \sim 30$ 代および $40 \sim 50$ 代では $5 \sim 7$ %台にとどまっており、やはり若年・壮年層より、老年層の方が支援を拡充すべきと考える割合が高いことがわかる。

このように、 $60 \sim 70$ 代の世代は $20 \sim 50$ 代の世代と比べて、差別をなくす、あるいは雇用対策や教育支援の拡充といったアイヌ政策に対して、より積極的な意向をもっているのである。こうした意識の世代差は、なぜ生じているのだろうか。その理由として考えられるのは、アイヌ民族が置かれた状況の歴史的変化である。先述したように、アイヌ民族に対する施策は「不十分である」と評価されながらも、1960年代からさまざまな形で続けられてきた。その結果、アイヌ民族の人々の生活状態も以前と比較して、相対的に良くなっていると考えられる。 $60 \sim 70$ 歳の世代は、アイヌの人々に対する差別が現在よりも激しく、貧困状態に置かれていた時代の記憶をもっており、それが「差別が起きない社会」、「雇用対策の拡充」、「教育支援の拡充」といったアイヌ政策に対する支持としてあらわれているのかもしれない。

表8-1 アイヌ政策として重視するもの(複数回答・年齢別)

| | 20~30代 | 40~50代 | 60~70代 | χ²検定 |
|------------|--------|--------|--------|------|
| 差別のない社会 | 44.0% | 47.8% | 63.8% | ** |
| アイヌ語・アイヌ文化 | 32.1% | 37.0% | 43.1% | |
| 雇用対策 | 7.1% | 6.0% | 12.8% | * |
| 教育支援 | 7.1% | 4.9% | 14.2% | ** |
| 経済的援助 | 7.1% | 3.8% | 8.3% | |
| 土地・資源 | 10.7% | 5.4% | 11.0% | |
| 正しい理解 | 47.6% | 40.8% | 42.2% | |
| 特別な政策を行わない | 32.1% | 42.4% | 34.9% | |
| その他 | 13.1% | 7.6% | 7.8% | |

^{***} p<.001 ** p<.01 * p<.05

第3項 アイヌ政策に対する意識の地域差

アイヌ政策に対する意識は、年齢だけでなく、回答者の出身地域によっても異なる可能性がある。 先述したように、北海道では、アイヌ民族やアイヌ文化に関する教育が、社会科の授業等を通じ て行われており、また、新聞等のメディアにおいて、アイヌ文化やアイヌ民族に関する歴史的な 問題が取り上げられる頻度も高いといえる。こうした環境が、アイヌ政策に対する意識に影響を 与えている可能性があると考えられる。

アイヌ政策に対する意識を、回答者の出身地域別に示したものが、以下の表8-2である。

これをみると、まず、新ひだか町出身者は、各種のアイヌ政策に対してそれほど肯定的な態度を示していないことがわかる。たとえば、「雇用対策」の拡充については、道外出身者の17.0%が肯定的な態度を示しているのに対し、新ひだか町出身者の場合、「雇用対策の拡充」が重要だと考えるのはわずか5.6%にとどまっている。また、「教育支援」についても同様であり、道外出身者の賛同割合が相対的に高い一方、新ひだか町出身者で「教育支援の拡充」に賛同する割合は低いという結果になっている。新ひだか町出身者は、アイヌを身近に感じてきたからこそ、「雇用対策」や「教育支援」などの形で、アイヌ民族の人々のみに限定した支援策が行われることに、違和感

をもつということなのかもしれない。

道内出身者と道外出身者の差が明確にあらわれたのは、「差別が起こらない社会」と「正しい理解」の両項目に対する回答である。「差別が起こらない社会」を重視する割合は、道内出身者で高くなっており、62.8%が選択をする一方、道外出身者の割合は51.1%にとどまっている。道内出身者はアイヌ民族に対する差別が「ある」、あるいはかつて「あった」ということを前提にし、そうした状況の解消が重要だと考えているように思われる。

一方、「アイヌ民族に関する正しい理解の提供」については、道外出身者でこれを選択する割合が高くなっていた。道外出身者の59.6%が、「正しい理解」を提供することが重要だと考えているのに対し、道内出身者の場合、その割合は42.9%にとどまっている。このような結果をみると、道外出身者は、アイヌ民族に対する正しい理解が広まっていないということを前提にし、それを解消すべきだと考える傾向が強いといえるのかもしれない。

新ひだか町 道内 χ2検定 差別のない社会 51.1% アイヌ語・アイヌ文化 36.6% 39.8% 42.6% 雇用対策 5.6% 12.0% 17.0% 教育支援 6.0% 12.6% 14.9% 経済的援助 4.4% 7.3% 12.8% 土地・資源 6.4% 9.9% 17.0% 正しい理解 38.6% 42.9% 59.6% 特別な政策を行わない 33.5% 31.9% 41.0% その他 9.8% 8 4% 8.5%

表8-2 アイヌ政策として重視するもの(複数回答・出身地域別)

第4項 アイヌ政策に対する意識の学歴差

次に、回答者の学歴によって、アイヌ政策として重視するものに差異があるかを確認してみることにする。表8-3に示されたカイ二乗検定の結果を確認すると、多くの項目で学歴による統計的な有意差が存在することがわかる。まず「差別のない社会」をつくるべきだと考える人の割合は、高校卒以上の学歴の場合 5 割程度にとどまっているが、中学卒の場合、約7割に達している。一方「アイヌ民族に関する正しい理解を提供すべき」だと考えているのは、大学以上の学歴でもっとも高く、66.1%が重要だと答えているのに対し、中学、高校卒の学歴の場合、4 割に満たない状況である。

また、「雇用対策」や「教育支援」に関しては、中学卒と大学以上で高い割合を示し、高校や専門・高専・短大で低いU字型の分布を示している。つまり、単純に学歴が高いほど、アイヌ民族に対する政策の必要性を認識し、これに賛同するというわけではないのである。

^{***} p<.001 ** p<.01 * p<.05

表8-3 アイヌ政策として重視するもの(複数回答・学歴別)

| | 中学 | 高校 | 専門高専短大 | 大学以上 | χ ² 検定 |
|------------|-------|-------|--------|-------|-------------------|
| 差別のない社会 | 67.3% | 53.4% | 45.7% | 50.0% | * |
| アイヌ語・アイヌ文化 | 40.8% | 34.5% | 43.6% | 48.2% | |
| 雇用対策 | 15.3% | 6.0% | 7.4% | 16.1% | * |
| 教育支援 | 15.3% | 5.2% | 9.6% | 17.9% | ** |
| 経済的援助 | 13.3% | 4.3% | 3.2% | 8.9% | ** |
| 土地・資源 | 9.2% | 7.3% | 7.4% | 17.9% | |
| 正しい理解 | 33.7% | 39.7% | 45.7% | 66.1% | ** |
| 特別な政策を行わない | 28.6% | 40.5% | 43.6% | 25.0% | * |
| その他 | 5.1% | 8.2% | 13.8% | 7.1% | |

^{***} p<.001 ** p<.01 * p<.05

さらに、アイヌ政策全般に対してどれだけ賛同しているかを調べるため、アイヌ民族に対する政策として挙げられた「差別のない社会」、「アイヌ語・アイヌ文化」、「雇用対策」、「教育支援」、「経済的支援」、「土地・資源」、「正しい理解」の7項目のうち、各回答者が選択した項目の総数を計算してみた。結果を示したのが以下の表8-4である。これをみると、やはり選択した項目数が一番多いのは大学卒(2.3項目)であり、次いで中学卒が多い(1.9項目)という結果であった。これと比較すると高校卒や専門・短大・高専卒の場合、選択した項目数の平均は1.5~1.6項目にとどまっており、アイヌ政策に対して肯定的な態度をとる割合は全般的に低いといえる。

表8-4 重視するアイヌ政策として選択した項目数

| | 平均値 | 度数 | 標準偏差 |
|--------|--------|-----|---------|
| 中学 | 1.9490 | 98 | 1.91775 |
| 高校 | 1.5043 | 232 | 1.37384 |
| 専門短大高専 | 1.6277 | 94 | 1.48819 |
| 大学 | 2.2500 | 56 | 1.90931 |
| 合計 | 1.7063 | 480 | 1.60348 |

つまり、大学卒と中学卒の場合はある程度アイヌ政策に対して肯定的な態度を示すものの、高校卒、あるいは短大・高専・専門卒の場合、各政策に対して否定的な態度をとる人が多いということになる。このような傾向がみられる理由は何だろうか。考えられるのは、「中学卒」という学歴による効果は見せかけの関係であり、年齢の効果によって攪乱されているという可能性である。つまり、年齢が高いほど中学卒の学歴が多くなるため、年齢の効果が、中学卒という学歴の効果としてあらわれているという可能性が考えられる。そこで、以下では、年齢などの他の変数を統制した上でもなお学歴の効果が存在するのかを、多変量解析によって確かめてみることにしたい。

第3節 アイヌ政策に対する意識の規定要因

第2節では、アイヌ政策に対する意識と回答者の属性(年齢層、出身地域、学歴)との2変数間の関連について確認してきた。その結果、年齢層が高いほど差別のない社会やアイヌに対する支援を望む、大学卒と中学卒の場合アイヌ政策への支持が高まる、新ひだか町出身者はアイヌ政策に対して否定的な意識をもつ割合が高いなどの傾向がみられた。

こうした諸要因のうち、どの要因がアイヌ政策への意識に対して、真の影響を与えているのだ

ろうか。以下では、アイヌ政策に対する意識を従属変数にした多変量解析を行い、アイヌ政策に 対する意識の規定要因を明らかにしていくことにする。

独立変数として用いるのは、年齢、性別(男性、基準カテゴリは女性)、学歴(中学、短大高専専門、大学、基準カテゴリは高校)、就業状態(経営・役員、自営家族従業、パート・アルバイト、無職・学生、基準カテゴリは常時雇用)、出身地域(新ひだか町、道外、基準カテゴリは道内)に関する各変数である。また、日頃のアイヌ民族の人々との交流の程度が、アイヌ政策に対する意識に影響を与えている可能性があるため、アイヌ民族との交流の頻度をあらわす変数を統制のために用いた。各変数の詳しい内容は、以下の表8-5のとおりである。

表8-5 使用する変数の概要

| 変数 | 変数の情報 | | | | | |
|----------------|--|--|--|--|--|--|
| アイヌ政策に対する全般的支持 | 「今後、アイヌ民族に関する施策はどうあるべきだと思いますか」という質問に対して、 複数回答可能な以下の7つの選択肢から選んだ項目の数。 | | | | | |
| | 「差別が起こらない社会をつくるべき」 | | | | | |
| | 「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべき」 | | | | | |
| | 「雇用対策を拡充すべき」 | | | | | |
| | 「教育支援を拡充すべき」 | | | | | |
| | 「経済的な援助を拡充すべき」 | | | | | |
| | 「土地・資源を返還すべき」 | | | | | |
| | 「正しい理解を提供すべき」 | | | | | |
| 教育支援 | 「教育支援を拡充すべき」を選択=1,非選択=0 | | | | | |
| 年齢 | 年齢 | | | | | |
| 性別 | | | | | | |
| 男性ダミー | 男性=1,女性=0 | | | | | |
| 学歴 | | | | | | |
| 中学 | 中学卒=1,その他の回答者=0 | | | | | |
| 高校(基準カテゴリ) | | | | | | |
| 短大・高専・専門 | 短大・高専・専門卒=1,その他の回答者=0 | | | | | |
| 大学 | 大学卒以上=1, その他の回答者=0 | | | | | |
| 就業状態 | | | | | | |
| 経営・役員 | 経営者・役員=1, その他の回答者=0 | | | | | |
| 常時雇用(基準カテゴリ) | | | | | | |
| 自営・家族従業 | 自営業・家族従業者=1,その他の回答者=0 | | | | | |
| パート・アルバイト | パート・アルバイト=1,その他の回答者=0 | | | | | |
| 無職・学生 | 無職・学生=1, その他の回答者=0 | | | | | |
| 出身地域 | | | | | | |
| 新ひだか町 | 新ひだか町出身=1,その他の回答者=0 | | | | | |
| 道内(基準カテゴリ) | | | | | | |
| 道外 | 道外出身=1, その他の回答者=0 | | | | | |
| アイヌとの交流 | あなたは普段、アイヌの人たちと交流がありますか。 | | | | | |
| | よくある $=4$, たまにある $=3$, あまりない $=2$, ほとんどない $=1$ | | | | | |

まず、アイヌ政策に対する全般的な支持を従属変数にした重回帰分析の結果を以下の表8-6で確認してみることにしよう。

表8-6をみると、「大学」の係数が危険率5%水準で有意であることが確認され、アイヌ政策 支持に正の影響を与えていることがわかる。つまり、大学卒の人は、基準となる高校卒の人と比べて、アイヌ政策に対する全般的な支持が強いということになる。また、危険率を10%とした場合、「中学」も有意であることが確認できる。大学卒の場合と同様、係数の符号は正であることから、やはり中学卒も、高校卒と比較して、アイヌ政策に対する全般的な支持は高いということになる。先にみたように、大学卒と中学卒でアイヌ政策への支持が高く、高校卒で支持が低いという傾向がここでも確認されたといえるだろう。

一方で、年齢はアイヌ政策支持に影響を与えていなかった。したがって、中学卒の場合、アイ

ヌ政策に対する全般的な支持が高いという効果は、年齢によって攪乱された擬似的なものとはいえない。つまり、中学卒層の年齢が高いことによってもらされたわけでなく、学歴独自の効果ということになる。

また、「無職・学生」であることがアイヌ政策支持に対して、正の影響を与えていた。つまり、 基準カテゴリとなる常時雇用従業者と比べて「無職・学生」の場合、アイヌ政策に対する全般的 な支持は高くなるということになる。なお、「無職・学生」の内訳を確認してみると、学生は4人 しか存在せず、ほとんど(97.5%)が無職となっている。また、無職に分類される人のうち、7 ~8割は60~70代の高齢者層であり、こうした人々は年金あるいは公的扶助などの制度を利用し て生活をしていると考えられる。そのため、アイヌ民族に対する支援政策についても、その重要 性を認め、支持する傾向が強いのかもしれない。

表8-6 アイヌ政策に対する全般的支持の規定要因

| | В | S.E. |
|------------|----------|------|
| 定数 | .990 ** | .372 |
| 年齢 | 001 | .006 |
| 性別 (男性ダミー) | .119 | .158 |
| 学歴 | | |
| 中学 | .359 | .200 |
| 高校(基準) | | |
| 短大・高専・専門 | .019 | .202 |
| 大学 | .536 * | .256 |
| 就業状態 | | |
| 経営・役員 | .048 | .311 |
| 常時雇用(基準) | | |
| 自営・家族従業 | .394 | .259 |
| パート・アルバイト | .002 | .230 |
| 無職・学生 | .814 *** | .219 |
| 出身地 | | |
| 新ひだか町 | 333 * | .161 |
| 道内(基準) | | |
| 道外 | .360 | .274 |
| アイヌとの交流 | .166 * | .068 |
| 調整済R2乗 | .09 | 98 |
| F値 | 3.973 | *** |
| N | 45 | 50 |

そこで、以下では、個別のアイヌ政策に対する支持の規定要因を探ってみることにしたい。具体的には、「差別のない社会をつくるべき」、「教育支援を拡充すべき」という項目の選択/非選択を従属変数にした二項ロジスティック回帰分析を行う。独立変数は、先の重回帰分析と同じ変数を用いた。結果を示したのが、以下の表8-7である。

結果を見ると、「差別のない社会」と「教育支援の拡充」の規定要因は、かなり異なっていることがわかる。まず「差別のない社会」の規定要因を確認すると、有意な変数は少なく、「新ひだか町」出身の効果、および「アイヌとの交流」の効果が確認されるのみである。「新ひだか町」の係数はマイナスなので、新ひだか町出身者は、道内の他地域出身者と比べて「差別のない社会」をつくるという目標に対し、否定的な傾向があるということになる。また、「アイヌとの交流」は正の効果をもっており、アイヌ民族の人との交流が多いほど「差別のない社会」という目標を肯定する傾向があるといえる。

一方、「教育支援の拡充」に対しては、やはり「新ひだか町」出身であること、「アイヌとの交流」 の程度が影響を与えているものの、それ以外にも学歴、就業状態などの個人属性に関する変数が 影響を与えていることがわかる。

まず、「男性ダミー」が正の影響を与えており、男性の方が「教育支援を拡充すべき」という政策に、より肯定的な態度を示していることがわかる。一般的にいって、女性は賃金水準が低く抑えられており、学歴による所得格差がつきにくい状況となっている。また、男性と比べて全般的な学歴の水準も低い。一方、男性は高等教育への進学率が相対的に高く、学歴による所得格差も大きいため、教育による不平等により敏感であり、これを解消する支援策が重要だと考えているのかもしれない。

次に、就業状態に関しては、「無職・学生」や「自営・家族従業者」が正の影響を与えており、常時雇用従業者と比べて「教育支援を拡充すべき」を選択する確率が高いということがわかる。また、学歴に関しては、「中学」および「大学」が正の影響を与えている。したがって、中学卒および大学卒の回答者は、基準となる高校卒と比べて「教育支援の拡充」により肯定的であるといえる。

このように、「教育支援の拡充」という具体的なアイヌ政策に対しては、中学卒あるいは無職などの層において、より強く支持される傾向があることがわかる。これらの層は、社会的な不平等・格差の影響をより強く受けると考えられるが、こうした人々がアイヌ民族に対する支援政策をより積極的に支持しているのである。この分析結果は、中学卒あるいは無職層ではアイヌ民族と和人との民族的な分断がそれほど意識されておらず、社会的不平等を解消する政策の一環として、アイヌ政策が捉えられていることを示唆している。

表8-7 個別のアイヌ政策に対する支持の規定要因

| | 差別のなり | \社会 | 教育支援 | の拡充 |
|---------------|--------|------------|------------|-------|
| | В | S.E. | В | S.E. |
| 定数 | 481 + | .618 | -4.500 *** | .964 |
| 年齢 | .009 | .008 | 006 | .015 |
| 性別 (男性ダミー) | 250 | .213 | .935 * | .380 |
| 学歴 | | | | |
| 中学 | .435 | .278 | 1.130 * | .445 |
| 高校(基準) | | | | |
| 短大・高専・専門 | 382 | .271 | .577 | .514 |
| 大学 | 032 | .340 | .968 + | .535 |
| 就業状態 | | | | |
| 経営・役員 | .139 | .413 | 310 | 1.131 |
| 常時雇用(基準) | | | | |
| 自営・家族従業者 | 062 | .345 | 1.560 * | .617 |
| パート・アルバイト | 185 | .307 | .086 | .757 |
| 無職・学生 | .424 | .296 | 1.853 ** | .565 |
| 出身地 | | | | |
| 新ひだか町 | 586 ** | .219 | -1.045 ** | .399 |
| 道内(基準) | | | | |
| 道外 | 317 | .367 | .092 | .569 |
| アイヌとの交流 | .209 * | .092 | .339 * | .164 |
| NagelkerkeR2乗 | .106 | | .212 | ? |
| N | 450 | | 450 | |

^{***} p<.001 ** p<.01 * p<.05

第4節 まとめ

本章では、国や北海道による各種のアイヌ政策に対して、和人の人々がどのような意識をもっているのかを、地域住民調査の結果をもとに明らかにしてきた。

その結果、大学卒や中学卒の学歴の場合、アイヌ政策への支持が高まること、就業状態が無職の場合、アイヌ政策への支持が高まること、出身地が新ひだか町の場合、各種のアイヌ政策に対して否定的な態度が強まること、などの知見が得られた。

中学卒の学歴および無職の人々が、アイヌ政策に対して肯定的であるのは、意外な結果であるといえるだろう。ブルーマーの集団脅威仮説(Blumer 1958)などによれば、マジョリティ集団の特権が、マイノリティ集団によって脅かされていると感じた際に差別意識が生じるとされる。また、差別意識は、特権の剥奪によって大きな影響を受ける層、具体的には階層や学歴が低い層において、より強まるとされている。本章の分析結果は、こうした先行研究の知見とは異なり、アイヌ民族と和人との民族的な分断がそれほど意識されていないこと、また、マクロな社会的不平等の構造を解消するための一つの方策としてアイヌ民族への支援政策を捉え、和人とアイヌ民族が連帯できる可能性が示唆されているように思われる。

しかしながら、分析の結果からは同時に「高校卒」、「常時雇用」などの基準となるカテゴリにおいて、あるいは「新ひだか町」出身者の場合に、アイヌ政策に対する支持が弱まるということも明らかになった。「高校卒」は学歴の中でもっとも大きい割合を占めるカテゴリであり、「新ひだか町」も出身地の約半数を占める最大のカテゴリである。また、「常時雇用」も回答者の27%を占め、無職に次いで大きい割合を占めるカテゴリとなっている。このように、新ひだか町におけるマジョリティとなる各カテゴリにおいて、アイヌ政策に対する支持が低いという結果がみられるのである。

このように、地域社会のマジョリティ集団において、アイヌ政策に対する支持が低く、積極的な姿勢がみられないという現状は、今後、地域においてアイヌ政策を進めていく上で大きな問題となるだろうし、これに反対する動きも容易に生じうるといえるだろう。これまで、アイヌ政策の多くは、国や道が実施するという形で進められてきた。いわば、上から降ってきた政策であるといえる。近年、地方自治体の財政が厳しい状態に陥る中、地域社会のマジョリティに対してアイヌ政策の重要性を訴えながら政策を進めていくことが、これまで以上に重要になっているのではないだろうか。

参考文献

アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会,2009,『アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書』.

Blumer, H., 1958, "Race Prejudice as a Sense of Group Position," *The Pacific Sociological Review*, 1(1), 3-7.

小川正人,1993,「『アイヌ教育制度』の廃止: 『旧土人児童教育規程』廃止と1937年『北海道旧土 人保護法』改正」『北海道大学教育学部紀要』61,37-79.

品田早苗,2010,「『アイヌ』像と北海道の学校教育: 教職員用の指導の手引き・指導資料を中心に」 『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』6,65-73.

- 常本照樹,2010,「アイヌ政策についての要望」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道 大学アイヌ・先住民研究センター,105-7.
- ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会, 1996, 『ウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会報告書』.

(濱田 国佑)

第9章 地域への評価

新藤 慶 | 群馬大学教育学部准教授

第1節 本章の課題と方法

本章では、アイヌの人々が多く住む新ひだか町に対して、一般住民やアイヌの人々がどのような 評価をしているかを明らかにする。

アイヌ民族多住地域における住民の生活や意識については、松本和良の研究グループが多くの成果を残している(松本・大黒編 1998; 松本・江川編 2001)。このなかでは、地域の評価に関わる部分として、以下の諸点が指摘されている。まず、松本らは、アイヌの人々に対する調査から「差別や偏見のみられるところほど(『この町は子どもを生み育てるのにふさわしい町だと思いますか』という問いに対して――新藤注)『たいへんふさわしい』とか、『一生住み続けたい』とかの答えは少なくなっている」(松本ほか 1998: 36)と述べている。また、宇田川拓雄は、アイヌの人々と一般住民の住み心地についての意識の比較から、「ウタリの人びとは一般の人びとに比べた場合、生活環境において、人間関係、社会関係を重視しており、このことは一般の人びとが物的な利便性や個人生活を重視しているのと対照的である。……ウタリの人びとが親密な人間関係を維持しているのはマイノリティとして差別されてきたためかもしれない」(宇田川 1998: 87)と指摘している。このことから、アイヌの人々は、地域に対する評価を行う際に、一般の住民に比べて人間関係の側面を重視している可能性がある。

一方、一口にアイヌ民族多住地域といっても、その歴史的な背景は異なっている。武田朋久は、門別町のアイヌの人々への調査から、「ウタリ協会門別支部の全体的傾向性として社会的貢献意欲の高さや地域、役所への信頼感の強さ及び日常的な生活態度における積極的態度が見られると同時に、アイヌ民族としての強いエスニック・アイデンティティの存在が看取される。これは門別支部の人たちが、日本国民として現代日本社会においていかに成功を収め、よりよい生活をなしうるかと考えていることを示している」(武田 2001: 76) と述べ、門別のアイヌの人々が地域への高い信頼感を有することを指摘している。そして、このような門別のアイヌの人々がもつメンタリティの根源を「仮説」と断ったうえで、「『御味方エゾ』としての共通感情」(武田 2001: 75) に求めている。この「御味方エゾ」とは、松前藩に激しい戦いを挑んだことで知られるシャクシャインと争ったオニビシが、松前藩と比較的近い関係を結んでいたことから、オニビシの影響下にあった日高地方以西のアイヌの人々たちに松前藩が用いた呼称の一つである。門別のアイヌの人々だけが、このオニビシのメンタリティを引き継いだとは考えにくいが、和人社会への適応を示すような門別のアイヌの人々の意識は、松前藩との対決姿勢を強めたシャクシャインではなく、オニビシの振る舞いに通じるのではないかと考えられている(武田 2001)。

そして、武田はこの論文の最後で、「シャクシャインの本拠地であった静内町における今後の社

会調査の実施によって、その妥当性と有用性を判断する必要がある」(武田 2001: 77)と述べている。 まさに今回は、この「静内町」を対象とした調査であるので、このような地域的な背景をふまえる ことも一つの論点となる。

さらに、白老町のアイヌの人々の調査からは、「年齢」と「居住年数」が住み心地と関連を持っており、それぞれ長いほど住み心地を「よい」とする程度が高まることも明らかにされている(大黒 2001: 146)。この点から、「年齢」や「居住年数」と地域への評価との関連を探ることも求められよう。

そこで本章では、新ひだか町で行った一般住民へのアンケート調査を中心に、住民への聞き取り調査とアイヌの人々への聞き取り調査のデータを一部使いながら、アイヌ民族多住地域としての新ひだか町への評価を明らかにする。その際、「年齢」(20~30歳代の「青年層」、40~50歳代の「壮年層」、60歳以上の「老年層」)、「地域」(新ひだか町内の「静内地区」と「三石地区」)、「出身地」(新ひだか町で生まれたか否か)¹⁾、そして「ジェンダー」の4変数の違いに着目しながら分析を進めたい。なお、一般住民へのアンケート調査には、一部アイヌ系住民からの回答も含まれるが、回答者数が少ないので、アイヌ系住民については年齢別にわけずに分析をする²⁾。「出身地」については、「居住年数」は「年齢」と効果が重なる部分もありうるので、「生まれたときから新ひだか町で暮らしている」のか、「新ひだか町に転入して生活している」のかの違いを検討してみたい。さらに、「ジェンダー」については、松本の研究グループでは、それほど明瞭な違いは指摘されていないが、小内透らの研究グループの研究成果(小内編 2010, 2012)からは、アイヌの人々の生活や意識にジェンダーの違いがみられる部分も明らかになっていることから、一つの分析視角として取り入れたい。

第2節 地域に対する意識

第1項 居住地域別にみた意識

それでは最初に、新ひだか町に暮らす人々の地域に対する意識を確認したい。まず、居住地域別にみた地域に対する意識を表 9 - 1 にまとめた。これをみると、三石地区では全般的に肯定的な回答が多いことがわかる。「1. 住民のまとまりが強い」については、肯定的な見解(「とてもそう思う」+「ある程度そう思う」、以下同様)が59.1%と半数を超える。それは、日常的なつきあいの密接さにも支えられており、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については、63.4%が肯定的な見解を示している。また新住民を受け入れる素地もあり、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」については61.9%が肯定的な回答をしている。その結果、「3. 誰でも自由にものが言える」については56.3%が肯定するように、新旧問わず、しがらみを気にせずに生活できる様子もうかがえる。一方、「5. 昔からの習慣・文化を大事にする」という側面も強く、この点は67.0%が肯定している。ただし、このように昔ながらのものを重視する姿勢は新しいものを取り入れる意識の乏しさにつながるところもあり、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については、69.0%が否定的な見解(「あまりそう思わない」+「まったくそう思わない」、以下同様)を示している。さらに、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」についても66.4%が肯定しており、表面的には「誰でもものが言える」けれども、地域運営に関わる人々の流動性が低調であることもうかがえる。

これに対し、静内地区は、より閉鎖的な印象を持つ住民が多い。「2. 新しく来た人でもなじみやすい」については、62.7%が肯定しており、新住民があからさまに排除されることはあまりないこ

とがみてとれる。しかし、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」については53.1%が肯定し、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については64.5%が否定している。「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」については否定的な見解が50.4%となっており、昔からの文化・習慣を重視する姿勢は強くないようであるが、人や方法の面では昔ながらの地域運営がなされていることがうかがえる。そのため、「3. 誰でも自由にものが言える」についても53.4%が否定しており、人々が声を上げづらい状況が見出される。このような地域のあり方にはなじめない住民も多いようで、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については56.3%が否定している。その結果、「1. 住民のまとまりが強い」についても、56.6%が否定することにつながっている。隣接する地域でありながら、地域のつながりについては三石地区と静内地区で大きな美が存在することがわかる。

また、年齢の違いに着目すると、静内地区・三石地区を問わず、年齢が高いほど地域に対してポジティブな評価をし、年齢が低いほどネガティブな評価をする傾向が見出される。

一方、エスニシティの観点からみると、三石地区のアイヌ系住民は、総じて一般住民と同じような回答の傾向となった。「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については否定的見解(71.4%)が多く、それ以外の項目については肯定的な評価が過半数となっていた。これに対し、静内地区のアイヌ系住民は、一般住民よりも地域にポジティブな評価をしていた。静内地区の一般住民では「2. 新しく来た人でもなじみやすい」以外のポジティブな評価は多数派とはなっていなかったが、アイヌ系住民の回答では、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」は75.0%が肯定しているのに加え、「4. 日常的なつきあいが盛ん」は54.6%が、「3. 誰でも自由にものが言える」については54.6%が肯定的な回答を示している。この「3. 誰でも自由にものが言える」については54.6%が肯定的な回答を示している。この「3. 誰でも自由にものが言える」については、三石地区のアイヌ系住民も71.5%という高い割合で肯定的な見解を示しており、アイヌ系住民にとって今の新ひだかは「誰でも自由にものが言える」と強く感じることができる状況になっていることがうかがえる。

ただし、「5. 昔からの文化・習慣を大切にする」については、三石地区のアイヌ系住民の71.5% が肯定的な回答をしているのに対し、静内地区のアイヌ系住民は63.6%が否定的な見解を示すと いった形で対照的な様相を示している。

以上のことから、両地域とも、「新しく来た人でもなじみやす」く、「昔からの文化・習慣を大事に」しているが、「昔から住んでいる人の意見が強」く、「新しいものを積極的に取り入れる気風」には乏しいという状況が浮かび上がる。また、地域の違いに着目すると、三石地区に比べ、静内地区では「住民のまとまり」が弱く、「誰でも自由にものが言える」雰囲気が乏しく、「日常的なつきあい」があまり活発ではないという状況がみられる。年齢の違いをみると、総じて、地域にとってポジティブな評価を与えるのが老年層であり、ネガティブな評価を与えているのが青年層・壮年層であることが多かった。一方、エスニシティに注目すると、アイヌ系住民は基本的には全体の傾向とほぼ同じであり、静内地区では一般住民よりもポジティブな評価を行っていることが多かった。とくに「3.誰でも自由にものが言える」については、両地区ともアイヌ系住民の間で強く肯定されていた。これに対し、「5.昔からの文化・習慣を大事にする」では、居住地域によってアイヌ系住民の見解がわかれ、三石地区では肯定の度合いが高かったのに対し、静内地区では否定の度合いが高くなっていた。このことは、地域におけるアイヌの人々が、発言をしづらい状況から徐々に解放されてきている様子をうかがわせる一方で、静内地区では、昔からのアイヌ文化が尊重されていないことを問

題にする意向が強いのだと考えられる。そこには、第1節でふれた「シャクシャインの末裔」とし ての静内地区アイヌ系住民のメンタリティが関わっているのかもしれない。

表9-1 居住地区別にみた地域に対する意識

| | | | | 静内地区 | | | | | 三石地区 | | |
|-----|------------|----------------------|--------------|---------------|--------------------|------------|-------------|--------------|---------------|--------------------|----------|
| | | とてもそう 思う | ある程度そう思う | あまりそう 思わない | まったく そう思わ ない | N | とてもそう 思う | ある程度そう思う | あまりそう 思わない | まったく そう思わ ない | N |
| 1. | 住民のま | とまりが強い | | | , | | | | | | |
| | 青年層 | 3.1 | 32.3 | 53.8 | 10.8 | 65 | - | 36.8 | 47.4 | 15.8 | 19 |
| 业 | 壮年層 | 2.2 | 36.7 | 53.2 | 7.9 | 139 | 5.0 | 45.0 | 45.0 | 5.0 | 40 |
| 般住民 | 老年層 | 3.8 | 48.7 | 42.3 | 5.1 | 156 | 5.1 | 74.4 | 20.5 | - | 39 |
| 氏 | 計 | 3.1 | 41.1 | 48.6 | 7.2 | 360 | 4.1 | 55.1 | 35.7 | 5.1 | 98 |
| アイマ | 系住民 | 9.1 | 9.1 | 81.8 | _ | 11 | 14.3 | 42.9 | 42.9 | - | 7 |
| | 計 | 3.2 | 40.2 | 49.6 | 7.0 | 371 | 4.8 | 54.3 | 36.2 | 4.8 | 105 |
| | | た人でもなじ | | 10.0 | 1.0 | 011 | 1.0 | 01.0 | 00.2 | 1.0 | 100 |
| ۷. | 青年層 | 7.7 | 44.6 | 43.1 | 4.6 | 65 | _ | 57.9 | 36.8 | 5.3 | 19 |
| 40 | 壮年層 | 2.9 | 44.6 | 41.7 | 4.6 | 84 | _ | 52.5 | 35.0 | 12.5 | 40 |
| 般住 | 老年層 | 4.8 | 63.6 | 29.1 | 1 | 165 | | 52.5 59.0 | 23.1 | 2.6 | 39 |
| 苠 | 老 中 僧 計 | 4.6 | 57.7 | | 2.4 | | 15.4 | | 30.6 | 7.1 | 98 |
| アイコ | 系住民 | 8.3 | 66.7 | 33.1 25.0 | 4.6 | 369 12 | 6.1 | 56.1 42.9 | 28.6 | 14.3 | 98 7 |
| | 計 | 4.7 | 58.0 | 32.8 | 4.5 | 381 | 6.7 | 55.2 | 30.5 | 7.6 | 105 |
| | | <u>4.7</u> 由にものが言 | | 04.0 | 4.0 | 301 | 0.7 | 00.2 | 30.3 | 1.0 | 100 |
| ο. | 青年層 | 田にものか言 3.1 | 30.8 | 53.8 | 12.3 | 65 | _ | 36.8 | 47.4 | 15.8 | 19 |
| | 壮年層 | 2.2 | 36.0 | | | | | 30.8 42.5 | | | 40 |
| 般住 | | | 50.0 51.3 | 55.4 38.0 | 6.5 3.2 | 139 | 7.5 | 42.5 59.5 | 45.0 29.7 | 5.0 | |
| 苠 | 老年層計 | 7.6 4.7 | 41.7 | | 6.1 | 158 362 | 10.8 7.3 | 47.9 | 39.6 | 5.2 | 37 96 |
| アノコ | 系住民 | 9.1 | 45.5 | 47.5 45.5 | - 0.1 | 11 | 42.9 | 28.6 | 14.3 | 14.3 | 7 |
| | ポ圧氏 計 | 4.8 | 41.8 | 47.5 | 5.9 | 373 | 9.7 | 46.6 | 37.9 | 5.8 | 103 |
| | | | | 47.3 | 5.9 | 313 | 9.1 | 40.0 | 31.9 | 5.0 | 103 |
| 4. | | つきあいが盛 I | | 20.0 | | 25 | | 20.0 | 01.0 | | |
| _ | 青年層 | - | 30.8 | 60.0 | 9.2 | 65 | - 0.5 | 63.2 | 31.6 | 5.3 | 19 |
| 般 | 壮年層 | 2.2 | 39.6 | 54.7 | 3.6 | 139 | 2.5 | 57.5 | 35.0 | 5.0 | 40 |
| 住民 | 老年層 | 3.8 | 46.2 | 48.1 | 1.9 | 158 | 13.2 | 55.3 | 31.6 | - 0.1 | 38 |
| | 計 | 2.5 | 40.9 | 52.8 | 3.9 | 362 | 6.2 | 57.7 | 33.0 | 3.1 | 97 |
| | 系住民 | 9.1 | 45.5 | 45.5 | | 11 | 14.3 | 42.9 | 28.6 32.7 | 14.3 | 7 104 |
| | 計 | l. | 41.0 | 52.5 | 3.8 | 373 | 0.7 | 56.7 | 34.1 | 3.8 | 104 |
| 5. | | 文化・習慣を | | | | | | | | | |
| _ | 青年層 | 6.2 | 36.9 | 49.2 | 7.7 | 65 | 5.3 | 68.4 | 21.1 | 5.3 | 19 |
| 般 | 壮年層 | 2.9 | 41.7 | 47.5 | 7.9 | 139 | 12.5 | 42.5 | 40.0 | 5.0 | 40 |
| 般住民 | 老年層 | 12.0 | 45.6 | 36.1 | 6.3 | 158 | 10.8 | 64.9 | 24.3 | - | 37 |
| | 計 | 7.5 | 42.5 | 42.8 | 7.2 | 362 | 10.4 | 56.2 | 30.2 | 3.1 | 96 |
| | 系住民 | 9.1 | 27.3 | 63.6 | - 7.0 | 11 | 28.6 | 42.9 | 28.6 | - | 7 |
| | 計 | 7.5 | 42.1 | 43.4 | 7.0 | 373 | 11.7 | 55.3 | 30.1 | 2.9 | 103 |
| 6. | | んでいる人の | | | | | | | | | |
| _ | 青年層 | 21.9 | 34.4 | 35.9 | 7.8 | 64 | 26.3 | 52.6 | 21.1 | | 19 |
| 般住 | 壮年層 | 12.9 | 44.6 | 39.6 | 2.9 | 139 | 30.0 | 50.0 | 17.5 | 2.5 | 40 |
| 任民 | 老年層 | 10.9 | 36.5 | 49.4 | 3.2 | 156 | 5.3 | 42.1 | 44.7 | 7.9 | 38 |
| | 計 | 13.6 | 39.3 | 43.2 | 3.9 | 359 | 19.6 | 47.4 | 28.9 | 4.1 | 97 |
| | 系住民 | 25.0 | 33.3 | 41.7 | - | 12 | - | 57.1 | 42.9 | - | 7 |
| | 計 | 14.0 | 39.1 | 43.1 | 3.8 | 371 | 18.3 | 48.1 | 29.8 | 3.8 | 104 |
| 7. | 新しいも | のを積極的に | 取り入れる気 | 〔風がある | | | | | | | |
| | 青年層 | 3.1 | 23.1 | 56.9 | 16.9 | 65 | - | 10.5 | 68.4 | 21.1 | 19 |
| 般 | 壮年層 | - | 32.4 | 55.4 | 12.2 | 139 | 5.0 | 17.5 | 55.0 | 22.5 | 40 |
| 住民 | 老年層 | 6.9 | 36.2 | 46.2 | 10.6 | 160 | 5.4 | 45.9 | 43.2 | 5.4 | 37 |
| | 計 | 3.6 | 32.4 | 51.6 | 12.4 | 364 | 4.2 | 27.1 | 53.1 | 15.6 | 96 |
| アイヌ | 系住民 | - | 18.2 | 63.6 | 18.2 | 11 | - | 28.6 | 71.4 | - | 7 |
| | 計 | 3.5 | 32.0 | 52.0 | 12.5 | 375 | 3.9 | 27.2 | 54.4 | 14.6 | 103 |

第2項 出身地の違いからみた地域に対する意識

続いて、出身地の違いに着目して、地域に対する意識をみたい。ここでは、新ひだかの出身か否 かの2つのカテゴリーにわけて検討する。この点を、表9-2にまとめた。これをみると、新ひ

注)1. 単位=人、%。 2. 不明・無回答を除く。

だか出身者の方が総じて、地域に対してポジティブな評価を行っていることがわかる。「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については63.6%、「1. 住民のまとまりが強い」については54.8%が否定的な見解を示している。また、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」についても55.1%が肯定するなど、これらの項目については地域へのネガティブな評価が多数派となっている。しかし、これ以外の項目についてはポジティブな評価が多数派であり、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」では65.5%、「3. 誰でも自由にものが言える」では53.8%、「4. 日常的なつきあいが盛ん」では54.4%、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」では56.4%が肯定的評価となっている。

これに対し、新ひだか以外の出身者は、ややネガティブな評価を行っている。「2. 新しく来た人でもなじみやすい」(59.9%が肯定)、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」(50.1%が肯定)、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」(57.9%が肯定)、「1. 住民のまとまりが強い」(52.1%が否定)、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」(67.2%) については、おおむね新ひだか出身者と同様の傾向をみせている。しかし、残りの「3. 誰でもものが言える」については55.4%、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については57.4%が否定的見解を示しており、新ひだか出身者とは対照的な結果となっている。新ひだか出身者が感じているよりは、新ひだか以外の出身者にとっての地域の魅力はやや低調なものであることがうかがえる。

年齢に着目すると、老年層がポジティブな評価、青年層や壮年層がネガティブな評価になりやすいという違いは確認される。一点注目されるのは、新ひだか出身の壮年層であり、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」について、新ひだか出身者では、老年層の66.1%、青年層の62.8%が肯定的見解を示しているのに対し、壮年層では53.1%が否定的見解をみせている。このことは、より若い青年層には気づきにくいが、新ひだかでの一定の生活経験のある壮年層にとっては「昔からの文化・習慣」が適切に扱われていない状況が感じられるものと思われる。

アイヌ系住民の状況をみると、新ひだか出身者が相対的にポジティブ、新ひだか以外の出身者が相対的にネガティブである状況は一般住民と同様である。ただし、新ひだか以外の出身者では、「2.新しく来た人でもなじみやすい」、「3.誰でも自由にものが言える」、「4.日常的なつきあいが盛ん」の3項目で肯定・否定がともに50.0%となっている。来住の際のなじみにくさはアイヌ系住民の方がやや強く感じるようであるが、その後の声の上げやすさやつきあいの活発さについては、一般住民よりもポジティブな評価が与えられている。また、新ひだか出身のアイヌ系住民の場合、「6.昔から住んでいる人の意見が強い」で同じように肯定・否定が50.0%ずつとなっており、一般住民に比べるとネガティブ色が薄い。これらの点から、アイヌ系住民であることは、来住の場合には地域になじむことに負担を感じさせるが、それ以外の面では、むしろ一般住民よりも地域をポジティブに評価させる傾向があることがわかる。このことは、「以前に比べてよくなった」という時間的な変化と、「前に住んでいたところに比べてよくなった」という空間的な変化の2つの変化がもたらしたものとも考えられる。

ただし、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」については、新ひだか以外の出身のアイヌ系住民では75.0%が肯定しているが、新ひだか出身のアイヌ系住民で57.1%が否定的な見解を示している。新ひだか出身のアイヌ系住民は、「昔からの文化・習慣」としての「アイヌ文化」が尊重されていないという問題意識をより強くもっていることがうかがわれる。

このように、新ひだか以外の出身者は、新ひだかという地域に対してややネガティブな評価をもっ

ているが、この点について、一般住民への聞き取り調査のなかで、次のような語りが聞かれた。

もともと住んでいる人達が7割で、年代が変わって、私のような3割くらいは新住民だと思うんですよね。町内会は昔からのやり方で30何年前からのやりかたで、ずっと延々と続いている。だんだん行事も少なくなってきている。参加されない方もいて、考え方や生活スタイルが違うので。昔からいらっしゃる方たちは、定年退職されて、高齢化になって70代、80代で、実際に働いている方とのズレもありますよね。そういうので、昔からのやり方をずっと続けていらっしゃるのに、私のような人間は反発している。(一般住民・老年層・女性・新ひだか以外の出身)

このように、住民構成の変化に、地域の体制が適応できずに昔ながらのやり方を引きずっていると 感じる新住民は少なくないようである。

以上から、全体として新ひだか出身者に比べて、新ひだか以外の出身者の方が、新住民への閉鎖性や交流の不活発さなど、地域に対するネガティブな評価を強くもっていることがわかる。世代別にみると、老年層の方がポジティブな評価になっていたが、やはり新ひだか以外の出身者では、老年層でもややネガティブな評価が目立った。一方、アイヌ系住民については、新住民のなじみやすさについては、新ひだか出身者がポジティブな評価を示す一方で、新ひだか以外の出身者では一般住民よりもネガティブな評価となっていた。このことは、アイヌ系住民の来住にあたっては、「新住民」と「アイヌ民族」という二重の障壁でもって地域への関わりを妨げられてしまうことを物語る。ただしその反面、新ひだかでの生活が長くなれば、アイヌ民族の復権と再生のなかでのアイヌ民族を取り巻く状況の変化もあってか、新ひだかは一定の居心地のよさを感じる地域になってくる様子もみられる。その居心地のよさは、新ひだか出身のアイヌ民族にも共通しているように見受けられる。

表9-2 出身地別にみた地域に対する意識

| | | | | 新ひだか出身 | • | | 新ひだか以外の出身 | | | | | | | |
|------------|-----------|-------------|--------------|---------------|--------------------|-----------|-------------|--------------|---------------|--------------------|-----|--|--|--|
| | | とてもそう 思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | まったく そう思わ ない | N | とてもそう 思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | まったく そう思わ ない | N | | | |
| 1. | 住民のま | とまりが強い | | | | | | | | | | | | |
| | 青年層 | - | 27.9 | 58.1 | 14.0 | 43 | 4.8 | 38.1 | 47.6 | 9.5 | 42 | | | |
| 般 | 壮年層 | 3.1 | 38.1 | 48.5 | 10.3 | 97 | 2.4 | 39.0 | 54.9 | 3.7 | 82 | | | |
| 住民 | 老年層 | 4.1 | 56.8 | 36.5 | 2.7 | 74 | 3.9 | 51.2 | 39.5 | 5.4 | 129 | | | |
| 氏 | 計 | 2.8 | 42.5 | 46.3 | 8.4 | 214 | 3.6 | 45.1 | 45.8 | 5.5 | 253 | | | |
| アイラ | 系住民 | 14.3 | 28.6 | 57.1 | - | 14 | - | - | 100.0 | = | 4 | | | |
| | 計 | 3.5 | 41.7 | 46.9 | 7.9 | 228 | 3.5 | 44.4 | 46.7 | 5.4 | 257 | | | |
| | | た人でもなじ | | | | | | | | | | | | |
| | 青年層 | 9.3 | 46.5 | 37.2 | 7.0 | 43 | 2.4 | 47.6 | 47.6 | 2.4 | 42 | | | |
| — ńл | 壮年層 | 3.1 | 59.8 | 29.9 | 7.2 | 97 | 1.2 | 52.4 | 36.6 | 9.8 | 82 | | | |
| 般住 | 老年層 | 12.2 | 60.8 | 23.0 | 4.1 | 74 | 3.6 | 63.3 | 30.2 | 2.9 | 139 | | | |
| 住民 | 計 | 7.5 | 57.5 | 29.0 | 6.1 | 214 | 2.7 | 57.4 | 35.0 | 4.9 | 263 | | | |
| 1/5 | ス系住民 | 13.3 | 60.0 | 26.7 | - | 15 | - | 50.0 | 25.0 | 25.0 | 4 | | | |
| | 計 | 7.9 | 57.6 | 28.8 | 5.7 | 229 | 2.6 | 57.3 | 34.8 | 5.2 | 267 | | | |
| | | | | 20.0 | 0.1 | 223 | 2.0 | 01.0 | 04.0 | 0.2 | 201 | | | |
| υ, | | 由にものが言 | | AC E | 140 | 49 | 0.4 | 26.2 | EO E | 11.0 | 40 | | | |
| | 青年層 | 2.3 | 37.2 | 46.5 | 14.0 | 43 | 2.4 | | 59.5 | 11.9 | 42 | | | |
| 般仕 | 壮年層 | 4.1 | 39.2 | 49.5 | 7.2 | 97 | 2.4 | 35.4 | 57.3 | 4.9 | 82 | | | |
| 住民 | 老年層 | 11.0 | 63.0 | 23.3 | 2.7 | 73 | 6.2 | 47.7 | 43.1 | 3.1 | 130 | | | |
| , , : | 計 《系住民 | 6.1 | 46.9 | 39.9 | 7.0 | 213 | 4.3 | 40.2 | 50.4 | 5.1 | 254 | | | |
| | 計 | 28.6 7.5 | 35.7 | 35.7 39.6 | 6.6 | 14 227 | 4.3 | 50.0 | 25.0 50.0 | 25.0 5.4 | 258 | | | |
| | | | 46.3 | 39.0 | 0.0 | 221 | 4.3 | 40.3 | 50.0 | 5.4 | 238 | | | |
| 4. | ,. | つきあいが盛 | | | | | | | | | | | | |
| 一般住民 | 青年層 | - | 48.8 | 39.5 | 11.6 | 43 | - | 26.2 | 66.7 | 7.1 | 42 | | | |
| | 壮年層 | 2.1 | 45.4 | 49.5 | 3.1 | 97 | 2.4 | 42.7 | 50.0 | 4.9 | 82 | | | |
| 住民 | 老年層 | 8.1 | 58.1 | 32.4 | 1.4 | 74 | 3.8 | 42.3 | 51.5 | 2.3 | 130 | | | |
| | 計 | 3.7 | 50.5 | 41.6 | 4.2 | 214 | 2.8 | 39.8 | 53.5 | 3.9 | 254 | | | |
| | 不系住民 | 14.3 | 42.9 | 42.9 | - | 14 | - | 50.0 | 25.0 | 25.0 | 4 | | | |
| | 計 | 4.4 | 50.0 | 41.7 | 3.9 | 228 | 2.7 | 39.9 | 53.1 | 4.3 | 258 | | | |
| 5. | 昔からの | 文化・習慣を | 大事にする | | | | | | | | | | | |
| _ | 青年層 | 7.0 | 55.8 | 32.6 | 4.7 | 43 | 4.8 | 31.0 | 54.8 | 9.5 | 42 | | | |
| 般 | 壮年層 | 6.2 | 40.6 | 42.7 | 10.4 | 96 | 3.7 | 43.9 | 48.8 | 3.7 | 82 | | | |
| 住民 | 老年層 | 15.3 | 52.8 | 27.8 | 4.2 | 72 | 9.9 | 45.8 | 38.2 | 6.1 | 131 | | | |
| 11 | 計 | 9.5 | 47.9 | 35.5 | 7.1 | 211 | 7.1 | 42.7 | 44.3 | 5.9 | 255 | | | |
| イ ラ | マ 系住民 | 21.4 | 21.4 | 57.1 | - | 14 | - | 75.0 | 25.0 | - | 4 | | | |
| | 計 | 10.2 | 46.2 | 36.9 | 6.7 | 225 | 6.9 | 43.2 | 44.0 | 5.8 | 259 | | | |
| 6. | 昔から住 | んでいる人の | 意見が強い | | | | | | | | | | | |
| _ | 青年層 | 31.0 | 35.7 | 26.2 | 7.1 | 42 | 14.3 | 42.9 | 38.1 | 4.8 | 42 | | | |
| 般 | 壮年層 | 14.6 | 44.8 | 35.4 | 5.2 | 96 | 19.3 | 48.2 | 32.5 | - | 83 | | | |
| 般住民 | 老年層 | 5.5 | 38.4 | 52.1 | 4.1 | 73 | 11.6 | 39.5 | 45.0 | 3.9 | 129 | | | |
| 氏 | 計 | 14.7 | 40.8 | 39.3 | 5.2 | 211 | 14.6 | 42.9 | 39.8 | 2.8 | 254 | | | |
| イ ラ | 不住民 | 14.3 | 35.7 | 50.0 | - | 14 | 20.0 | 60.0 | 20.0 | - | 5 | | | |
| | 計 | 14.7 | 40.4 | 40.0 | 4.9 | 225 | 14.7 | 43.2 | 39.4 | 2.7 | 259 | | | |
| 7. | 新しいも | のを積極的に | 取り入れる気 | 〔風がある | | | | | | | | | | |
| | 青年層 | 2.3 | 25.6 | 48.8 | 23.3 | 43 | 2.4 | 14.3 | 69.0 | 14.3 | 42 | | | |
| 如 | 壮年層 | 1.0 | 29.9 | 55.7 | 13.4 | 97 | 1.2 | 28.0 | 54.9 | 15.9 | 82 | | | |
| 般住 | 老年層 | 8.1 | 43.2 | 41.9 | 6.8 | 74 | 5.3 | 35.1 | 47.3 | 12.2 | 131 | | | |
| 民 | 計 | 3.7 | 33.6 | 49.5 | 13.1 | 214 | 3.5 | 29.4 | 53.3 | 13.7 | 255 | | | |
| '15 | 不 系住民 | - | 21.4 | 71.4 | 7.1 | 14 | - | 25.0 | 50.0 | 25.0 | 4 | | | |
| | 計 | 3.5 | 32.9 | 50.9 | 12.7 | 228 | 3.5 | 29.3 | 53.3 | 13.9 | 259 | | | |

注) 1. 単位=人、%。

第3項 ジェンダーの違いからみた地域に対する意識

さらに、ジェンダーの違いに着目して、地域に対する意識の状況を確認したい。この点を、表 9 -3 にまとめた。これをみると、いくつかの項目では、それほど大きなジェンダー差はないことがわかる。「1. 住民のまとまりが強い」については男性の53.2%、女性の53.8%が否定、「2. 新しく来

^{2.} 不明・無回答を除く。

た人でもなじみやすい」については男性の55.6%、女性の65.0%が肯定、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」については男性の52.8%、女性の53.2%が肯定、「7. 新しいものを積極的に取り入れる気風がある」については男性の62.1%、女性の68.9%が否定的な見解を示している。

ただし、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」については、男性が60.3%、女性が53.0%と、ともに肯定的見解が多数にはなっているが、男性の方でややその度合いが高い。また、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については、男性の54.2%は否定的な回答だが、女性の50.6%は肯定的な回答をしている。さらに、「3. 誰でも自由にものが言える」については男性の53.0%が肯定的な回答をしているのに対し、女性は54.7%が否定的な回答をしている。このことは、ジェンダーによって活動の場に差が存在することが関係していると思われる。女性の方が「日常的なつきあいが盛ん」だと答えていることから、女性の方で私的領域での活動が盛んであることがうかがえる。一方、男性は相対的に公的領域に関わる程度が高いために、「昔から住んでいる人の意見が強い」ことを実感する場面に出会うことが多くなっているものと思われる。さらに、女性は公的領域から遠ざけられることも多いため、「自由にものが言える」とは感じられにくくなっているのだと考えられる。

年齢の違いについては、居住地域や出身地からみた場合と同様、年齢が高い方でポジティブな、年齢が低い方でネガティブな評価がなされている。ただし、「2. 新しく来た人でもなじみやすい」については、男性では青年層(肯定が47.6%)・壮年層(肯定が49.4%)と老年層(肯定が73.0%)の間で評価の違いが大きく開くのに対し、女性では青年層(肯定が58.2%)と壮年層(肯定が66.7%)・老年層(肯定が65.5%)の間で開きが生じている。このように、世代の違いを乗り越える時点にジェンダーの差が存在するところもあり、女性では壮年層の段階で老年層と近くなる一方で、男性は壮年層を終えるまで老年層とは一線を画す状況が見出される。男性の壮年層については、「5. 昔からの文化・習慣を大事にする」についても60.9%が否定的見解を示しており、男性の世界では壮年層と老年層の間に意識の違いが強く存在していることがわかる。

一方、アイヌ系住民については、一般住民よりもジェンダー差がみられておらず、アイヌ系住民というエスニシティで共有される意識が強いことがうかがわれる。ただし、「4. 日常的なつきあいが盛ん」については、男性では肯定・否定がともに50.0%であるのに対し、女性では62.5%が肯定と、一般住民と同様に女性で私的領域でのつきあいが活発になされていることがうかがえる。一方、「3. 誰でも自由にものが言える」については、男性で60.0%、女性で62.5%が肯定しており、アイヌ住民内のジェンダー差は存在しないが、一般住民の女性に比べてアイヌ系住民の女性が高い割合で肯定していることがわかる。このことは、アイヌ女性の公的領域への関わりが以前に比べて進んでいることを感じさせる。それに対し、「6. 昔から住んでいる人の意見が強い」については、男性の55.6%、女性の62.5%が肯定しており、ともに肯定的見解が多数派ではあるが、一般住民と逆に、女性の方でより肯定の程度が高いことがわかる。これらのことは、アイヌ系住民男性の場合は、「まだ昔に比べればマシ」との意識がある一方で、公的領域への関わりを増したアイヌ女性の方で、「昔から住んでいる人の意見が強い」と感じられることが多いのではないかとも考えられる。

以上から、特徴的な部分を振り返ると、「3. 誰でも自由にものが言える」と「4. 日常的なつきあいが盛ん」で大きなジェンダー差がみられ、女性では「ものが言え」ないけれど、「つきあいは盛ん」と回答する者が多かった。これは、女性においては、公的領域への参入にまだ障壁を感じやすいことと、家族や近隣などの私的領域での交流の活発さがみられることを示しているものと考えられる。

しかし、アイヌ女性の場合は、「ものが言える」ことについては肯定する者が多かった。このことは、 アイヌ女性の方が、かつてに比べれば発言権が与えられていることを実感しやすくなっていること を物語るとも考えられ、それだけ以前のアイヌ女性が置かれた状況の深刻さをうかがうことができ るだろう。

表9-3 ジェンダー別にみた地域に対する意識

| | | | | 男性 | | | | | 女性 | | |
|------|-----------------|-------------|--------------|---------------|--------------------|-----------|--------------|--------------|---------------|--------------------|------------|
| | | とてもそう 思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | まったく そう思わ ない | N | とてもそう 思う | ある程度 そう思う | あまりそう 思わない | まったく そう思わ ない | N |
| 1. | 住民のま | とまりが強い | | | | | | | | | |
| | 青年層 | 2.4 | 38.1 | 45.2 | 14.3 | 42 | 2.3 | 27.9 | 60.5 | 9.3 | 43 |
| 般 | 壮年層 | 2.3 | 34.5 | 51.7 | 11.5 | 87 | 3.2 | 41.9 | 51.6 | 3.2 | 93 |
| 般住民 | 老年層 | 2.0 | 58.2 | 39.8 | - | 98 | 5.7 | 48.6 | 37.1 | 8.6 | 105 |
| | 計 | 2.2 | 45.4 | 45.4 | 7.0 | 227 | 4.1 | 42.3 | 46.9 | 6.6 | 241 |
| アイラ | 《系住民 | 10.0 | 20.0 | 70.0 | - | 10 | 12.5 | 25.0 | 62.5 | - | 8 |
| | 計 | 2.5 | 44.3 | 46.4 | 6.8 | 237 | 4.4 | 41.8 | 47.4 | 6.4 | 249 |
| 2. | 新しく来 | た人でもなじ | みやすい | | | | | | | | |
| | 青年層 | 7.1 | 40.5 | 47.6 | 4.8 | 42 | 4.7 | 53.5 | 37.2 | 4.7 | 43 |
| 般 | 壮年層 | 3.4 | 46.0 | 40.2 | 10.3 | 87 | 1.1 | 65.6 | 26.9 | 6.5 | 93 |
| 般住民 | 老年層 | 6.0 | 67.0 | 26.0 | 1.0 | 100 | 7.1 | 58.4 | 29.2 | 5.3 | 113 |
| 氏 | 計 | 5.2 | 54.1 | 35.4 | 5.2 | 229 | 4.4 | 60.2 | 29.7 | 5.6 | 249 |
| アイラ | 不住民 | 9.1 | 54.5 | 27.3 | 9.1 | 11 | 12.5 | 62.5 | 25.0 | - | 8 |
| | 計 | 5.4 | 54.2 | 35.0 | 5.4 | 240 | 4.7 | 60.3 | 29.6 | 5.4 | 257 |
| 3. | 誰でも自 | 由にものが言 | える | | | | | | | | |
| | 青年層 | 2.4 | 35.7 | 52.4 | 9.5 | 42 | 2.3 | 27.9 | 53.5 | 16.3 | 43 |
| 般 | 壮年層 | 4.6 | 40.2 | 52.9 | 2.3 | 87 | 2.2 | 35.5 | 52.7 | 9.7 | 93 |
| 住民 | 老年層 | 4.2 | 62.1 | 32.6 | 1.1 | 95 | 11.1 | 45.4 | 38.9 | 4.6 | 108 |
| | 計 | 4.0 | 48.7 | 44.2 | 3.1 | 224 | 6.1 | 38.5 | 46.7 | 8.6 | 244 |
| | マ系住民_ | 20.0 | 40.0 | 30.0 | 10.0 | 10 | 25.0 | 37.5 | 37.5 | - | 8 |
| | 計 | 4.7 | 48.3 | 43.6 | 3.4 | 234 | 6.7 | 38.5 | 46.4 | 8.3 | 252 |
| 4. | 日常的な | つきあいが盛 | ん | | | | | | | | |
| _ | 青年層 | - | 42.9 | 54.8 | 2.4 | 42 | - | 32.6 | 51.2 | 16.3 | 43 |
| 般 | 壮年層 | 2.3 | 36.8 | 56.3 | 4.6 | 87 | 2.2 | 50.5 | 44.1 | 3.2 | 93 |
| 般住民 | 老年層 | 4.2 | 48.4 | 45.3 | 2.1 | 95 | 6.4 | 47.7 | 44.0 | 1.8 | 109 |
| | 計 | 2.7 | 42.9 | 51.3 | 3.1 | 224 | 3.7 | 46.1 | 45.3 | 4.9 | 245 |
| | 《系住民 | 10.0 | 40.0 | 40.0 | 10.0 | 10 | 12.5 | 50.0 | 37.5 | - | 8 |
| | 計 | 3.0 | 42.7 | 50.9 | 3.4 | 234 | 4.0 | 46.2 | 45.1 | 4.7 | 253 |
| 5. | | 文化・習慣を | | | | | | | | | |
| _ | 青年層 | 9.5 | 47.6 | 40.5 | 2.4 | 42 | 2.3 | 39.5 | 46.5 | 11.6 | 43 |
| 般 | 壮年層 | 6.9 | 32.2 | 52.9 | 8.0 | 87 | 3.3 | 51.1 | 39.1 | 6.5 | 92 |
| 住民 | 老年層 | 8.3 | 55.2 | 31.2 | 5.2 | 96 | 15.0 | 42.1 | 37.4 | 5.6 | 107 |
| | 計 7 年 日 | 8.0 | 44.9 | 41.3 | 5.8 | 225 | 8.3 | 45.0 | 39.7 | 7.0 | 242 |
| | マ系住民 計 | 10.0 8.1 | 40.0 | 50.0 41.7 | 5.5 | 235 | 25.0 8.8 | 25.0 44.4 | 50.0 40.0 | 6.8 | 250 |
| | | | | 41.7 | 5.5 | 233 | 0.8 | 44.4 | 40.0 | 0.8 | ∠3U |
| ь. | | んでいる人の | | 20.0 | | | 100 | 00.4 | 05.5 | | - 10 |
| | 青年層 | 26.2 | 40.5 | 28.6 | 4.8 | 42 | 19.0 | 38.1 | 35.7 | 7.1 | 42 |
| 般住 | 壮年層 | 22.1 | 44.2 | 31.4 | 2.3 | 86 | 11.7 | 47.9 | 37.2 | 3.2 | 94 |
| 民 | 老年層計 | 8.4 17.0 | 44.2 | 43.2 35.9 | 4.2 3.6 | 95 223 | 10.3 12.3 | 34.6 40.3 | 51.4 43.2 | 3.7 | 107 243 |
| アノニ | 計 系住民 | 17.0 | 36.4 | 45.5 | 3.0 | 11 | 12.5 | 50.0 | 37.5 | 4.1 | 8 |
| | 計 | 17.1 | 43.2 | 36.3 | 3.4 | 234 | 12.5 | 40.6 | 43.0 | 4.0 | 251 |
| | | | | | 0.4 | 404 | 12.4 | 40.0 | 40.0 | 4.0 | 201 |
| ι. | | のを積極的に | | | 0.5 | 40 | 0.0 | 0.0 | CO F | 07.0 | 40 |
| _ | 青年層 | 2.4 | 31.0 | 57.1 | 9.5 | 42 | 2.3 | 9.3 | 60.5 | 27.9 | 43 |
| 4.00 | 壮年層 | 1.1 | 26.4 | 55.2 | 17.2 | 87 | 1.1 | 31.2 | 55.9 | 11.8 | 93 |
| 般住 | | 5.1 | 44.9 | 44.9 | 5.1 | 98 | 7.5 | 31.8 | 45.8 | 15.0 | 107 |
| 般住民 | 老年層 | | 0.5.0 | E1 1 | 10.0 | 007 | 4.1 | 97.6 | EO 0 | 100 | 9.49 |
| 民 | 老年僧 計 系住民 | 3.1 | 35.2 30.0 | 51.1 50.0 | 10.6 20.0 | 227 10 | 4.1 | 27.6 12.5 | 52.3 87.5 | 16.0 | 243 8 |

注)1. 単位=人、%。 2. 不明・無回答を除く。

第3節 町内会活動への参加

次に、住民たちの町内会活動への参加状況をみたい。町内会にどの程度参加しているかをみることで、住民たちの地域の公的領域への参加状況や参加意志を把握することができると考えられる。

そこで、この点をまとめた表9-4をみると、まず居住地区については、静内地区で「参加して いる」とする者(「積極的に参加している」+「ある程度参加している」、以下同様)が64.6%、三 石地区では79.6%と、三石地区の住民の方が町内会活動に積極的に参加していることがわかる。ア イヌ系住民については、静内地区では66.7%が参加傾向が強いのに対し、三石地区では42.9%にと どまっており、三石地区のアイヌ系住民の方が町内会への関わりの程度が低いことがわかる。年齢 層でみると、年齢の高い方で参加傾向が強く、静内地区の老年層では85.1%、三石地区の老年層で は97.6%が「参加している」と答えている。表9-1では、三石地区のアイヌ系住民は、静内地区 のアイヌ系住民に比べて地域に対してポジティブな評価をしている状況がみられたが、このことと 老年層以外の町内会への参加の低調さをあわせて考えると、町内会をはじめとした地域への関わり をあまりもたないがゆえに問題のない地域生活を送ることができるという、いわば「セグリゲーショ ンによる生活共生」(小内 2001: 367)に近いような状況が顕現していると捉えられるかもしれない。 続いて、出身地に着目すると、新ひだか出身者では77.7%が「参加している」と答えているのに 対し、新ひだか以外の出身者では67.3%が「参加している」とし、やや少なくなっている。アイヌ 系住民については、新ひだか出身者の場合は62.5%が「参加している」とする一方、新ひだか以外 の出身者では「参加している」が50.0%と、やはり新ひだか以外の出身者の方が参加の程度が低い。 年齢層でみると、世代が上になるほど差が開いており、新ひだか出身の老年層では92.4%が「参加 している」と答えているのに対し、新ひだか以外の出身の老年層では84.2%が「参加している」と 答えていて、相対的にはやや少なくなっている。

ジェンダーに注目すると、男性では69.9%が「参加している」と答えている一方、女性では「参加している」とする者は65.5%とやや少なくなっている。アイヌ系住民については、男性の69.3%が「参加している」が、女性では44.4%しか「参加している」と答えていない。年齢別にみると、下の世代ほど差が大きくなっており、男性の青年層では40.5%が「参加している」と答えているが、女性の青年層では25.6%しか「参加している」と答えておらず、ジェンダーの違いが目立っている。表9-3でみたように、「誰でも自由にものが言える」という点を肯定する者が女性では少なかったが、このことは、ここで確認したように、町内会などの地域の公的領域が女性にまだ十分には開かれていない状況と符合するだろう。そして、その女性と公的領域との間の壁は、「年齢の若さ」と「アイヌ」であるということによって、より厚くなっていることもうかがえる。

以上から、町内会の参加については、年齢が上の世代で、三石地区の居住、新ひだかの出身者、 そして男性であるほど活発になることがうかがえた。ただし、アイヌ系住民では、三石地区の居住 者の参加の程度が低いことから、地域の公的領域への消極的な関わりと、そうであるがゆえの地域 への評価の高さが生じている可能性も見出された。

表9-4 町内会への参加状況

| | | 積極的に 参加して いる | ある程度 参加して いる | あまり参加 していない | まったく 参加して いない | N | 積極的に 参加して いる | ある程度 参加して いる | あまり参加 していない | まったく 参加して いない | N |
|-----|-----|--------------------|--------------------|----------------|---------------------|-----|--------------------|--------------------|----------------|---------------------|-----|
| | | | | 静内地区 | | | | | 三石地区 | | |
| | 青年層 | 6.2 | 21.5 | 24.6 | 47.7 | 65 | 10.5 | 42.1 | 26.3 | 21.1 | 19 |
| 般 | 壮年層 | 17.1 | 38.6 | 26.4 | 17.9 | 140 | 31.7 | 48.8 | 14.6 | 4.9 | 41 |
| 般住民 | 老年層 | 25.7 | 59.4 | 9.7 | 5.1 | 175 | 36.6 | 61.0 | 2.4 | - | 41 |
| 氏 | 計 | 19.2 | 45.3 | 18.4 | 17.1 | 380 | 29.7 | 52.5 | 11.9 | 5.9 | 101 |
| アイヌ | 系住民 | 26.7 | 40.0 | 20.0 | 13.3 | 15 | 14.3 | 28.6 | 57.1 | - | 7 |
| Ī | 計 | 19.5 | 45.1 | 18.5 | 17.0 | 395 | 28.7 | 50.9 | 14.8 | 5.6 | 108 |
| | | | | 新ひだか出身 | | | | 新で | ひだか以外のと | 出身 | |
| | 青年層 | 9.3 | 25.6 | 27.9 | 37.2 | 43 | 4.8 | 26.2 | 21.4 | 47.6 | 42 |
| 般 | 壮年層 | 21.6 | 41.2 | 24.7 | 12.4 | 97 | 17.9 | 39.3 | 23.8 | 19.0 | 84 |
| 般住民 | 老年層 | 34.2 | 58.2 | 5.1 | 2.5 | 79 | 22.6 | 61.6 | 10.3 | 5.5 | 146 |
| | 計 | 23.7 | 44.3 | 18.3 | 13.7 | 219 | 18.4 | 49.3 | 16.2 | 16.2 | 272 |
| | 系住民 | 12.5 | 50.0 | 31.2 | 6.2 | 16 | 50.0 | - | 33.3 | 16.7 | 6 |
| | 計 | 23.0 | 44.7 | 19.1 | 13.2 | 235 | 19.1 | 48.2 | 16.5 | 16.2 | 278 |
| | | | | 男性 | | | | | 女性 | | |
| | 青年層 | 9.5 | 31.0 | 28.6 | 31.0 | 42 | 4.7 | 20.9 | 20.9 | 53.5 | 43 |
| | 壮年層 | 24.7 | 36.0 | 23.6 | 15.7 | 89 | 16.0 | 44.7 | 24.5 | 14.9 | 94 |
| 般住民 | 老年層 | 36.2 | 53.3 | 5.7 | 4.8 | 105 | 18.3 | 66.7 | 10.8 | 4.2 | 120 |
| | 計 | 27.1 | 42.8 | 16.5 | 13.6 | 236 | 15.2 | 51.0 | 17.5 | 16.3 | 257 |
| | 系住民 | 38.5 | 30.8 | 23.1 | 7.7 | 13 | - | 44.4 | 44.4 | 11.1 | 9 |
| | 計 | 27.7 | 42.2 | 16.9 | 13.3 | 249 | 14.7 | 50.8 | 18.4 | 16.2 | 266 |

注) 1. 単位=人、%。

第4節 定住意識とその理由

第1項 定住意識の状況

それでは、上記のような地域への関わりと意識をもつ新ひだかの住民たちは、今後の定住についての意識をどのようにもっているのだろうか。この点を、表9-5にまとめた。これをみると、まず静内地区の住民は定住志向(「今の場所にずっと住みたい」)が66.1%、三石地区の場合は68.7%と、ほぼ同じ割合になっている。一方、アイヌ系住民の場合は、静内地区で85.7%が定住志向、三石地区では100%が定住志向をもっている。アイヌ系住民の場合、定住志向以外の回答は「わからない」のみであり、「別の場所に移りたい」や「別の場所に移る予定がある」と答えた者は皆無で、非常に強固な定住志向をもつことがわかる。年齢別にみると、上の世代になるほど定住志向が高く、静内地区の老年層では82.3%、三石地区の老年層では90.0%が定住志向をもっている。

一方、出身地についてみると、新ひだか以外の出身者では60.4%が定住志向をもつのに対し、新ひだか出身者では76.7%が定住志向をもっている。この傾向は、アイヌ系住民においても同様で、新ひだか以外の出身者の場合は66.7%が定住志向を示しているが、新ひだか出身者では100%が定住志向をもっていることがわかる。年齢別にみると、若い世代ほど定住意識に差があり、新ひだか出身の青年層では55.8%が定住志向をみせるのに対し、新ひだか以外出身の青年層では29.3%が定住志向を示すにすぎず、「わからない」が31.7%となっている。

ジェンダーの違いに着目すると、男性では67.5%が定住志向をもち、女性では67.7%が定住志向をもっているといった形で、ジェンダー差は存在していない。アイヌ系住民でも、男性の92.3%が定住志向、女性の87.5%が定住志向と、ほとんど差はみられない。ただし、年齢別にみると、青年層では男性でやや定住志向が弱く、青年層の女性の47.6%が定住志向をもつのに対し、青年層の男性では38.1%にとどまっている。

^{2.} 不明・無回答を除く。

全体としては7割程度の住民が定住志向をもっているが、とくに年配で、新ひだか出身であるほどその傾向は強くなっている。また、アイヌ系住民についていえば、「わからない」を除くと定住志向は100%であり、現在の新ひだかでの生活を続けたいと強く考えていることがわかる。

表9-5 今後の定住意識

| | | 今の場所に ずっと住み たい | 別の場所 に移りたい | 別の場所に 移る予定が ある | わからない | N | 今の場所に ずっと住み たい | 別の場所 に移りたい | 別の場所に 移る予定が ある | わからない | N |
|-----|-----|----------------------|---------------|----------------------|-------|-----|----------------------|---------------|----------------------|-------|-----|
| | | | | 静内地区 | | | | | 三石地区 | · | |
| | 青年層 | 40.6 | 17.2 | 15.6 | 26.6 | 64 | 52.6 | 15.8 | - | 31.6 | 19 |
| 般 | 壮年層 | 57.4 | 14.9 | 6.4 | 21.3 | 141 | 55.0 | 17.5 | 5.0 | 22.5 | 40 |
| 般住民 | 老年層 | 82.3 | 5.1 | 1.7 | 10.9 | 175 | 90.0 | 2.5 | - | 7.5 | 40 |
| 民 | 計 | 66.1 | 10.8 | 5.8 | 17.4 | 380 | 68.7 | 11.1 | 2.0 | 18.2 | 99 |
| アイヌ | 系住民 | 85.7 | - | - | 14.3 | 14 | 100.0 | - | - | - | 7 |
| i | 計 | 66.8 | 10.4 | 5.6 | 17.3 | 394 | 70.8 | 10.4 | 1.9 | 17.0 | 106 |
| | | | | 新ひだか出身 | | | | 新で |)だか以外のb | 出身 | |
| _ | 青年層 | 55.8 | 14.0 | 7.0 | 23.3 | 43 | 29.3 | 19.5 | 19.5 | 31.7 | 41 |
| | 壮年層 | 69.8 | 10.4 | - | 19.8 | 96 | 42.4 | 22.4 | 12.9 | 22.4 | 85 |
| 般住民 | 老年層 | 92.3 | 1.3 | 1.3 | 5.1 | 78 | 79.5 | 6.8 | 1.4 | 12.3 | 146 |
| 民 | 計 | 75.1 | 7.8 | 1.8 | 15.2 | 217 | 60.3 | 13.6 | 7.7 | 18.4 | 272 |
| アイヌ | 系住民 | 100.0 | - | - | - | 15 | 66.7 | - | - | 33.3 | 6 |
| į | 計 | 76.7 | 7.3 | 1.7 | 14.2 | 232 | 60.4 | 13.3 | 7.6 | 18.7 | 278 |
| | | | | 男性 | | | | | 女性 | | |
| | 青年層 | 38.1 | 19.0 | 14.3 | 28.6 | 42 | 47.6 | 14.3 | 11.9 | 26.2 | 42 |
| 般 | 壮年層 | 56.3 | 16.1 | 8.0 | 19.5 | 87 | 56.2 | 15.6 | 4.2 | 24.0 | 96 |
| 般住民 | 老年層 | 85.6 | 3.8 | 1.9 | 8.7 | 104 | 82.5 | 5.8 | 0.8 | 10.8 | 120 |
| 氏 | 計 | 66.1 | 11.2 | 6.4 | 16.3 | 233 | 67.1 | 10.9 | 3.9 | 18.2 | 258 |
| | 系住民 | 92.3 | - | - | 7.7 | 13 | 87.5 | - | - | 12.5 | 8 |
| Ī | 計 | 67.5 | 10.6 | 6.1 | 15.9 | 246 | 67.7 | 10.5 | 3.8 | 18.0 | 266 |

注) 1. 単位=人、%。

第2項 定住志向の理由

続いて、定住志向をもつ住民に、その理由を尋ねた結果を検討する。この点を、表 9 - 6にまとめた。まず居住地区の違いに着目すると、静内地区では「ここに土地や家があるから」がもっとも多く63.5%、次いで「生活環境がよいから」が44.9%となっている。他は20%に満たない。三石地区では、静内地区と同じように「ここに家や土地があるから」がもっとも多くて70.7%、次に「生活環境がよいから」が42.7%、さらに「人間関係がよいから」も28.0%となっている。アイヌ系住民の場合は、静内地区では全体と同じような傾向で、「ここに土地や家があるから」が50.0%、「生活環境がよいから」が41.7%となっている。三石地区では、全体で多かった「ここに土地や家があるから」(71.4%)、「生活環境がよいから」(57.1%)のほか、「人間関係がよいから」(28.6%)、「職場や学校が近いから」(28.6%) も比較的多くの回答を集めている。

年齢の違いに着目すると、静内地区の青年層では「職場や学校が近いから」が50.0%ともっとも多く、「親の面倒を見るため」も30.8%と比較的高い。「親の面倒」については壮年層も35.8%と高い割合を示している。三石地区では、「職場や学校が近いから」はあまり多くなく、「土地や家」「生活環境」「人間関係」に加えて、青年層・壮年層では「親の面倒」が多くなっている。「その他」については、「気候が良い」「いなかが好き」「行く所がない」などが挙げられている。

これらをみると、「土地や家」「生活環境」が定住志向の基本的な理由でありつつ、三石地区では、 アイヌ系住民も含めて他にも理由が挙げられることが多い。とくに、三石地区のアイヌ系住民では、 一般住民からはほとんど挙げられなかった「職場や学校が近い」という理由も高い割合になってお

^{2.} 不明・無回答を除く。

り、三石地区のアイヌ系住民の労働世界も、ある程度三石地区内に存在することがうかがえる。ただし、静内地区のアイヌ系住民の場合、「人間関係がよいから」を挙げるものは8.3%と少なく、第 1節でふれた宇田川(1998)の知見である、アイヌの人々が人間関係を重視しているという傾向とは少し異なる。

出身地については、新ひだか出身者では「ここに土地や家があるから」が65.7%ともっとも多く、以下、「生活環境がよいから」(38.8%)、「親の面倒を見るため」(23.0%)、「人間関係がよいから」(20.8%) など、さまざまな理由が挙げられている。一方、新ひだか以外の出身者の場合、「ここに家や土地があるから」(64.3%)、「生活環境がよいから」(49.4%) 以外は、それほど目立った選択肢はない。アイヌ系住民の場合は、「土地や家」と「生活環境」が高い割合となっているが、それ以外がそれほど多くの回答を集めていないという点では、とくに新ひだか出身の場合で一般住民との間に比較的大きな差が生じている。年齢層に着目すると、とりわけ新ひだか以外の出身の青年層で「職場や学校」を選ぶ者が50.0%と多く、新ひだか町への居住が、まさに仕事上の理由で行われた可能性が高いといえる。このことから、出身地については、新ひだか出身者の方が、「土地や家」や「生活環境」以外の理由が多く、それだけ地域に強固につなぎとめられていると考えられる。しかし、アイヌ系住民の場合は、新ひだか出身者でも「土地と家」「生活環境」以外の回答はあまりなされておらず、和人の出身者であればいろいろな「結びつき」もあって定住志向が強まるところ、アイヌ系住民はそういった「結びつき」はあまりもっていないと考えることができる。

ジェンダーの違いをみてみると、男性では「ここに土地や家があるから」(68.7%) や「生活環境がよいから」(42.2%) が多い。女性でもほぼ同様で、「ここに家や土地があるから」(61.7%) と「生活環境がよいから」(45.6%) に加えて、「人間関係がよいから」(21.7%) も多くなっている。アイヌ系住民の場合、男性では「土地や家」(58.3%) と「生活環境」(50.0%) が多く、他があまり目立たない点では男性全体の傾向と似ている。これに対し、アイヌ女性の場合、「その他」以外のすべての選択肢が2割以上の回答を集めており、アイヌ女性では現住地との間に様々な接点が存在することがうかがえる。年齢層の違いでいうと、若い世代ほど多くの選択肢が選ばれる状況が見て取れ、とくにそれが女性に顕著になっている。

以上をまとめてみると、「土地や家」と「生活環境」が定住志向の基本的な理由であるが、年齢が若いほど、また三石地区の居住であるほど、あるいは新ひだかの出身であるほど、さらには女性であるほど、そしてアイヌ系住民であるほど、多くの理由が挙げられやすいことがわかる。これらの特徴を持つ人々は、現住地に多くの魅力や利点が存在していると把握することができる。

ただし、アイヌ系住民に関していうと、静内地区、あるいは男性では「人間関係がよいから」を 選ぶ者が少なくなっていた。このことは、アイヌ系住民のなかでも、静内地区の居住者や男性では、 人間関係のよさを感じにくい状況にあったこともうかがえる。

表9-6 定住志向の理由(複数回答)

| | | 生活環境がよいから | 人間関係がよいから | 親の面倒を見るため | からここに土地や家がある | 職場や学校が近いから | その他 | N | 生活環境がよいから | 人間関係がよいから | 親の面倒を見るため | からここに土地や家がある | 職場や学校が近いから | その他 | N |
|-----|------|-----------|-----------|-----------|--------------|------------|------|-----|-----------|-----------|-----------|--------------|------------|------|-----|
| | | | | | 静内地区 | | | | | | | 三石地区 | | | |
| | 青年層 | 30.8 | 11.5 | 30.8 | 38.5 | 50.0 | 7.7 | 26 | 40.0 | 30.0 | 20.0 | 60.0 | 10.0 | - | 10 |
| 般 | 壮年層 | 46.9 | 16.0 | 35.8 | 65.4 | 24.7 | 2.5 | 81 | 31.8 | 31.8 | 40.9 | 72.7 | 9.1 | 4.5 | 22 |
| 般住民 | 老年層 | 46.5 | 15.3 | 4.9 | 68.1 | 5.6 | 6.2 | 144 | 47.2 | 25.0 | 2.8 | 72.2 | 2.8 | 2.8 | 36 |
| | 計 | 45.0 | 15.1 | 17.5 | 64.1 | 16.3 | 5.2 | 251 | 41.2 | 27.9 | 17.6 | 70.6 | 5.9 | 2.9 | 68 |
| アイラ | マ系住民 | 41.7 | 8.3 | 8.3 | 50.0 | 8.3 | 8.3 | 12 | 57.1 | 28.6 | 14.3 | 71.4 | 28.6 | 14.3 | 7 |
| | 計 | 44.9 | 14.8 | 17.1 | 63.5 | 16.0 | 5.3 | 263 | 42.7 | 28.0 | 17.3 | 70.7 | 8.0 | 4.0 | 75 |
| | | | | 新 | ひだか出』 | 身 | | | | | 新ひた | ごか以外の | 出身 | | |
| | 青年層 | 29.2 | 16.7 | 33.3 | 50.0 | 33.3 | 8.3 | 24 | 41.7 | 16.7 | 16.7 | 33.3 | 50.0 | - | 12 |
| 般 | 壮年層 | 35.8 | 22.4 | 43.3 | 64.2 | 16.4 | 4.5 | 67 | 58.3 | 13.9 | 25.0 | 72.2 | 30.6 | - | 36 |
| 般住民 | 老年層 | 43.1 | 22.2 | 2.8 | 73.6 | 2.8 | 4.2 | 72 | 47.4 | 13.8 | 6.9 | 65.5 | 6.0 | 6.0 | 116 |
| | 計 | 38.0 | 21.5 | 23.9 | 66.3 | 12.9 | 4.9 | 163 | 49.4 | 14.0 | 11.6 | 64.6 | 14.6 | 4.3 | 164 |
| アイラ | マ系住民 | 46.7 | 13.3 | 13.3 | 60.0 | 20.0 | 6.7 | 15 | 50.0 | 25.0 | - | 50.0 | - | 25.0 | 4 |
| | 計 | 38.8 | 20.8 | 23.0 | 65.7 | 13.5 | 5.1 | 178 | 49.4 | 14.3 | 11.3 | 64.3 | 14.3 | 4.8 | 168 |
| | | | | | 男性 | | | | | | | 女性 | | | |
| | 青年層 | 31.2 | 12.5 | 25.0 | 50.0 | 56.2 | 6.2 | 16 | 35.0 | 20.0 | 30.0 | 40.0 | 25.0 | 5.0 | 20 |
| 般 | 壮年層 | 40.8 | 20.4 | 30.6 | 67.3 | 24.5 | 4.1 | 49 | 46.3 | 18.5 | 42.6 | 66.7 | 18.5 | 1.9 | 54 |
| 般住民 | 老年層 | 43.8 | 10.1 | 6.7 | 74.2 | 9.0 | 3.4 | 89 | 47.5 | 23.2 | 4.0 | 63.6 | 1.0 | 7.1 | 99 |
| | 計 | 41.6 | 13.6 | 16.2 | 69.5 | 18.8 | 3.9 | 154 | 45.7 | 21.4 | 19.1 | 61.8 | 9.2 | 5.2 | 173 |
| | マ系住民 | 50.0 | 8.3 | - | 58.3 | 8.3 | 16.7 | 12 | 42.9 | 28.6 | 28.6 | 57.1 | 28.6 | - | 7 |
| | 計 | 42.2 | 13.3 | 15.1 | 68.7 | 18.1 | 4.8 | 166 | 45.6 | 21.7 | 19.4 | 61.7 | 10.0 | 5.0 | 180 |

注) 1. 単位=人、%。

第3項 移住志向と移住予定の理由

それでは、「別の場所に移りたい」という移住志向をもつ住民の回答から、その理由を探りたい。この点を、表9-7にまとめた。これをみると、まず静内地区では「その他」(30.0%)、「よい仕事がないから」(26.0%)、「生活環境が悪いから」(24.0%)などが多くなっている。三石地区では、「交通の便が悪いから」がもっとも多く53.8%、次いで「生活環境が悪いから」が46.2%、「その他」が30.8%となっている。「仕事」や「生活環境」を挙げる者は、とくに若い世代で多くなっている。「その他」の理由としてもっとも多く挙げられているのは「病院がない」ということであり、医療・福祉施設の不足が、この地を離れたいという希望をもたせる理由の一つになっている。また、一人だけであるが、「私のことを悪く利用する人がいるから(アイヌ人)」と回答した住民もいる。和人である「私」を「アイヌ人が悪く利用する」と訴えているもので、詳細は不明であるが、アイヌ系住民に対するネガティブな思いが完全に払拭されているわけではない状況もみられる。

出身地に注目すると、新ひだか出身者では「生活環境が悪いから」(31.8%)のほか、「よい仕事がないから」(31.8%)や「人間関係が悪いから」(22.7%)などの回答が多い。一方、新ひだか以外の出身者では、医療・福祉施設の不足等が挙げられている「その他」(37.2%)、「交通の便が悪いから」(32.6%)などが多く、インフラ面での問題を強く感じていることがわかる。

ジェンダーに着目すると、男性では「生活環境が悪いから」(29.4%)、「その他」(29.4%)、「よい仕事がないから」(20.6%)などが多くなっており、女性では「交通の便が悪いから」(38.7%)、「その他」(32.3%)、「生活環境が悪いから」(25.8%)などが多くなっている。全体的に女性が多くの選択肢を選んでおり、女性の方により問題が集中しやすい傾向を見て取ることができる。

^{2.} 不明・無回答を除く。

表 9-7 移住志向の理由 (複数回答)

| | | 生活環境が悪いから | 人間関係が悪いから | 交通の便が悪いから | 別の場所に土地や家が | よい仕事がないから | 職場や学校が遠いから | その他 | N | 生活環境が悪いから | 人間関係が悪いから | 交通の便が悪いから | 別の場所に土地や家が | よい仕事がないから | 職場や学校が遠いから | その他 | N |
|-----|-----|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|------------|------|----|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|------------|-------|----|
| | | | | | 静内均 | 也区 | | | | | | | 三石均 | 也区 | | | |
| | 青年層 | 43.8 | 18.8 | 25.0 | 6.2 | 37.5 | 6.2 | 18.8 | 16 | 33.3 | - | 33.3 | - | - | 33.3 | 33.3 | 3 |
| 般 | 壮年層 | 13.0 | 13.0 | 17.4 | 8.7 | 30.4 | - | 30.4 | 23 | 55.6 | 33.3 | 66.7 | 11.1 | 11.1 | 11.1 | 22.2 | 9 |
| 般住民 | 老年層 | 18.2 | 9.1 | 18.2 | 27.3 | - | - | 45.5 | 11 | - | - | - | - | - | - | 100.0 | 1 |
| 民 | 計 | 24.0 | 14.0 | 20.0 | 12.0 | 26.0 | 2.0 | 30.0 | 50 | 46.2 | 23.1 | 53.8 | 7.7 | 7.7 | 15.4 | 30.8 | 13 |
| | | | | | 新ひだな | 出身 | | | | | | 新 | ひだか以 | 外の出身 | ř | | |
| | 青年層 | 42.9 | 14.3 | 14.3 | - | 28.6 | 14.3 | 14.3 | 7 | 41.7 | 16.7 | 33.3 | 8.3 | 33.3 | 8.3 | 25.0 | 12 |
| 般 | 壮年層 | 23.1 | 30.8 | 15.4 | - | 38.5 | - | 23.1 | 13 | 25.0 | 10.0 | 45.0 | 15.0 | 15.0 | 5.0 | 30.0 | 20 |
| 般住民 | 老年層 | 50.0 | - | 50.0 | - | - | - | - | 2 | 9.1 | 9.1 | 9.1 | 27.3 | - | - | 63.6 | 11 |
| 民 | 計 | 31.8 | 22.7 | 18.2 | - | 31.8 | 4.5 | 18.2 | 22 | 25.6 | 11.6 | 32.6 | 16.3 | 16.3 | 4.7 | 37.2 | 43 |
| | | | | | 男仆 | ± | | | | | | | 女性 | 生 | | | |
| | 青年層 | 54.5 | 9.1 | 18.2 | 9.1 | 9.1 | 9.1 | 18.2 | 11 | 25.0 | 25.0 | 37.5 | _ | 62.5 | 12.5 | 25.0 | 8 |
| | 壮年層 | 16.7 | 27.8 | 16.7 | - | 33.3 | - | 27.8 | 18 | 33.3 | 6.7 | 53.3 | 20.0 | 13.3 | 6.7 | 26.7 | 15 |
| 般住民 | 老年層 | 20.0 | - | 20.0 | - | - | - | 60.0 | 5 | 12.5 | 12.5 | 12.5 | 37.5 | - | - | 50.0 | 8 |
| 氏 | 計 | 29.4 | 17.6 | 17.6 | 2.9 | 20.6 | 2.9 | 29.4 | 34 | 25.8 | 12.9 | 38.7 | 19.4 | 22.6 | 6.5 | 32.3 | 31 |

注) 1. 単位=人、%。

移住予定者については絶対数が少ないので、移住予定の理由について全体をまとめたものを表 9 - 8 として掲げる。これをみると、「転勤があるから」がもっとも多く、53.3%にのぼっていることがわかる。次いで「その他」が33.3%となっているが、その中身は、「自家に誰もいない為」や「親の意見」、「実家があるから」など、家族の生活の拠点が新ひだか以外にあることをうかがわせるものが多くなっている。

表9-8 移住予定の理由

| 就職するから | 3.3 |
|---------|------|
| 転勤があるから | 53.3 |
| 結婚するから | - |
| 進学するから | 10.0 |
| その他 | 33.3 |
| N | 30 |

注)1. 単位=人、%。 2. 不明・無回答を除く。

第5節 アイヌ民族多住地域に関わる認識

最後に、アイヌ民族多住地域としての新ひだか町に関わる聞き取りを、いくつか紹介しておきたい。まず、住民調査からは、以下のような話が聞かれた。

この地区はなかなかアイヌの方々、……何て言うんでしょうか、和人をはなす(和人と距離をとる——新藤注)ようなそういう感じがございますね。私はそれなりのおつきあいはございます。アイヌという言葉それ自体を、要するに本当に同化がされていますんで、本当にアイヌという血筋の方はいらっしゃいますけど、なかなか「私はアイヌです」と名乗る方は少ないです。そういうような関係上、私どももアイヌという言葉を出していいのかどうかというのはあります。私自体はそういうお友だちもおりますので、この方ですと容易にその話はいたします。でも、やはり一般的にそういう話ができるかどうかというのはございますね。

^{2.} 不明・無回答を除く。

^{3.} アイヌ系住民で移住志向を示した人はいなかった。

そして、自分たちが「私はアイヌです」と言える方はそういらっしゃいません。この地区では。 (一般住民・老年層・男性・新ひだか以外の出身)

このように、友だちと呼べるような間柄になっていても、なかなかアイヌ系住民の方から自分がアイヌであることを告白しづらい状況は存在している。ただし、この方も、「『私はアイヌです』とはいわないけれど、この人はアイヌ民族ではないだろうか」と感じることはあるということであり、一般住民にも、それなりにアイヌの方はわかっているようである。また、アイヌの人たちは「地域の部落の名前を取ってつけている。山のほうはそういうふうに名前をつけて、名字をつけている。今でもわかるよ」(一般住民・老年層・男性・新ひだか以外の出身)ともいわれており、名前でアイヌの人かどうかもわかるようである。和人との混血も進み、見た目だけではアイヌの人々の存在は目立たなくなってきている側面もあるのかもしれないが、地元で暮らしている人々には、アイヌ民族であるかどうかがある程度認識されているものと考えられる。

また、「何かその一つの企業さんがその(アイヌ民族の――新藤注)血筋の人らしいですね。そ ういう話は聞きましたけど」(一般住民・青年層・男性・新ひだか以外の出身)という語りもあるよ うに、「この会社はアイヌの人が多いらしい」ということで、アイヌ民族であるかどうかが判断さ れている様子もみられる。この点は、アイヌ系住民からも、以下のような形で語られた。

結構うちの妹が働いていた……会社とかも、アイヌしか働いてないとかとみんなにいわれていて、そういう人が集まる会社とかってあるんですけど、そういう人を遣っているのかどうか、選んでいるのかわからないんですけど。静内は結構あるんですよね。私も一番最初に働いたところの従業員がほとんどそうだったんです。……そういうふうに集まっちゃうのかなと思って、それは感じたことがあります。……みんな働きやすくていくのかわからないですけど、そういう会社というのはあるんですよね、従業員がアイヌだというのが多いところがあるから。(アイヌ系住民・青年層・女性・新ひだか出身)

このことから、アイヌの人々の側にも、特定の職場に集まっているという認識はもたれているようである。だからといって、つきあいがないわけではないが、踏み込みづらいと感じている様子もうかがえる。たとえば、一般住民からは、次のような話が聞かれた。

そういうこと(アイヌ民族であること――新藤注)を気にする人もいるし、気にしない人もいるから、あまりおおっぴらにいえないんだよね。気にしている人もいるし。そこのところはデリケートな部分だから、いえないんだよね。どこまで、どうやっていっていいのかっていうのがね。となり近所だし。(一般住民・壮年層・女性・新ひだか以外の出身)

ただし、政策に対する意見は第8章で扱われるようにある程度出されているが、一般住民から、アイヌ系住民が多く暮らす新ひだかという地域に対する評価はあまり聞かれなかった。これらをふまえると、新ひだかは間違いなくアイヌ民族多住地域の一つではあるが、そのことはあまり意識しないようにするという姿勢もみえてくるように思われる。

第6節 小括――三者三様の「共生の作法」

題が深刻であったことを示しているだろう。

それでは、以上の検討をふまえ、おもだった部分を振り返っておきたい。

第1に、住民の地域への評価については、老年層、三石地区、新ひだか出身、男性の住民であるほどポジティブになっていた。そのこととも関わって、これら以外の住民層は町内会活動への参加があまり積極的ではなかった。そのため、地域への評価と町内会活動への参加は、一定の相関関係があることがわかる。また、このことは定住志向の強さにも反映していたが、全体としては7割近くの住民が定住志向をもっており、いずれも高い水準のなかで若干の差が生じることになっていた。第2に、アイヌ系住民の状況をみると、一般住民とそれほど大きな差は存在していなかった。細かくみると、一般住民での地域への評価が低かった静内地区、新ひだか以外の出身者などでは、一般住民以上にポジティブな評価も見られた。その反面、三石地区や女性のアイヌ系住民では、町内会など地域への参加が低調である状況もみられた。このことは、ある局面においては「アイヌ民族である」ということと一定の属性が重なることで問題がより困難なものになることや、かつての問

ただし第3に、アイヌ系住民は一般住民よりも「誰でも自由にものが言える」地域であることを強く感じていた。このことは、老年層のアイヌ系住民から、「やっぱりそういうふうにやられれば (差別されれば――新藤注)、やっぱり遠くに行きたいわね。あっち、内地のほうへ行けばアイヌっていわれることないもの。北海道にいたらアイヌっていわれるけど、内地へ行けば、……アイヌというような民族はないから。アイヌといったって知らんものね」(アイヌ住民・老年層・男性・新ひだか出身)と語られていたような状況からは、地域が確実に変わりつつあることを感じさせる。それだけ、アイヌ民族についても復権と再生の動きが強まり、アイヌ系住民が暮らしやすい状況が実現されてきたものと受け止められる。

そのこともあってか、第4に、アイヌ系住民の定住志向は非常に強かった。第4節でも触れたように、アイヌ系住民は移住志向や移住予定をもつ者はおらず、ほとんどが定住志向をもっていた。その理由は「土地や家」の存在とともに、「生活環境のよさ」と説明されており、アイヌの人々にとって新ひだかは住みやすい地域になっていることがわかる。

第5に、その住みやすさを、静内地区のアイヌ系住民は「参加して勝ち取っていこう」という意識がみられた。静内地区のアイヌ系住民は、町内会へ積極的に参加していた。また、「昔からの文化・習慣」としてのアイヌ文化が重視されていないことへの問題意識をもっているように受け止められる様子もみられた。さらに、宇田川 (1998) が指摘した「人間関係のよさ」を評価する傾向は低く、「静内の人は差別せずに仲良くつきあってくれるから定住したい」という受動的な意識はあまりもたれていないこともうかがえた。このことは、静内地区のアイヌ系住民が積極的に地域に関わり、伝えるべきことは伝える、という姿勢をもっているとも考えられる。第1節でふれたような「シャクシャインの末裔」としての意識のようなものが、もしかしたら受け継がれているのかもしれない。

それに対して、第6に、三石地区のアイヌ系住民は、町内会にはあまり積極的に関わっていなかった。にもかかわらず、地域への評価は、一般住民以上に高い状況がみられた。このことは、地域にあまり関わらないがゆえに、逆に高い満足度を手に入れるという「セグリゲーションによる生活共生」のような地域での振る舞い方を志向しているようにも受け止められる。

一方、第7に、一般住民の側からは、アイヌ民族多住地域としての新ひだか町に対する評価は、

ポジティブなもの、ネガティブなもののいずれも、あまり聞かれなかった。このことは、一般住民がアイヌ系住民の存在を認識していないことを示すわけではない。むしろ、職場や近所づきあい、あるいは名字などを手がかりに、「誰がアイヌ民族であるのか」についてはかなり鋭敏に感じ取っているともいえる。しかし、そのような「アイヌ民族多住地域」ということはあまり意識せず、普段はこの点にはふれないようにしている様子も見出された。そのような姿勢で、新ひだかでの生活を続けていく姿がみてとれる。

このことから、静内地区のアイヌ系住民は「参加」、三石地区のアイヌ系住民は「セグリゲーション」、そして一般住民は「意識しない」という、三者三様のあり方で「アイヌ民族多住地域」での共生を実現させていると考えられる。ただし、今回の調査で取り上げたアイヌ住民の調査データはあまりにも少ない。そこで今後は、ここで見出された三者三様の「共生の作法」を一つの手がかりとして、さらに「アイヌ民族多住地域」を生きる住民たちの意識や行動を明らかにすることが求められよう。

注

- 1)ここでは本人の「新ひだか町への来住時期」をもとに、「生まれてからずっと」を「新ひだか出身」、それ以外を「新ひだか以外の出身」とした。
- 2)アイヌ系住民には、「本人がアイヌの血筋」という方の他に、「自身は和人だが、アイヌの人と 結婚した(和人配偶者)」と「自身は和人の生まれだが、アイヌの家庭に養子に入った(和人養子)」 という方々も含まれる。ただし、後二者はごく少数であることと、主観的なレベルでは一定のア イヌのエスニシティをもっていると考えられることから、ここではアイヌ系住民として一括りに して扱う。

参考文献

- 松本和良・江川直子編,2001,『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社.
- 松本和良・石郷岡泰・太田博雄,1998,「ウタリ社会と差別・偏見――浦河町の社会調査」松本和良・大黒正伸編『ウタリ社会と福祉コミュニティ――現代アイヌ民族をめぐる諸問題』学文社,24-71.
- 松本和良・大黒正伸編,1998,『ウタリ社会と福祉コミュニティ――現代アイヌ民族をめぐる諸問題』 学文社.
- 大黒正伸,2001,「アイヌ民族の日常的リアリティ――白老町と門別町の調査から」松本和良・江川直子編『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社,134-60.
- 小内透,2001,「日系ブラジル人の定住化と地域社会の変化」小内透・酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房,351-73.
- ―――編著,2012,『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと 意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究 センター.

- 武田朋久,2001,「門別におけるアイヌ民族とエスニシティの問題」松本和良・江川直子編『アイヌ民族とエスニシティの社会学』学文社,53-79.
- 宇田川拓雄,1998,「ウタリ社会の住み心地――浦河町の事例」松本和良・大黒正伸編『ウタリ社会と福祉コミュニティ――現代アイヌ民族をめぐる諸問題』学文社,72-88.

(新藤 慶)

付属 資料

地域住民の日常的な交流の実態と アイヌ文化・アイヌ政策に関する意識調査

これは、新ひだか町の人たちの日常生活のあり方とアイヌ文化・アイヌ政策に関する意識につ いてお聞きするアンケート調査です。対象の方は、新ひだか町にお住まいのみなさまのなかから、 くじ引きの方法で選ばせていただきました。

この調査の結果は、科学的・統計的に処理しますので、個人的にご迷惑のかかることはござい ません。お名前は必要ありません。お気軽にお答えください。

なお、不明な点などがありましたら、以下の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室

> 〒060-0811 札幌市北区北 11 条西 7 丁目 電話 (FAX 兼用): 011-706-3093 e-mail: soe@edu.hokudai.ac.jp

I. はじめに、基本的なことがらについてお聞きします。

- 問1 あなたの性別・年齢・居住地区・生まれた場所を教えてください。
 - A. 性別 → 男·女
 - B. 年齢 → 満()歳
 - C. 居住地区 → 1. 静内地区 2. 三石地区
 - D. 生まれた場所(あてはまる番号1つに○をつけてください)
- 2. 現住所以外の新ひだか町(旧静内町または旧三石町)内
 - 3. 北海道内の他市町村 4. 東北 5. 関東 6. 中部

- 7. 近畿 8. 中国・四国 9. 九州・沖縄 10. 外国
- 間2 あなたの家が新ひだか町(旧静内町または旧三石町)にお住まいになられたのは、どなたの 代からですか。また、それはいつごろですか。それぞれ教えてください。
 - (A) どなたの代

 - 1. 自分の代 2. 親の代 3. 祖父母の代 4. 祖父母より前 5. わからない

- (B) いつごろ

 - 1. 明治より前 2. 明治・大正・昭和・平成 () 年から 3. わからない

- 間3 あなたご自身が新ひだか町(旧静内町または旧三石町)にお住まいになられたのはいつから ですか。

 - 1. 生まれてからずっと 2. 明治・大正・昭和・平成 () 年から

| 耳. 日 | 常生活の | あり | 方につ | いてま | 3聞き | します | • |
|------|------|----|-----|-----|-----|-----|---|
|------|------|----|-----|-----|-----|-----|---|

| 間4 | 新ひだか町につい | ヽて感じておられるこ | <u>と</u> をおた | ずねします。 | それぞれについて | 、あてはまる |
|----|----------|------------|--------------|--------|----------|----------------------------|
| t | のを1つ選んで、 | ○をつけてください | | | | |

| | | とても そう思う | | あまり そう思わない | まったく そう思わない |
|----|--|-------------|---------------|---------------|----------------|
| 1. | 住民のまとまりが強い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 4 · · · · · | • • 3 • • • • | 2 | 1 |
| 2. | 新しくきた人でもなじみやすい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 4 | 3 | 2 | • • • 1 |
| 3. | 誰でも自由にものが言える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 4 | 3 | 2 | • • • 1 |
| 4. | 日常的なつきあいが盛ん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 4 | 3 | 2 | • • • 1 |
| 5. | 昔からの文化・習慣を大事にする | 4 · · · · · | 3 | 2 | • • • 1 |
| 6. | 昔から住んでいる人の意見が強い・・・・・・・・・ | 4 · · · · · | 3 | 2 | 1 |
| 7. | 新しいものを積極的に取り入れる気風がある・・・・ | 4 · · · · · | 3 | 2 | 1 |
| | | | | | |

- 問5 あなたは、普段<u>ご近所の人たちと、どのくらい交流</u>を行っていますか。あてはまる番号を1 つ選んで、○をつけてください。

 - 近所の住民とつきあいはない
 道であえばあいさつをかわす程度
 会った際に世間話をする
 互いの家をよく行き来する
- 問6 あなたは、お住まいの地域で自治会(町内会)の活動や行事に参加なさっていますか。あて はまる番号を1つ選んで、○をつけて下さい。

 - 1. 積極的に参加している
 2. ある程度参加している
 - 3. あまり参加していない
- 4. まったく参加していない
- 問7 あなたは普段、**アイヌの人たちと交流**がありますか。
 - 1. よくある

1. よくある 2. たまにある それは それは それは とのような交流ですか。 あてはまるもの全てに をつけてください。

- 3. あまりない
- 4. ほとんどない
- 1. 近所づきあい 2. 職場での付き合い
- 趣味の付き合い
 子どもを介した付き合い

)

- 5. インターネットを介した付き合い
- 6. 学生時代からの付き合い
- 7. その他(

| いまの | 場所にずっと住みたい | →新ひだ: | か町に住みたい理由 | (|
|-----|------------------|----------|-----------|--------|
| 別の場 | 所に移りたい | | 所に移りたい理由 | (|
| 別の場 | 新に移る予定がある | →別の場 | 所に移る理由 | (|
| わから | ない | | | |
| | | | | |
| 〈新 | ひだか町に住みたい理 | 由〉 | | |
| 1. | 生活環境がよいから | 2. | 人間関係がよいから | ò |
| 3. | 親の面倒を見るため | 4. | ここに土地や家があ | あるから |
| 5. | 職場や学校が近いから | ,) | | |
| 6. | その他(| |) | |
| 〈別(| の場所に移りたい理由 |) | | |
| 7. | 生活環境が悪いから | 8. | 人間関係が悪いから | ` > |
| 9. | 交通の便が悪いから | 10. | 別の場所に土地や領 | 家があるから |
| 11. | よい仕事がないから | 12. | 職場や学校が遠いた | 316 |
| 13. | その他(| |) | |
| 〈別(| の場所に移る理由〉 | | | |
| 14. | 就職するから | 15. | 転勤があるから | |
| 16. | 結婚するから | 17. | 進学するから | |

問8 あなたは、 $_{oldsymbol{\circ}}$ をも新ひだか町に住みたい と思いますか。あてはまる番号を $_{1}$ つ選んだ上

Ⅲ. アイヌ文化についてお聞きします。

18. その他(

問9 アイヌ民族の**伝統文化は、現在どのくらい残っている**と思いますか。あてはまる番号を1つ 選んで、○をつけてください。

)

- 1. かなり残っている 2. ある程度残っている 3. あまり残っていない

))

- 4. 全然残っていない 5. わからない

| 問10 下記のアイヌ文化を知っていますか。また、 | |
|---|--|
| はありますか。さらに <u>将来体験したり参加した</u> のがある場合、それぞれについて以下の選択肢 | |
| | :から速い、カッコの中に番号を記入してくだ |
| さい。 | |
| A. 内容を知っているものがある 1. はい→ | () 2. いいえ |
| A. 内谷を知っているものがある 1. はい→ B. 体験・参加したことがある 1. はい→ | |
| B. 体験・参加したことがある 1. はv→ C. 将来体験・参加したい 1. はv→ | , |
| し. 将来体験・参加したい 1. はい→ | 2. いいえ |
| 1. カムイノミ(動物や物の霊送り)などの祭事 | 9. アイヌ語 |
| 2. 伝統的な婚礼・地鎮祭・新築祝い | 10. ユカラなど口承文芸 |
| 3. 伝統的な葬儀・先祖供養 | 11. 歌と踊り・楽器 |
| 4. イナウを捧げる | 12. 工芸(編み物・刺繍・織物・木彫) |
| 5. 神聖な場所への祈り | 13. 伝統的狩猟・農法・漁法 |
| 6. 海・川・山でのタブーや約束事 | 14. 伝統的な料理 |
| 7. まじない・トゥス(巫術) | 15. その他 () |
| 8. 夢見を大事にする | , |
| o. 97227(1)-7 3 | |
| | |
| | リキトます それいめの 1 け用 1 9 ~ 准しで |
| | |
| 問11 【問10のAで「1. はい」を選んだ人におし くがさい】そのアイマウルは、ドニで(誰から | |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から | |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から ○をつけてください | <u>ら)</u> 知りましたか。 <u>あてはまるものすべてに</u> |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から ○をつけてください1. 家族や親戚2. 近所の人 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から ○をつけてください 家族や親戚 アイヌ文化を普及している団体 情報メ | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から ○をつけてください1. 家族や親戚2. 近所の人 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 |
| <u>ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から</u> ○をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(| 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から ○ ②をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(| 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○ をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(問12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラ 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から ○ ②をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(| 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○ をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(問12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラ 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○ をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(問12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラ 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○ をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(問12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラ 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○ をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(問12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラ 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から ○ ②をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メ 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラ 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材 2. ない | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○ ②をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メライン 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイター 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材を表す。 2. ない | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メイン 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材をおいます。 2. ない 間13 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → それはどのようなアイヌ文化ですかます。 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○ ②をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メライン 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイター 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材を表す。 2. ない | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メイン 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材をおいます。 2. ない 間13 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → それはどのようなアイヌ文化ですかます。 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メイン 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材をおいます。 2. ない 間13 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → それはどのようなアイヌ文化ですかます。 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メイン 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材をおいます。 2. ない 間13 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → それはどのようなアイヌ文化ですかます。 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |
| ください】そのアイヌ文化は、どこで(誰から) ○をつけてください 1. 家族や親戚 2. 近所の人 5. アイヌ文化を普及している団体 6. 情報メイン 7. 施設や展示物 8. その他(間12 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → そのうち特に印象に残っている事材をおいます。 2. ない 間13 学校(小学校・中学校・高校など)で、アイラー 1. ある → それはどのようなアイヌ文化ですかます。 | 5) 知りましたか。 あてはまるものすべてに 3. 友人 4. 学校の授業や行事 メディア (本・テレビ・ラジオ・インターネットなど)) ヌの歴史 を学んだことはありますか。 所について教えてください。 |

| 問15 あなたは アイヌの歴史や文化の内容 が世間 か。あてはまる番号を1つ選んで、○をつけて | |
|---|----------------------------|
| 1. 正しく知られていると思う | 2. だいたいは正しく知られていると思う |
| 3. あまり正しく知られていないと思う | 4. 正しく知られていないと思う |
| 5. わからない | The Edition of the Edition |
| | |
| 問16 アイヌ民族の伝統文化を 後世に残していく | |
| あてはまる番号を1つ選んで、○をつけてくだる | _ 0 |
| 1. アイヌの人たちが残すべきだと思う | |
| 3. 地域ごとに残すべきだと思う | 4. その他(|
| 問17 今後、アイヌ民族に関する施策はどうある~ <u>すべてに〇</u> をつけてください。 1. アイヌ民族への差別が起こらない人権尊重の | |
| 2. アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと | 思う |
| 3. アイヌ民族に対して雇用対策を拡充すべき7 | だと思う |
| 4. アイヌ民族に対して教育支援を拡充すべき7 | だと思う |
| 5. アイヌ民族に対する経済的な援助を拡充す | べきだと思う |
| 6. アイヌ民族の土地・資源に対して補償を行 | うべきだと思う |
| 7. アイヌ民族に関する正しい理解を提供すべ | きだと思う |
| 8. アイヌ民族のみを対象とした特別な政策は | 行うべきではないと思う |
| 9. その他(|) |
| IV. 最後に、あなたとご家族のことについてお | お聞きします。 |
| 問 1 8 あなたが 最後に卒業(または中退)なさっ | た (またけ、祖女かとっている) 学校け ※ |
| のどれですか。あてはまる番号を1つ選んで、 | |
| 1. 義務教育(旧制高等小学校をふくむ) | 0 2 30 C \ |
| 2. 高校(旧制中学校・旧制高等女学校・師範 | 学校なととする |
| 3. 専修学校(専門学校)専門課程 | +(X & % / C) |
| 3. 専修子仪 (専門子仪) 専門課任4. 短大・高専 (旧制高校をふくむ) | |
| 4. 短人・同等 (四制商权をふくむ) 5. 大学 (大学院をふくむ) | |
| | |
| 6. その他(具体的に) | |

問14 新ひだか町の以下の**施設や行事に行ったり、参加したりした**ことはありますか。**あるもの**

1. シャクシャイン記念館 2. アイヌ民俗資料館 3. シャクシャイン法要祭

すべてに〇をつけてください。

| 問10 | あなたのお仕事 | (\$************************************ | 17 | 次のうち | ビカに あた V | ままか |
|-------|---|---|------|--------|--|----------|
| 10119 | (V)/1 / V/1 /011 - 21 | (水化・麦) ガクは分し | Val. | ガムシノフロ | $C \times A \cup V \subseteq A \cup V \subseteq V$ | 1 X 9 // |

- 1. 経営者・役員
- 2. 常時雇用されている一般従業者(サラリーマンなど雇われている人)
- 3. パート、アルバイト、臨時雇用、季節労働
- 4. 自営業主(従業員4人以下の店や工場を経営)
- 5. 家族従業者(家業の手伝い)
- 6. その他(
- 7. 無職 8. 学生(在学中)

問20 【問19で、7(無職)、8(学生)以外を選択された方にお聞きします。】

あなたの職業を教えてください。下の表の中であてはまる番号1つに○をつけてください。

)

- 1. 事務的職業 (総務・営業・人事・経理など事務一般)
- 2. 保安的職業(警察官・自衛官・消防士、ガードマンなど)
- 3. 販売的職業 (卸・小売、不動産仲介、保険外交など)
- 4. 技能工・生産工程に関わる職業(工員、建設作業員、大工、自動車整備など)
- 5. 運輸・通信的職業 (運転手、郵便配達、通信士など)
- 6. 専門・技術的職業 (医師・看護士・弁護士・教師・保育士・税理士・技術者などの 専門的知識や技術を要するもの)
- 7. 管理的職業(企業・官公庁における課長職以上、議員や経営者を含む)
- 8. 農林水産的職業 (第二種兼業や農水産物加工は含まない)
- 9. サービス的職業 (ホームヘルパー、理美容師、飲食店従業員、ホテル従業員など)
- 10. その他 ()
- 間 21 あなたの世帯は以下のうちどれにあてはまりますか。あてはまる番号1つに \bigcirc をつけてください。
 - 1. 一人暮らし
 - 2. 夫婦のみ
 - 3. 夫婦と未婚の子どもの二世代(父子・母子世帯をふくむ)
 - 4. 夫婦(片親をふくむ)と既婚の子どもの二世代
 - 5. 三世代同居
 - 6. その他(
- 間 2 あなたの**現在のお住まい**は、次のどれにあたりますか。あてはまる番号 1 つに \bigcirc をつけてください。
 - 1. 一戸建て持ち家(土地も所有)
 - 2. 一戸建て持ち家(借地)
 - 3. 分譲マンション
 - 4. 民間の借家・アパート・賃貸マンション
 - 5. 社宅·官舎
 - 6. 公営・公団住宅
 - 7. その他()

| Α. | あなた個人 | (|) I | 3. 世帯全 | 全体 (| |) | |
|-------------------------------------|------------------------------------|---|---------------------------|---------------------------------------|--|---|--------------------|-----------------|
| イ. ウエオカ. | 200 万円~3 300 万円~4 400 万円~8 | 満 200 万円未満 300 万円未満 400 万円未満 500 万円未満 | | ケ. コ. サ. シ. | 600 万円 700 万円 800 万円 900 万円 1000 万円 1500 万円 | ~800 万 ~900 万 ~1000 万 円~1500 | 円未満 円未満 5円未満 | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| 質問に | これで終わ | りです。ご協力 | 力いただる | き、まこと | とにありが | いとうござ | ゛いました。 | ì |
| | | りです。ご協力 | | | | | | |
| | | | | | | | | · |
| | | | | | | | | > |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| をに関し | てご意見・ご | で感想などごさ | いました | ら下の余 | :白にご記 | 入くださ | V | |
| 至に関し 新ば直接 | てご意見・ご か町にお 住 : お会いし、 | ご感想などごさ まいの方々の! お話をうかが; | いました 見状をき えれば幸v | ら下の余 に 詳 しく と をじま | : 白にご記 調べたり ばす。 | 入くださ ¹ と考えて 1 は 9 月1 | おります。 | 。 9 月 |
| だに関し新ば直接 | てご意見・ご か町にお 住 : お会いし、 | で感想などごさ が の方々の | いました 見状をき えれば幸v | ら下の余 に 詳 しく と をじま | : 白にご記 調べたり ばす。 | 入くださ ¹ と考えて 1 は 9 月1 | おります。 | 。 9 月 |

| 生活の歩みとアー | イヌの人々。 | との関わりについてのイ | ′ンタビュー調査 |
|----------|--------|-------------|----------|
|----------|--------|-------------|----------|

北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室

| 対象者 |
|-----|
| 調査者 |

Ⅰ 家族構成とあなたの生活の歩みについて

あなたの家族構成についてお聞きします。
 結婚について(ア.未婚 イ. 既婚 ウ. 離別 エ. 死別)

| 続柄 | 年齢 | 性別 | 職業 | 同居・別居 (居住地) | |
|----|----|-----|----|-------------|---|
| 本人 | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |

- あなたのご家族にアイヌの血筋の方はおられますか。
 →「いる」とこたえた場合、アイヌ生活実態調査票へ。
- 3. あなたはどこで生まれましたか。

| 都道府県 | 市町村 大字 |
|------|--------|

4. 生まれたところと現在住んでいるところは一緒ですか。引っ越したことがある場合、これまでに住んだ場所を すべて教えて下さい。

| | 場所 (原則市区町村まで) | 時期 | 転居の理由 |
|---|---------------|----|-------|
| 1 | | | |
| 2 | | | |
| 3 | | | |
| 4 | | | |
| 5 | | | |
| 6 | | | |
| 7 | | | |

| 5. | あなたは子どものころ、 | 周囲に以下のようなアイヌの伝統文化をする人はいましたな | ぃ。それはどのようなもの |
|----|-------------|-----------------------------|--------------|
| | でしたか。いつ頃まで紛 | いていましたか。 | |

- ア. アイヌ語を目常会話として使用する イ. 入れ墨、耳輪 (ニンカリ) をする
- ウ. クマ猟、サケ漁 エ. 囲炉裏を中心とした生活、伝統的な家屋 (チセ) に住む
- オ. 宝物 (漆器・宝刀など) があり、大事にする
- カ. イナウを捧げる。家にイナウ、ヌササン (イナウを並べた祭壇) がある
- キ. 日常的にアイヌの神々へ祈る(聖地への祈り、先祖供養を含む)
- ク. クマなどの動物送り、器物送りをおこなう
- ケ. トゥスクル (神おろしをする人) にみてもらう
- 6. あなたが子どものころ、アイヌの方と交流・ふれあいはありましたか。それは誰と、どのような交流でしたか。 ア. 仲良くつきあっていた イ. よくけんかをしていた ウ. いじめられた
 - エ. いじめていた オ. かかわりがなかった

SQ. それはなぜですか。また、子どもの頃のアイヌの方との関わりについて、印象に残っているエピソードなどありましたら教えて下さい。

- 7. あなたが子どものころに、アイヌ以外の方との関わりはどのようなものでしたか。 ア. 仲良くつきあっていた イ. よくけんかをしていた ウ. いじめられた エ. いじめていた オ. かかわりがなかった
- 8. あなたが中学校を卒業するころ (15歳の頃)、家族の暮らしぶりはいかがでしたか。
- 9. あなたの学校歴を教えて下さい。

| | 学校 | 卒業 or 中退 | 地域 |
|---|----------------------|-----------|----|
| 1 | 幼稚園・保育所 | _ | |
| 2 | 小学校 (尋常小学校) | 卒業・中退 | |
| 3 | 中学校(高等小学校) | 卒業・中退 | |
| 4 | 高等学校(旧制中学校)(全日制・定時制) | 卒業・中退・在学中 | |
| | (普通科・専門科) | | |
| 5 | 専修学校(高等課程・専門課程) | 卒業・中退・在学中 | |
| 6 | 大学 (短大・四年制) | 卒業・中退・在学中 | |
| | () 学部 | | |
| 7 | その他 | | |

| | あなたは進学に際し | し、利用したも | 獎学金制度 | | |
|--|------------------------|--------------------------------|-------|----------|-------------------------|
| 11 | | | | こはありますか。 | それはどのようなものでしたか。 |
| 11. | 学校時代に、楽した | かったのはどの | のようなこ | . とですか。 | |
| | 逆に、学校時代に~ 相談した方や、参え | | | | また、それをどのように解決しましたか。その日 |
| | | の学校へ進学 | したかった | こですか。断念し | した場合、どこまで進学したかったですか。また、 |
| | 学を断念した理由に | は何ですか。 | | | |
| 14. | あなたが初めて就い | ハた職業は何~ | | | |
| 14. | あなたが初めて就い | ハた職業は何~ | | | けべて教えて下さい。 |
| 14. | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | `きましたか。ゔ | けべて教えて下さい。 |
| 14. i | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 14. | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 114. ¹ | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| * | 学を断念した理由に | は何ですか。 | | | |
| 14. | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | `きましたか。ゔ | けべて教えて下さい。 |
| 114. វ | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 14. | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 14. | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 14. | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 114. i | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 114. ¹ | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 114. i | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 114. 15. 15. 15. 11. 12. 33. | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |
| 14. 15. 15. 15. 15. 15. 15. 15. 15. 15. 15 | あなたが初めて就\ あなたはこれまでに | ハた職業は何 [~] こどのようなイ | 仕事をして | きましたか。っ | けべて教えて下さい。 |

| 17. あなたがお仕事をしていくうえで、楽しかったのはどのようなことですか。 |
|--|
| 18. あなたがお仕事をしていくうえで、つらかったのはどのようなことですか。また、それをどのように解決しましたか。その時、相談した方や、参考にしたことはありますか。 |
| 19. (結婚されている場合)結婚する際に、苦労したことはありますか。また、それをどのように解決しましたか。 その時、相談した方や、参考にしたことはありますか。 |
| 20. (結婚されている場合)結婚・恋愛するときに、民族性 (アイヌであるかどうか)を考慮した・されたことはありましたか。ある場合、それはどのようなことでしたか。 (結婚されていない場合)結婚・恋愛を考えた場合、民族性 (アイヌであるかどうか)を考慮する・されることはありますか。 |
| II アイヌ文化・アイヌ政策についてお聞きします。 21. (郵送調査の問10Bで「体験・参加した」アイヌ文化があると答えた人の場合) あなたがそのアイヌ文化を体験したきっかけはどんなことですか。また、体験・参加した時にどのような感想を持ちましたか。 |
| 22. (郵送調査の問10Cで「将来体験・参加してみたい」アイヌ文化があると答えた人の場合)あなたはなぜそのアイヌ文化を体験・参加してみたいと思っているのですか。理由をお聞かせください。 |
| 4 |

| 23. あなたは、現在のアイヌ文化を残すべきだと思いますか。また、失われたアイヌ文化を復活すべきだと思いますか。理由も合わせてお聞かせください。 |
|--|
| 24. (郵送調査の問17で答えた今後のアイヌ民族に関する施策について)アイヌ政策に対するあなたのお考えは、 いつ頃から、お持ちになるようになったのですか。また、何かきっかけになったことはあるのですか。 |
| 25. 最後に、アイヌの方々に対して、ふだんお感じになっていることをご自由にお聞かせください。 |
| |
| |
| 調査は以上です。長時間ありがとうございました。 |
| |
| |
| 5 |

アイヌ生活実態調査 インタビュー調査票

北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室

| 対象 | No. | | |
|----|-----|--|--|
| | | | |

| 調 | 查者 | | | |
|---|----|--|--|--|
| | | | | |

Ⅰ アイヌの血筋とアイデンティティについて

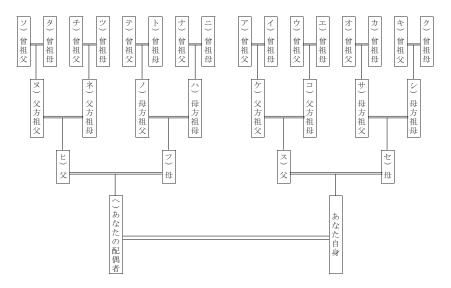
1. あなたの家族構成についてお聞きします。

結婚について (ア. 未婚 イ. 既婚 ウ. 離別 エ. 死別)

| 続柄 | 年齢 | 性別 | 職業 | 同居・別居 (居住地) | |
|----|----|-----|----|-------------|---|
| 本人 | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |
| | | 男・女 | | 同居・別居(|) |

2. あなたのご家族のなかでアイヌの血筋の方はどなたですか。

%アイヌの方には「 \bigcirc 」を、アイヌ以外の日本人には「 \triangle 」を、外国人には「 \square 」を、不明には「?」をつける。



| 4. | (自身の血筋にアイヌの方が | ぶおらず、 <u></u> 面 | | イヌの方の | の場合)あなたは、配偶者の方がアイヌ民族 |
|----------------|---|---------------------|----------|-------------|----------------------|
| | あると感じることがあります | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| П | これまでの生活史につい | てお聞きし | します。 | | |
| 5. | あなたはどこで生まれました | . か。 | | | |
| | | | | | |
| _ | 都道府県 | 市町村 | 大字 | | |
| | d 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | | | | |
| 6. | | いるところ | らは一緒ですか。 | 。引っ越し | したことがある場合、これまでに住んだ場所 |
| | すべて教えて下さい。 | | nd the | | des El om 1 |
| _ | 場所(原則市区町村まで) | | 時期 | | 転居の理由 |
| 1 | | | | | |
| 2 | | | | | |
| 3 | | | | | |
| 4 | | | | | |
| 5 | | | | | |
| 6 | | | | | |
| 7 | | | | | |
| 7 | なわたけヱじぇのこスに 安 | : 佐の山で | 大会仕に関す | スアノコト | 民族の伝統文化(生活様式など)を体験して |
| 1. | あなたはするものころに、家 ましたか。それはどのような | | | | |
| ア | . アイヌ語を日常会話として使 | | | | |
| | . ノイス m を ロ 市 云 m こ し C l l l l l l l l l l l l l l l l l l | | | | |
| - | . っ、 | | | IM WELLY AS | 水圧 (ノモ) に正む |
| | · イナウを捧げる。家にイナウ | | | べた祭壇) |) があろ |
| | . 日常的にアイヌの神々へ祈る | | | | |
| ク | . クマなどの動物送り、器物造 | きりをおこな | こう | | |
| ケ | . トゥスクル(神おろしをする |)人)にみて | こもらう | | |
| | | | | | |
| | | サルをナス | 人はいましたか | ٥, | |
| Se | Q. また、周囲にこれらの伝統。 | スルセナン | | | |
| S | ?. また、周囲にこれらの伝統。 | X1L2 9 D. | | | |
| S_{ϵ} |) . また、周囲にこれらの伝統。 | X162) V. | | | |

3. あなたは、ご自分をアイヌ民族の一人として意識することはありますか。それはどのような時ですか。

| 8. | あなたが子どものころに、アイヌ民族の方と交流 したか。 | 充・ふれあいはありまし 7 | たか。それは誰と、どのような交流で |
|-----|---|---|-------------------|
| SQ | あなたが子どものころに、アイヌ民族以外の方とア・仲良くつきあっていた イ・よくけんかをエ・いじめていた オ・かかわりがなかった ウ・それはなぜですか。また、子どもの頃のアイヌ」などありましたら教えて下さい。 | していた ウ. いじめ | られた |
| 10. | . あなたが中学校を卒業するころ(15 歳の頃)、家 | 3族の暮らしぶりはいかか | ぶでしたか。 |
| 11. | . あなたはいつ頃、自身がアイヌ民族の一人である たか。 | 3ことを自覚しましたか。 | そのきっかけはどのようなことでし |
| 12. | . あなたの学校歴を教えて下さい。 | | |
| | 学校 | 卒業 or 中退 | 地域 |
| 1 | 幼稚園・保育所 | _ | |
| 2 | 小学校 (尋常小学校) | 卒業・中退 | |
| 3 | 中学校(高等小学校) | 卒業・中退 | |
| 4 | 高等学校(旧制中学校)(全日制・定時制) | 卒業・中退・在学中 | |
| _ | (普通科・専門科) | → 本 → 1 → 2 · · · · · · · · · · · · · · · · · · | |
| 5 | 専修学校(高等課程・専門課程) | 卒業・中退・在学中 | |
| 6 | 大学(短大・四年制) | 卒業・中退・在学中 | |
| _ | () 学部 | | |
| 7 | その他 | | |
| | | 3 | |

| 13. あなたは進学に際し、ウタリ対策の援助(高等学校等進学奨励事業、高等学校通学費補助事業、専修学校等進学奨励事業、大学等修学資金等貸付など)を使いましたか。どの学校段階に対してですか。使わなかった場合、それはなぜですか。 |
|--|
| SQ. ウタリ対策の援助以外に利用した奨学金制度はありますか。それはどのようなものですか。 |
| 14. 学校時代に、楽しかったのはどのようなことですか。 |
| 15. 逆に、学校時代につらかったのはどのようなことですか。また、それをどのように解決しましたか。その時、相談した方や、参考にしたことはありますか。 |
| 16. あなたはもっと上の学校へ進学したかったですか。断念した場合、どこまで進学したかったですか。また、進学を断念した理由は何ですか。 |
| 17. あなたが初めて就いた職業は何ですか。その職業を選んだ理由は何ですか。 |
| 4 |

18. あなたはこれまでにどのような仕事をしてきましたか。すべて教えて下さい。

| | 就業形態・職業 | 時期 | 地域 | 就転職の方 | 就職・転職理由 | | | |
|---|---------|----|----|-------|---------|--|--|--|
| | | | | 法・ツテ | | | | |
| 1 | | | | | | | | |
| 2 | | | | | | | | |
| 3 | | | | | | | | |
| 4 | | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | | |
| 6 | | | | | | | | |

19. あなたが就職・転職をされる際に、大変だったこと・つらかったことはありますか。また、それをどのように解決しましたか。その時、相談した方や、参考にしたことはありますか。

20. あなたがお仕事をしていくうえで、楽しかったのはどのようなことですか。

21. あなたがお仕事をしていくうえで、つらかったのはどのようなことですか。また、それをどのように解決しましたか。その時、相談した方や、参考にしたことはありますか。

22. あなたご自身の年収は税込みでいくらくらいですか。また、世帯全体の年収はいくらくらいですか。

個人() 世帯() ア. なし イ. 100 万円未満 ウ. 100 万円~200 万円未満 ウ. 100 万円~200 万円未満 エ. 200 万円~300 万円未満 オ. 300 万円~400 万円未満 カ. 400 万円~500 万円未満 カ. 400 万円~600 万円未満 キ. 500 万円~600 万円未満

23. (結婚されている場合)結婚する際に、苦労したことはありますか。また、それをどのように解決しましたか。 その時、相談した方や、参考にしたことはありますか。 24. (結婚されている場合)結婚・恋愛するときに、民族性を考慮した・されたことはありましたか。ある場合、 それはどのようなことでしたか。

(結婚されていない場合) 結婚・恋愛を考えた場合、民族性を考慮する・されることはありますか。

Ⅲ アイヌの文化と情報についてお聞きします。

25. あなたが普段実践している、あるいは心がけているアイヌ文化 (アイヌ民族の生活様式) はありますか。

26. あなたが関わってみたいと考えているアイヌ文化はありますか。それはどのようなものですか。

<アイヌ文化の例>

- ア. 動物や物の霊送り(イヨマンテなど) イ. カムイノミなど祭事 ウ. 伝統的な婚礼・地鎮祭・新築祝い
- エ. 伝統的な葬儀・先祖供養 オ. イナウを捧げる カ. 神聖な場所への祈り
- キ. 海・川・山でのタブーや約束事 ク. まじない・トゥス(巫術)など ケ. 夢見を大事にする
- コ. アイヌ語 サ. ユカラなど口承文芸 シ. 歌と踊り ス. 工芸(編み物・刺繍・織物・木彫)
- セ. 伝統的狩猟・漁撈・農耕 ソ. 料理 タ. これら以外のアイヌ文化
- 27. あなたは (あなたの家では) アイヌタイムス (季刊) を購読していますか。
 - 1. 購読して、読んでいる。
 - 2. 購読しているが、読んでいない。
 - 3. 購読していないが、読んだことはある。
 - 4. アイヌタイムスは知っているが、読んだことはない。
 - 5. アイヌタイムスがあることを知らない。
- 28. あなたは、エフエム二風谷放送 (愛称: FMピパウシ) をご存知ですか。
 - 1. 知っている 2. 知らない
 - SQ 「知っている」と回答した方にお伺いします。FMピパウシの放送は、インターネットラジオで聞くことができます。あなたは放送を聞いたことがありますか。
 - 1. 聞いたことがある。
 - 2. インターネットラジオで聴けることは知っているが、聴いたことはない。
 - 3. インターネットラジオで聴けることを知らない。
 - 4. その他(

| $SQ= \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \$ | <i>うさい。</i> |
|--|----------------------|
| 30. あなたは首都圏で活躍する若者のパフォーマンスグループ「アイヌレブルズ」(現在活動休止中) すか。 1. 知っているし、実際にパフォーマンスを見たことがある。 2. 知っているが、パフォーマンスは見たことがない。 3. 知らない。 | を知っていま |
| SQ <u>「知っている」と回答した方にお伺いします。</u> このような活動をどう思われますか。 | |
| 31. アイヌ民族自身の情報発信の現状について、ご意見があればお教え下さい。 | |
| 32. メディア (新聞・TV・ラジオなど) でのアイヌ民族の取りあげられ方について、常日頃感じてればお答え下さい。 | いることがあ |
| IV あなたやアイヌ民族の将来についてお聞きします。 33. あなたやあなたの家族がアイヌ協会(ウタリ協会)に加入したのはいつですか?また、何がきっれたのですか? SQ. 【住民調査からインタビューの対象者になった方の場合】アイヌ協会(ウタリ協会)に加入して → 【加入している場合】加入されたのはいつですか?きっかけは何ですか? → 【加入されていない場合】なぜ加入されていないのですか。また、今後加入する気持ちはありま → 【加入していたがやめた場合】最初に加入された時期ときっかけ、また、やめた理由を教えてく 今後再度加入する気持ちはありますか? | <i>いますか?</i> きすか? |
| 7 | |

29. あなたは「You Tube」で、アイヌ関係の番組を見たことがありますか。

1. ある 2. ない

- 34. あなたは今後、どのように生活していきたいと考えていますか。
 - ア. アイヌとして積極的に生きていきたい イ. 特に民族は意識せず生活したい
 - ウ. 極力アイヌであることを知られずに生活したい エ. その他
- 35.34 について、それはなぜですか。
- 36. あなたが「アイヌ民族」について思うことをご自由にお聞かせください。

- 37. あなたは、国や北海道に対し、どのようなアイヌ政策を望みますか。下記の選択肢を参考にお考えをお教えください。また、何を優先すべきか、その順番もお聞かせください。
 - (ア)学校教育にアイヌ民族のことを積極的に盛り込む
 - (イ)アイヌ子弟の大学への進学機会を拡大する(奨学金や優先入学制度など)
 - (ウ)アイヌの人々がアイヌ語・アイヌ文化に触れることができる機会を増やす
 - (エ) 地名をアイヌ語で表記する
 - (オ)工芸織物技術が次の世代に受け継がれるように技術の向上、人材育成を図る
 - (カ)観光を盛んにして、アイヌ文化が国内・世界に広く知られるようにする
 - (キ)働く場所や機会を提供し、自立できるようにする
 - (ク)自治体と協力し、アイヌ文化を通じて地域を活性化する
 - (ケ)文化を受け継いでいくため、土地を利用し、公有地や川で草木や魚をとれるようにする
 - (コ)土地資源をアイヌ民族に返還する
 - (サ)アイヌ民族について研究する組織を作り、アイヌ民族出身の研究者を養成する
 - (シ)大学等に保管されている遺骨を国が慰霊する施設を作る
 - (ス)アイヌ民族と国がアイヌ政策を協議する場を設ける
 - (セ)国会や道議会にアイヌ民族特別議席を設ける
 - (ソ)その他

調査は以上です。長時間ありがとうございました。

執筆者紹介・執筆順(担当)

小内 透 北海道大学大学院教育学研究院教授(序章・編集)

北海道大学アイヌ・先住民研究センター兼務教員

品川ひろみ 札幌国際大学短期大学部教授(第1章)

野崎 剛毅 國學院大學北海道短期大学部准教授(第2章)

菊地 千夏 北海道大学大学院教育学研究院専門研究員(第3章)

新藤こずえ 立正大学社会福祉学部講師(第4章)

小内 純子 札幌学院大学社会情報学部教授(第5章)

小野寺理佳 名寄市立大学保健福祉学部教授(第6章)

上山浩次郎 北海道大学大学院教育学院博士後期課程(第7章)

濱田 国佑 大阪商業大学JGSS研究センター

ポスト・ドクトラル研究員(第8章)

新藤 慶 群馬大学教育学部准教授(第9章)

『調査と社会理論』・研究報告書30

新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民

2013年3月31日発行

編集·発行 060-0811 札幌市北区北11条西7丁目 北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 小内 透